
IS ~Blue Swallow~

和利夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS ~Blue Swallow~

【ISBN】

N4355T

【作者名】

和利夫

【あらすじ】

とある世界で男は死に神の氣まぐれで色々な待遇を受け、第一の生を授かった。

だが、生き返った世界では男は女として生まれ、愕然。しかし、そこで出会った人達とISの世界で波乱万丈な日々を送ることを決めた。

プロローグ（前書き）

別の小説が息詰まつたので息抜きに書きました。

プロローグ

気が付けば田の前には何も無い空間が広がっていた。
いや、正確には何も無く無い。

地面の代わりに水面のような地面がある。不思議なことに『俺』
はその水面の上に立っていた。だが、それ以外何も無い。真っ白な
空間の中でただこの状況を理解しようと思思考を巡らせる。

「おや？ 珍しいね。こんな所にお姫さんが見えるなんて」

色々悩んでいると不意に声が聞こえてきた。

「ふむ、単に迷い込んだだけではないのかな？ といつあえず、血口
紹介をしよう。私は君達が言つ『神』だ」

神さま？ なんの事だ？

「おや、体が無いのに自我がちゃんとしてる。これは驚きだな？」

体が無い？ あ、ホントだ…俺はどうなつたんだ？

「つむ、さうなる前の記憶がスッポリ抜けているみたいだね。いい
よ。説明してあげる。簡単に言えば君は死んでしまったんだよ」

死んだ？ なんで？

「さあ～？ 寿命で死んだんじゃないか？」

そうか

「あれ？ そんなにショックじゃない？」

ショックも何もこじに来るまでの記憶が無いんだ。覚えてい
るのは自分の名前ぐらい

「ふ〜ん…死ぬ直前の記憶だけでは無く。それ以前の記憶も無いの
か…でも、君は運がいい！…！」

なんで？

「輪廻転生の輪に入る前に私に会えたからだよ。本来ならこんなこ
とはしないんだけど今日はちょっとといい事があつてね！ 特別に一
つだけ願いを叶えてあげよつー。」

願い？ なんでも？ いいのか？

「そうだよお〜！」

そんな神の言葉を聞いて俺は一つの願いを口にする。

空を飛んでみたいな

「おや？ 生き返りたいってとか言わないのかい？」

……なんでもうつて言つたじょん

「まあいいやー…じょ、特別にうつとしたサプライズだ。君の今
の名前で生を受けれる」とこいつあげよつ。後、ちょつとした『力』
をあげよつ

名前はいいとして…なんで『力』を？ つてか、生つて？

「名前は今君が一度目の生を受けたような気休めだよ。まあ、『力』は君の願いだ。あと、私も君に干渉出来るようにするから」とでの記憶もそのままにしておくれ〜」

世界？ 自分がいた世界に生まれないのか？ つてか、なんであんたが干渉するんだよ？

「私が干渉するのはただの暇つぶし。君により充実した生を送つてもらうためさ！ そして、世界つてのは必ずしも同じとは限らない。並行に世界の姿は何万、何億通りに並んでいる。そのどこに生まれ落ちるかは…生まれるまでわからない。どう～ おもしろそうだろ？」

パラレルワールドか？

「おや？ そう言つ知識は残つてゐるんだね。うんうん……君に抜けているのは生前の記憶だけか。知識はそのままあると……よし！ そろそろ君を送りだそう」

なんだ？ もう生まれる事が出来るのか？

「わうだよ～。じゃ、行つてらっしゃい！」

ああ、ありがと～

そして、『俺』は一度目の生を受ける事になり、自分の意識が

その空間から消えて無くなるのを実感した。

「ちょっと、気の抜けた神様だったが……願いを叶えてくれた事には感謝しなくてはな。さて、『俺』はどんな世界に生まれる事が出来るのやう。

「精々、私を楽しませておくれよ……君が描く物語。どんな物になるのかね？」

場所は変わつて、とある病室。

その病室では一人の女性がベッドで寝ておつ、ベッドの横には男性が椅子に腰を掛けている。

「無事に生まれたのか？」

「ええ……元気な子よ。さつきまで泣いていたのに、今は寝ているわ」

「お前もよく頑張ったな」

「あらがとう。ねえ？　お前は考へてくれた？」

「あー！　ひびきりいいのを考えたぞ！」

「あら？　あなたのネーミングセンスはどうかと思つ時もあるけど

…一応聞いてあげる。どんなの？」

「…言い方が引っかかるが。まあ、いい。なんか電波を受信したみたいに閃いたんだ。この子の名前は」

男性は自信満々に生まれて来た子供の名前を告げる。

「ツバメだ」

「うして『俺』は一度目の生を手にしたのだつた。

プロローグ（後書き）

感想などあつたらお待ちしております。

第一話 鬼と燕

ハ雲ツバメ。

それが一度田の生を手にした『オレ』の名前。生前の記憶で唯一覚えていた自分の名前である。どうやらあの神は本当に以前の名前をそのまま受け継ぐようにしたらしい。

訂正、『アタシ』の名前と言おう。
なぜなり……。

「女として生まれたからです……」

部屋の隅でブツブツと何か独り言を言つツバメ。

神様の気まぐれで前世の男としての記憶を受け継いでいるので色々と悩む。

体が女なのに精神が男。

某少年探偵の方がもつといい設定だったぞ。

まあ、神様曰く。こればかりはどうにもならないらしい。済んでしまった事を気に病んでもしょうがないと思い、無理矢理納得した。

「ツバメ～。御飯よ～」

「は～い」

至つて平和な生活。

オレの家族は父と母とオレの三人。

まあ～父親は年中世界のどこかを転々としているので殆ど家にいない。なので、実質あたしは母親と一緒に日々を堪能していた。

「じゃ、今日も頑張ってね

「うん。」

一度田の生を受けて早六年。

若干の違和感がありつつもオレは現在小学校低学年として日々を過ごしていた。

そして今は自分の通う学校の通学路を通らず、公園内を歩いている。理由はこの先に『友達』が待っているからだ。そしてその友達と言うのが・・・。

「篠ちゃん！」

「ツバメ～！ おはよー！」

篠ノ之篠。

一度田の生を受けて始めて出来た友達。

精神が男で体が女である俺はどのように人と接してよいのかわからず、一時期孤独な日々を過ごしていた時があった。だが、この篠はそんな俺に対して積極的にと言つかなんというか…まあ、優しくしてくれた。それから、篠と共に日々を過ごしている内に友達になつたのだ。

「お姉ちゃん。ツバメが来たから行くる

「うん！ 行つてらっしゃーい

篠の横では、ベンチに腰掛けながらノートパソコンで何かを打ち込む女学生がいる。

彼女の姉。篠ノ之東である。

なんと言つたか…あの頭から生えているウサミミが印象強く、始めはコスプレしている人かと思った。でも、どうやらそれが彼女のポリシーらしい。

彼女は自称『天才』らしい。いや、自称としなくても世間が認める『天才』だ。

何かの研究をしているのか、最近はどこに出かけるにしてもああしている。

「束さん。おはようございます」

「おはよ」

篝の時と一八〇。態度が変わり、興味無く、ただ冷たく挨拶を返していく束。始めは自分が嫌われているのかと思つたがどうやらそうでは無いらしい。

彼女は興味が無い人間にはまだ冷徹な態度を取るのだと最近わかつた。理由は知らないがそれが篠ノ之束と言う人間らしい。篝の話では今までに興味を持つた人間は自分も含めて三人だけ。それってどうなのだろうと思うが深くは聞かなかつた。

「あ、プリント落としてますよ」

そんな束の足元に一枚のプリントが落ちていたので俺はそれを拾い上げる。

「？ 航空力学？」

プリントには手書きで数字の羅列が並んでいる。

普通の子供なら單なる模様にしか見えない羅列。だが、前世の知識を持っているオレにはこれが何を意味しているのかがわかつた。

「ここに書かかれているのは航空力学に関する『数式』であると。

「それが、わかるの？」

「あ…」

思わず口にしてしまったことに後悔する。

今のオレは小学生であり、こんな物がわかるはずも無い。実際、隣でプリントを覗きこんでいた筈は頭に？マークを浮かべた用に首を傾げていた。

だが、束の反応は意外と言つたように田を見開いていた。

「これ、わかる？」

そう言つて束は俺にパソコンの画面を見せて来る。

正直、わかりませんと言えばいいのだが。

田の前にいる束の気迫に負け、正直に答えてしまった。

「プログラミング。…でも、なんのプログラムかはわかりません。なんか、複雑すぎる。何かの学習機能？　みたいなものですか？」

正直に答えると束は先程までの冷徹な表情をせず、その瞳をキラキラと輝かせている。

そして、突然俺の事を抱きしめてきた。

「凄いよー、凄いよー、篠ちゃんと同じ年なのにわかるんだあ！
君も天才だあー！！」

なんだが嬉しそうにする束。自分の頬を俺の頭に高速ですりよせてくる。

その間、俺は彼女の大きな胸に埋まり、窒息寸前。

「（やべっ！ 苦しい……でも、いい……もつもつとだけ
いつしてたい…）」

などと、男子ならではの欲望むき出しで状況を堪能していた。

「名前。なんて書つの？」

「…ツバメ。ハ雲ツバメです」

「ツバメ…じゃ！ ツンチャンだね！」

それなんてツンデレ？と思つたが口にはしない。ただ、嫌そうな顔だけはしておいた。ささやかな反抗だよ。

しかし、そんな反抗も虚しく束は一人で浮かれてオレに付けただ名を連呼していた。
わづ、いいや・・・

「今度、家においでよ～！ 束さんと遊ぼう～！」

「えへっと…何度もお邪魔します」

「あれ？ そうなの？」

はい、何度もあなたのお宅にお邪魔させていただいてますよ～。
まあ、大抵あなたは部屋に籠るが、挨拶しても無視してくれます
がね。

「ツバメ！ 早く行かないと学校遅れちゃうー！」

「あ！ そうだった！」

筈の一言に俺は自分が学校に行く途中であつたことを思い出す。無理矢理、束の胸から脱出する。その時、束が残念そうな顔をするが気にしない。

「いつてらっしゃーい！」

「行つてきま～す」「

元気よく手を振る束が俺達の事を見送り、それに答えるように筈と一緒に手を振つて返事をする。

どうやら俺は篠ノ之束の『四人目の興味対象』になれたらしい。

第一話 高校受験です

時は流れて、オレが小学校4年になった時。

世界は動いた。

世界各国が日本に向けて放ったミサイル攻撃。
それを全て撃墜する篠ノ之束の作製したIS『白騎士』。

後の『白騎士事件』である。

全世界に大体的にISの存在をアピールした束は各国にISの作製法を提供し、その姿を突然消してしまつ。

そして、日本政府も束の家族を重要保護と言つたので各地を転々とさせられてしまう。第とはその時以来合っていない。

たまに連絡のやり取りはしているのだが、何せ居場所を聞いても子供が一人で行けるような場所では無かつたり、連絡出来たと思つたらまた引っ越すなどの繰り返しであつた。
向こうも色々大変らしい。

そんなこんなで中学三年の冬である。

「それでね。今度あたしIS学園の受験するんだ」

『そつか！ 私もIS学園に行くことになつたんだ！』

そして今日もそんな第と近況報告の連絡をやり取りしている。
携帯電話と言う物は便利だ。向こうがどこにいようと連絡が取れるのだから。まあ、政府連中が盗聴している可能性があるがね……。

オレと篠は携帯電話を手にしてから頻繁に連絡を取り合っていた。そして今は高校受験の話をしており、EIS学園を受験すると篠に報告していた所だ。

「へえ～！　じゃ、一緒だね！　また篠と会えるのが楽しみだ！」

『私はあまり行きたく無かつたが…ツバメが行くとわかつたら楽しみになつた！』

「あつ。でも、その前に私が受からないと入れないけどね」

『はははー！　それもそうだな。頑張れよ』

「うん…」

篠はオレがEIS学園を受験するとわかるとやたら嬉しそうにしてくれた。

「あ、そつそつ。この前一夏くんがね～」

『一夏がどうかしたのかー…』

「そんなに過剰な反応しないでよ。…この前ね。別のクラスの女の子に告白されたんだ～」

『なつー？　本当かー？』

いちいち反応が面白いな。

「で、その女の子がね。ストレートに『付き合ひてくださいー』つ

て言ったのに一夏くんつたら『なに？ 買い物？』とか言つたりやつてんだよ

『はあ～…あの馬鹿者が』

「で～も～。そんな一夏くんが好きな篠ちゃんはどうなのかなあ～？」

『なあ！？ う、うるさい…』

先程から出ている一夏と言つ人物は篠の幼馴染である織斑一夏の事である。

そして、篠の想い人。

篠がオレの前から消えてもそれは変わりず、今でも好きでいるらしい。

だから、たまに一夏の事を報告するとやたら嬉しそうにして来るのが電話越しでもわかる。

「一夏くんつて本当、朴念仁だよね。もはや朴念神？ 篠も積極的にアプローチが必要だよ？」

『せ、積極的にって！？ そんな、会えない人にどう積極的にすればいいんだ？』

「別に電話の一つでもすればいいんだよ。で、その繰り返し！ 男の子は意外とそんな行為にグッと来るんだよー！」

実際、元男のオレが言つのだ。オレだつたらそれで相手の事を気にするよつになつてしまつだらつ。まあ、一夏はどうかわからんがな。

「こないだ電話番号教えたでしょ？ 試してみたり？」

『は、恥ずかしい……』

「はあ～…」

コイツもコイツだ。奥手過ぎてあの本念「」を射止めるには相当な苦労が必要とされるだろう。他人事だが、想像するだけで気が参りそうになる。

「あ、ごめん。そろそろ切るね。明日の準備しなくちゃいけないから」

『ん？ 明日何かあるのか？』

「何つて… IIS学園の受験日」

『あ、明日なのか！？ 『、ごめん！ もしかして勉強の邪魔をした？』

「ううん。勉強は一通り終わってるから大丈夫だよ。それに篠の声が聞けてなんだか落ち着いたし」

『ツバメ…』

「一シシシシ！ 後は頑張つて来るだけだよ！ そうしたら篠と春から一緒にだから」

『ああ、頑張つて来い』

「ありがとう。じゃ、今度は結果報告する時ね」

『ああ、おやすみ』

「うそ、おやすみ」

そう言つてオレは携帯の通話終了ボタンを押した。そして、明日の準備を済ませてベッドの中に潜り込む。

「本当は合格確定なんだけどな……」

実はオレは篠ノ之束が失踪した直後、彼女と会っていた。

そして、オレはE.S理論を叩きこまれ、いつの間にか助手のような事をつい最近までしていたのだ。そして高校受験をする時、束が勝手にE.S学園への入学手続きを済ませてしまい、そこへ自動的に行くことになつていてる。

決して裏口入学じゃないだ。

試験は形式のような物なのだ。一応、オレは篠ノ之束から推薦をもらつてゐるのだが、非公式なものなので試験は受けなくてはいけないらしい。

まったくもつてメンドクサイ……。

「シンチャンにはこいつくとのことを守つて貰いたいのー。」

不意に束から言われた言葉の意味を思い出す。

こつくんとは織斑一夏のことだ。

聞けば織斑一夏は俺の気付かぬ間に誘拐などされていたらしい。何故誘拐されたのかは束から話してくれなかつたのでその言葉の意味が解らない。

オレも、筹と別れてからオレと一夏は共通の友達がいることでそれなりに仲良くなつた。だから、誘拐されたと聞かされた時はさすがにショックだつた。無事に帰つて来てくれたのはよかつたのだが、もし最悪な事態になつたらと思つと悪寒で体が震えてくる。

一度目の生を受けて、この世界で出来た友達。それが危険にさらされているとわかると怖かつた。

だが、この世界にはISと言つ『力』がある。

「（いいぜ、守る力を手にしてなんでも守つてやるよ）」

守ると言つても自分に出来る事など限られているかも知れない。だつたら、せめて自分の手が届く範囲の人は守つてやる。

そう決心した途端。俺の意識は睡魔に負けて眠りに付いてしまつた。

翌日。試験会場では大事件が発生してしまつた。

「一夏くん…………なに、やつてるの？」

「ツバメ…………ISを動かしちゃつた」

この会場にいるはずも無い人物がここにいる。そしてそいつは男だと言うのに女性しか動かせないISを動かしてしまつたのだ。

オレは束の言葉の意味をここで理解して深くため息をついた。

第三話 天燕（あまつばめ）

『シンチャーンー 入学おめでとうー。』

「…………」

無事工学園へと入学が決定したオレは電話越しのテンション高めの声を聞いてウンザリしている。

『アレアレ？ もしかして元氣無い？ ビーフしたのかな？』

「…ビーフしたもんじゃしたも。一夏くんを工学園に入れるよつたのは束さんですよね？」

『何のかとかなー 束さんは何の事だかさっぱりわかりません』

そんな調子で嘘を言われても、なんとなくわかる。
この人確信犯だ！

「なんだってそんな事をする必要があるんですか？」

『ヒ・ミ・ツ』

「はあー・・・」

つむか、秘密なんて言っている時点で認めてるじゃん。でも、これ以上の事は話してくれなさうだから聞くのを止める。

『それより！ 束さんからシンチャンに入学祝いがあるので～すー。』

「入学祝い？」

『シンチャン専用のＩＳだよ～』

「アタシ、専用？」

専用と言つ言葉を耳にしてオレは反応する。

ＩＳの『専用機』。特定の企業がその人のために作ったＩＳの呼称。

現段階では各国の代表候補生などが持つてゐる数体しか開発されていないと聞く。それをオレが手にすると聞いて少しテンションが上がりそうになった。

『うん！ それでね～入学式前に渡したいから早めに学校の方に来てほしいんだ～。ダメ？』

「いいですけど……なんですか？」

『専用機の実戦データ収集でえ～す！ 今回作つたシンチャンの専用機は他とは勝手が違うのでその実験～』

「はあ～…」

そして、上がり気味のテンションはそんな束の言葉によつて右下下がりで落ちて行くのであった。

数日後。IS学園入学式前日。どの生徒よりも先にオレはその学園の前に立っていた。

「ひつれ～な……」

見渡す限りに広がる学園。もはや何かのテーマパークのように広く、下手したら迷子になってしまうのではないかと思つた。

「八雲ツバメだな」

「あ、はい！」

そんな学園に見取れていると俺に声を掛けて来る女性がいた。
鋭い目つきで長身でスース姿。
いかにも仕事の出来るような人だった。
そんな女性がオレを出迎えてくれた。

「すまんな。入学は明日だと言つのに」

「いえ、あの人の事ですから。もう慣れました」

互いに苦笑いをしていた。

ちなみにこの人は一夏の姉で織斑千冬だ。互いに面識は無かつたがこの人も東の友人と言つことで俺と言う存在の話を聞いていたらしい。俺もいつも東から「ちーちゃんはね～」と耳にタコが出来そなぐらいに話を聞いていたので知つていた。

「では、早速お前の専用機のテストを開始するがいいか?」

「はい」

やうしてオレは「」のH.I.V学園へと足を踏み入れる。

千冬に更衣室に案内され、そこでE.S.S-ツヘと着替えたオレは広いアリーナのど真ん中に立たされていた。

『では、天燕の運用試験を開始します。準備はいいですか?』

「はい。」

『I.Sの展開をお願いします』

アナウンスの指示して来た通りにオレは先程渡された天燕の指輪に念じる。

「(……来い)」

念じると指輪は光。その光が俺の体を包みこんだ。現れたのは白と青が特徴的なカラー。

ただ、他のI.Sと比べて一回り小さく、両手両足に付いている装甲も従来のI.Sに比べて非常に軽く感じた。つまり、装甲が非常に薄いのである。そして、背中には飛行のための反重力力翼の代わりに可変式の翼があり、そこから光の粒子が噴き出していた。たしづめ光の翼と言つた所だろうか。

「(完璧な高機動型だな……)」

『展開までの時間0・24秒。では、次は飛行テストです』

「了解」

空を飛ぶとイメージするとオレの体は宙に浮いた。その際、光の粒子が翼から強く吹き出していた。

「…なるほど。IJの粒子は推進剤か…ってか、コレって」

などと、一人で納得したオレは適当に天燕で空を飛ぶ。
そして、驚いた。

今まで束の実験で何度もIJSを操縦したことがあったが、この天燕は相当な物だつたからだ。自分がイメージしていたスピードよりも速く動き、自分の反応速度に応じて方向転換、停止をしてくれる。これほど自分とフィットした感覚をしてくれることにオレは驚いていたのだ。

『予定コース順調。天燕の飛行テスト完了です。では、最終試験。対IJS戦闘を行います』

途端にアリーナのピットから一つの影が飛び出してきた。教師陣が流用しているIJSだ。操縦者は自分とさほど変わらない程の身長で、その割には発育した胸が特徴的なメガネを掛けた女性だった。

「八雲さん。これからよろしくお願いします」

「あ、はい」

「私はこのIJS学園で織斑先生の服担任をしている山田真耶です」

「ハ雲ツバメです」

「じゃ、早速始めちやこましょ~」

「お願いします!」

そうして俺は山田先生と対峙した。

所変わつてアリーナのモニター室。

織斑千冬はそこでモニターに映し出された映像を見ていた。

「やあーやあー！ 千冬くん！ 調子はどうだい？」

そして千冬の背後から呑気な声が聞こえてくる。
千冬に取つて聞き覚えのある声であったが、その声の主を見て千冬は呆れた。

「……束。それは変装なのか？」

「なつーーー私は篠ノ之束ではありますよーーー！」

実際、その人が身に付けているのはよく宴会用で付けられる鼻眼鏡であつた。それ以外はいつも見ている篠ノ之束が身に付けている服装とウサミミ。変装している本人はこれで完璧だと思っているらしく、他人から見ればもはやただの変人であつた。

「シンチャンの天燕はどう?」

「順調だ。性能も第三世代にも劣らない」

「うんうん シンチャンもそれに適応してくれるから大助かりだよ~」

「しかし、私達以外でお前が興味持つ人間がいるとはな。彼女は何者だ?」

「え~っと……篠ちゃんの親友で、私の助手!」

「いや、もつと根本的な事を聞きたいのだが……」

「う~ん…私に続く天才?」

「なぜ疑問形なんだ? それに天才とは?」

「彼女はね教えたことをすぐに理解して、自分の物にしちゃうんだ。私のIS理論もあつといつ間に理解して、それに似た理論を独自で作っちゃう程に」

「IS理論に似た理論?」

「そう! その理論を見せてもうった時はビックリしたよ~。こんな理論もなり立つんだあ~って! それで、実はあの天燕には彼女の理論と私のIS理論組み合わせて作った物なんだよ~」

「なんだと?」

「だから、あの天燕は I.S. は敷いて言えば新しい I.S.。第三世代を飛び越して、第四世代とも言つのかな？」

「第四……世代……」

「でも、まだ発展途上で完成には程遠いけどね。もつと正確に言つちゃうといつくんの専用機みたいに第三、第四の中間地点にカテゴライズされるのかな？　あ、決着ついたみたい」

束がそう言うと私もモニターの様子を窺つた。

モニターには地面に倒れている一人の様子が映し出されていた。二人の I.S. のエネルギー残量は 0 を表示している。試験なので勝敗など関係無いのだが、勝敗を付けるとしたら両者引き分け。おまけに、二人共目を回しながら気を失つていた。

「はあ～… 医療班。一人の確保」

アナウンスでそう報告し、話の続きを聞こうと束の方を振り向く。先程まで隣にいた束はいつの間にかいなくなつっていた。私はまたため息をつき、とりあえずモニター室を後にすることにした。

明日から、新しく I.S. 学園にやつてくるガキ共を迎える準備をしなくてはな……。

第四話 神降臨ー（前書き）

息抜きのつもりで書いたらなんだか止まらなくなってきた…

第四話 神降臨！

IS学園に来てから今日とこつ一つ一日が終わるつとしていた。

「だめだ…まだ気持ち悪い…」

オレは自分がこれから二年間使用する宿舎の部屋に案内され、自分のベッドに倒れこむようにしている。

そして、重度の疲労で体が鉛のように重く感じた。

何故、そんな状態になったかと言えば……理由は今日の天燕の性能テストのせいだ。あの山田真耶という教員。元日本代表候補制というだけあって、実力はかなりのものだった。それを引き分けに持ち込めたのは天燕の性能のおかげだろう。

「…まだまだ…弱いな、オレ」

ボソリとそう呟く。

／＼＼

己の実力を知り、これからどのよつこじよつと考えていた時。突如、俺の携帯が鳴った。

誰だろうと思い、携帯の着信画面を見てみると登録されていない番号がそこに表示されていた。

だが、俺はこれが誰からの電話なのか知っていたので通話ボタンを押して携帯を耳に当てる。

「もしもし」

『やつほー！ 第二の人生をエンジョイしているかい？』

電話の相手は俺をこの世界に送った張本人。神様であつた。

「…………おかげさまで」

『そつかそつか！ それなりいいんだ』

「で？ なんの用だ？」

『おや？ 用が無かつたら駄目だつたかい？』

『神様はよっぽどお暇だと見える』

『つれないねえ。まあ、確かに暇なんだけど』

『疲れているから手短に頼む・・・』

『あいあい。了解しましたよ～』

オレはたまにこんな調子で神様とコンタクトを取つてゐる。なぜ携帯に神様が電話してくるのかが謎だが……まあ、あの人の単なる気まぐれだろう。だから、あまり気にしないでいる。

『ついに君の願いが叶つたことの祝福と能力の解放をしてあげようかと思つて』

『願い？ 能力の解放？』

『なんだい？ 忘れたのかい？ 君が最初に私にお願いしたことじ

やないか。空を飛びたいって

『ああ～そんなこと言つてた。でも、なんで今なんだ？　俺はもつと前から飛んでいたぞ？』

『それは仮の翼でだろ？　今日君が手にしたのは正真正銘の君自身の翼だよ』

「オレの、翼」

神様に言われて俺は指につけていた指輪を見る。

天燕。それが俺の本当の翼。

『で、能力の方なんだが』

『ん？　オレの能力は順応性じゃないのか？』

オレは物事に対して理解するが人並み外れて早い。どんなに難しい物事でも一回教えてもらえればすぐにそれを理解してしまつほどだ。だから、オレはこれが神から与えられた能力の一つだとずっと思っていた。

『それは生前から君の持つている知識だよ。私はそのことに関して何もしていない。元からある君の能力と言つてもいい。それで、話を戻すが……君の翼。天燕なんだが、操作していく疲れるだろ？』

「…たしかに」

『まあ、人間の体での速度は対応できないからね』

神の言つ通り、天燕のスピードは速すぎた。オレの動体視力や反射神経ではその動きに対応できず、それなりにスピード制限をしなければならなかつたのだ。

『なので、君に特別な『眼』をあげよう』

「眼？」

『『神眼』とでも言おうか？ まあ、全てを見通すことができる眼だね。ちょっと痛いから我慢してね～』

「お、おーーー ッ！？！？」

まだ心の準備ができていないといつのにオレは眼球辺りに激しい痛みに襲われた。痛みはほんの数秒ぐらいで引いたが、あまりの痛さに涙がボロボロ出てきて止まらない。

つてか、マジで痛い……眼球をくり抜かれて、無理やり何かを詰め込まれた感じだ。まあ、そんな経験ないから本当にそうなのかと聞かれればただの例えとしか答えられないのだが、そんな感じです。

『はい、おしまいくどー』

「…テメH」

『後は天燕のH&Aとのリンクができるよ！にしてあげるよ』

「…はあ？ って…お、い…」

神は人の話を聞かずにじんじん俺にプレゼントを渡して来る。そ

れはいいのだが、『神眼』なんてなんかネーミングが恥ずかしくね？
そんな事を思つてゐる内に俺の意識は闇へと落ちた。

次に目を覚ませばオレは空の上に浮かんでいた。
奇妙なのは目の前に広がる景色は空と雲しかなく、下を見ても地
上らしきものは見えない。

『誰？』

不意に声が聞こえて来る。

『あなたは誰？』

オレは声の方を振り向くとそこには一人の少年がいた。
なんというか、普通の男の子だ。年齢は5～6歳ぐらいだろ。髪
の毛はほんの少し赤みがかかった茶色で瞳はこの蒼天と同じ綺麗な
蒼色をしていた。

「はじめまして、八雲ツバメだ」

とりあえず、自己紹介をする。

『ツバメ……。僕の所有者の名前だね。意外とここまで來るのに早
かつたね。ってか、早すぎない？』

「ちょっとした事情があつてな。まあ、今日は挨拶だけだ」

『ツバメって女だよね？ なんだか、男みたいな喋り方だね』

「これが俺の本性だよ。君に猫がぶつてもしょうがないし」「ああ～…いや、そういう訳ではないんだが」

『猫？ 猫つてかぶれるの？』

「ああ～…いや、そういう訳ではないんだが」

『？？』

言葉が難しくて理解できなかつたのか少年は首をかしげながら頭に？マークを浮かべている。まあ、無理もない。こいつはまだ生まれて間もないからそういう理解がまだできないのだから。なので、今度暇なときにでも教えるとしよう。

「とりあえず、今日は挨拶だけだ。また、ここに来るよ

『うん。あ、そうだ…』

「ん？」

『自己紹介。僕はツバメのHSコアの管理人格。名前は天燕。ツバメと一緒にだね』

名前に燕を持つ者同士。天燕と名乗つた少年はそれが嬉しかったのか笑顔を俺に向ける。

それはそれは無邪気な笑顔だった。

オレの精神が完全な女だつたら悶え死にそつだつた。男としての部分があるから何とか堪えることができたが……。

つてか、かわいすぎるー これがいわゆる『萌え』と言ひやつか。

「……ああ、これから宜しく」

《うんー》

軽く天燕の頭に掌を置き、優しく撫でる。天燕もそれが嬉しくてえへへと笑つてまた笑顔を向ける。

やめろー その笑顔は眩しそぎるー 心が浄化されてしまふーー。

次に田を覚まして時にはもつ田は昇つっていた。
時刻を見れば朝の6時。

「そりいえば今田は入学式……」

まだ時間的に余裕がある。新入生が登校してくるのが8時くらい。入学式は9時から。つてか入学式初日から授業つておかしくね？

「… わて、今日も一日頑張りますか！」

じつしてオレのHHS学園での学生生活が始まる。

第四話 神降臨ー（後書き）

感想などお待ちしております。

第五話 クラス代表三つ巴バトル開催決定！（前書き）

やつと原作に入れました。

上手く出来てるか不安ですけど温かい田で見守りください。

第五話 クラス代表三つ巴バトル開催決定！

俺、織斑一夏は現在窮地に立たされている。

「…………」

もはや緊張を通り越して背中から変な汗が滝のように流れてくる。もつシヤツが背中にくつついて気持ち悪い。

え？ 何故そんなことになっているかつて？

それは俺が新たに高校デビューを飾ろうとしている今日初日。クラスメイトは女子しかいないからだ。

傍から見た男子は「何？」このハーレム？「とか「おい、YOU ちょっとそこ代われよ」とか言われそうだ。

代われるものなら代わってやりたい。

そして、この敵地のど真ん中で支援物資が届かないといつ恐怖を味わってくれ。

「（これは…想像以上にきつい…）」

不意に窓側の席の女子を見る。そこに座っているのは6年ぶりに再開をした幼馴染の篠ノ之箇である。俺はそんな幼馴染にアイコンタクトでSOS信号を発信する。

あ、目を反らした……。

第に見捨てられたことがショックだったが、とにかくこの窮地を脱出したいがために今度は廊下側の一番後ろの席に座る女子を見た。じゅらは小学校から今まで同じ学校に通っている八雲ツバメだ。

ツバメに第同様のSOS信号を発つしよつとするが……やめた。

「（あいつ！俺があたふたしているのを楽しんでる……）」

ツバメさんは現在口を手で押さえ、声を殺し、顔を伏せて、小さく震えていた。もう、声に出してしまった方が楽だろ？……。

「……くん。織斑一夏くん！」

「は、はい！？」

「あ、あのね。大声だしてごめんね。お、怒ってる？怒っているかな？自己紹介、『あ』から始まつて『お』の織斑くんなんだよね？自己紹介してくれるかな？駄目かな？」

「いや、あの、そんなに謝らないでください。……ってか、自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

俺はひたすら頭を下げる眼鏡で一部例外を除いて小さい山田先生（さつき自己紹介した）に落ち着かせるように言う。

山田先生は顔をあげ、俺の手を握り嬉しそうにした。
そして、クラスの視線がさらに俺に注がれる。

「えーっと……織斑一夏です。よろしくお願ひします」

とりあえず、自己紹介。

席を立ち、後ろにいるクラスメイトに向かつて頭を下げて、上げた。本来ならこのまま着席をするのだが、振り向いたことが失敗だつた。彼女たちの視線が痛い程俺の体に突き刺さる。「え？ 終り？」とか「もっと喋つてよ」的な空気が教室を支配していた。

「……以上です」

だが、空氣を読まずここで終了。何人かは芸人みたいに机から口
ケていたがそんな過度な期待をされても困る。無茶ぶりもいいところだ。

パアアン！！

「いつ 「！？」

しかし突然俺の脳天に痛みが走る。何事かと思い後ろを振り返る
と…。

「げ！？ 関雲！？」

パアアン！！

「だれが三国志の英雄だ。馬鹿者」

そこにいたのは俺のよく知っている人がいた。姉の織斑千冬だ。
なんで、貴方様がここにおられるのですか？という疑問に頭がいっ
ぱいになつて俺は放心状態となつた。

そして、その直後。クラスの女子が甲高い声をあげて、黄色い声
援がクラスに響いた。

一時間目のIIS基礎理論授業が終わって、オレは懐かしの親友の席へと向かった。

「ほーおーきー！」

「ツバメ」

実に6年ぶりに再開する篠ノ之篠。

外見はあまり昔と変わらないが成長する所はけやんと成長しており、立派な女性となっていた。

「SHRの時、一夏くん面白かったね。お腹がよじれるかと思つた」

「はあ～…なんだか頼り無く感じてしまつたよ」

「それより、もう挨拶したの？」

「いや…まだ…」

「はあ～…」

モジモジする篠を見て俺はため息を吐く。人の事言えないですか？ お姉さん。

「とりあえず、話をするーでないと、ズルズルしちゃうよー」

「う…」

「しようがない…。おーいーーー一夏くーん」

「なあつー?」

もはや強行突破だ。あれ? 違う? 合ってる? まあいいや。
篠はこの手に関して無理やりにでもきつかけを作つてあげないと
行動しない。なので、オレが二人のかけ橋となつてしまんぜよ。

「ツ、ツバメ…なんだ…」

「うつわ…酷い顔…」

「うつせえ、人の苦悩を笑いやがつて」

呼び出しに答えてやつてきた一夏は何故だか酷くやつれたようだ
った。

「ほり、篠ー!」

「ああ…」

篠も腹をくくつたのか、その気になつたようだ。

「…ちよつといいか

「え?」

そして、篠は一夏を連れて教室の外へと出でつてしまつた。それで
はて、久々の再会はうまくいくのかね?

「ねえ、八雲さん」

「はい？」

そんな二人を見送つていると同じクラスの女子に話しかけられた。

「ハ雲さんって織斑くんの知り合いなの？」

「うん。 小学校から同じ学校だったよ」

「そ、 そつなんだ。 … ねえ？ 織斑君つてどんな人なの？」

「見ての通りの人だよ。 でも、 やる時はやる奴で自分の考えは曲げない真っすぐな人だよ」

「ふ、 ふーん…」

おやおや、 まさかこれは…。

「何？ 気になるの？」

「そ、 そんなんじゃないよ…。」

慌てて否定するその女子は両手を突き出し残像が見えるほどブンブンと振つていた。 だが顔は真つ赤にしている。

… 篠さんや。 敵は意外と多いかもせんぜ…。 オタオタしてたらあつといつ間に愛しの彼が取られてしまつかもせんよ。

「再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけな

い

そんな事をいきなり言つたのは織斑千冬である。

三時間目はI.Iが持てる実践で使用する各種装備の特性についての説明などがこれも重要なことらしいので今決めることになった。クラス代表はクラス対抗戦や生徒会の開く会議や委員会への出席…言つなれば委員長のようなものである。

「はーい！ 織斑君を推薦しまーす！」

「私もそれが良いと思いますー」

などとクラスの女子が面白半分で一夏の事を他薦している。

当の本人は必死に抵抗し辞退しようとしているが教師の千冬は厳しい言葉で却下。なので、無投票当選で一夏がクラス代表に決まりとした時だった。

「や、八雲ツバメを推薦しますー！」

ん？ 一夏の奴なんか言つたか？

「ツバメは中学の時に生徒会長を務めた事もあります！ 僕より仕事は出来ると思いますー！」

「！？」

「イツ！！ オレを売りやがった！！！ ソンまでして自分は助かりたいかああああああああああ！！！」

「うむ、それは頼もしいな。ではこの一人で投票を行うか？ 他に

誰か候補はいないか？」

「待つてください！ 納得がいきませんわ！」

そこに待つた掛けたのはイギリス代表候補生のセシリ亞・オルコットである。先程の休み時間も何かと一夏に突っかかるて、ギヤーギヤー喚いていた。何かとプライドが高そうな人だ。

どうやら自分がクラス代表にならなかつた事に不満があり、自らを自薦して来たのだった。よしよし。この二人が相手なら票はそつちに流れで確實に俺は落ちるだろう。

「決闘ですか！」

「おう。いいぜ。四の五の言つよりわかりやすい」

ん？ なんか話を聞かずに一人で安心していたらおかしな方向に話が流れてるな。

「さて、話はまとまつたな。それでは勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行つ。織斑、オルコット、八雲はそれぞれ用意をしておくよ。それでは授業を始める」

あれ？ ちょっと耳がおかしくなつたかな？ 今先生なんて言った？ 決闘するのは一夏とセシリ亞だけじゃないのか？ つてか、今自分の名前も出た？

「えつ！？ アタシも！！」

「話は聞いておけ馬鹿者。お前も他薦で名前が上がつてゐるんだ。辞退は認めん」

バツサリと千冬はオレに「反論をさせず、ひとつと授業を開始し始める。

ギロリとオレは一夏に視線を向け、アイコンタクトである言葉を伝える。

……ブ・チ・コ・ロ・ス

それが伝わったのか一夏は顔を青くして顔をオレから背けた。

クラス代表の選出方法が決まり、とりあえず授業が終わつた後一夏を絞めた。そして本日の授業が終了して、オレは自分の部屋へと帰つて来ていた。

「そうだ。死のう」

「な、何言つているんだ！」

「はあ～…」

いきなりのネガティブ発言に突つ込みを入れるのは筈である。

ちなみに現在、筈は俺の部屋へと来ている。このエス学園の生徒は一人一部屋の寮に住むことになつてしているのだが、生憎俺の部屋には相手がいない。無駄に広い部屋を一人で独占できるのも良いし、精神が男の俺にはちょっと刺激が強いから大助かりであるがハブルれた気がする。ちなみに筈は俺の隣の部屋らしい。

「それより、篠さん。一夏くんと進展はありましたか？」

「今日一緒にいたから知っているだろ…」

「篠はもひつけようと素直になつた方がいいかもね」

「そんな急に言われれも…」

「もうでもしないとこのH-S学園は一夏くんにとつて誘惑が多いことじるだよ？モタモタしてたらあつとくう間に他の子に取られるよ！」

「あ…」

シユンッと落ち込む篠。

普段の篠は気の強い。だから、思つてもいなことを言つてしまい少し誤解を受けることもある。多分、今朝の一夏とのやり取りにも何かあつたのだろう。嬉しさ半分、虚しさ半分と言つた表情で帰ってきたのだ。何があつたと聞いてみれば、「久々に会つたのに覚えてくれてた」とニヤケながら言い、「でも、幼馴染として覚えていた…」と肩を落としていた。

「うーん…なにか一夏くんとの距離を縮める方法はないかね？」

「……すまない。ツバメ」

「んー？」

オレは一人でウーウー唸つていると突然、篠が謝罪してきた。篠は

膝の上に載せてくる手を強く握り、小さく震えている。

「わ、私の為に色々考えてくれるのには感謝してる。でも、私が不甲斐なくて・・・」めん

「何言つているの？ これはね、アタシの血口満足よ

オレは震える簫の手にそつと自分の手を添える。

「え？」

「親友が困つているのにほつとけないの！だから、アタシの気が済むまで簫の事を助けてあげる！！ つまくいかないからつて何！？ 次をつまくやるためにまた一緒に考えてあげるつてのーー！」

いかん……少し感情立つてしまつた。

でも、オレが言ったことに嘘偽りはない。本心からオレはこの子の事を助けたいと思つたのだ。それがオレの簫ノ之簫に対する『恩返し』なんだ。

この世界で、こんな境遇に馴染めなかつた俺を導いてくれたのは彼女なんだ。他人にとつて小さな理由なのかかもしれない。彼女が居なくても俺は世界に馴染めたかもしれない。

でも、オレにとつてはそれが立派な理由で、彼女がいたから今のオレがあるのだ。そして、オレは今的生活が大好きだ。そう思わせてくれるようになつたのも彼女なんだ。だから、彼女との出会いに感謝し、彼女の取り巻く世界も幸せな物にしたいと思う。

「うう…………ありがと…………」

「いいよ

篝は声を殺しながら泣いている。オレはそんな泣き顔が見えない
よつて自分の胸に篝の顔を隠すよつて抱きしめた。

束さん。じめんなさい。形は違つけど……約束は守ります。

しばらぐして、やつと落ち着いた篝は元の調子に戻つた。
田じりはまだ赤いが何かスッキリしたような表情になつていていた。

「本当にありがと。おかげでスッキリした」

「うんうん。今日はもう戻つたら? そんな顔でルームメイトと会
う訳にも行かないからシャワーでも浴びなよ?」

「ああ、本当にありがとな」

そして、篝は隣にある自分の部屋へと戻つて行つた。

「さてはで、どうした物かね~?」

ベッドに寝つ転がり、篝と一夏をどうやってくつつけようとしたと考え
ることにしたオレ。

しかし、数十分後。隣の部屋からものすごい物音が聞こえて、意
外な形で一人の心の急接近させるチャンスが到来してきたのだつた。

第五話 クラス代表三つ巴バトル開催決定！（後書き）

感想お待ちしてまーす。

第六話 特訓開始！

昨晩はちょっとした一騒動があつた。

「なあ」

「…………」

「なあ、いつまで怒ってるんだよ」

「…怒つてなどいない」

「顔が不機嫌そうじやん」

「生まれつきだ」

「ブツー！」

現在オレこと八雲ツバメと織斑一夏と篠ノ之箇は一年生寮の食堂で食堂を取っていた。で、ただいま箇さんは超「」機嫌斜め。理由は昨晩にちよつとした事件が発生したからだ。

何の事件だつて？ そりや君たち。あれですよ。

これなんてエロゲー？ 的なイベントが一人の間にあつたわけですよ。

「うわっ！ 汚ねえ！！ おい、ツバメ！ 味噌汁吹くなよーー！」

「「」「」めで…でも…おかしくわ…」

やしてオレは絶贊思い出し笑い中。あまつにもできすぎた状況に
もうこれは笑うしかないのですよ。
だが、ちょっとした問題がある。

「… なあ、 篠」

「な、名前で呼ぶなー。」

「… 篠ノ内さん」

「……」

微妙に気まずい空気が一人の間に流れてしまったのだ。
なんとか修正しようとオレも頑張ったんですけど。
でも、無理だったんです。

それでもう一つ問題が発生してしまったのです。

「ねえねえ、織斑くんさあ～」

「はーはーーー！ 質問ー。」

「今日の朝ヒマ？ 放課後ヒマ？ 夜ヒマ？」

突然だが朝食を取り終え、本日の授業一時間目が終了すると同時に一夏の元にクラスの女子が我よ我よと駆け寄つて行く。昨日の騒動は他の女子たちの耳に入り、出遅れないために唯一の異性に猛アタックをしてくるのだ。女子に囲まれ一夏は困っている様子。

「…………」

その様子を自分の席から見ていた筈は大層^{ほど}立腹の様子である。

「…………さてはて。どうした物か」

だからオレはこの状況を何とかしようとしたウーハー唸つて考えるのだった。

「筈。なんでもいいよな？ なんでも食うよな？」

「ひ、人を犬猫のように言つた。私にも好みがある」

昼休み。

私は一夏に無理やり連られ食堂にやつて来た。ちなみにいつも一緒にいるツバメはいない。誘おうとしたがなぜだか断られてしまった。

まったく、昨日あんなことをしておきながら何故貴様は平然と私と接してられるのだ。

わ、私は今にでも……気が狂いそつだというのに……。もしかして、こんなこと思つているのは私だけ？ だったらちょっと虚しい……。

「ふーん。あ、日替わり一枚買ったかこれでいいよな。鯖^{サバ}の塩焼き定食だつてよ」

「話を聞いているのが、お前はー。」

「聞いてねえよ。俺が先までどんだけ穏和に接してると思つてんだ馬鹿。台無しにしやがつて。お前、友達がツバメ以外にできなかつたりどりするんだよ。高校生活暗いとつまんないんだひ

「う…一夏のくせに変な所に気が回る。」

「私は別に・・・頼んだ覚えはない！」

「俺も頼まれた覚えがねえよ。あ、おばちゃん、日替わり一ツで。食券ここで良いですよね？」

一夏は相変わらず左手で私の腕を掴んでいる。たぶんこの手を離したら私が逃走すると思っているのだろう。

「いいか？ 頼まれたからって俺は「んな」と、普通はしないぞ？」
筈だからしているんだぞ？」

「な、なんだそれは……」

「なんだもなにもあるか。おばさん達には世話をなつたし、幼馴染で同門なんだ。これくらいのお節介はやらせね

「...」

心の中でため息を吐いた。

コイツは私を幼馴染以上には見ていない。でも、幼馴染だから私の事を気に掛けてくれている。それはそれで嬉しい事だ。しょうがないから今はそれで我慢してやる。

だから……。

「そ、その……ありが

」

「はい、日替わり一いつお待ち」

必死な思いで、一夏に感謝を言おうとしたら食堂のむせいかやさんに遮られた。おかげでタイミングを逃してしまった。

一夏も私が言おうとした言葉など聞こせず、楽しそうにねばねば笑ふと談笑している。

「…………」

ツバメ。私が素直になるのはもう少し時間が掛りそうだ……。

そんなこんなで放課後。
一夏と篠は学園内にある剣道場でセシリシアと俺に対する特訓をしてくるのだが……。

「どうこういひ」とだ

「いや、どうこういひと言われても……」

ギャラリー満載の中、オレはそんなギャラリーの中で一人をみていた。

一人は剣道の防具を付けてちょっととした試合をしていたのだが、ものの10分で一夏の方が簞に「テンパンにされている。

でも、なんでこんなことになつたんだ？ なんだかんだで一人はうまく行つているんだ？ もしかして、オレってお役じめん？

……まあ、いいや。

「どうしてここまで弱くなつている…？」

「受験勉強していたから、かな？」

「…中学では何部に所属していた」

「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」

「…直矢」

「はい？」

「鍛え直す！ HS以前の問題だ！ これから毎日、放課後三時間私が稽古をつけてやる！」

「え。それはちょっとと長くよつな
ていうかHSのことだな

「だから、それ以前の問題だ！」

じつして一夏のHS修行ではなく、剣道修行が始まったのだった。

ザマアー見る。

オレを巻き込むから」ひなつたんだ。むつと篠に「テニンパンにやられてしまえ。

「ツバメさん！ お願いしますー！」

「…………」

しかし、事態はまたも変な方向に進んでしまった。
篠の剣道特訓が終わり、夕食を食べ終えた後、一夏はオレの部屋
にやつて来て土下座をしてくる。

「俺にEISについて教えてくださいー！」

「…………」

本人は「」のままだとEISに関する知識を得る事が出来ないと予感
して危機感を感じたらしく。篠にこの後頼もうとも思つたが、また
剣道場でじいしかれそうになつて逃げて來たとか。なので、オレの所
に来てEISに関する勉強を見てもらいたいとか。

「一夏くん。君の立場わかつてる？」

「……重々承知しております」

「君はあたしを敵に回したんだよ？」

「いや、敵の又敵は味方と言いますか…」

「あん？」

「…こえ、なんでもあつません」

おひと、思わず本性が出てしまった。
そして、己の馬鹿をむりしたものが…。

確かに、己のままでは剣道の修行だけで一週間が終わってしまう。
かといって「マイシは俺を敵に回したのだ。そこまでしてやる義理はない。

わたくしは、ゼリハしたものか…。

「あつ」

「え？」

「ここ事を思つてついた。

「じゃー条件付きで教えて上げてもいいよ」

「ほ、ホントか…？」

「うん」

「で？ 条件と��のせ…」

「そんなに恥ずかしい事じゃないよ。一夏くとも簡単に出来る
事だよ」

「聞こ方が引っかかるナビ…なんだよ~」

「クラス代表決定戦終わった後に『テートして』

「……………はあ？」

一夏はオレの言葉を聞いて意味が解らず、固まつた。

第七話 セシリアル・シッバメ（前書き）

何度も書いても戦闘描写って難しいですね。

上手く展開が表現出来ていればいいですが…。

第七話 セシリアルバメ

皆さんこんにちは！ 八雲ツバメです！

本日は誠晴れやかな天気になつておりまして、もう皆で平和的に外でピクニックにも行きたい気分ですね。はい！

「八雲。逃げようとするな」

「…はー」

などと考へてコソコソその場を退散しようとしていたら織斑先生に捕まつた。

「では、これよりクラス代表決定戦を始める。織斑に用意した専用機がまだ届かないの先にオルコットと八雲の模擬戦を開始する。尚ルールは大会ルールを使用。一人共いいな？」

「はい！」

「…はー」

「では両者一 各ピットで待機」

そんなこんなで始まつてしまつたクラス代表決定戦。正直、未だにオレのやる気はグラフに示すと右下下がりだ。…もう、あれだ。どうにでもなれって感じだ。

「八雲。今回の模擬戦では天燕の性能テストも含んでいるから…手を抜くなよ。もし抜いたとわかれば…」

「全力でやります！」

だから、出席簿を構えないと大変だぞ… もう、やる気出まくつですから…！」

「ツバメ。大丈夫か？」

「あ、篠。一夏くん」

オレは第三アリーナのアピッチで出撃準備していると篠と一夏がオレの様子を見に来てくれた。

「その……なんだ。」めん。こんなことに巻き込んで

一夏は申し訳なさそうにオレに謝罪してくれる。

「謝るぐらになら始めからしないでよ。まあ、ビリでもこからいいけど。約束は守つて貰つからね」

「お、おひー。男に一夏は無えー。」

「よしよし」

そんなやり取りを一夏としていると篠は何の事だと首を傾げていた。

とりあえず、オレは筈に気にするなどだけ言つておく。

「しかし、大丈夫か？ 相手は代表候補生だぞ？」

「大丈夫だよ。ISでの模擬戦は始めてじゃないし。あたしには心強い味方がいるから」

「……そうか、頑張つて来い」

「うん」

親友の声援を受けてオレはピットの出口に身体を向ける。

「おいで……天燕」

そして天燕を呼び出す。

オレが身に纏うのは青と白が特徴的なカラー。従来のISより小さく、だが背中にある可変式の翼だけ見れば人に翼が生えたようなIS。

「…綺麗だな」

「ああ」

後ろにいた一人は天燕の姿を見取れていた。

たぶん、天燕の可変式の翼から噴き出している粒子の光が幻想的な演出をしているのだろう。

戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊

装備有り

天燕のハイパーセンサーで感知した報告を聞き、俺は各種チェックを行う。

よし、今日のお前は絶好調だな。

『ツバメ。よろしくね』

「（あれ？ お前コンタクト取れるの？）」

『うん。なんか取れるみたい。迷惑だった？』

「（…いや、そんな事ないよ。じゃ、ちよっと遊びに行こうか？）」

『はーい』

突然の天燕からのコンタクト。どうやら、後ろの二人にはこの声は聞こえてないらしい。

ISを展開させるとコンタクトが可能になる。それがわかるとオレはまだ会つて間もないこいつが頼りがいのある相棒になりそうだと思った。

「じゃ、行つてくるよ」

「ああ」

「勝つて来い！」

そう言つて、オレは天燕で飛翔し、ピットを飛び出して行った。

「あら？ 変わった工房ですこと」

「まあ、試作機ですから」

ピットを飛び出せば、そこに今回の相手がいた。

天燕とは違い、鮮やかな青色の機体。フィン・アーマーを四枚、背に従え、王国騎士のような気高さを感じさせる工房。

それがセシリ亞・オルコットの『ブルー・ティアーズ』。

「正直、あなたと戦う意味は無いんですけど… クラス代表は誰にも渡せませんの」

「アタシはクラス代表には興味無いんだけど… ちょっと応援してくれる人の期待にこたえないといけないから」

「では、わたくしとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲フルツでその人達の期待を私が摘み取つて差し上げますわ！」

セシリ亞は手にしている六七口径特殊レーザーライフル『スターライトmk?』の銃口をオレに向ける。

それと同時に試合開始の鐘はなつた。

「天燕とブルー・ティアーズの模擬戦開始。各機のデータ収集を開

始します

第三アリーナのモニター室。そこで素早くコンソールを操作する山田先生が横にいる織斑先生にそう報告する。ちなみに私は一夏と一緒にこのモニター室でリアルタイム映像を見ていた。

「凄いです。天燕は前回のテストより格段に動きがよくなっています」

「うむ。八雲もよくセシリアの攻撃をかわしている。もはや天燕の性能だけでは無い。ちゃんと『視えてる』」

モニターに写っているツバメはセシリアの攻撃をかわし続けていた。攻撃が当たらないことにセシリアは若干の苛立ちがモニター越しでもそれが感じられる。このままいけばセシリアは無駄弾を使ってエネルギーを使い果たしてしまっだろ。

「うわっ…あんな攻撃も出来るのか。ツバメもよくかわすぜ」

一夏は一人の戦いを見て感心し、学習している。次に戦うのは一夏なのだ。先に相手の戦略を観れる一夏は少しでも相手との差を埋めようと必死になつてている。

「…ツバメ」

しかし、私の中では何か複雑の物が渦巻いていた。
なんだろうか。この気持ちは…。

自分でもよくわからない。私はこんなことで悩む人間だつただろうか？

私はそこまで弱く無いと自負している。剣道に身を投じ、精神を

鍛え、頂点に立つた。だが、ツバメ達のような専用機持ちの前では私は弱いと感じてしまう。

「（ああ……これは嫉妬か）」

「この『氣持ちは』『力』を持った者達への嫉妬なのだと気付いた。

「第? どうした?」

「え?」

不意に一夏が声を掛けて来る。

「心配か?」

「…………」

「ツバメなら大丈夫さ。アイツが俺達の期待を裏切ったことなんてあつたか?」

「…無いな」

「なら親友のお前が目を反らしてもどうする? 最後まで期待してやれ。そうしたら、アイツはそれに答えてくれる」

「勝負は感情論で解決しないぞ」

「気持ちの問題だ」

「そうだな」

そうだ。今は自分の事より彼女の身を案じよう。
そして、どれだけの距離が私達の間にあるのかを見極めよう。

ツバメ、私はすぐにそこまで駆け上がって行くからな。

「こーのー！ こーのー！ ちよこーまかとー！」

あのハ雲ツバメと言う方の動きはなんですか！ 先程からわたくしの攻撃がかすりもしない！

「うわー！ 今のは危なかつた…」

とか言いながら余裕で避けているではないですか！？ 完全な死角からの攻撃のはずだったのに、彼女にはそれがわかっているかのようにレーザーをかわす。

それは、燕の如く。鮮やかな飛行技術で。

もはや、彼女に死角など無いのではないかと思えてくる。

「フ、フン！ 避けてばかりでは勝てません事よーーー！」

「…生憎この天燕には特殊武装が無いんですよね～」

「…え？」

今、彼女はなんて言いました？ 武器が無い？

「な、舐めていますの！？」

思わず、叫んでしまった。

武器の無い IIS でどうやって勝敗を付けよつと言つのだ。だが、先程ブルー・ティアーズのハイパーセンサーで武装はあると確認した。確か、固定武装があると。

……あ。

「思い出した？」

彼女がそう言つと、天燕の翼が大きく外に広がつた。それにより翼から散布される粒子の光はより強い輝きを放つていて。

キュイイイン！

「！？」

刹那、わたくしの横を何かが通り過ぎていった。

ブルー・ティアーズの警告音と同時に身体が反応しなければ直撃していた。日頃の訓練に感謝しなくてはならないとの時思つた。

「凄いですね。今のをかわすなんて」

その『何か』を放つた彼女の方を見て見る。今の一撃で決めるつもりだつたのか、わたくしの回避に少しばかり驚いたような顔をしていた。

「…加速粒子砲…砲身も無しにそんなこと」

「これが天燕の現在ある唯一の武器『蒼燕』。翼から散布される粒子は飛行のための推進剤だけで無いの。圧縮させ、こいつやって放つ事も出来るのよ」

言葉と同時に今度は単発では無く、連射してツバメは蒼燕を放つて来る。わたくしはその射線に入らないように回避するが、彼女は蒼燕を放ちながらわたくしの後を追いかけて来た。

「（ぐつー！）ビットを戻してスピードを上げないと… 追いつかる…」

攻防の逆転。戦闘機で言えばドッグファイト状態。後方から迫つて来る敵機から必死に逃げようとするが相手はしつこく自分の背後を追い掛けて来る。

先程まで自分が一方的に攻撃をしていたにも関わらず、今では逃げの一手。ブルー・ティアーズのスピードではあの天燕に捕えられてしまうのも時間の問題。このままでは自分は負けてしまう。

こんなこと誰が認めるものか！

感情の爆発。内に溜まつた物が出て来る。

わたくしはイギリス代表候補生なんだ！

憧れの人の名を守る者なのだ！

だから、ただではやられない！

わたくしはセシリ亞・オルコットなのだから！

「捕えた！」

蒼燕を回避しながら、体を反転させ、スター・ライトmk?のスコープを覗き、目標を捕えて、引き金を引く。放たれたレーザーは真っ直ぐツバメに向かつて放たれた。ツバメも回避しながら攻撃して来るとは予想していなかつたらしく、ビックリした様子だった。だが、これも回避されてしまう。

「今ですわ！！」

そして今度はスラスターとして戻した四つのビットを展開。ツバメが回避した方向に向けてレーザーを順番に放つ。

一つ目のレーザーを回避され

二つ目のレーザーも回避され

三つ目のレーザーも回避され

四つ目のレーザーも回避された。

だが、それでいい。それでわたくしの勝ちです！

ビットの攻撃命令終了と同時にスター・ライトmk?で放ったレー

ザーがツバメに直撃し、彼女の体に空洞を開けた。

「……え？」

ちょっと待つて。なんで、空洞が空くのです？　ISには絶対防御と言う操縦者を守るシステムが備わっている。いくらスター・ライトmk?の砲撃が直撃したとしても人の体に穴を開けることなど出来ないはず。なのになんで！？

ドゴン！！

「ツー？ キヤアアアアアアアー！！！」

そんな疑問で思考が滅茶苦茶になつてている時。突然、真横から衝撃が襲つて來た。そして、わたくしはその衝撃を殺せず、そのまま地面へと墜落してしまつた。

バリアに直接ダメージ。エネルギー残量28。実体ダメージ。
レベル大

「な、なにが……」

倒れている体をなんとか起き上がらせようとするがうまく力が入らない。だが、何が起こったのかを理解しようと視線だけを上空に向ける。

先程自分のいた位置には彼女がいた。わたくしの事を見下ろしている。

その姿はとても美しかった。

粒子が空中で光を放ち、彼女の背中から光の翼が生えているかのようだった。

「セシリ亞・オルゴット」

彼女がわたくしの名を告げる。

「あなたの強さに感服いたしました。その強さを手にするまでにどれほどの努力と苦労したかが窺えます」

彼女の態度とは先程までとは違つた。どこか凜々しく、神々しい。そんな彼女が真っ直ぐな瞳でわたくしの事を見ている。地面に横になりながら彼女の言葉を耳にし、少し涙が出そうになつた。

「ですから、私の全力を持つてそれにお答えさせていただきました。負けたことに恥じないでください。今回の負けを次に生かしなさい。あなたはまだまだ強くなることが出来る人です」

「この人はわたくしが積み重ねてきた物を理解し、そしてそれに全力で答えてくれた。」

「これ程嬉しいことは無い。」

わたくしの周りにいるのは親の残した財産を狙い、顔色を窺う者ばかり。今までISで勝負して来た人達も同じだ。どこかで手を抜き、本気で勝負して来ない。

いつしか、自分の強さを疑つようになつた。

わたくしは本当に強いのだろうかと。

代表候補生を名乗るに相応しい強さを持っているのだろうかと。

でも、この人はわたくしの強さを認めてくれた。その言葉を聞いて今までの努力が報われたような気になる。

「グス…ま、参り…ヒック…ました」

目から溢れる大粒の涙が止まらない。
手でどれだけ抑えようとしてもどんどん溢れて来る。

そして、わたくしは震える声で自分の敗北を認めた。

『試合終了！ 勝者 八雲ツバメ！』

第七話 セシリアムシバメ（後書き）

これなんてトランザム？

第八話 転校生は親友セカンド（前書き）

セカンド幼馴染ならぬ親友セカンド。

うん語彙わりいな…。

第八話 転校生は親友セカンド

なぜこいつなつたし。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繫がりでいい感じですね！」

もう一度言う。なぜこいつなつたし。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日セシリアに負けたのですが、なんでクラス代表になつてるんでしょうか？」

そう、昨日のクラス代表決定戦で俺は後一步の所でセシリアに負けてしまった。負けた理由は至つて簡単。俺の専用機『白式』のが不足。白式の装備『雪片式型』の特性を理解せず、シールドエネルギー残量を気にせずにいたのがいけなかつたらしい。

あ、かつこ悪いとか言つたなよ…。

ちなみにツバメとは対戦していない。セシリアとの対決の後、ツバメの天燕に不都合が生じたとかで俺達は対戦出来なかつたのだ。

「それは

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

山田先生が理由を言おうとしたらその本人が理由を述べた。相変わらず様になつている腰に手を当てるポーズ。あ、そこはどうでもいいか。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然の事。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですわ」

あんなこと言つてますがツバメには負けてるんですよ。あの人。「それで、まあ、わたくしも大人げなく怒つたことを反省しまして」しまして？

「“一夏さん”にクラス代表を譲ることにしましたわ」

何と言つありがた迷惑。あれ？ 今名前で呼ばれた？

「いや、それならセシリアに勝つたツバメに譲ればいいじゃないか？ あれ？ そう言えればツバメは？」

クラスを見渡すとそこにいつもいる彼女の姿が無い。たしか、朝食の時は一緒に食べていたから風邪で休みなんてことは無いと思うけど。

「八雲は今日から週末まで休みだ」

俺の疑問に答えてくれたのは山田先生の横で椅子に座つてゐる千冬姉だった。

「え？ なんで？」

「バシン！」

「……な、なんですか？」

「ハ雲のIISは別の人気が開発した物だが、アイツが構築したIIS理論を元にされている。だから自分で整備する必要があつてな。今はこの学園の整備科の方にいる。時々今回のような事があるからクラス代表としての役割に支障をきたすと考え、アイツも辞退した」

ざわ…ざわ…

「どこの賭博師の効果音のよつにクラス中が千冬姉の言葉を聞いて騒ぎ始めた。

「ハ雲さんつて自分でIIS理論を組めるの？」

「つてか、そんなこと出来るの篠ノ之博士ぐらいでしょ？」

「もしかして、私達のクラスつてすゞこ人の集まり？」

「頼んだら私の専用機作つてもうえるのかも」

「あ、私も！」

そして招集が付かない程に騒ぎ出す。そんな中、俺は不意に窓際の席にいる筈を見てしまった。

「……」

幕も知らなかつたらしく目を見開いて驚いていた。

だが、俺はそれで納得をした。

クラス代表決定戦が決まった日。俺はツバメにISについて教えてもらったことがある。ツバメの説明は悪いが山田先生よりもわかりやすく、頭の出来がいいとは言えない俺でも理解できる程だ。今まで単に教え方がうまいなあ～とその程度に思っていたが自分でIS理論が作れてしまえば当然だ。

アイツ、凄い奴だつたんだな。

「静かに！ とにかく、八雲はしばらくこちらの授業を欠席する。それとクラス代表は織斑一夏。異存はないな」

はーいっと俺を除くクラスメイトが一丸となつて返事をした。もはやこのクラスに俺の意思は存在しないらしい。

なぜこうなつたし。

「では、今日は解散しましょ。八雲さん。またあなたのIS理論について聞かせてね？」

天燕の整備に整備科へと足を運んだ途端。オレに付いての噂（オレは知らないが）を聞いた整備科の生徒達に囲まれわんやわんやとされ、精神をガリガリ削られた。

本当なら天燕の整備をしに来たのに今日一日がそんな質問攻めで

終わってしまった。

もう一度言おひ。なぜこうなったし。

オレは気だるい気分で寮の食堂へと向かつて学園の外を歩いていた。ちなみに今は夕食後の自由時間だ。なぜ、こんな時間に食堂へ向かうのかと聞かれれば自分の夕食を済ませるためだ。それまであそこ連中はオレを解放してくれなかつたのだ。これからあそこに通うと思つと気が重くてしようがない。

「あれ？ ツバメ？」

「ん？」

不意に声を掛けて来た人物がいた。

オレはその方を向くとそこには小さな身体に不似合いな大きなボストンバッグを持った少女。

特徴的なツインテールが目立つ女の子がそこにいた。

「……鈴、ちゃん？」

「わー！ ツバメだあー！」

途端に、オレが鈴と呼んだ少女が抱きついてきた。
凰・鈴音。小学校の時、笄とすれ違いでオレの通つていた小学校に転校して來た少女だ。

そして、オレの第一の親友でもある。

「ツバメもこの学園に通つてたの？」

「うん。鈴ちゃんはビーチしたの？ なんでもいいの？」

「転校して来て今着いた所！」

「転校？ いろんな時期に？ あー、一夏くんを追いかげに。」

「わーわー！ そ、そんなんじゃないから…。」

オレがそう言いつと鈴は顔を真っ赤にして強く否定する。ビーチからそれが理由らしい。昔から二つの行動はわかりやすかった。さしづめ一夏がEHS学園に通つてコースを見て、軍人である鈴の叔父にでも無理矢理頼んだのだろう。

そして、オレ達は一年が宿泊する寮に向かしながら世間話をしていた。

「でも、久しぶりね！」

「そうだね。一年ぶりぐらい？ 連絡はしてたからなんか実感は無いねえ～」

「でも、実際に会つたら実感する物があるよ」

「たとえば？」

「えへっと…とにかく嬉しいー。」

なんともアバウトな…。

「そう言えばツバメは何組なの？ さつき手続きしたらあたしは一

組つて言われた

「あたしは一組だよ」

「ふーん…一夏と同じクラスか」

「ありや？ 情報早いね」

「手続きした時に受付の人に聞いたの。一夏ってクラス代表になつたんだつて？」

「え？ そうなの？」

まあ～予想はしていたが。

「自分のクラスなのに知らないの？」

「あたしは今日一日整備科の方に行つてたから」

「整備科？ なんで？」

「フツフツフ！ 実はあたしも専用機を手にしたのです！ そして、その整備を自分でする事になつてるので…」

「へー」

「ありや？ あまり驚かない？ ちょっと、無駄にポーズ取つたのが恥ずかしいじゃないか。

「反応薄いなあ～」

「だつて、あたしの専用機『甲龍』^{カクロン}の龍砲はツバメが考へた武装理論を元に作られたんだよ」

鈴はそいつ言いながら右手に付けていた黒いブレスレットをチラ付かせる。

「え？ そりなの？」

「うん！ 始めはジックリしたよ。理論提案者の一覧にツバメの名前があつたのには。だから、ツバメが専用機持つても不思議じゃなって思つたの。ねえ？ ツバメの専用機つてどんなの？」

「天燕つて言つた。待機状態は指輪なんだけど・・・今は整備科のラボに置いて来ちゃつた」

「じゃ、今度見せてよー。」

「うふ、いいよ。つと、寮にとづけやーーー！」

鈴との会話に夢中になつていると俺達は寮の玄関ホールに到着した。オレは飯がまだだったので鈴と一緒に食べるかと誘つてみたが、鈴はもう済ませてしまつたらしく。それに、長旅で疲れたのか今日は部屋に行つて休むと言つてその場で別れた。

鈴と別れてオレは再び目的の場所へと向かつ。しかし、その目的地に向かうに連れ、なんだか騒がしくなつてくる。食堂でなにかやつているのか？

「どうわけでーー！ 織斑くんクラス代表決定おめでとうーー。」

「おめでとー！」

食堂にやつて来ると大勢の女子が食堂の一 角を占領し、手にしたクラッカーを乱射させていた。一瞬何事だと思つたが壁に掛つて いる紙を見て状況を把握した。

『織斑一夏クラス代表就任パーティー』

それはもうデカデカと飾られている。そこに参加している女子達はわいわい、キヤキヤと飲み物片手に楽しく騒いでいたが、当の本人は何故だか暗い顔をしていた。

「あ、ツバメ」

そしてこちらの存在に気付いた。

「え？　八雲さん…？」

「ビー！…？」

「あー　あそー…」

一夏がオレの名前を呼ぶと何故か参加者の視線がオレに集中する。オレ、何かやつたかな？

「八雲さん！　自分でエス作つたつてホントー？」

「私の分の専用機つて作つてくれるー？」

「え？　え？　え？」

突然、オレの周りを取り囲むようにそんな彼女達が質問してくる。状況はわからなかつたがオレは心の中でこう思つた。

なぜこいつなつたし。

「なるほど、整備科に足を運んでいる内にそんな事が・・・ってか、アタシが作ったのは篠ノ之博士のISM理論に手を加えた程度で自作じゃないよ」

「でもそれってすごくねえ？」

やつとの思いで質問攻めから解放されたオレは本日のメインパーソンがいる席で御飯を食べていた。そして、なんであんなことになつたのかを聞き、その補足説明をした所だ。

ちなみに御飯は自作のオムライスだ。上に国旗が立つているのがワンポイントだぞ。

「でも、それは企業レベルで行える行為ですわ。それを学生の内から行えることは誇りに思つてもいいのではなくて？」

「たしかに・・・事実それが採用されてISMが作られたのだからな」

そんな補足説明を褒めたたえるのはセシリ亞と算だつた。二人共

ちゅつかり一夏の両サイドを陣取り、間に挟まれている一夏は少し困った様子。

まあ、気にせずオレは「飯を口に運ぶのだが。

「どこの技術を習得したのですか？」

「言えない」

「え？」

「教えたなら命が無くなるかもしれないから」

「冗談で脅してみました。ですが、効果抜群。セシリ亞さんの横で話を聞いていた一夏は顔を真っ青にして引き気味です。

「つてのは冗談で、普通にIOSを開発していた事業に知り合いがいて留つただけだよ」

「ハ、ハハハ…」

おうおう、見事に顔を引きつらせてますね。あれ？ 篠さん。なしてそこにオレの事を睨むような目で見るのですか？ つてか、怖いです。

「もう言えば一夏くん。鈴だけやんって覚えてる？」

「鈴？ 鈴ってあの鈴ちゃん？」

「やひ、あの鈴ちゃん」

篝の視線に耐えられず、オレは話題を変える事にした。

「なんかEIS学園に転校して来たみたいだよ？ セツネンで会つた」

「本当か…？」

「本当、本当」

鈴の名前を出した途端。一夏は懐かしの人の名前を聞いてパアーッと表情が明るくなつた。鈴は一夏に取つてセカンド幼馴染なのである。小学校の時からの付き合いで、鈴が帰国する最後の日まで一緒にいた仲である。

「うわ～そなんだ。どうだつた？ 元気にしてたか？」

「うん、相変わらずだつたよ。ってか、あんまり変わって無かつた」
アハハハハ。と一人で笑つていると一夏の両サイドにいる篝とセシリアは話について行けず、若干の放心状態だつた。

「ああ、鈴つてのは篝とすれ違いで小学校に転校してきた奴なんだ。だから、俺達のセカンド幼馴染なんだよ。ってか、アイツEIS操縦者なんだ。はじめて知つた」

「ちなみに中国代表候補生だよ」

その言葉にいち早く反応したのはセシリアだつた。ガタンとテーブルを叩き、その場で立ち上がる。

あ、国旗が倒れた。倒さないようしていたのに。ショックだ。

「聞き捨てなりませんわ！　一夏さん！　クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう！　わたくしも協力は惜しませんわ！　なにせ専用機持ちはわたくしと一夏さんとツバメさんだけなのでですから」

オレの専用機は整備中ですがね。

「そうだな。やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！　一夏さんは勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男たるものとのよつた弱気でビリする」

「織斑くんが勝つとクラスの皆が幸せだよー」

「フリー・パスだからー」

セシリ亞、笄、クラスメイトの順に色々好き勝手言ひ。後半の方はもはや己の欲望だったのは気にしないでおこう。

こうして、クラス代表就任パーティーはいつの間にかクラス対抗戦の作戦会議の時間となってしまった。

翌日。

結局、天燕の整備で徹夜した俺は寮の部屋へ戻らうとしている所に鈴に捕まり、「ビックリさせようと思ったのに…なんでバラしたのー…」つと怒られた。

なぜこうなったし。

第八話 転校生は親友セカンド（後書き）

本文がなぜこうなったし！

いや、言いたかっただけです・・・。

第九話 戦士の休息 新たな友情誕生（前書き）

友人A「なあ？」

和利夫「どうしたんだ。小説仲間の友人Aくん」

友人A「一夏とツバメのデートってどうなったの？」

和利夫「あつ」

つてなやり取りがあり、オリジナルストーリー展開！
期待しないでください。

第九話 戦士の休息 新たな友情誕生

「ふああ～……ねむ……」

天燕の調整をして四日目。曜日で言えば金曜日。今日で整備科に通うのは最後となり、やつとこの徹夜続きから解放される。そう思うとオレの気は一気に緩みはじめ、物凄い眠気が襲うのであった。とりあえず、寮の自販機でコーヒーでも飲んで頭をスッキリさせよう。

「あ、ツバメ」

だが、そんな状態であるオレの目の前に一人の人物が目の前に現れる。

「」のHS学園で唯一の男子生徒。織斑一夏だ。

「一夏くんどうしたの？ 暗い顔して？ ってか、ホッペ赤くなってるよ」

「いや……ちょっとな……」

何かを悩んでいたらしく、一夏の表情は優れない。おまけに誰かに殴られたのか彼の頬は少し赤くなっていた。

「コイツとしては珍しい光景だった。ついに誰かの地雷を踏んでしまったか？ いや、今まで踏まなかつた試しが無いか。

「アタシ、自販機の所まで行くけど？ 何か飲む？」

「え？」

「ツバメさんが奢つてしんぜよ～」

「あー、おこー。」

オレは一夏の手を無理矢理引っ張つて寮の自販機へと足を運ぶことにした。

「なるほど… 鈴ちゃんはそんなことが

「…ああ」

寮の自販機でオレはコーヒーを一つ取り出し、一つを一夏にあげた。一夏は受け取ったコーヒーを飲まずに頬に当てて腫れを冷やしている。

そして、どうしてそうなったのかを聞き出した。

オレが寮に返つて来る前、鈴が簫に部屋代えを申し出に来たらしい。そして、その際に鈴は一夏と書したある約束事を確認した所、一夏は間違つて覚えていたのだ。それで鈴は怒り、その場にいた簫にも冷たくそれ部屋に呑びらくなつてしまつたとか。

「つてか、それって一夏くんが悪いよ。鈴ちゃんはそんなつもりで言つたんじゃないと思つし」

「なんだよ？ 酢豚奢つてくれるるつて他に意味があるのか？」

「はあ～…」

オレは「マイツの間違った認識に心底呆れる。

いや、まあ～鈴も鈴だ。よりによつてなんで酢豚をチヨイスしたのだろう～。中国では酢豚が代名詞となつてゐるのだろうか？

「なあ？ 倆ぢつたらいいのかな？」

「言葉の意味を理解して、鈴ちゃんに謝るべきだね」

「言葉の意味…。ツバメはわかるのか？」

「だいたい」

「教えてくれないのか？」

「こればっかりは」

「はあ～…だよな…自分で理解できる」に努力するよ」

「わつしなきこ。じや、あたしはもう寝るね～」

「あ、ツバメ。ちよつと待て」

一夏の話を聞き、何をどうあるべきかがわかつた所でオレはその場を去つたとした。だが、一夏はまだ何か用があるらしくオレを呼び止める。

そして、何故か顔を赤くしながら「口」もつていた。

「や、その…ツバメとの約束」

「約束？」

「ほら、クラス代表を決める時… ISOについて教えてもらつただろ？」

「ああ、そうだったね」

「そ、それで、教えてもらつ代わりに出した条件…『テテテ、データー』するつて」

「あつ」

「…………もしかして忘れてた？」

「あ、あははは！ いや～ 最近忙しくて～」

そう言えどもそんな約束してたな。本当に最近は忙しくてすっかり忘れてた。

一夏もそんな不遜の態度を見て少し呆れ気味にしてしまった。いやお前だけにはそんな顔されたくないぞ。

「じゃ～明後日！　日曜日に行こうか！」

「え？ せ、急だな」

「いや？」

わざとひじへ、下から一夏の顔を覗き込むようとする。何を感じ

たか一夏は少し怯んだようだつた。

女子の上目使いってホント効果があるんだな…。

「わ、わかった。じゃ、日曜日な」

「OK~ 詳しい事はまた明日にでもね~」

「お、おひ」

そう言つてオレは一夏と別れ、一人部屋へと戻る。
その途中オレは二ヤリと三田用のよつに口を歪め、携帯を取り出
してとある人物に連絡をした。

日曜日。

俺、織斑一夏は学園に外出届を出して街へと繰り出していた。
なぜ街に来ているかつて？

それは…アレだ…。

本日はハ雲ツバメとの約束通りにデートをする事になつたからだ。

「でも、なんで駅で待ち合わせなんだ？ 学園から一緒に行けばいいのに」

そして、肝心の彼女は今この場にいない。ツバメからもうつたスケジュールで何故か駅集合となつていたのだ。これにどんな意味があるのか疑問に思いツバメに確認を取つた所、その方がデートらしいだけ帰ってきた。

「…なんか、ドキドキしてきた。俺、デートなんて初めてだし」

普通のカップルがデートする時はこんな感じなのだろうか。俺はそんな事経験したことが無いのでよくわからないが、とにかく心臓がバクバク鳴り響く。女子だけの学園で多少は女子に対する免疫（別に女子が苦手ではないぞ）は出来てきたものの、この状況はどうやらそう言つものは関係無いらしい。

「はあ～…胃が痛い…」

「ふ、フン。不甲斐ないぞ。一夏」

「え？」

人が頭を抱えて悩んでいる所に突然声を掛けられた。俺はその声を掛けて来た人物の方を向くと思考が一時停止する。

そこにいた人物は

「…簞？」

「な、なんだ？」

「どうしてお前がここにいるんだ？」

「そ、その…ツバメが急用で来れなくなつて、その代理で、來た」

「はあ？」

目の前に現れたのは俺の幼馴染の篠ノ之簞だつた。しかし、目の

前にいる筈はどこかいつもと違った気がした。

『どこが違うかと聞かれれば…返答に悩むのだが、そんな気がしたのだ。

俺の今の心情のせいだろうか。何かとそんな所に目が行き届いてしまい、そういうことを察知してしまつ。

『ちよつと待て。ツバメは急用で来れないって？ ああ、これが俗にツバメドタキヤンなんだな。始めてされたぜ。

『どうした？』

『…いや、ちよつと待つわ』

筈に待てと言い俺は自分の携帯を取り出す。そして、光速とまでは行かないが素早く指を動かして携帯を操作し、電話を掛けた。

『もしもし？』

『ツバメ！？ どういたしましてだ…』

電話を掛けた相手は本来ならここにいる人物である。

『あーごめん。急用ができちゃつてさあ。行けなくなっちゃつた

『で？ なんで代わりに筈が来てるんだ？』

『いやー今日は観たい映画があつて、そのチケットを持ってたんだけど。もつたいないし、代わりに筈と観て来てよ～つて思つて。代理を出しました。あ、チケットは筈に持たせてるから』

『はあ？』

『まあ、そんな訳だから！　帰ってきたら色々な意味で感想聞かせてねえー』

「あ！　おい！」

ブツツーツーと俺の携帯から電子音が鳴り、絶望した。ツバメさんそりゃあんまりですよ。さつきまでの俺のドキドキはなんだつたんだああああ！

「終わつたか？」

「え？」

ちょっととした絶望を味わっていた刹那。 笛は俺が電話を終えたかと聞いて来る。

「な、なら行くぞ！　もうすぐ上映の時間だ」

「え？　あ、おい！」

半ば強引に笛は俺の手を取つてきた。

田の前にいるのは6年ぶりに再会した幼馴染なのに、その行為が俺の心臓の鼓動をまた早くした。

街へと繰り出した一夏と笛の二人。 そんな様子を影で見ていた人

物がいた。

「ニシシシ。作戦通りにつまく行つたみたいだな」

一人で悪役の用な笑いをしながら一人が消えて行つた方を見つめるその人物は物影から身を晒し、一人の後を追おうとした。

まあ、その人物と言うのはオレ、ハ雲ツバメなのだがな。あ、ちなみに今は周りに知り合いがないので男言葉なのはあしからず。

「さてさて、撒いた種はうまく花を咲かせるかね？」

今回の『テート。実は始めからこいつするつもりであった。一夏に言った急用も当然嘘だ。最近の篠は一夏との仲も順調であつたが未だに一線を越えるような間柄にはなつていない。なので、『一夏に異性を意識させてから篠とテートして、ラブラブイチャイチャになつてもらおう作戦！』を考え付いた訳です。

いやいや、そんなに褒めるなよ。照れるじゃないか。

しかし、オレは視界には一夏達とは別に奇妙な物を捕えてしまつてている。

「…セシリ亞？」

一夏と篠から離れた場所で金髪ブロンド縦ロールの令嬢、セシリア・オルコットがいたのだ。

なんともまあ、憤怒の炎を宿らせている。おまけにT-Sの部分装甲展開をしてスター・ライトmk?で狙撃までしようとしていた。

「おお、怖っ…。ってか、瞳からハイライトが消えているのは気の

せいか？」

恐ろしき、乙女の純情。

だがさすがに学園外でのIIS展開で問題を起しそうのは不味いと思
い、オレは彼女の元へと足を運ぶことにした。

「…………」

現在、わたくしセシリア・オルコットは織斑一夏の後を付けていた。

先日から一夏さんは何かおかしい。そう思つたのは昨日一緒に朝食を取つた時。食事にはあまり箸をつけず、何を話しても上の空で心ここに有らざと言つた感じだった。おかげでIISの訓練もわたくし直々に指導しているにも関わらず、まったく集中してくれなかつたのだ。始めは調子が悪いのかと思つて心配して影ながら一夏さんの行動を監視していたのだが……。

それがこの有様だ。

まさか、わたくし以外の女の事で頭が一杯だつたとは何とも如何わしい！ それでもわたくしの上に立つお方ですか！ なんとかして一夏さんの目を覚まさなければ！

「はーい！ ストップ。武器を納めなさい」

「ツー？ つ、ツバメさん！？」

不意に背後からわたくしの脳天に手刀を軽く降ろしてきた人がいた。

わたくしを本当の意味で打ち負かした人。八雲ツバメがそこにいたのだ。

「何やつてるのよ？ こんな所で人でも撃ち殺す氣？」

「あ、あなたには関係ありませんわ！」

「はいはい。とにかく、街中でそんな物騒な物は閉まつてね」

「…くつ」

彼女がそう言つとわたくしは大人しく手にしたスター・ライトmk ?の展開を解除した。その際に彼女はどこか遠くを見ており、そしてなぜかため息を吐いた。

たしかそちらの方向は一夏さん達が向かつた方向。

「ねえ？ これからお茶でもしない？ いいお店知ってるんだけど」

「え？」

「よし！ 行こう！ もうあと行こう！」

「なつ！ ちょっと！」

ツバメさんはわたくしの了承を得ずに腕を掴む。そして、その場から無理矢理引っ張られるのだった。

これから一夏さんに間違いがあつてはならないように阻止しなくてはならないのに！

日曜日の街。多くの人が行きかう中でそんな少女の声が鳴り響いた。

『やめて！ こんなことして何になると？』

『フツ、もう遅いんだよ。俺はもう引き返せない所まで来ちまつたんだ』

「なあ？ なんで主人公は死んじまつたんだろうな？」
　　一人の男性が泣きすがる女性を振りほどいて目の前にある扉を開け、その場を立ち去つてしまつ。女性は大声で泣き、彼の名前を呼び続けた。そして、外から一発の銃声が鳴り響いて來るのであつた。

「自分が死ぬことで罪が償われると思ったんだろ。やり方はアレだが、男らしいじゃないか」

「
」

現在、私と一夏は先程観た映画の感想を話しながら某有名ジャンクフード店の一席で昼食を取っていた。ジャンクフードと言つのはあまり好きではないので私はサラダとジュースだけを注文し、一夏は二つ目のハンバーガー口にしている。

「悪役の奴もなんだかそれなりの事情があつて悪役つて感じもしなかつたな。むしろ、最後はアイツの方が主人公ぽかったし」

「正義、悪なんて分類は実際曖昧だ。人は自分が信じた信念が自分にとつての正義になるのだから。いろいろあるのだろう」

「そつかー。篠はやっぱ好きなのか？」

「ブフツ！？」

映画の話からいきなり自分の好みについて聞かれ、私は飲みかけのジュースを噴き出してしまった。正面にいた一夏にそれが思いつきり掛けたのは言つまでもない。

「（い、いきなりなんだ！　どうしてそんな話になる！？　いや、好きか嫌いかと聞かれれば好きだし、お前もずいぶん男らしくなつたと思うわ。テレビでお前の顔写真を見た時は純粋にカッコいいと思つたし、放課後の訓練だつて根は上げるが、最後まで頑張る姿勢もカッコいい。いやいやいや、その前にどうしてその質問をして来るので！？　こ、こいつは私に何を言わせたいのだ！？）」

「お、おい。大丈夫か？　ホラ」

「…すまない」

思考がグルグルする中、一夏は私にチリ紙を差し出してくれた。私はそれを受け取り、ジュースで汚れてしまったテーブルを拭く。

「で？　好きなのか？」

「なつ！ 何を言つているだ！？」

「え？ いや、映画に登場した主人公みたいな奴が好きなのかあ
つて思つて…」

「…………え？」

一夏が質問の意味がなんのかを答えるとグルグル回つた思考がピ
タッと止まる。

つて

「いや、やけにあの映画の登場人物について喋るから好きなかと思
つた。

そして止まつた思考が再び動き出すと顔がどんどん熱くなつてき
た。恥ずかしい…。自分の勘違いで色々考えたのがとてもなく恥ず
かしくなつてきた。

「本当に大丈夫か？ 顔が真っ赤だぞ」

「…ああ、大丈夫だ。問題ない」

「そ、そつか。ならいいけど…」

そう言えば一夏はこの状況をどう思つているのだろう…。ツバメ
にほほ無理矢理このようなデデテ、デード（デードと言つのが恥
ずかしい）をセッティングしてもらい、いつものように振る舞えな
ど言われたが…いつも以上に余計なことを考えてしまう。

なんだかんだで一夏は普段通りの振る舞いだし、舞い上がつてい
るのは自分だけではないかとまたいつかのように考えてしまう。

「…ん？ 一夏、どうしたのだ？ れつきからキラロキラロして」

「うえつー？ な、なんでも無いぞー？」

「？？」

チラリと一夏の方に視線をやると向やかにソソソソした感じだった。
なにか気になる物でもあったのだろうか。

「な、なあ。 篇」

「ん？」

「」の後どうする？ 映画観ただけじゃつまらないし、ビリカで遊
んでくか？」

「え？ も、そうだな。 そうしよう。」

「じゃ、決まりだな」

そう言つて一夏はカフェのトレイを持って席を立ち上がる。私も
その後に続き、これからどうするかを考えながら一夏と一緒に店を
後にした。

少し一夏の顔に赤みが掛っていたのは気のせいだろうか？

「ん~… まさかこんな島国で」のよつた美味しい紅茶を飲めると
は思いませんでしたわ」

「気に入つてもうれて何よりだよ。連れて来た甲斐があつた」

「じゃなくて! わたくしは」

「お待たせしました。『注文のフルーツタルトとチーズケーキにな
ります』

「あ、どうせ~」

「あ~、うれしいもんこしかつですわ」

「でしょ~?」

一 夏さんを追跡している途中。わたくしはツバメさんに連れられ
午後のティータイムをたしなんでいた。天氣もいい事ですし、こう
言ったオープンカフェでお茶をするのもいいものだ。
そう、本来の目的すら忘れて。

「忘れてませんわ!」

「わっ! 急にどうしたの?」

バンジーとテーブルを叩いて何かに反論する自分。

「あ、失礼しました。それよりツバメさん。どうしてあのような場
所にいたのですか?」

「んー？ アタシはただの買い物だよ。セシリ亞さんこそあんなと
こりで誰を狙撃しようとしてたのかな？」

「うう…」

嫌みたらしく先程の愚行の理由を突きつけられるとわたくしは押し黙ってしまう。そして、反論する気も失せ、大人しく席に着き、紅茶に口にした。

「やあー やあー 君達。可愛いね。今暇？ 僕達と一緒に遊びに行かない？」

そんな時だった。

何とも頭の軽そうな男性数人がわたくし達に声を掛けてきたのだ。この日本社会では「こうして気楽に軟派をする輩がいると聞いた」とがある。男女優劣が変わったこの現代社会でもまだこんな存在が生存していることにビックリするが、どうでもいい。

「その制服ってHJ学園のやつだよね？ スッゲエーお嬢様なの？」

話もしていないのに勝手に喋るな。わたくしの優雅な一時を邪魔するな。

「ねえー 無視しないで俺達と遊びに行こうよ~ 楽しい所に連れてつてあげるから」

そう言つて男の一人がツバメさんの腕を掴み上げる。その軽率な行為にさすがのわたくしも頭に来て、また席を立ち上がるうとするが目の前にいるツバメさんに止められた。そして、彼女はニッコリ

と笑い、言葉にする。

「Thank you for a wonderful invitation Mr. But I don't want going with you guy」

(素敵なお誘いありがとうございます。でも、あたし達はあなた達と行けないわ)

「え？ あ？」

突然ツバメさんは英語で喋り出し、田の前にいる男達は田をパチクリさせながら訳のわからない顔でいる。

「Cecy. What you thinking this guys? I don't like it」
(セシイ。この人達の事どう思つ？ アタシは好みじゃないんだけど)

そして、英語でわたくしに話を振るツバメさん。男達はもはや何が何だかわからない様子であたふたしていた。それを見ておもわず笑いそうになってしまった。

この行為の意味をわたくしは察知し・・・。

「Yea I agree. I don't like to. Wow maybe this guy can understand English I think that making fan time」

(そうですわね。わたくしの好みでもありませんわ。でも、この方達が英語を理解できるなら楽しい時間にはなりそうですが)

「It is cruelly. So sorry. Get another person do you like
(それは酷い・・・。『めんなさい。他の人を当たつてください』)

わたくし達の会話を聞いていた男達はなんだか得体の知れない物を見るような感じでその場を去つて行つた。

失礼な。こっちからすればあなた達の方が十分得体の知れない物ですよ。

「……ふつ

「……ふふふ

「あはははははーーー」

男達が姿を消して少し。わたくし達は声を上げて笑つた。

「ああ～おかしいかつたですわね。見ました？あの顔！」

「いや～セシリアさんが乗つてくれなかつたらどうしようかと思つたけど・・・にしても、凄い間抜けな顔だつたよね？」

「ところでジバメさんほどで英語をお習いで？発音も完璧でした」

「たしなむ程度だよ。ISの研究とかしていると海外事業と連絡取つたりするから覚えたの」

「そうでしたの。たしなむ程度にしてはかなりの物でしたわよ。でも、久々に母国の言葉を喋れましたわ。外国にいると言葉を忘れそ

「ついで困ります」

「ああ～わかる。たまに忘れそうになるよね～。なんならたまに英語で会話する？ アタシも勉強になつていいし」

「それは助かりますわ。是非お願ひします。それと…」

「んー？」

「先程のセシィっと呼びのは…」

「あ、ごめん。嫌だつた？ 英語だと人の名前つてなんとなく略しちゃうんだよね。」ごめん

「い、いえ！ そんなことないです！ … その、これからもそう呼んで構いませんことよ」

ツバメさんにそう呼ばれると、妙に嬉しくなる。

前の模擬戦で彼女はわたくしに本氣で挑んで来てくれた。なんとなく前から彼女とは話をしてみたいと思つていた。そして、そう呼ばれたことで本当の意味で友達になつたように思えたのだ。

「そつか。じゃ、セシィもアタシの事もさん付けで呼ばない」と…

「ふえ！？ わたくしもですか！？」

「ええ～だつて不公平じゃん。アタシが一方的に仲良くしていろみたいでえ～」

「で、ですが。これは癖みたいな物で……」

「じゃ～アタシも呼ばない

「あ～……」

ツバメさんは「や一やしながらわたくしをからかつてぐる。

「わかりましたわ…ツ、ツバメ」

「な～に～？ セシイ？」

「よ、呼んだだけですー。」

「よし、これからアタシ達は友達だね。よろしくー！ セシイー。」

そう言つて、ツバメは自分の右手をわたくしの前へ差し伸べて來た。わたくしもそれに答えるようにツバメの手を握つた。その時若干まだ恥ずかしさがあつた所為でまともにツバメの顔を見れなかつたのは言つまでも無い。

いつしてわたくしは学園に来てから始めての友達が出来たのだった。

後日談。

一夏と篠のデータ報告を篠から聞くと篠は一夏と楽しい時間を過ごせた」とに喜び、いつも以上に明るかつた。しかし、話を聞く限

りではまだまだ二人の関係が進展する様なことは無く、オレは短くため息を吐き、作戦が失敗したと思った。

あの朴念神は難攻不落の要塞だと改めて認識させられたのだった。

第九話 戦士の休息 新たな友情誕生（後書き）

友人「デートして無いじゃん」

和利夫「・・・ごめん。書いてたらセシリアルメインになつた。反省はするが後悔はしない」

友人「英語あつてるの？」

和利夫「そこは突っ込まないでください。文法なんて物は存在しない」

友人「だめじやん」

和利夫「・・・そうですね」

第十話 課せられる試練

「ふつふつふうん」

地球のどこかにある篠ノ之束の研究所。今日も私は優雅に逃避行中なのです。

え？ 誰から逃げているかつて？

まあ、いいじゃない。どこの誰か知らないけど追つて来るのだから逃げるのが人の性なのです！

ローン

「あ～ツンチャンからメールだ！」

私がいくつもあるモニターを巧みに操作しているとモニターの一つからメールの受信を確認した。

ちなみにこここの連絡先を知っているのは世界で三人だけ。妹の篠ちゃんと、親友のちーちゃんど、篠ちゃんの親友で私の助手をしてくれるツンチャンの三人！

それ以外の人からメールが来ても受信拒否… あ、でもいつくんもその内こここの連絡先を教えないとな。

「何？ 何？ 『天燕稼働実験経過報告書』。お～！ ツンチャンは仕事が早いね！ 束さんはそう言つ子が大好きです！」

送られて来たメールに添付されているファイルを開くとツンチャンの『IS天燕に関する資料』が開かれた。

「IS模擬戦での戦闘報告。戦闘に勝利するも機体の稼働限界を超

越し再調整の必要あり・・・うへん、やつぱり欠陥機のISにはキツイかあ～」

私はツンチャンの報告を見て椅子に全体重を掛けて持たれ掛けた。そして、天才である私の頭脳を悩ませる。

世界に存在するISはどれも『未完成』の物ばかりだ。それに比べてツンチャンの天燕はいくくんの白式同様・・・いや、それ以上の欠陥を持っている。どんな欠陥かと聞かれればツンチャンが作ったIS理論と技術を使っている所為だ。

彼女は天才だ。

天才の私が認める天才だ。私が教えたIS理論を元にしていると
は言え、それを自分なりにアレンジし、新たな理論を作ってしまう
程に。

その理論を提示された時、私は始めて鳥肌が立つ程の感動をした
と思つ。

反重力力翼に代わる飛行システム。

従来のISに使用されている装甲より強度で軽い炭素素材の採用。

ハイパーセンサーより高度な高性能センサー・システム。

絶対防御をより完璧にした防御システム。

イグニッショーン・ブーストをより早い加速装置。

……他に上げたらきりが無いだろう。どれも私が思いつきもしなかつた技術ばかり。

だが、その理論はいまだ未完成の物だ。

机上の空論とでも言えばいいのだろうか……。

現代にある技術では再現不可能な物ばかりなのである。

けれど、これを見てしまった私はこの理論を完成させたいと思つてしまつた。だからツンチヤンの理論を出来るだけ再現させ、天燕を作り、ツンチヤンに託した。言わば天燕はツンチヤンのE.S理論と技術を完成させるための存在。未完成にも劣る未完成品なのである。

「さあ～って！ 今日も天才アイドル束さんは開発がんばるぞーー！」

そして一人で意氣込み、目の前にある全身装甲E.Sの開発を再開させた。

五月。

高校生活も早く一ヶ月が経とうとしていた。そして今月はクラス対抗戦もあり、各クラスのクラス代表も放課後アリーナを使用して訓練に励む。もちろん、オレ達のクラス代表である織斑一夏もその一人だ。そして実戦形式の訓練が出来る最終日。一夏は鈴との不仲

は解消されておらず、訓練最後の日に彼の暴言により鈴を怒り狂わせ、火に油を注ぐ状態になってしまった。

（　　）

そんな出来事があつた夜。

寮の部屋で一息入れているとオレの携帯に着信が入る。携帯のディスプレイを見れば登録されていない番号が表示されていた。が、構わずその電話に出る。

「もしもし」

『やあーまたもや神様だよー!』

電話に出るとやたらテンション高めな神様が喋つて来る。少しウザかったのでそのまま通話終了ボタンを押そうとすると『あー！ヤメテ！切らないで！』と電話を耳から離しても聞こえるぐらいに叫んで来た。

たまに思う、ここつは本当に神なのか？

「……で？ なんの用？」

『ちょっとした報告だよ。予言と言つてもいいかな？まあ、それを伝えに』

「予言？」

『近い内に君の前に試練が訪れる。これは避けられない試練だから気を付けてね』

「…………」

『それとその試練は君だけでは無く、君の大切な友達にも課せられるものだから。失敗すると君だけじゃなくてその友達も失うことになってしまふかもね』

「どう言つ意味だ？」

『そのままの意味さ。そして、その試練は始まりに過ぎない。これから幾度と君達の前に立ちはだかるから』

「あなたはその結末を知つてているのか？」

『いや、知らないね。知つていたら私の楽しみが減つてしまふから』

「暇人め…………」

『人じやないよ。神様だよ』

皮肉で言つたつもりが眞面目に返された。

なんか余計にムカつく。

だが、この神様の言つことは無視が出来る物では無い。自分以外の人に危険が及ぶと言つ忠告。下手したらその人達を失う可能性もあると……。

「はあ～…わかった。忠告どいつも」

『いやいや、これで君の描く物語が面白くなるなら私はなんでもするよ』

楽しければ何でもいいか。

『そりだねー。私には娯楽が少ないから』

「勝手に心を読むなよ」

『全知全能の神の前に隠し事は通用しないよー』

フム、改めて「コイツが神である事を認識なくてはならないな。

『そうしなさい。そうしなさい。そして、私を崇めなさい』

「よし、神の象徴である物を全力で踏みつける事をオレの日課にしよう」

『神の否定！？ キリスト教信者も驚愕の行為！？ そんな事日課にされても困るよーー』

「安心しろ。冗談だ」

『でないと天変地異を起こしてやるーー』

「器の小さい神様だな。オレの行為で天変地異が起ころんなら世界の犯罪者を消し去ってくれよ。」

「まあいい」

『よく無いーー』

「ありがとう。とにかく気を付けるぞ」

『あれ？ なんか胸がキュンとする……君はアレか？ 俗に云ひつつ
ン』

お礼だけ言つてとりあえず通話を切つた。

そんな事言わせねえーよ！ その属性は籌だけで間に合つてます
から！

「さてはで、どんな試練が待ち受けているのや？」

そしてやつて來たクラス対抗戦當日。

神様からの忠告を聞いてから特に何も無くこの日を迎えた。

第一アリーナ第一試合では我が一組代表織斑一夏と一組代表鳳・
鈴音の対決が始まろうとしていた。

「サンキューツバメ。ツバメが白式の整備してくれたおかげで早朝
訓練もかなりいい動きが出来るようになつた

「そんな事無いよ。動きが良くなつたのは一夏くんが成長している
からだよ。『一チもよかつたんじやない？』

「かもな。これで負けたら恥さらしだ」

現在、HS出撃用ピットではオレが一夏の白式の最終調整を行つ
てゐる。普通なら一般生徒は立ち入り禁止なのであるが白式の状態

を万全にするためオレが申し出をし、許可を得た。

まあ、これは口実で本当の理由は『ここ』が一夏と鈴に一番近い距離だからだ。

「（どうも嫌な予感がする。神様が言つてた試練はもしかしたら今日起つるかもしない）」「

「ここ数日。背筋がザワザワする感じが多かった。始めは何だろうと思ったが、今日と言つて迎えてそれが悪寒だという事がわかつた。なにかとてつもない物に背中を触られていの感覺とでも言えればいいだろうか。とにかくそんな感じだ。

「これでよし！ 最終チェック終つだよ！」

「ああ！ ありがとつ。じゃ、行つて来る！」

全てのチェックを終えると一夏は白式の反重力力翼を展開してピットから飛び出して行つた。

その際、オレはまた背筋がザワザワする感覺に襲われていた。

「一夏。今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ？」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

超満員の第一アリーナ。俺はそんな大勢の人を見ていてもその

中心へと向かう。そして、先にスタンバイしていた鈴がオープン・チャンネルで話し掛けってきた。

鈴のISは肩の横に浮いたスパイク・アーマーがやたら攻撃的な自己主張をしている。アレで殴られたら、すげえ痛そうと思つたがツバメにアレについて聞かされていたのでそこまで深く考えなかつた。

「鈴ちゃんのアンロック・ユニットは龍砲と呼ばれる衝撃砲なの。だからアレで物理的に殴られる事は無いから安心して。でも、衝撃砲は砲身と砲弾が目に見えないからハイパーセンサーの大気の変化に目を張る事。でないと物理的に殴られるより痛い目にあうよ。」

ツバメ様感謝感激です。それを知らなかつたら変な警戒心を持つたまま戦う羽目になる所でした。

『それでは両者、試合を開始してください』

試合開始の合図。ビーとブザーが鳴り、それが鳴り終わると俺と鈴は動いた。

ガキイイン!!

金属がぶつかる音。俺は動くと同時に手にした雪片式型を構え鈴に向かつて一閃。しかし、鈴の持つ武器と鍔迫り合いになる。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど　　」

鈴が手にしているのは異形なまでの大きさの青龍刀。両端に刃が付いており、鈴はそれをバトンの用に振りまわす。遠心力も加わつて鈴の攻撃は威力を増し、俺はその攻撃を捌くので精一杯だつた。

「（まよい。）のまじや消耗戦になるだけだ。一度距離を取つて
）」

「 甘いつ！！」

パカッと鈴の両肩に浮かぶバイク・アーマーが開き、球体の中
心が光出した。

「来る！？ え？」

しかし、そこには予想を反した光景が広がっていた。
見えないはずの砲身が『見える』のだ。そして、見えないはずの
砲弾も『見える』。半透明で空気の歪みのような物が砲身と砲弾の
形を作り、見せてくれているのだ。

聞いていた話と違い一瞬戸惑つたが俺は鈴がどこを狙っているか
が解り、それをゆうにかわす事が出来た。

「なつ！？ かわした！？」

龍砲をかわされた事に驚く鈴。

そう言えばツバメがこんなことを言つていた。

「白式にちよつとした『仕掛け』をして置いたから

そうか、それがその仕掛けなんだな。

「ハハハ」

「な、何がおかしいのよ！？」

「いや、俺はいい仲間に恵まれてるなと思つてな」

「はあ？」

そして俺は再び雪片式型を構え、鈴に突撃する。

「なんだあれは……？」

ピットからリアルモニターを見ていた筈は呟く。

「衝撃砲ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して打ち出す…………ですが、府に落ちません。一夏さんのあの動きは砲弾がまるで見えているみたいです」

そんな呟きに答えてくれたのは同じくリアルモニターを見ていたセシリアだった。確かに鈴の衝撃砲は凄まじい物である。だが、それをかわす一夏の動きにも驚かされていた。

「確かにアレは『見て』、『かわしている』動きだな。大方、八雲辺りが白式に手を加えたのだろう」

今度はセシリアの反対に立っていた千冬さんが答えた。

「たぶん衝撃砲の砲身と砲弾を生成する際にできる空間の歪みを視覚化できるよ」としたんだ

「そんな事が出来るんですか？」

「でなければ一夏の動きが説明できない」

そんなやり取りをしているセシリアと千冬さん。
だが、私はそんな話を聞いておらず、田の前のモーターだけをただじつと見ていた。

「（一夏・・・）」

セシリアとの戦闘よりも激しい戦い。籌は一夏の無事だけを祈つていた。

「くわっ！　すばしっこいわね！　！」

先程から甲龍の龍砲が全然一夏に当たらない。初弾をかわされてからずつとこの調子だ。なので龍砲自体を当てるのは諦め、一夏の回避方向を限定させ、回避した後に回り込み、切り付ける戦法を取つてしているのだが。

「遅い！　！」

元々あの白糸と甲龍のスピード性能が違うのか後一步の所で逃げられてしまう。

「ぐうー　！」

あたしは内心焦っていた。

一夏は予想以上に強かつたのだ。どうやったか知らないけど、見えない砲弾をかわし、持ち前の機動力を生かし、それなりの剣術で戦つてくる。

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

一夏の表情は真剣で真っ直ぐあたしの事を見て来る。不甲斐なくあたしはその気迫に押し負けそうになってしまった。

「な、なによ… そんなこと、当たり前じゃない…。と、とにかくつ、格の違いつのを見せてあげるわよー！」

青竜刀を構え直し、気合を入れる。

「ここので負けたらアンタを見返せないじゃない！」

絶対、アンタに勝つてあの日の約束を思いださせてあげるんだから！

そう思い、あたしは龍砲のチャージをフルパワーに充電しようとしました。時だった。

ズドオオオオオオンッ！！！

突然の衝撃。何かがアリーナの遮断シールドを貫通して落ちて来た。

何かが着弾した所には爆煙が舞い、ハイパー・センサーの表示する簡易解析を見るまでも無く、その威力の凄まじさを物語つている。

「なんだ？」何が起こつて……」「

一夏も状況が飲み込めなかつたのか混乱した様子だつた。

そして炎の海から異形の姿をしたエウリシキ物が姿を現した。

第十一話 単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）

「なんだ、アレは……」

ハ雲ツバメは一夏と鈴が先程まで戦っていたアリーナ上空にいた。突然の襲撃者が現れ、教師陣の早めの対応によりアリーナ観客席は防護シャッターが起動し、オレはシャッターが閉まる前に天燕を展開、外へ飛び出していた。

「……あれが試練って奴か？」

襲撃者の落下地点では激しい炎が巻き起こっており、その中心にいる者を天燕のハイパー・センサーで捕えると姿がハッキリ見えた。深い灰色をしているI.S.らしき物の手が異常に長く、つま先よりも下まで伸びている。しかも首と言うものがなく、肩と頭が一体化しているような形をしていた。おまけに全身に装甲を纏つており、その不気味さが増している。

『一夏、早く!』

そんな全身装甲のI.S.に見取れていると鈴がオープン・チャンネルで話すのが聞こえた。見れば一人でアイツどうするかで揉めている。だが、アレがそんな事を待つてくれるはずも無く、遮断シールドを貫通させたと思われる高出力ビームで鈴を攻撃。間一髪のところで一夏が鈴を抱きかかえて守った事にオレはホッと胸を撫で下ろす。

そして、気持ちを切り替え、一人の元へ飛んで行つた。

「二人共！ 無事！？」

「ツバメ！？ どうしてここに…？」

「それより今は避難！ アタシが食い止めるから早く外へ！」

「ダメだ！ 女を置いて行けるか…！」

「なつ…？」

「一人にこの場から逃げるように指示するが頑固な一夏はそれを聞こうとしない。オレはそんな一夏を相手にハーアーと深くため息を吐いた。

『織斑くん！ 凪さん！ つて、八雲さん！？ どうしてそこそこ…？ いえ、それよりも今すぐアリーナを脱出してください！ すぐに先生達がI.Sで制圧に行きます…』

そんな時、割り込みで通信を入れて来た山田先生。
オレが二人に指示したようにここから逃げろと伝えて来る。

「いや、先生達が来るまで俺達で喰い止めます。いいな？
鈴、ツバメ」

「だ、誰に言つてんのよ。そ、それより離しなさいってば！ 動けないじゃない！」

「ああ、悪い」

一夏の腕の中で暴れ出す鈴。そんな一人を見てオレはヤレヤレと

思つ。なんとも緊張感の無い光景。

まあ、ヤレヤレ等らしきひやういんだけどな。

「一夏くんの一度決めたら意地でも通すつて今に始まつた事じゃないし、それでいいよ。……ハアー」

「なんでため息吐くんだよ?」

「別に」

お前はもう少し人の心情を察するスキルを磨いた方がいいぞ。現在進行形でそれで苦労してゐるんだから。

「一夏、あたしとツバメで援護するから突っ込みなさいよ。武器、それしかないんでしょ?」

「その通りだ。じゃあ、それでいくか」

キンシとお互いの武器の切つ先を当てる一人。オレは一夏や鈴のよつな武器は持つていないので横でそれを見ているだけ。

いいな。それ、ちょっとカツコいいじゃないか。オレもなんか武器持どうかな?

そして、オレ達は未知なる敵に向かつて飛びだした。

「くそつー。」

「一夏っ、馬鹿！ ちゃんと狙いなさいよ。」

「鈴ちゃん！ 右に回避！ 狙われてる！」

「え？ うわつ！？」

何度もアタックだらうか。先程から一夏のアタックがことじりとくかわされてしまう。

オレの蒼燕と鈴の龍砲でのIISを牽制し、一夏が止めを刺すというシナリオなのだが。

あの巨体が人間離れした動きを披露する度に見事にそれが失敗してしまうのだ。

「一夏っ、離脱！」

「お、おひつー。」

おまけに敵は攻撃を避けた後、必ず反撃に転じてくる。しかもその攻撃方法が滅茶苦茶だ。長い腕を回しながら一夏に接近し、その高速回転を利用してビーム砲撃まで行って来る。

「（まるでコマだな…。いや、それよりも…）」

あのIISから感じる違和感。

死角からの攻撃は完璧に捕え臨機応変に対応しているが反撃のパターンが一定過ぎる。

なんと言つか、あのIISの動きは『機械的』なのだ。

「なあ？ ツバメ。あいつの動きってなんか機械じみてないか？」

「IISは機械だよ」

「やうづんじやなくて…アレに人が乗つてているのか？」

「…………」

自分が感じた物を一夏も感じていたらしい。

「無人機なんてあり得ない。IISは人が乗らないと絶対に動かない。
そう言うものだもの」

オレ達の違和感に答えたのは鈴だった。教科書通りの返答をして来る。だが、それは飽くまで教科書に載つていてる答えで最先端の研究がそれを可能にしているかもしれない。

「仮に、仮にだ。無人機だつたらどうだ？」

「なに？ 無人機なら勝てるつていうの？」

「ああ、人が乗っていないなら容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だ
しな」

一夏はそう言い切つて、手にしている雪片式型を見つめる。

「全力も何もその攻撃自体が当たらないじゃない」

「次は当てる」

「おお、カツ『いいじゃないか。鈴もちょっとドキッとした表情しちゃつて』。

「言い切ったわね。じゃあ、そんなこと絶対にあり得ないけど、アレが無人機だと仮定して攻めましょうか」

「そうだね。で、作戦はあるんでしょ？　一夏くん」

「ああ、ツバメは今まで通りにアイツを牽制してくれ。鈴、龍砲をフルチャージでブッ放せ」

「いいけど、当たらないわよ？」

「いいんだよ。当たなくてなくても。じゃ、早速　　」

作戦が決まり、それぞれが行動を開始しようとした時だった。アリーナに設置されているスピーカーから大音量の声が響いた。

『一夏あつ！』

何事だと思い、オレ達はそれぞれE.Sのハイパーセンサーで中継室の方を見た。見ればそこには篝の姿があった。そこにいるであろう審判とナレーターはすぐ横で氣を失っている。たぶん、篝が伸びてしまったのだろう。

『男なら……男なら、それくらいの敵に勝てなくてなんとするー。』

肩で息を切らしながら、一夏に向けて喝を入れる。しかし、当の本人はビックリした用に目をパチクリしていた。

「…………」

まづい！

そう気付いた時。敵は箒に興味を持ち、あの長い腕を箒に向けて構えていた。そして、腕に着いている砲身にエネルギーを溜め、発射させる。

『ワンドラ・アビリティ单一仕様能力発動確認。』 ELS Driver System エルスドライバー・システム

起動』

箒が俺に喝を入れた瞬間。あの無人機ISから高出力ビームが発射された。

光線は真っ直ぐ箒に向かっている。

コンマ何秒と言う一瞬の時間で俺は絶望した。

このままだと箒が死ぬ。

アリーナにも遮断シールドはある。

だが、あのビームを前にシールドは紙切れのような物だ。

俺は何も守れないのか？

白式をして、皆を、仲間を守ると自分に誓つたじゃない

か
！

やめろ！ 俺から大切な仲間を奪うなー！

しかし、どんなに願つてもビームは消えない。その速度を緩めない。

自分はなんでここにいる?
なんで身体が動かない?
頼むから
俺をあそこに行かせてくれよ。

大切な人を守らせてくれええええええええええ！！

パン！！

「え？ ぐわつ！」

刹那。風船が弾けるような音が聞こえた。なんだと思った瞬間、突風が吹き荒れた。

「それとほほ同時、筈は向かって放たれたビームは筈は当たる。前に何かに当たり四散していった。

「ツ、ツバメ？」

声を出しているのは鈴だ。

俺も何にビームが当たったのかをハイパーセンサーで確認すると

- ■ ■ ■

そこにはハ雲ツバメがいた。

天燕の可変式ウイングを身体の前で広げ、翼から放出する光の粒子で膜のような物を作つてビームを防いでいたのだ。

「な、なんで？」

しかし、問題はそこでは無い。

「ハメは」数秒前まで自分と一緒に『ル』にいたのだ。

ビルとは光た
そして光が進む速度は光速である
あの無人機
ISと第の距離を目算で計つても一秒もかかるないだろう。

それをどうやって瞬て、あそびまで移動した？

瞬間移動？いや、そんなことあり得ない。ツバメが先程までいた位置を見て見るとわずかに天燕が放出する光の粒子がその場に残っていた。そして、その粒子はツバメが移動したと言う痕跡を残している。

一体何があつたんだ？

俺が色々思考を巡らせてると不意にアリーナ内に大きな声が響いた。E.Sの通信やアナウンスでは無く、普通の地声だ。

声のした方を見ればそこには一瞬で移動したツバメがいた。何故か天燕は電池が切れたかのように起動しておらず、地面に膝をついた状態だった。たぶん、エネルギーを使い果たしたのだろう。

その声に反応して俺は無人機ISの方を向く。アイツはまた籌と

ツバメに向かってビームを放とうとしていた。

「鈴、やれ！」

「わ、わかつたわよ！」

ツバメはたぶん、次を防ぐ事は出来ない。次にあのビームが放たら今度こそ終わりだ。

そんな事はさせない！

俺は鈴の衝撃砲の射線上に躍り出た。

「ちよつ、ちよつと馬鹿！ 何してんのよ！？ 『じきなさいよ！』

「いいから撃て！！」

「ああもひつ！ どうなつても知らないわよ！」

鈴の放つた衝撃砲を背中に受け、俺は『イグニッション・ブースト瞬間加速』を作動させる。そして、衝撃砲の巨大なエネルギーを利用して加速。

「オオオッ！」

加速中、ISが加速Gを軽減してくれているとは言え、身体に軋むような痛みが走る。

俺は…千冬姉を、篠を、鈴を、そしてツバメを、関わる人すべてを…守る！

必殺の一撃は、敵ISが寡達に向けて突き出していた右腕を切断した。しかし、その反撃で左拳をモロに受ける。

零距離からの砲撃。

だが、恐怖は無い。

俺はたぶんこの時、してやつたと笑っていたと思つ。

「…狙いは？」

『完璧ですか！』

そんなISの通信と同時に青い複数のビームが無人機ISを撃ち貫く。

観客席からセシリ亞によるブルー・ティアーズの狙撃。
遮断シールドはさつきの一撃で破壊した。そんな状態での狙撃

を喰らえればひとたまりもない。ボンッ！と無人機IRSから小さな爆発が起こり、地上に落下していった。

『ギリギリのタイミングでしたわ』

「セシリアならやれると思つていたさ」

確信染みた口調でそう言つ。しかし、そんな俺の言葉が意外だつたのか、帰つて来た言葉はひどく狼狽していた。

『そ、そうですの…。とつ当然ですわね！なにせわたくしはセシリア・オルコット。イギリス代表候補生なのですからー。』

「ふう。何にしてもこれで終わ　　』

『敵IRSの再起動を確認。警告。ロックされています』

「！？」

片方だけ残つた左腕。それを俺に向けていた敵IRS。

次の瞬間、迫り来るビーームに向かつて俺は突進した。そして、真っ白な視界の中で雪片が相手の装甲を切り裂く手応えを感じた。

学園地下五十メートル。そこは学園でも一部の人間しか入れない隠された空間。

「すまんな。ハ雲」

「いえ、気にしないでください。織斑先生」

私はハ雲を連れてそこへ向かつて行った。先の戦闘で天燕がまた再調整を必要とされ、あの襲撃して来たEISと一緒にここへ運ばれた。そして、天燕を再調整出来るのは彼女しかおらず、特例としてここに招き入れた。

「天燕の調整はこれからここを使用してもいい。だが、一応ここでの存在は機密扱いになつているので口外しないように」

「はい」

「それからお前に見てもらいたい物がある」

エレベーターが目的の階層に着くと鉄の扉が左右に別れ、開かれた。

扉が開かれるとそこは電気もついていない暗い通路。何百本と言う電気ケーブルが部屋中に張り巡らされ、ジャングルのような場所。そんな通路を進むと私達は目的の部屋へと到着する。

電磁パネルに暗証番号とカードキーを差し込み扉が開く。

「織斑先生」

部屋にいたのは私の副担任をしている山田真耶だった。ただ、普段よりきびきびした動きを見せており、いつもの雰囲気は無い。他にも白衣を来た女性が何人かいだ。

「解析結果は?」

「今、出ました。機能中枢は織斑くんの一撃で破壊されてしまいま
したが・・・結論を言つとアレは無人機です」

その言葉を聞くと私はその無人機が寝かされている手術診察台の
ような台を見た。

寝かされた無人機IRSはまさに手術の途中かのように腹を切り裂
かれ、中身が丸見えだった。

「山田先生。ハ雲に解析データを見せてやってくれ」

「いいのですか？ 一応、生徒なんですよ」

「コイツだつてIRS研究者の一人だ。なにより、あの篠ノ之束の所
で助手をしていたのだぞ？ いい意見が聞けると思うが？」

「わかりました」

真耶はそう言ってブック端末を取り出し、ハ雲にそれを手渡した。

「ハ雲さん。一応、機密になるので口外は絶対しないでくださいね」

「はい」

短く返事するとハ雲はブック端末に手を通す。

「ところで山田先生。ここつのニアは？」

「未登録の物が使用されていました」

やはりか……。

「心辺りがあるんですか？」

「いや。ない。今はまだ な」

そう言つて私は先程の一夏達の戦いを映し出していたモニターに目をやる。

「……『ゴーレム』

「ん？」

ブック端末をハ雲に見せてから数分。ハ雲はなにかを見つけ、ボソリと呟いた。その声は私以外の人間には聞こえていなかつたらしい。真耶を始め、他の人は別の作業でそちらに意識が集中していたからだ。

「あ、いえ。この壊れたプログラムソースどこかで見た事あるなあ
～って思つて……」

「……どいJでだ？」

「…東さんの研究所です」

やはりこいつにコレを見せたのは正解だと思い、私の疑念は確信へと変わった。

第十一話 恋の宣戦布告ー（前書き）

「これにて原作一巻分が終了。」

そして、今日は短いです。

「めんなさい。」

後、これまでのお話で誤字脱字が多かったので修正しようと思つてます。

話は変わつませんので「安心を。

第十一話 恋の宣戦布告！

謎の襲撃者を倒してから数時間。織斑一夏の疲労はピークを迎えていた。

保健室で鈴との約束を完璧に思い出し、なんとか和解することが出来た。だが、何故か鈴は不服そうにしており、見舞いに来てくれたセシリアと鈴が口論になつてそれをなだめるのに疲れた。

そして、部屋に帰れば筈の味なしチャーハンを食し、腹は膨れるものの少し物足りない。そこから山田先生が部屋に来て、筈の部屋替えが決まり、何故か筈の奴は怒りながら部屋を出て行ってしまった。

俺が何をしたと言うのだ？

同居人がいなくなつた部屋は無駄に広い。する事も無かつたのももつ寝ようかと思い、ベッドに横になつたのだが……。

「寝れん…」

妙に頭が冴えて寝れなかつたのだ。

「…何か、飲み物でも飲もう」

どうしようかと思い悩んだが、特に名案が浮かばず、とりあえず渴いた喉を潤すために自販機へと向かう事にした。

「あれ？ ツバメ？」

「んー？」

俺が自販機に辿り着くとそこにツバメの姿があった。

風呂上がりだったのかいつも田にする制服姿ではなく、なんともラフな格好だつた。ショートパンツにタンクトップ。おまけに湯上りで首からハンドタオルを掛け、セミロングの髪が水分を含んで異様に色っぽく見える。

水も滴るいい女とはこいついう事を言つのだろつか？

丁度ツバメも自販機で飲み物を買い、缶コーヒーをその場で飲み干そうとしていた。

「どうしたの？ 買わないの？」

「あ、いや。買ひよ」

そんなツバメに見蕩れると、俺は慌てて百二十円をポケットから取り出し、自販機にお金を入れて飲みたいジュースを選ぶ。ガコンと自販機から出て来たジュースを取り出し、一口だけその場で飲んだ。

「そう言えば大丈夫なのか？ 天燕がまた調整されるつて聞いたけど」

「んー？ まあ、明日からまた整備科で作業だね。でも、先生が学園内にあるちょっとといい整備ラボを貸してくれるみたいだからそんなに時間はかかるないよ」

「そつか…お前は大丈夫なのか？ その、身体とか」

「明日辺りは筋肉痛だねえ。一応お風呂でマッサージしたけどアタシそりこりの苦手でうまく出来ないんだよ」

ん~っと背筋を伸ばすツバメ。その際、程良い大きさの胸を張りだす物だから俺は高速で視線を反らした。

「あ、一夏くん」

「な、なんだ?」

「アレ。久々にやつてよ」

「ああ~アレか。いいぜ。じゃ、部屋に戻らうぜ」

「うん!」

ツバメのお願いを聞き入れ、俺達は部屋に戻ることにした。

「.....」

篝は先刻、山田真耶に連れられ一夏と別の部屋へ移動させられた。そして今は来た道を戻り、一夏の部屋へと向かっている。

「(一夏と別室...やつぱり、不安だ。なにかと目を張らなければだらしことにいるがあるし)...よしー 每朝様子を見に行こう。朝稽古

と脇ひて誘えれば自然だな。うんー。」

などと並んでこの内に田舎の部屋へ到着する。

そして、部屋のドアをノックしよいとした時だった。

「あ……だめ……」

え？

小さかつたがかすかに女性の声が聞こえた。

「（一 夏の部屋から女の声？…………えー？ まさかー？）

私はドアに耳を近じ、中から聞くべく来る会話に集中した。

「何言ひしるんだ。ちやんとほぐれないと仮持りよくならなーぞ？」

ほぐす？ なにをだ？

「でも、痛いのはイヤ…………もひと優しくしてよ

痛い？ 優しく？ つて、この頃はツバメー？

「せひ、今度はまじけだ」

今度はまじけなことあるつもつだー。

「……ああ……ぐう……すいこね。一夏ぐう」

何がすごいんだ！
ツバメ！

「まあ、な。家では千冬姉にしてるから馴れてる」

千冬さんと…？ ソレはソレで問題があるぞ…！

「え！？ そんな物まで使つのー！？」

何を使つ氣だ！？

「いいじゃん。ツバメとこうするのも久々だし。結構利くぜ？」

「お前だけは信じていた
ツバメ！ 始めてでは無いのか！？」
のに！！

聞き耳を立てて数分。思考は恥ずかしさと怒りで一杯になり、私の顔は熱を帯びていた。たぶん、鏡を見れば耳まで真っ赤になつているだろ？ だが、そんな事はどうでもいい。

……………

とりあえず、肅清だ。

そんな結論を導き出した瞬間、ドアを蹴破り、部屋に突入。

怒りを爆発させて部屋に入る。だが私は部屋の中に入り、一人の

行為を見て怒りが一気にクールダウンしてしまった。

一夏はツバメの足を片手で掴み、反対の手で持っていたツボ押し棒でツバメの足の裏をそれで押していたのだ。

「…………え？」

「ほ、雛？」

「イタイ！ イタイ！ そこはイタイって！－！」

一夏はビックリした用に私を見てくる。対してツバメは痛みを訴えながら一夏の頭を枕でボスボスと叩いていた。

「な、何をやつているんだ？」

「何つて…足裏マッサージ」

「雛～！ たすけて～！」

そこで全てを理解した私はまた急激に顔が熱くなり、目眩がしてその場に倒れた。

「雛？ 大丈夫か？」

「…ああ」

現在、俺の部屋では倒れた簾をベッドで寝かされ、その介抱を俺とツバメでしていた。

ちなみにツバメは簾が目を覚ますとまた俺のマッサージをするように言い、今度はツバメの肩を揉んでいる。

簾の奴、風呂にでも入つてのぼせたか？いや、まだ制服姿だからまだ風呂は入つて無いはず。でも、顔が赤かつたし。なんでだろう？風邪か？五月つて暖かくなつたり、寒くなつたりするからな。俺も気を付けよ。

「急に倒れてビックリしたぞ？ってか、いきなり部屋に入つて来た時もビックリしたけど」

「…うひー

怒られた。何か気に障る事でもしただらうか？

「…ツバメ

「うひー？」

マッサージを受けた程良く気持ちよくなつていたのかツバメは気の抜けた返事をした。

「色々とすまなかつた。それと…今日は助けてくれてありがとうないな」「じつとじつられないのはわかるけど、あんまり無茶はして欲しくないな」

「……」めぐ

「解ればよろしく……」

「シ「ココと笑うシバメ。篠は少し涙田になつていてがそれに釣られて優しく笑う。

篠ってあんな風に笑うんだなと俺は思つた。俺の前ではいつも機嫌悪そうにしてるし、俺にもいつかあんな笑顔向けてくれないかな？

「さて……アタシはそろそろ寝るよ。今日は何だかんだで疲れたし」

「やうか

ツバメはそう言つて、俺はツバメの肩を揉むのを止めた。

「一夏くん。マッサージありがと。またお願ひするね~。篠も一

回一夏くんのマッサージ受けてみたら~。癖になるよ~?」

「おつ、こつでも言つてくれ

「……やめてくれ

む、そこまで拒否しなくてもいいだろ。俺のマッサージテクは千冬姉の折り紙付きだぞ。

「じゃ、一人共おやすみ~

「おやすみ」「

そう言つてツバメは自分の部屋に戻つて行つた。ちなみにドアを開け閉めする音は無い。さつき簾がドアを壊してくれたのでこの部屋のドアは無いのだ。

後で直さないとな……。

「私も戻る」

「ん？ どうか？ 無理しなくてもいいぞ？ 消灯までまだ時間あるし」

「いや、戻る」

「お、おつ……なら送るよ」

まだ熱でもあるのか簾の顔はまだ少し赤かった。足取りはしつかりしているが上半身が少しだけ左右に揺れている。
途中でまた倒れるんじゃないかと心配し、俺は簾を部屋まで送ることにした。

「…………」

「…………」

寮の廊下。俺は黙つて簾の後を付いて行く。と聞つか部屋を出でからこじままで俺達の間に会話と言つ物は無かつた。少しだけ気まずい雰囲気だ。

「い、一夏」

しかし、そんな空氣を打ち破るように篠が声を発した。

「なんだ？」

「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが……」

そう言えばそんな物が六月末に行われるらしい。生徒の自主参加で個人戦。学年別で区切られている以外は何でもアリのトーナメント。

「わ、私が優勝したら…………」

篠は俺の方を振り向いて告げる。

「つ、付き合つてもうつー。」

びしつと篠の人指し指が俺に向けられる。

「…………はい？」

第十一話 恋の宣戦布告！（後書き）

天燕の説明を含めた話にしようかと思ったのですが・・・。

異様に長くなつたのでやめました。

「メントくれた方々へここで謝罪します。

誠に申し訳ありませんでした。

第十二話 ハンタクト（前書き）

シャルルとラウラ登場。

第十二話 ノンタクト

「ええとですね、今日は転校生を紹介します！ しかも一
名です。」

突然ではあるが教卓に立っている山田先生がそんな事を言い始めた。

瞬間。大抵の女子が声を上げて驚く中、ツバメはあまりの五月蠅
さに両手で耳を塞いでいた。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では慣れな事も多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

そして、招かれた転校生二人。

先は自己紹介をしたシャリ川と言へ、生徒を前にしてまだ誰か声を上げてソニックウェーブ並みに発狂する。もちろんオレは両手で耳を塞いでいたのでそれほどダメージは無い。

しかし
世界には不思議な事が起る物たち。
と俺はシャババを見て思う。

なぜなら…。

「男子！ 二人目の男子！」

「しかも、うちらのクラス！」

「地球に生まれてよかつた……！」

最後の感激の言葉は意味不明だが、シャルルは男なのである。——夏と同じ男子用の制服を身に纏っている。そして、ここにいふと言

う事は一夏と同じで男の身でエスを動かす事が出来る存在って事になる。

「（束さんがいたら興味もつかな？　…あれ？　デュノアって確か…）」

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わつてませんから～！」

一人で考えていると織斑先生と山田先生が騒ぐクラスを沈める。先生の言つ通り、自己紹介はまだ終わつていない。

シャルルの横に立つている銀髪を腰の辺りまで伸ばしている少女。軍人のような気迫を感じさせる。でも、特徴を聞かれればその銀髪や軍人のような雰囲気より彼女の付けていたる眼帯と答える人の方が多いと思つ。

つてか、ああ言ひ眼帯つて本当にあるんだな～。自作なのか？

「…………」

クラスがやつと静まりかえるものの、当の本人は未だに口を開けようとしない。

「……自己紹介をしろ。ラウフ」

「はい、教官」

「（）ではそう呼ぶな。もう教官ではないし、（）ではお前も一般生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ」

「了解しました」

軍人のような返答をするラウラ。いや、織斑先生を『教官』と呼ぶ辺り本当の軍人なんだろう。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「…………」

なんとも短い自己紹介。入学式初日に短い自己紹介した誰かを思い出す。

「！ 貴様が 」

パシン！！

突如、教室内で何かが叩かれた音が響いた。オレは音の発生源を見て見るとラウラが一夏をビンタしていた所だ。

……一夏……ついに女性から叩かれるような事をしてしまったのか？
オレは悲しいぜ……。ハンカチがあつたら目頭に当ててヨヨヨと泣いたフリをしたい。

と言う冗談はさておき、突然のラウラの行為でクラス中がキョトンとしていた。

叩かれた一夏も何が何だか解らず、放心状態であった。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

その一言でやっと我に返った一夏。

「いきなり何しやがるー。」

「ふんっ」

だが、ラウラはそれ以上一夏の相手はせずツカツカと姿勢正しい足取りで空いてる席へ では無くオレの方に向かって歩いて来る。

え？ 何故？

「八雲ツバメだな」

そしてオレの席の横に立ち、その足を止めた。
もしかして、オレも彼女に何かしてしまったか？ イヤ、一夏同様初対面だ。だが、その初対面の一夏に対してもあの態度だ。あれか！ ドイツ人は気に入らない奴の顔も見たらとりあえずぶん殴れ！ みたな習慣があるのか！ ヤバい！ 非常にヤバいぞ！ 幸いなのは彼女が次に出る行動が解っている事だ。それなら、初撃に備える事が出来る！

なので、グッと身構え。取れもしない迎撃態勢をするが……

「あ、握手してくださいー！」

「…はい？」

そんなオレの予想と裏腹にラウラは恥ずかしそうに自分の右手を差し出していた。

所変わつて、第一「グランド」。今日は一組と二組で実習訓練をする事になつてゐる。ツバメはそんな集団の中で空を見上げてボーッとしていた。

現在、ISを身に纏つた山田先生とセシリアと鈴の代表候補生組が上空で対決していたからだ。

「フン、二人の連携が甘いな。即席とは言え酷過ぎる」

などと実況を解説しているのはオレの隣にいるラウラ・ボーデヴィイッヒである。

「あ、やられた」

「所詮この程度か…実戦を知らん愚か者め」

「…あんまり本人達の前では言つちゃダメだよ」

「善処いたします。八雲博士」

「はあ～…」

クラスでラウラに握手を求められた後、ラウラはずつといの調子なのである。

何故こうなったかを聞けば、オレが昔立案したIJS戦術理論に感銘を受けてファンになつたとか。

「アレつて東さんが軍に依頼されて引き受けたおきながら『メンドクサイ！』とか言ってオレに押し付けて作らせた物だぜ？ しかもかなり適当に作つた気がする。

後で気付いたが、提出された戦術理論には東さんの名前では無く、オレの名前で提出されていたのには驚いたなあ。

「ねえ？ ラウラさん。その『博士』ってのはやめない？ 今はクラスメイトだし、同じ年だし」

「私は敬意を払うべき人には最大の敬意を払います。それと私の事はラウラと呼び捨てで結構です。博士」

「…アタシ、博士号持つて無いから正確には博士じゃないんだけど」

「そんな事関係ありません」

「はあ～…」

「うん、なんかこのやり取りをする事に疲れた。

「では、これから各グループに別れてIJSの装着訓練と動作訓練をする。グループのリーダーは専用機持ちがする事」

「やつた！ 織斑くんと一緒にだ！」

「うー、セシリ亞かあ… もつきボロ負けしてたしな。はあ…」

「鳳ちゃん！ ようしきね。後で織斑君のお話聞かせてよっ！」

「デコノア君！ わからなことがあったたら何でも聞いてね！ ちなみに私はフリーだよー」

「ツバメちゃん。ようしきね！ 今度私に専用機作つてよー」

「.....」

各グループの女子は専用機持ちを中心におしゃべりしながら集まる。だが、そんな中でラウラのグループだけは会話が無かった。

何とも氣まずい雰囲気。見ていろひつとも気まずくなる。

「おい、八雲」

「はい？」

織斑先生がオレに声を掛けてくる。

「ボーデヴィッシュのグループと合同で寒酒をした。アレでは口が暮れてしまつ」

「うえーー？」

「返事は「はい」か「YES」しか受け付けない。私達は他のグループも観なくてはならないからな。頼んだぞ」

何とも理不尽な選択。もはや拒否権すらあらわれないとま。

「…と言つてよひます。リカラ」

「よろしくお願ひいたします。博士」

「じゃ、始めにHSの装着だけど…これって立つたままロックされている?」

田の前にあるのは学園で支給される訓練機。『打鉄』と『リヴァイヴ』の一機。

訓練機は専用機のような待機状態は無い。操縦者はそのまま『着る』と言つた感じでHSを装着しなくてはならないのだが、装着する際にはHSを座らせた状態にしないと次に装着する時一苦労しなくてはならないのだ。

「はあ～……山田先生がうつかりしたんだね。しちつがない。天燕」

とりあえず、天燕を展開するオレ。空を飛んで立たされたままの打鋼の背後に周った。

その行為を見ていた一同は何をするのだろうと言つた表情だった。もちろん、ラウラもだ。

まあまあ、君達。今からちょっとした『人形劇』が始まりますから。

「（天燕。HSネットワークを介して田の前にいる打鉄のコントロールをオレに寄こして）」

『わかつたー。おはよひござこりますー・打鉄さんー』

『他者による外部アクセス確認。アクセス者を天燕と断定』

数秒の時間を置いて、目の前にいる打鉄の『声』が聞こえた。

天燕の人格管理者はIFSネットワークを使って他のIFS「ア」の『『意思』と会話が出来るらしい。らしいと言つのはオレがこの原理を把握しきっていないからだ。

オレ自身がコンタクト出来るのは天燕だけである。

他のIFSともコンタクトが取れるか試しに何度かコンタクトを取つてみようとしたが、ウンともスンとも答えてくれなかつた。だが、天燕を通して相手側からコンタクトをして来てくれるど、こういつた事が出来る。まあ、簡単な遠隔操作だけなのだが。

『あのね。これから皆で打鋼鉄さんに乗りたいんだけど今のままで乗れないんだ。だから、僕の操縦者にコントロールさせたいんだけど、いい?』

『了解。コントロールを天燕の操縦者八雲ツバメに移行』

『ありがとうー! ツバメー! 動かしてもいいって!』

「(サンキュー天燕。それと打鉄も)」

コントロールが移つた事を確認するとオレは何も無い空中にいくつものモニターが浮かび上がる。そしてモニターを操作し、打鉄を座らせるように命令した。

ブシューーー!

機体を支えていたジョイントからエアーが抜ける音が聞こえる。そして、打鉄は無人のまま器用に地面に座わつたのだった。

「はい、お終い 次はつと・・・」

そして、打鉄同様。リヴァイヴにコンタクトを取り、同じように戸地面に座らせた。一通りの作業を終えるとオレは天燕に「『苦労さん』と言い展開を解除して地上に降り立つた。

「はーい！ これで乗れるよ。最初は誰に・・・」

あれ？ 皆さん口を開けてどうしたんだ？ ラウラまでボーッとして。可愛い顔が間抜けすぎると。

「EVAが…無人で動いた…」

誰かがボソッと呟いた瞬間だった。

「なんで…？ どうやったの…？ ツバメちゃん…！」

「EVAって人が乗らないと動かないんでしょう…？」

「す、ぐーーい！ さすが、自分でEVAを作れちゃう人なんだね…！」

グループの女子が一斉にオレの周りに集まり質問攻めにして來るのだった。

「あー…えーっと…」

「おい！ 貴様等！ 博士が困っているだらうが…！」

質問の答えに困つてこるとラウラがオレと女子の間に立つて引き

剥がす。

あ、ラウラって基本いい子かも。

「大丈夫ですか！？ 博士！！」

「う、うん。ありがとう。ラウラ」

でも顔近いよラウラ。ってか、そんなに手を強く握らないでください。身体の割には力が強いぞコイツ。

「……ところで」

「ん？」

「後でこいつそり教えてください」

「……」

ラウラの欲望も他の皆と同じだった。所詮そんなものなのか。色々な事に絶望するぞ？ ロノヤロ。

そんな事を思つてるとオレ達のグループ全員は織斑先生の出席簿アタックが脳天に飛来して来た。なので、さっさと皆で起動実習を再開させる。

「バカモーン！！　エスは自分の手足だと思え！！　そんなチンタラしてたら日が暮れるだらうが！！　このウジ虫があ！！」

訓練が開始されだからラウラは自分の古巣に戻つたかのように生き生きとしていた。

軍曹や……」に鬼軍曹がある……

「私の階級は少佐ですよ？」

……いや、そつ言つては無くてね。

第十二話 ハンタクト（後書き）

シャルロッ党もいいけどラビッシュ党もいいよね？

第十四話 銀の過去、金の未来（前書き）

タイトルに深い意味は無い！

内容だつてタイトルのそのままです。

後、主人公の一人称を「オレ」から「アタシ」に変え、完全な女にしてしまった。

前からもそうですが、違和感などがあつたらお申し付けください。

6月5日

読者様達の申し出により主人公のキャラを戻しました。内容はさほど変わつておりません。

第十四話 銀の過去、金の未来

ラウラ・ボーデヴィッヒには憧れの存在が一人いる。

一人は自分の元教育。織斑千冬。

軍の遺伝子強化実験により私と言つ存在が生まれた。目的は『より強い兵士を生み出すため』。実験素体は何体もいたが私はその中でも優秀な成績を収めていた。格闘、狙撃、体力、戦術訓練、戦車、戦闘機。どれをとっても私はエリート。

疑いようの無い自分の力に迷いなど無かつた。

しかし、世界が変わつて軍は私に『役立たずの欠陥品』の烙印を押す。

『白騎士事件』

世界にISと言つ兵器の力をアピールさせ、世界のバランスを変えた事件。

我がドイツ軍もそのISの兵器転用に力を注ぎ、その研究が始まつた。
そして、私はIS適合向上のためヴォーダン・オージェの移植をする事になる。

だが、移植されたヴォーダン・オージェは不適合。私の右目は金色に変色し、ISの適正までもを私から奪つていった。

ISを使えない兵士などいらない。

生まれた理由を否定された気がした。いや、完全なる否定だ。

おかげで私は自分の存在意義に疑問を持つようになった。

なんのために生まれたのだろう？

生まれる前から戦いを存在意義として来た。それが田の前から無くなってしまい、私に残った物は何も無い。ここにいる意味など無いのではないのだろうか？ 私は世界に拒絶されたのだと思った。

このまま消えてしまいたい。

そう思つた矢先。暗闇から私を救つてくれたのが織斑千冬だつた。血反吐が出る思いをして、彼女の教えをこの身に刻みこむ。何度も、何度も、何度も、体力が無くなるまで努力した。その甲斐あって、私は再びエースの称号を手にすることが出来たのだ。

だから、私にとって織斑千冬は絶対的な存在なのである。そして、その経歷に泥を塗つた彼女の弟を私は許さない。アイツと言う存在さえいなければ織斑千冬は完璧なのだ。

だから私は織斑一夏をこの手で

。

そして、もう一人が八雲ツバメである。

この場合は教官へ抱いた憧れとはちょっと違うかも知れない。

ISの戦術訓練の講義を受けている時。

「ISを使ってどのような作戦が出来ると思う？」

講師がそんな質問をしてきた。

装備次第で火力の調整を可能とし、幅広い作戦内容を遂行することができる兵器。つまり、どんな作戦にでも対応ができる。

「そうだな。どんな作戦にでもISは活躍する事が出来る。だが、この論文にはそんな当たり前の事が書かれていない。なんでだと思う？」

当時の私は純粋に何故だろうと思つた。そして、その答えを講師が告げる。

「要約すると『敵が行動に移る前に最大の火力で攻撃してしまえ』としか書いていないからだ」

「ツブフー！」

私は笑いを堪えて苦しんでいた。周囲にいる受講生もそんな私を見てビックリしたようだった。

「単純だが理に適っていると私は思う。ISの機動性、拡張領域を一杯まで使った装備、これを前にしてしまえば相手の戦力など関係無い。まあ、敵がISなら話は別になるかもしれないがな」

本当にだ。本当に単純である。
もはや戦術もクソも無い内容。だが、私はそれが気に入ってしまった。

力＝攻撃力

それが私の中にある方程式。そして、この論文はその方程式を肯定とした内容だったのだ。

それから、私は彼女が書いた論文を読み漁つた。

気付けば口の出を抑む事も何度もあった。

声を出して笑ってしまった事もあった。

眞面目に納得する事もあった。

実際に演習でやつてみて凄いと感心させられたこともあった。

私は彼女の書く論文の虜になってしまっていたのだ。IISが使えるようになつて単純に面白いと思つたのはこの時からだつた気がする。つまり、私が彼女に抱いた憧れは『好きな本の作家に憧れる』と同じなのだ。

後日、これを書いたハ雲ツバメと言つ人物が自分と同い年だと知つた時には驚かされた。あんな面白い事を自分と同い年の子が考えてまとめたのかと思うと色々興味が湧く。

いつの日かお目に掛りたいな。

だがそんな思想も意外な形で叶うとは当時のラクワラはまだ知らない。

午前の訓練が終了して学園の屋上。ハ雲ツバメはそこから見える空をただ眺めていた。

「（今日もこい天氣だな～……）」

「ほり、あ～ん」

「あ、あ～ん…」

現在、オレ、一夏、篠、セシリ亞、鈴と転校生のシャルルは「ここ
で昼食を取つてこる。そして、一夏は篠お手製の唐揚げを篠に絶賛
あ～んをしているところである。

口から砂糖でも拭き出しそうな展開だな…。

「い、いいものだな…」

「だろ？ うまこよな、この唐揚げ」

「唐揚げではないが…「つむ。いいものだ」

篠さんはとても幸せそうであった。

「「一夏ー（さんー）」」

しかし、その行動に火がついたセシリ亞と鈴。自分達が作った（
セシリ亞はサンドイッチ。鈴は酢豚）を一夏に向けて突き出してい
る。

「皆、仲がいいんだねえ～」

そしてそんな光景をノホホンと見つめるブロンドの貴公子。
アレをどう見て仲がいいと言つただろう？いや、その通りかも

な。

「とにかく」

「

「……………噛んだ？」

「はい、かみまみた。」

「シャルルでいいよ。僕もツバメって呼ばしてもらひから」

「…ありがと」

「うわあ～とてつもなく恥ずかしいぞ！！ 穴があつたら埋まりたい！ 入りたいじゃなくて埋まりたい！！」

「…シャルル君はデュノア社の御曹司なの？」

「え？ うん…そうだよ」

あれ？ なんか暗い表情になつた。御曹司とかあつて複雑な家庭
なのか？ うむ、地雷踏んだかも。

「といつよリツバメつて自分でEISを作つているつて聞いたけど…
ホント？」

「正確には出来あがつた天燕を整備、調整しているだけだよ」

「そりなんだ。凄いね」

「デュノア社製のEISパーティつていいよね。安定性があるし、アタ

シの天燕も色々と使わせていただいてます

「え？ そうなの？」

「うん、最近は拡張領域のメモリーを『テュノア社製に替えてみたんだ。そしたら、相性良くて大助かり！ 機動の処理速度もグーンって上がったんだよ』

「あ、ありがと『う』

何故か嬉しさ半分、恥ずかしさ半分で下を俯いてしま『う』シャルル。しかし、すぐさま元の表情に戻り、オレに詰め寄つてくるのだ。

「ね？ ツバメから見て『テュノア社つてビ『う』見る？」

「え？」

「正直に言つてくれてもいいからー。」

「う、うん」

「一体どいつしたんだり？」

「安定した第一世代型を中心開発しているのはいいんだけど…今の時代、世代交代始まつてゐるでしょ？ それについていくかなあ～つて感じがする」

「…やつぱり」

「でも、拡張領域の容量が凄いからそれを軸に第二世代を作つたら

す”」にかもね

「え？」

「シャルル君のラフアール・リヴァイヴ・カスタムエイは通常のリヴァイヴより拡張領域が一倍でしょ？ その技術を応用してISの特殊兵装パッケージ切り替え出来るようにすればいいんじゃないかな？」

「パッケージを切り替え？」

「どの世代もそうだけど、パッケージってかなり拡張領域を占めちゃうでしょ？ それに、いちいちパッケージを外したりもするのもメンドクサイよね～。だから、拡張領域をさらに広げるか、パッケージ 자체のメモリーを縮小するかして、一体のISに複数のパッケージを組み込むの」

「……」

「あいや？ 変な事でも言ひてしまつたか？」

まあ、この技術の原理はアレですよ。変身ヒーローが戦況に合わせて色んな姿に変身できるって奴。

アレってカッコいいですよね。オレは今は女の子だけど男の子は憧れるよね～。

「す、すごいよ～。ツバメ！ そんな事思いつきもしなかった！」

「つわ！ いきなり顔を近づけないで～。ドキドキする～」

「そ、そーカナ？」

「うん！」

……ああ、色々と眩しい笑顔。

もうこの人本当に男なのかと思えて来る。握つて来たても男の子にしてはプニプニして気持ちいし、色々反則ツス！！

「ねえ？ よかつたらいつか色々ISについて教えてよ。ツバメのアイディアは面白いから」

「うん。いいよ。アタシの部屋は一夏の隣だから暇な時にでも呼ぶか来てくれば」

「ありがとう！」

「なあ？ セつきから一人はなんの話してんだ？」

オレとシャルルでそんな話題で盛り上がりがつていると女子三人からやつと解放された一夏が話しかけて来た。

「うわー！ セシリ亞のサンドイッチで凄いやつれてる。そんな君に正丸を差し上げよう。」

「ツバメにISに付いて色々聞いてたんだよ」

「ああーツバメの教え方はうまいからな。シャルル。俺の事も頼つてくれていいいんだぞ。IS以外で」

胸をトンと自分で叩く一夏。出来ればISに関しても頼れる存在になつてほしい。

「ありがとう一夏ーえへへ」

「ふむ、一夏のボケをスルーですか…やるな、ブロンズの貴公子め。
「うひ。そろそろ戻るわ。昼飯食った後に更衣室までダッシュはキ
シイ」

「もうだねー。じゃ、ツバメ。後でお話聞かせてね」

「ひつしてオレ達は午後の授業に備えて屋上を後にするのである。

「男同士つてこよなあー」

「や、そつ。よくわからないけど、一夏がいいならよかつたよ」

一夏の発言により、アタシを含めた女子から変な誤解が生まれた。

「…男同士が…つて向ぬ…」

「…不健全ですか…」

「…灯籠もと暗しに気づかぬ愚か者め…」

「一夏くそ…まさか、そつちの趣味が…」

オレはしばらくの間、一夏から10メートルの距離を取ろうと心に決めたのだった。

第十四話 銀の過去、金の未来（後書き）

感想お待ちしてます

第十五話 居場所（前書き）

前回、キャラ改善をいたしましたが思った以上に不評でしたので元に戻します。

後、天燕の第十一話で出て来た単一仕様能力のシステム名を変えました。十一話の方も改善済みです。

この場を借りてお詫びいたします。誠にご迷惑おかけいたしました。

第十五話 居場所

シャルルとラウラが転校してきて五日目。本日は土曜日。授業も午前中で終わり、午後は自由時間となっている。

そんな中、学園の地下ラボでハ雲ツバメは日の前にあるモニターを見て頭を悩ましていた。

「おやおや。何を悩んでいるの？ 天才少女ハ雲ツバメさん？」

オレがうーうー悩んでいると不意に背後から声を掛けられた。

「天才つて…アタシは先輩程の天才じゃないですよ。樋無先輩」

「あら、謙遜しなくてもいいのに」

手にした扇子を開いて口元を隠し、笑う。オレは開いた扇子に書かれている「もひとつ褒めろ」という文字に苦笑いした。

更識楯無。

彼女はこのIIS学園の生徒会長である。そしてそれを意味する事は「学園最強」の称号を持つ。

何故そんな彼女と一生徒であるオレと面識があるかと言つと、単に一年でIISを組み立てている生徒がいると言つ事で興味を持つてくれたらしい。実際の所は不明である。

「天燕の調子はどう？」

「順調…とは言えませんね。色々と問題は山積みですよ~」

「どれどれ……あら？ フレームの強度を上げたの？」

「機動性が売りですから…それに耐えられるフレームを作らないと
いけないんです。他にも拡張領域を広げてハイパー・センサーの処理
能力を上げたりとか……」

「EJのままでも十分な気がするけど？」

「ダメですよ。これだと起動時間が他のISより極端に短いんです。
此間の事件もEシステム一回使つただけでエネルギーが無くなりま
したし」

「Eシステムね……厄介な物を作ったものね」

Eシステム。

正式名称E-L-S Driver System^{エルエスドライバ・システム}

天燕に搭載されている粒子エネルギー生成装置。

自分でも忘れガチであるがオレは前世の知識を持つてこの世界に
生まれた。

そして、このシステムはそんな知識の一つである。束さんにIS
について教えてもらつていた時期。オレは自身の内にある知識とI
Sに関する知識が合わさつたらどうなるのだろうと考えた。なので、
試しにそれ等を組み合わせた理論を作つてみると。するとそれ
は面白いぐらいに組み上げられ、完成。出来あがつた理論を束さん
に見せると四日間ぐらい部屋に引き籠つてしまい、再開した時には
屍のようになつていたのにはビックリしたな。

「EJのシステムが完成したら篠ノ之博士並みの革命が起こるんじや
ない？」

「そうですかねえ～？」

しかし、樋無先輩が言つよつてこのシステムは完成していない。この世界にある技術では今の段階が限界なのである。

「ふふふ、あなたは自分のしようとしている事の重大性に気付いてないのかしら？」

「う～…確かにこれが完成したら大変なことになるかもしません。でも、それでも完成させてみたいんです」

「それは何故？」

「…たぶん自分の欲望に貪欲なんです。自分の翼で空を、どこまでも高く飛んでみたいんですよ」

「ずいぶん単純な理由ね」

本当にだ。

「でも、私は結構そつとつ的好きよ。…やつぱり、あなたとは気が合つたうね」

樋無先輩は広げていた扇子をパンと閉じ、どこからともなく一枚のディスクを取り出した。

「この人は手品師か？」

「これは？」

「私のIDS。ミステリアス・レイディに関する資料。特にツバメちゃんにコレをあげましょー」

「え？」

「色々な技術が詰め込まれているから役に立つ物があるかもよー」

「い、いや！　あの！　なんでー？」

「私の理由も単純。『それが完成したら単に面白くなつそー』だよ」

閉じた扇子を口元に当て、可愛らしくウインクする樋無先輩。

うん、同性からも人気がある理由が解る気がする。

「あ、ありがとうございますー！」

深々と腰を九十度曲げ、頭を下げてお礼をする。

「うん、おれはいいから生徒会に入つてよ」

「それはお断りします」

「即答ツーー？」

お礼同様に頭を下げる誘いを断るオレ。樋無先輩もショックを受けた様に肩を落としていた。

だつて、生徒会つて面倒臭そつだし…。

「まあ～いいや。気が変わつたらいつでも来てね。歓迎はするわ」

少し浮かない顔をして樋無先輩はそう言つて部屋を出て行つてしまつ。部屋に残されたオレは彼女が部屋を出て行つた後にもう一度だけ頭を下げ、ディスクをパソコンに早速読み込ませる。

「……ハハ、スゲエ。樋無先輩……やっぱ、あなたはオレ以上の天才ですよ」

ディスクの内容を見て、オレは思わず本性を更け出してそう口にしてしまつた。

樋無先輩から資料をもらつたその日の晩。

「…………」

「…………」

「…………」

現在オレは何故か一夏の部屋に招かれ、オレ、一夏、シャルルの三人は物凄く気まずい空氣の中で一時間ぐらいこうじしている。

え？ なんでこうなつたかって？

じゃ、ちょっとそこから説明しよ。

「へへへ」

ラボから一人上機嫌に寮に帰つて来たオレは鼻歌なんか歌つてスキップなんかしてたんだ。樋無先輩からもらったデータは色々役に立ち、天燕の開発が大きく進展したんだ。そりや、気分だつて浮かれるさ。でも、部屋の前までやって来るとそんな気分も無くなつてしまつ。

「……」

「い、一夏くん？」

なぜか部屋の外で体操座りをして放心状態の一夏が目の前にいたからだ。つてか、あの時の表情はなんか魂みたいな物が抜けていたかもしれない。

「……ツバメさん」

「何故にさん付け？」

「……俺、よく解らなくなっちゃたんだ

「何が？」

「男と女って何なんだろうな？」

「はあ？」

何を悟りだしたんだ？　コイツは？

「い、一夏」

そんな会話をオレ達がしていると一夏の部屋からシャルルの声が聞こえてきた。

「ひやー！」

そして返答に何故か声が裏返る一夏。オレは横で訳も解らず首を傾げており、状況が飲み込めなかつた。しかし、二人の会話を聞いてある答えを導き出す。

ハツ！ もしかして二人は…！

「そりが、一夏くん…そりが…とか…

「な、なんだよ」

「シャルルくんと…その…ううん！ 何でもない！」

「なに顔を赤くして…ハツ！ ツバメ！ お前は重大な勘違いをし

てこるぞ！――

オレが何を言いたいのか伝わったのか、一夏は必死にその考えを否定して来る。

「いいのー。それも立派な個性だと頷つからー。安心して、誰にも言わないから」

「ち、違つー。お前の考へていることは一切していない！――」

「明日はお赤飯を炊いてあげるよー。」

「あああー！ 面倒だー！ ちよつといつもひいてこないー。」

「えー？ シャルル君だけじゃ満足出来ずニアタシまでー！ だ、ダメだよー。」

「いいからー！。」

半ば強引に腕を掴まれオレは一夏の部屋に入れられる。

そりや、オレも今は女だし…。異性に対してそれなりの感情を抱いたりするぞ。しかし、お前だけはダメだ！ お前は筈の想い人なんだ！ オレは筈を裏切る事なんて出来ないんだ！

「そんな！ アタシは筈を裏切るような事はでき、な……い？」

「ツ、ツバメー！？」

しかし、そんな思考も田の前にいるシャルルを見て止まる。

「すまん！ シャルル！ ツバメが変な誤解をし始めるから・・・」

「へ？ へ？」

「シャルルさん？」

目の前にいるのは間違いなくシャルル・デュノアである。風呂上がりなのか束ねていた髪は程かれており、学園指定のジャージ姿であった。

だが、いつもと外見が違う。

オレの視線はシャルルの体を一点集中して凝視してしまった。

「胸が、ある？」

そう、シャルルの胸には無いはずの膨らみが付いていたのだ。

「……しかも、アタシの胸より大きい」

何かに負けた氣がして、オレはその場で膝を付いてしまうのだった。

そんなこんなで今に至る。

「で？ なんで男装なんてしてたの？」

「それは、その… 実家の方からそうじろって言われて…」

「の空気になれなくなつたオレは話を切り出す」と。シャルルもその質問に答えよつとするがどこか表情が暗い。

「実家つていうと、デュノア社の？」

「うん。僕の父がその社長。那人から直接の命令なんだよ」

「命令つて… 親だろ？ なんでそんな

「僕はね、一夏、ツバメ。愛人の子なんだよ」

その言葉を聞いて先程まで質問していた一夏が絶句してしまう。

「引き取られたのが一年前。ちょうどお母さんが亡くなつたときにな、父の部下がやつてきたの。それで色々と検査する過程で IIS 適応が高いことがわかつて、非公式ではあつたけれどデュノア社のテストパイロットをやることになつてね」

それからシャルルは家の事を語る。

父親とは滅多に会えないとか、本妻から邪険に扱われていたとか。一夏もそんなシャルルの話を真面目に聞いていて拳を強く握り締めていた。たぶん、怒つているのだ。

「なんとなく話はわかつたが、それがどうして男装に繋がるんだ？」

「…注目を浴びるための広告塔。それに、同じ男子なら一夏くんや白式から何らかのデータが持ち出せると考えたんでしょ？ あの人を考えそなことだよ」

一夏の疑問にオレが答える。

「…うん。 つて、ツバメは父と会った事があるの？」

「アタシもＩＳ開発とかに携わる身だかね。何度もデュノア社から開発をやらないかって言われてたんだ。何度も断っているのに。でも、あんまりにもしつこいから一度だけ本社の方に出向いたんだよ」

「そ、そりなんだ」

「それから社長直々に出迎えてくれて会社案内をしてくれたんだ。でも、なんか第一印象から好きになれなくて適当に話を流してた」

「ハハハ…」

シャルルはそんなオレの話に力無く笑う。だが、表情は笑っていない。

「…ああ、なんだか話したら楽になつたよ。聞いてくれてありがとう。それと、今までウソをついていて「ゴメン。二人共」

「いいのか？ それで」

「え？」

「それでいいのか？ いいはずないだろ。親がなんだつていうんだ。」

どうして親だからってだけで子供の自由を奪つ権利がある。おかしいだろ、そんなものは！」

「い、一夏…？」

いきなり一夏が声を荒げる。そんな一夏を見てシャルルは少し怯えた表情をし、オレは心の中でため息を吐いた。

……ああ、また始まった。こいつの『良い』癖が。

「親がいなけれりや子供は生まれない。そりやそりやうつよ。でも、だからって、親が子供に何をしてもいいなんて、そんな馬鹿なことがあるか！ 生き方を選ぶ権利は誰にだつてあるはずだ。それを、親なんかに邪魔されるいわれなんて無いはずだ！」

たぶん一夏はシャルルと自分を照らし合させていたんだと思う。過去に一夏から親に捨てられたと聞かされた事がある。だから似た境遇のシャルルと自分を重ねて感情を抑えられなくなっているのだ。

まあ、そんなこと関係無しにこいつは人のために怒れる奴なのだ。それが織斑一夏の『良い』癖。欠点は感情的な故、周りがあまり見えていないところだが。

「でも、一夏くん。ここで君が怒つてもシャルルの問題は解決しないよ」

「どういふことだよ？」

酷な事をするがオレは現実を一夏に付きつける。

「Jの問題はきっとフランス政府が付き止めるのも時間の問題。彼女はここにはいられなくなるかもしないし、代表候補生を降ろされて、牢屋に入れられるかも知れないんだよ」

「そうなのか？ シャルル」

「……うん」

シャルルの抱えている問題を述べると一夏は確認するよつにシャルルに聞く。シャルルもそれが正しいと答え、一夏はJの問題に対する答えを即答する。

「だったら、Jに居ればいい」

「え？」

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする つまり、この学園にいれば、すくなくとも三年間は大丈夫だろ？ それだけの時間があれば、なんとかなる方法だつて見つけられる。別に急ぐ必要はないだろ」

「いっは驚きだ。感情的になつていて思つたが意外と冷静だつた。つてか、特記事項なんてよく覚えていたものだ。」

「一夏」

「ん？ なんだ？」

「よく覚えられたね。特記事項つて五十五個もある」「

「…勤勉なんだよ、俺は」

「そうだね。ふふ」

一夏の意外な面を見て、シャルルが笑う。しかしその表情は屈託が無く、心から笑っているようだつた。

……おい、一夏何顔赤くしてんだ？ ってか、せっかくシャルルのどこを凝視している。

「一夏は胸ばつかり気にしているけど…見たいの？」

「な、なに？」

「……」

一夏の視線に気づき、シャルルは胸に手を当てて顔を赤く染める。そして、シャルルの爆弾発言にその場の空気は凍り付くのであつた。

「ン」

「「「」」

「一夏さん、いらっしゃいます？ 夕食まだ取られていないようですか？ 体の具合でも悪いのですか？」

いきなりのセシリ亞の訪問。オレ達はいきなりの事だったのでもふたしてしまう。

「い、一夏くん！ とりあえず、適当に相手して来てー。」

ପ୍ରକାଶକ

「シャルルも隠れて！ って、なんでクローゼット！？」
布団の中
でいいから！」

「あ、そっか！ つて、ツバメは！？」

「アーティスト」

などと小声でやり取りしていると部屋のドアが開く音がした。

断りも無く入つて来くるな！　ええい！　まあと……

「…何してますの？」

「いや、シャルルが何だか風邪っぽいっていうから、布団をかけてやつてたんだ。それだけだぞ、ははは…」

「…日本では病人の上に覆い被さる治療法でもあるのかしら?」

そんな治療法は無いと思つぞ。まあ、現状がそうなつてゐるから
そう思つても仕方ない。

「と、とにかく、あれだ。シャルルは具合が悪いからしばらく寝るつて。夕食はいらないみたいだし、仕方ないから俺一人で行こうって話をしてたんだ。よし！ セシリア。一緒に行こう！ うん！」

「え？ ち、ちょっと。『テュノアさん、お大事に』

一夏は部屋に入ってきたセシリアの背中を押ししさすようにして部屋を退出。一人が退出した事を確認するとシャルルは布団の中から起き上がる。

「ツバメ。もう行ったみたいだよ」

「ふはあー…布団の中って息苦しいね」

セシリアの突然の訪問。オレの身近には隠れる場所も無く、咄嗟にシャルルと同じ布団の中に潜り込んでいたのだ。そして、詰まりそうになつた息を吐き出し、大きく深呼吸をする。

「ふふつ、『じめんね。苦しかった？』

「つづん。平氣。…それで、シャルルはこれからどうするの？」

「え？」

「一夏くんの言つた通りにする？」

「…僕はここに居てもいいのかな？」

「決めるのはシャルルだよ？ でも、ここはもうあなたの居場所にもなつてゐんだだから」

「僕の居場所？」

「一緒に笑つて、怒つて、泣いてくれるような人がいて、ここにいる事が楽しいと思えればそこはもうあなたの居場所。アタシは少くともそつと思うな」

かつて自分に居場所をくれた人の事を思い出す。オレも一夏の事馬鹿に出来ないな。

「そつか…ここは僕の居場所になつてたんだね」

「わう感じるならうなるね」

「ありがと、ツバメ」

「いえいえ、アタシは特に何もしてませんよ~」

「それでも、ありがと」

シャルルは黙つて自分の右手をオレに向けて付き出す。

「シャルロット・テュノア。それが本当の『私』の名前」

「うん、よろしくね。シャルロット」

オレはシャルロットが付き出して来た右手を握り、握手した。不思議とオレ達は笑顔になる。

「じゃ、ツバメさんはもう部屋に戻るね。シャルロット、一夏ぐんに変な事されないようだよね」

「うえ！？ … 一夏ってやつぱりそういう事にするのかな？」

「まあ～一夏くんに限つてそんな事はしないと悪いな～……何せ、朴念仁ならぬ朴念神だからね～」

「ボクネンジン？ ビーフिंグの意味？」

「乙女の純情が解らなくて馬に蹴られて死ぬような人」

「ああ～なるほど」

「あ、それは解るんだ。って、これつて余計なフラグ建てた？ ……まあ、いいか

「じゃ、おやすみ～」

「うそ、おやすみ」

「ひつしてオレは一夏とシャルロットの部屋から出で、自分の部屋へと戻つて来た。そしてベッドに倒れ込むようにして寝む。

一夏の提案は一時凌ぎにすぎない。根本的な所を解決しなければシャルロットは学園を卒業と同時に逮捕なんてことになつてしまつのだ。そしたらシャルロットに未来なんかは無いし、一夏やその友達が悲しむかもしれない。

「しょうがない… オレも一肌脱ぎますか…」

オレは自分の携帯を取り出して、とある場所へと電話を掛けることにした。

第十六話 強さ

『学年別トーナメントの優勝者は織斑一夏と交際できる』

月曜日。八雲ツバメはこんな噂を教室で聞いて呆れていた。

「（ハイニになつてゐるな……）」

そんな事を思いながら自分の席からチラリと籌の方に視線を移す。表面上は平静を装つてゐる。だが、内心はかなり焦つてゐるのだ。微妙に落ち着きが無かつたのだ。

「（筹からそんな事聞いてたけど……まさかそれがこんな風に広まつてゐるとはな……）」

「Jの噂は確認しただけでも学園中に広まつてゐる。先程も一年生がこの教室にやつて来て、「学年別で優勝しても有効なの?」とか「表彰式で発表が可能なのか?」とか質問しに來ている程だ。

「本当だつてば! この噂、学園中で持ち切りなのよ? 月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君と交際でき

「俺がどうしたつて?」

「「「きやああつー?」」「

そしてそんな噂をしている女子の輪にJ本人登場。つてか、ちゃっかりセシリアと鈴の奴がその輪に交じつてゐる。

「で？ 何の話だ？ 僕の名前が出てたみたいだけど」

「「ふ、うん？ やうだっけ？」

「わ、わあ、どうだったかしら？」

セシリアと鈴は一夏の田を見ずに話を逸らさうとしている。そしてお互い自分のクラスや席にサッサと戻り、話をうせむれこむとした。

「なあ？ ツバメ、アイツ等どいつしたんだ？」

「… わあ～？」

「（な、なぜ）ひなつた……」

一時間田が始まり、平静を装いながら篠ノ内は内心焦っていた。

「（あの話は私と一夏だけの話だらうつ……）」

焦っていた理由は例の噂についてである。あの時の約束がこのようになるとは本人も思っていなかったのだ。しかも、これが学園中に広まっているとなれば余計に厄介なことになつたと頭を抱える。

「（いやー、私が優勝すれば問題は無いのだー）」

それに自分は昔とは違う。あの頃のような憂き晴らしで暴力に似た強さではなく、一夏には本当の私の強さを知つて貰いたい。だから、この学園別トーナメントで優勝出来れば私は本当の私になれる気がする。

「（今度こそ私は強さを身誤る事無く勝つことが出来るのだろうか？）」

しかし、若干の不安はある。だが、これを成し遂げれば自信は付く。相手にも己にも勝つことが出来る強さが欲しい。

いつしか篠の頭の中では一夏との約束よりも己の何たるべきかで意識が一杯になっていた。

その際、織斑先生に質問され、答えられず、出席簿アタックを喰らったのは言つまでも無い。

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」

「ああ、もちろんだ。今日使えるのは、ええと

「第三アーリーナだ」

「つか、学年別トーナメントに向けてしばらく一年は第二アーリナしか使えないんだよね？」

「「わあっー」」

「わあっー。」莉香がビックリした。いきなりオレと篠で声を掛けたぐらいでそんなに驚く事ないだろ?」

「……そんなに驚く程のこととか。失礼だぞ」

「お、おひ。すまん。つてか。篠達も第三アリーナに行くのか?」

「つむ。学年別トーナメントに向けて私達も実戦的な特訓をしようと思つてな」

「やうが、俺も負けてられないな!」

「…………」

篠の意気込みを聞いて一夏も一緒に意気込む。だが、そんな一夏を見た篠はちょっと複雑そうな顔をしていた。

「ねえ? 篠。一夏くんって本当にあの約束を承諾したの?」

一夏達に聞こえないように小声でオレは篠に話しかける。

「や、そのはずだ。学園中に広まっている方は知らんが、私との約束はさすがに覚えてるはずだ」

「でも、その割にはトーナメントに向けて意気込んでるよ?」

「「わあ……」

そして、一人でチラリと一夏の方に視線を向ける。一夏はシャルロットとどのような特訓をしようかと話していた。明らかに嫌な予感しかしないのは気のせいだろうか？

「ねえ？ 思つたんだけど……万が一、一夏くんがトーナメントで優勝したら約束はどうなるの？」

「……考えていない」

「はあ～……そんな事だらうと思つた」

「……すまん。あの時はこの約束をする」と頭が一杯で

「いいよ。恋する親友を応援する」とがツバメさんの役目ですから

「…ツバメ」

「とりあえず、特訓がんばるー。ね？」

「ああー！」

「ド「オノンッ！－！」

「「「「「－？」」「」」

いきなりの事だった。

オレと雛が意氣込んでいると第三アリーナ方から物凄い轟音が響

いて来たのだ。オレ達は何事かと思い、観客席に向かつて走り出す。そして、田の前の光景に驚愕する。

「セシリア！ 鈴！」

グランド中央。爆煙の裂け目から一人の姿を見た一夏がそう叫んだ。そして、もう一つ、爆煙の中から姿を現す影がいた。

「ラウラ」

姿を現したのは漆黒のIISを駆るラウラであつた。ドイツの第三世代型IIS。ドイツは現在第三世代型IISの量産の中途が付いていない。実質あのIISはその量産に向けての試作機なのだろう。そんなIISがグランドから上がる爆煙の中から姿を現したのである。どうやら、三人は一体一の模擬戦をしているのだが、圧倒的有利なはずの鈴達がラウラ一人に押されていた。

「このお！」

負傷しながらも鈴は甲龍の両肩にある龍砲を放とうとするがラウラは平然としており、その射線から回避しようとしている。

「無駄だ。このショヴァルシェア・レーGENの停止結界の前ではな

「くつー、まさかこいつまで相性が悪いなんて……！」

ラウラは右手を鈴に向けて付き出し、何かのバリアーを張る。すると、鈴の甲龍はピクリとも動かず、放とうとしていた龍砲にチャージしていた砲弾はそのままチャージを止めてしまった。

「（AICOか…また、厄介な物を）」

AICO。

正式名所、アクティブ・イナーシャル・キャンセラー。
ISの浮遊、加速を停止させてしまうシステム。アレを前にした
ISは文字通り見動きが取れない状態となってしまう。

「（まさか、ドイツで完成させていたなんて……いや、それよりも
……）」

ゾクッ！

そして、あのレーベンをはじてから背筋に悪寒が走る。

「（あの時と同じだ）」

一夏と鈴のクラス代表戦に感じたこの悪寒。それがあのISから
感じられる。

「おおおおおおおおお…」

不意にオレのすぐ横から叫び声が聞こえた。振り向くとそこには
白式を開いた一夏が『零落白夜』でアリーナのシールドを切り裂
いていたのだ。

ありとあらゆるエネルギーを消滅させる『零落白夜』によって切
り裂かれたバリアー。一夏はその切り裂かれた間から飛び出し、イ
グニッシュョン・ブーストで一気にラウラの元へと接近する。

「その手を離せえ…！」

「ふん……。感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」

「なら、これでどう?」

「なにつ!?. ガアツ!..」

ラウラが突っ込んで来る一夏に向けてAICOを発動させようとした瞬間。オレは天燕を開き、ラウラの背後に回っていた。さすがのラウラもオレの存在には気付かず、オレの放った拳をもろに受けて吹き飛ぶ。

「……さすが、博士ですね。あの愚図を函にして接近するとは」

「函にしたつもりは無いけど……結果的にやつなるのかな?」

「やはり、貴方とあの人はここに居るべきではない。どうです? 私と一緒にドイツに来ませんか?」

「嬉しいお誘いありがとう。でも、アタシはここでしなければならない事があるからお断り」

ラウラの誘いを丁寧に断つたつもりでいたが、ラウラはその言葉を聞いて表情を歪めた。そして、己の怒りを声に乗せてオレ達に言う。

「……何故なんだ。貴方もあの人も…何故私を拒絶する!…
…そ、うか、そいつがいるからだな。そいつが消えれば!…この世に
存、在しなければ!..」

「!..?」

ラウラはレーゲンの大型レールカノンをオレではない別の何かに向ける。一瞬なんだと思ったが天燕のハイパー・センサーが何を狙っているのか教えてくれた。

オレの背後に居るのは一夏だ。

一夏はラウラにやられたセシリ亞と鈴の無事を確かめている。だからこちらの事を気にしていないのか自分が狙われてることに気が付いていない様子。

レーゲンの攻撃力はセシリ亞と鈴のIISを見れば一目瞭然だ。二人共IISの絶対防御で守られているとは言え、機体はところどころ損傷し、IISアーマーの一部は消滅してしまっている。

一夏はともかく近くに居る二人がそんな攻撃を喰らえばひとたまりも無い。最悪死ぬかもしぬ。

「バカヤロオオオオ！」

オレはラウラが大型レールカノンを発射するより速く動いた。
狙うはレーゲンの大型レールカノンの砲身。

「甘い！…」

しかし、それが狙いだったのかラウラはオレに向けてPICOを発動させる。

「そつちの方が甘いよ」

だが、オレはラウラが発動させたPICOには捕まらない。

天燕は高機動特化のISだ。

そのスピードはどのISよりも速く、追える物はまずないだろう。だから、その速度を生かしてPICOが発動する前にその範囲から逃げ出す事が出来る。

ガンッ！！

そして、オレはレーゲンの大型レールカノンの砲身を蹴り上げた。ギリギリのタイミングだったのかレールカノンの弾は蹴り上げたと同時にドンッと轟音を響かせ空に向かつて砲弾が発射された。発射された砲弾はアリーナ天井にあるシールドエネルギーに当たり、爆発する。

「くつ！ 邪魔をするなーー！」

「うわっ」

ラウラは両手首に装着した袖のようなパーツから超高熱のプラズマ刃を展開してオレに襲いかかってくる。

「フン！ 先程の威勢はどうした！」

「くつーー！」のっ

「あのイグニッシュョン・ブーストで私から一気に距離を取る事も出来るだろが。大方、エネルギーがもう底をついて使えん状態みたいだな！」

まったくもってその通りです。もうエネルギーが73しか残ってません。

ラウラはオレを逃がさないと前進しながら両手のプラズマ手刀を振り回し、オレは後退しながらそれを避けている。

「何故だ!? 貴方は私と同じ側の人間ではないのか! 力を求める力で立ち塞がる物を打ち碎き、前に進んで来たのではないのか!?」

「アタシはそんなつもりで力を求めたつもりは無い!」

「なら、貴方はなんのために力を求めた!?」

「アタシは

「

ガキンッ!

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「「一.?」」

突然オレ達の間に入つて来た影がラウラのプラズマ手刀を手にしたIS用接近ブレードで受け止めた。

一瞬何事かと思ったがその影の正体を見てオレは驚愕する。

「織斑先生!/?」

そこに居たのは我らの担任。織斑千冬だった。だが、驚く所はそこでは無い。織斑先生はいつもと変わらないスース姿で170センチはある長大な武器を生身で振りまわしていたのだ。

「この人は本当に人間か? とすら思える。」

「ハ雲、今失礼な事を考えなかつた？」

「い、いえ！ 滅相もいわいません！」

す、銳すぎる……。怖え～。

「模擬戦をやるのは構わん。……………が、アリーナのバリアーまで破壊する事態にならなくては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら」

「異論はありません」

オレ達は素直に頷いて、織斑先生の提案に賛同する。そして、お互いISの装着状態を解除した。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

パン！ つと織斑先生が手を叩く。それはまるで銃声の様に鋭くアリーナに響いた。

第三アリーナの件から一時間が経過した頃。オレはセシリヤと鈴の見舞いを済ませいつものラボへ向かおうとしていた。

— २८७ —

ん?
わ!
?

廊下を歩いていると突然のイノシシの群れ…もとい、大量の女子の大群が土煙を上げて正面から突っ込んで来る。しかし、皆さん的眼は飢えた獣のように鋭く、なんかもう怖い。なので、オレは咄嗟に壁に身体を張りつけてその集団をかわすのだった。

なんだ?」

彼女達が向かつた方向は確か保健室。 皆で怪我した訳でもないし、まさかセシリ亞と鈴のお見舞い？

「……今月開催される学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかつた者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする……なるほど、皆さん一夏とシャルロットがお目当てね」

だが、そうなるとオレもパートナーを探さなくてはならない。まあ、籌に言えば一緒に組んでくれるから後で聞いてみる事にしよう。

- 1 -

「あ、ラウラ

手にした紙を見ながらオレは廊下を歩いていると正面からラウラの姿が見えた。ラウラもオレの存在に気付き、規則正しい足取りをピタッと止める。

「…………」

「…………」

妙に気まずい…。事が事だからなんて話しかけていいか解らん。

「……貴方だけは私のことを解ってくれると思つていました」

「え?」

そして、そんな気まずい空氣の中先に開いたのはラウラだった。

「私は貴方の書いた戦術理論に感銘を受け、己の力を身に付けてきたつもりです。でも、今日貴方と手合わせして……解らなくなりました」

「…………」

「貴方は何のために力を得たのですか?」

先程とは違う表情をするラウラ。感情的ではあるが、先程の怒りは無い。今あるのは迷いだ。彼女の表情がそう物語っている。

「ねえ? ラウラ?..」

「…………はい」

「アタシとコレに出ない?..」

やつにオレはつこいつを拾つた紙をラウラに付せ出す。

「学年別トーナメント…申込書？」

「アタシの強さを知りたいなら、アタシの側で戦う所を見ててよ。もしかしたら、その疑問の答えが見つかるんじゃないのかな？」

「貴方の、強さですか？」

「わうー！」

「…………」

ラウラは手渡された申し込み用紙に再び視線を降ろす。そして、ポケットに入っていたペンを取り出し、申し込み用紙に何かを書き込んだ。

「いいでしょ。貴方の近くでその強さを見極めさせてもらいます」

そして、申し込み用紙を突き返し、オレはそれを受け取る。用紙を見れば名前の欄にラウラ・ボーテヴィッチと書かれていた。

「じゃ、よろしくねー！」

「はー」

第十七話 学年別トーナメント開催（前書き）

気付いたらPVアクセス10万を超えてました！

ここまで来れたのも皆さんのおかげです。

誤字・脱字・駄文な所もありますが・・・これからもよろしくお願
いいたします！

第十七話 学年別トーナメント開催

六月、最終週に入り、IIS学園では月曜日から学年別トーナメントが行われる。生徒は第一回戦が行われるまで、雑務や会場の整理、来賓の誘導を行っていた。

それからやっと解放されると急いで更衣室でIISスージに着替える。俺、織斑一夏とシャルルは男子用に用意された更衣室で着替えている。

ちなみに今年は例年と違い、ペアでの大会参加となっている。だから俺はシャルルとペアを組み参加することになっている。そして準備のため色々最終チェックをしていた。

「一年の部、Aブロック一回戦一組目なんて運がいいよな

「え？ どうして？」

「待ち時間に色々考えなくとも済むだろ。こいつらは勢いが肝心だ。出たとこ勝負、思い切りのよさで行きたいだろ」

「ふふっ、そうかもね。僕だったら一番最初に手の内を晒すことになるから、ちょっとと考えがマイナスに入つてたかも」

「ああ～そうかもな。……お、モニターに対戦表が発表されるみたいだ」

「あ、ホントだ」

更衣室のモニターが突然映り出し、今大会のやぐらがズラーっと出て来る。そして、俺達は対戦相手の名前を見て驚いた。

「「え？」」

第一試合、織斑、デュノアVS八雲、ボーデヴィッヒ

大観衆が見守る中、オレ達四人はグランド中央で対峙していた。

「……ツバメ。どう言ひ?」とだ? 抽選でそいつと組んでいる訳じ
やないよな?」

「.....」

「わあ～…マジギレですか。普段怒らない奴ほど怖いって言つ
けど、一夏はそう言つタイプだな。

一夏はオレを睨むようにして質問をして来る。が、オレは何も答
えない。

「やめなよ、一夏。……ツバメ、なんでボーデヴィッヒさんと組ん
でいるのかには理由があるんだよね?」

「……そうだよ」

「なら、聞かない。でも、勝負となつたら手加減はしないよ」

そして、そんな一夏をなだめるよつてシャルルがオレ達の間に割つて入つて来る。

「レーヴルのつむり。何せひかりのラウラちゃんが張り切つてますから」

「ふん。待つ手間が省けたといつものだ。つて、ひちゃん付けはやめてくだけこーー！」

「ええ～……可愛いくらいに～」

「「…………」「

おや？ 一人共なにそんなに鳩が豆鉄砲でも喰らつたようにして？ これからオレ達戦うんだから緊張感持とつぜ？

そんなこんなで試合開始のブザーが鳴り始めた。

「「叩きのめすー！」

開戦と同時に俺は雪片式型を構えて、イグニッショーン・ブーストを使ってラウラの元まで飛び出す。

「おおおつーー！」

「ふん…………」

しかし、ラウラはこれを読んでいたと言わんばかりの表情をして右手を突き出した。

AIC。慣性停止能力。一いつに捕まれば見動き一つ取れなくなる。

だが、俺にはその対策方法がない。なので……。

「くつ……！」

「開戦直後の先制攻撃。わかりやすいな」

アッサリと言いいぐらに捕まってしまう。ラウラに向けて振り下ろした雪片は動きを止めてしまった。いや、正確には白式の腕の動きを止められた。そして次第に胴、足と動けなくなる。

「……そりゃどうも。以心伝心で何よりだ」

「ならば次に私がなにをするかわかるだろ？」

ガキンッ！ とラウラのIS。シュヴァルツェア・レーゲンの右肩に付いている大型レールカノンの砲身が俺に向けられた。そして、白式のハイパーセンサーが敵からのロックオン警告を知らせてくる。

「焦るなよ。なにも一対一じゃないんだから

な？」

「うん。させないよ！」

そこへシャルルが俺の頭上から飛び出して来る。シャルルは手に

している六一口径アサルトカノン『ガルム』による爆破弾をラウラに喰らわせる。

「くつ！」

シャルルの攻撃によりラウラの砲撃は空を切る。さすがに不利と思つたのかラウラは俺を捕えていたA.I.Cを解除して急後退する。

「逃がさない！」

シャルルは即座に銃身を正面に突き出した突撃体勢へ移り、左手にアサルトライフルを呼び出した。

これこそがシャルルの得意とする技能『ラピッド・スイッチ高速切替』。事前呼び出しを必要としない、戦闘と平行して行えるリアルタイムの武装呼び出し。シャルルの器用さと瞬時の判断力があつてこその技能。

「（そう言えばツバメはどうしたんだ？）」

シャルルがラウラを追撃している間。俺はもう一人の敵に視線を向ける。

「（いた。って、何してるんだ？）」

アリーナの壁際。そこにツバメの姿があった。ハイパーセンサーのカメラでズームして見ると何やら空中に浮いたモニターを操作している。

マジで何せつてるんだ？

「一夏つ！」

「え？ 「わおー！」

余所見をしてくると、ラウラはワイヤーブレードを飛ばし俺を攻撃して来る。何とかシャルルの掛け声で反応し、雪片式型で弾く事ができた。

「お前達の相手は私だけで十分だ！！！」

そして、ラウラのプラズマ手刀が俺に襲いかかってくる。連続で放たれる斬撃と突撃を混ぜた正確無比な攻撃は俺を圧倒し、押され気味にされてしまう。しかも、ちゃつかりシャルルに向けてワイヤーブレードを射出して牽制もして来る。

「いつもなかなか器用だ。俺を相手にしながらちゃんとシャルルの動きを見ている。

「（しかし、なんでツバメは戦いに参戦しないんだ？ もしかして、ラウラ一人で俺達を倒そうとしている？ だったらつ……）」

強気で攻める俺。田の前にいる相手に集中して雪片式型を構え直し、ラウラの猛攻を受け止め、こちらも斬撃を放つ。

「ぐつー！」

さすがのラウラもこの連撃に押され始めた。そして、俺の動きを止めるためにAICを発動。再度、ピタリと俺の動きは止まつてしまつがシャルルのサポートによりそれも長く続かない。

「こけるー！」

アリーナに設置されている観察室。そこでモニターに映し出される戦闘映像を眺めている人達がいた。

「ふあー、すごいですねえ。一週間ちょっとの特訓であそこまでの連携が取れるなんて」

戦闘映像を見てそう感心するのは一夏達のクラス副担任。山田真耶である。

「やっぱり織斑君ってすごいです。才能ありますよね？」

「ふん。あれはテュノアが合わせてくれているから成り立つんだ。あいつ自体はたいして連携の役には立っていない」

そして、そんな辛口評価をするのは私。織斑千冬だ。

「そうだとしても、他人がそこまで合わせてくれる織斑君自身がすごいじゃないですか。魅力のない人間には誰も力を貸してくれないものですよ」

「まあ…… そうかもしれない」

山田先生の言つ通り、一夏には人を惹きつけるにかを持つている。カリスマとでも言えばいいのだろうか？ ふん、生意気なハナタレ坊主が成長したものだ。

「それにしてもハ雲さんは何をしているんでしょ？ アリーナの壁に行つたきり動きません」

「ああな。 いればかりは私もわからん」

そして、一夏と似た魅力を持つているこのハ雲ツバメ。あのラウラが一緒にペア申請をして来た時には驚いた。一体なにをしたのだと聞きたくなつたがなんとなく聞くのを止めた。聞いても答えをはぐらかされそうになると思ったからだ。

ワアアアッ！

そんな事を思い出していると会場が一気に沸いた。その歓声がこの観察室に直に響くぐらこ！」。

「あー、織斑君、零落白夜を出しました！ 一気に勝負を掛けのつもりでじょつか」

「さて、やつ上手くいくかな？」

「またまた、そんな気にしてないよつな態度をしなくても

「山田先生、今度久しぶりに武術組み手をしようか。せつかくだ、十本ほどやりのう」

「こつ、こえいえつ！ 私はそのつ、ええとつ、生徒達の訓練機を見ないといけませんからつ！」

慌てて首を振り、手を振ると物凄い勢いで組み手を断る山田先生。

「私は身内をネタでいじられるのが嫌いだ。そもそも覚えるよ！」

「は、はい…。すみません…」

ショーンと落ち込む山田先生を見て少しあり過ぎたかと反省する。
だから、ぽんと軽く頭を撫でることにした。

「さて、試合の続きだ。どう転がるか見物だぞ」

「は、はい！」

「これで決めるー！」

零落白夜を発動させた俺はラウラクと直進する。

「触れれば一撃でシールドエネルギーを消し去ると聞いているが…
…それなら当たらなければいい」

ラウラのA.I.Cによる拘束攻撃が連續で襲いかかろうとしていた。
俺はそれらの目に見えない攻撃を急停止、転身、急加速で何とか
かわす。

「ちゅうひんじゅんと田障りな……。」

AICOと一緒にワイヤーブレードも攻撃に加わり、ラウラの攻撃は熾烈を極める。

でも、こっちはそつちと違つて一人で戦つている訳じゃないんだぜ？

「一夏つー。前方一時の方向に突破！」

「わかつた！」

射撃武器でラウラを牽制しながら、俺への防御も抜かりがない。つづづく味方でよかつたと思つ。もし敵だつたら背筋が凍る。

「ちつ……小癪な！」

ワイヤーブレードをぐぐり抜け、俺はラウラを射程圏内へと納めた。

「無駄だ。貴様の攻撃は読めていん」

「普通に斬りかかれば、な。 それならー。」

「ー？」

斬撃が読まれるなら、突撃で攻める。俺は今まで足下へと向けていた切つ先を起こして、体を前へ持つて来る。これなら、単純に腕の軌道を捉えにくはず。それに線で捉えるより点で捉える方がはるかに難しい。

「無駄なことを！」

ビシッ！と前進の動きが凍り付く。AICの網が完全に俺の体を固定した。

「腕にこだわる必要はない。よつはお前の動きを止められれば」

」

「…………ああ、なんだ。忘れているのか？ それとも知らないのか？ 俺達は ふたり組みなんだぜ？」

「！？」

慌ててラウラが視線を動かすが、もう遅い。零距離まで接近したシャルルが、素早くショットガンの六連射を叩き込む。

次の瞬間。

ラウラの大型レールカノンは轟音を立て、爆散した。

「一夏つ！」

「おう！」

ラウラのAICは対象物に意識を集中しなければ効果を発揮しない。だから、今みたいにコンビネーションで攻めれば大した脅威にはならないのだ。

つづづく、この大会がふたり組でよかつたと思つ。

「…！」

ラウラが距離を取らうと後退するが、俺は再度、雪片式型を構え直し、突撃する。

今度こそ避けきれないタイミング！

絶対必殺を確信した一撃だった。だった、のだが

キュウウウウン…………

「なっ！？」ここにきてエネルギー切れかよ…」

思った以上にラウラの攻撃でもらったダメージが大きかったらしい。零落白夜のエネルギー刃は音と共に小さくしぼみ、そしてそのまま消えてしまう。

「残念だつたな！」

瞬間。ラウラの声が近く感じたと思った時。ラウラは俺の懷に飛び込み、両手にプラズマ手刀が展開されていた。

「限界までシールドエネルギーを消耗してしまってはもう戦えまい！あと一撃でも入れれば私の勝ちだ！」

その通りだ。あと一撃でも攻撃を喰らえば俺のシールドエネルギーはゼロになってしまい負けが決まる。だから俺はラウラが放つプラズマ手刀の攻撃を必死に弾く。

「やられないと…」

「邪魔だ！」

ラウラは俺への攻撃を緩めず、援護しに来たシャルルに向けてワイヤーブレードを射出。プラズマ手刀とワイヤーブレードの攻撃はどうちらも精度が高さとスピードを伴った攻撃が俺達を襲う。改めて「コイツの技量のすごさを感じさせられた。

「うあっ…」

「シャルル！　くつ

「次は貴様だ！　墜ちろっ！」

シャルルがダメージを受けたことに気を取られないと強い熱源のような感触と電流が走ったかのような痺れが俺を襲う。

「は……ははっ！　私の勝ちだ！　見ろ、ツバメ！　私は一人でも強いんだ！」

「まだ終わってないよ」

「なつ……！　イグニッショーン・ブーストだとー！？」

勝利を確信し、高らかに勝利宣言しているラウラに超高速で突撃する物体があつた。

イグニッショーン・ブーストを使用したシャルルがラウラとの距離を一気に詰めたのだった。

「こんなデータはなかつたぞ！」

「今始めて使つたからね」

「な、なに……？　まさか、この戦いで覚えたといつのかー…？　だが、私の停止結界の前では無力ー！」

ドンッ！

ラウラがA.I.Cを発動させようと渴いた銃声が聞こえた。そして、銃声と同時にラウラの体は衝撃に襲われる。

ラウラが視線を巡らせるときと目があつた。

シャルルの残弾アリのアサルトライフルを構えた俺とだ。

「これならA.I.Cは使えまい！」

「い、のっ……死に損ないがあつー！」

だがラウラは冷静だった。俺の射撃の腕はたかが知れないと判断し、迫りくるシャルルに向けてA.I.Cを発動しようとしたのだ。

「でも、間合いに入る事は出来た」

「それがどうした！　第一世代型の攻撃力では、このシュヴァアルツ・エア・レーゲンを墜とすことなど

「

そこまで言つて、ラウラはハツとする。

そう、単純な攻撃力だけなら第一世代型最強と謳われた装備があることに気付いたのだ。

そしてそれは、ずっとシャルルが装備していた盾の中に隠されていた事も。

「い」の距離なら、外さない

盾の装甲が弾け飛び、中からリボルバーと杭が融合した装備が露出する。

六九口径パイルバンカー『灰色の鱗殻』^{グレー・スケール}。通称

「盾殺し（シールド・ピアース）……！」

初めて、ラウラの表情に焦りが見えた。それは、文字通り必死の形相。

「「おおおおおっー」」

両者の声が重なる。シャルルは左手拳をきつく握りしめ、叩き込むように突き出す。それは俺が行ったのと同じ、点の突撃。しかもイグニッショーン・ブーストのおまけ付きだ。全身停止は間に合わない。ピンポイントでパイルバンカーを止めなければ、直撃だ。

「みんな、アタシのこと忘れてない？」

シャルルの盾殺しがラウラのボディに決まろうとした瞬間だった。

「うああっー！」

突然、何かがシャルルの横から突撃して来た。シャルルの体はその衝撃を殺せず、横へ吹き飛ばされてしまう。

「な、なんだ！？」

俺はいつたい何がシャルルに突撃して来たのかを確かめた。そして、そこにある物体を見て驚愕する。

「剣が、浮いている？」

そう、そこにあったのは一本の剣。ただその剣はISが持つ接近型ブレードとは違い、俺の雪片式型のようなエネルギー刃を発している。

そして、驚くことにその剣は空中にフヨフヨと浮いていたのだ。しかも、光る粒子を撒き散らしながら。俺はその粒子を見てこれが誰の物かすぐに理解した。

「な、何をしている！？」

「いや、約束の十分過ぎたし、ラウラちゃんにやつだつたので」
「ちゃんと付けするなー。」

俺がシャルルを襲つた剣を見ていると、そんな会話が聞こえて来る。会話のした方を向くとラウラの他にもう一人いた。

先程まで戦いに参戦していなかつたハ雲ツバメがそこにいたのだ。

「ツ、ツバメ？」

「じゃ、looからはアタシも参戦つてことでよひつべー。」

第十七話 学年別トーナメント開催（後書き）

感想お待ちしております。

第十八話 Valkyrie Trace System Unboot（前書き）

平日になると更新が遅れてしまつが……何とか書けた！――

でも、意味不明かも――

ぶつちやけオリ展開に仕上がつてます。

第十八話 Valkyrie Trace System Unboot

「今から敬語を禁止します！…！」

「はあ？」

突然のツバメの宣言にラカワ・ボーテヴィッチは首を傾げてしまう。

「コンビを組む以上！ アタシ達はより親密な友好関係を築かなければなりません！」

宣言した本人が早速敬語を使って力説しているが…そこは触れないとおこづ。

「確かに…お互いを知ることでより良いコンビネーションが可能になります」

「…」

「あ、すみません」

「注意した途端にまた敬語！？ なかなか心を開いてくれないラウラちゃんにツバメさんは悲しい想いで胸が一杯だよ…」

ミミヨとハンカチを取り出して出てもいらない涙を拭き、嘔泣をするツバメ。そこまでする必要性は無いと思うのだが…ん？ それよりもこの人は、私の事を今なんと呼んだ？

「ハリウッドリチャードちゃん」

「ラ、ラウラちゃん…？」

「親しみを込めてアタシは『れかひか』と呼ぶ」としたの」

「そんな親しみはいりません…。今まで通りに呼び捨てで構いませんからやめとください！」

柄でも無い呼び方に私は戸惑ってしまう。いや、でも……悪くはイヤイヤ、何を考えているのだ私は…。そんなのダメに決まっている！ 何より恥ずかしい！

「なら、ラウラちゃんもアタシに対して親しみを込めてよ。でないと、やめない！」

「あ…」

「つおッ……」惑つ表情は普段のクールぶりから想像出来ない物を持つてこる。やるね！ ラウラちゃん…」

「わ、わかりまし…。わかつたからその呼び方はやめろ」

「おお！ よく出来ました！ だが、もう一息だよ…。今度は博士とかじやなくて、普通にアタシの名前を呼んでみよ~」

今、思つ。この人はこんな人だつたか？ なんか、今まで持つていたイメージがどんどん崩れて行く。だが、このまま放置してしまえば一生この人は私のことをちゃんと付けで呼ぶだろ？ それは何としても阻止しなければならない。と言つた嫌だ！

「ツ、ツバメ……」

部下でも無い者を呼び捨てで呼ぶと言うのは若干恥ずかしかつた。

「何？ ラウラちゃん？」

あれ？ ちゃん付けのまま？

「なつ！　名前で呼んだのだからちゃん付けをやめろー。」

ええ、結構可愛いと思うのに～

か、可愛い！ な、何を言つてゐるんだ！ そんな訳無からう！

可愛いなど初めて言われた。この私が？ 部下から「カツ」「い」などとか「凛々しい」とかの褒め言葉は言われた事はあるが可愛いなど言われた事は無い。

……イカン、何故か顔が熱くなつてくる。

「いやいや、実際可愛」と思つよ？ 肌白くて、髪の毛も手入れしたらサラサラになるし、顔だって悪い方じやないし、一部の異性には受けが良いと思うよー。ラウラちゃんマジ天使つてー！」

「なつなつなつなつ！」

ツバメが訳のわからない事を言つて私の思考は完全にショートする。特に最期の一言は何だ？ 頭から煙でも出てるんじゃないかと

思った。それほど顔が熱いのだ。だが、そんなショートした頭でも私はとある答えを導き出すことができた。

「ああああい！――！」

敵からの逃亡。まともな思考が出来なくなつた私はそんな事を叫びながらツバメから逃げ出していたのだ。

「可愛いやつ、べりや

ボソリとそう呟くツバメ。もちろん、敵前逃亡した私の耳にはそ
の言葉は聞こえなかつた。

その後もツバメは私の事をちゃんと付けで呼び、私を困らせてくるのだった。

「まあまあっ！」

「！」

オレは両手にしたエネルギー刃を発した剣を横一閃に振り、シャルルに斬りかかる。シャルルはそれを近接用ブレード『ブレッド・

スライサー』でいなし、後方に飛んだ。

「！」のつー。」

「ドンッ！ と高速切替（ハイスピード・スイッチ）でブレードから両手に連装ショットガンを展開し、オレに向けて散弾の雨を降らす。

「遅いよ！」

だが、天燕の移動速度はどの『』より速い。だから、散弾が広がり切る前にその回避。そして、手にした一本の剣をシャルルに向けて投げつける。

「！？ ブレードを投げた！？ わつー！」

あまりにも意外性のある行動だつたのかシャルルの反応は微妙に遅れた。ギンツトリヴィア・イヴ・カスタムの装甲に剣がかされる音が聞こえ、少しダメージを受けてしまったのだ。

「まだまだーー！」

「シャルル！ 後ろだ！」

「！？」

オレがそう宣言すると投げ放つた剣が軌道を変え、再びシャルルに襲い掛る。一夏の声に反応できたおかげか、シャルルは緊急回避で体を捻り、剣をかわす事ができた。が、それでも剣は軌道を変え何度もシャルルに襲い掛るのだ。

「セシリアのブルー・ティアーズみたいな物だね……でも、それなら！」

シャルルは襲い掛る剣をかわしながら冷静に分析。そして、その弱点を見抜きイグニッショーン・ブーストで一気にオレとの距離を詰めて来た。盾殺し（シールド・ピアース）を構えながら。

「操縦者はビットの動きに集中しなくちゃいけないから他の行動に制限が掛る。一気に懷に潜り込めばこっちに勝機だってあるんだよ！…」

「……それはどうかな？」

「え？」

その考え方は正しい。でも、それは従来のビットならではの弱点なんだよ。生憎、この天燕は特別製だ。

シャルルが完全に盾殺しを放とうとした瞬間。オレは天燕の可変式ウイングを広げ、蒼燕の集中砲火をシャルルに喰らわせる。そして、その背後から剣型のビットがシャルルを切り刻んだ。

「ぐうう……なん、で？」

む。今を喰らつてまだ動けるか。意外とシャルルのISは防御力があるんだな。

「IJのセイバー・ビットは特別製なの。普通のビットだと想つと今みたいに痛い目みるよ？」

セイバービット『羽斬』。

それがこの剣の名称。小型のエルスドライブを剣 자체に組み込む自立飛行を可能とさせ、手に持ち接近戦闘も可能なビット。本来シャルルの通り、ビット系の武器は操縦者が意識を集中させて操る。なので、他の行動が疎かになる。やがていつやつてカバーしようか悩んだオレはこう考えた。

オレが制御しなければいいじゃん。

そこでコマイシが登場だ。

『じつけー！ セーだー！ ベローンー！』

「（つまづく）操作してくれるのはいいが、もう少し静かにしてね」

『だつてコレおもしろいんだもん！』

新しいおもちゃを手にしたかのように天燕は羽斬を縦横無尽に操作し、シャルルと一緒に攻撃していく。つまり、セイバービットのコントロールはオレでは無く、この天燕自身にさせているのだ。

そいつするひとでオレは他の事に集中出来るつて寸法。

うん、我ながらいい相棒を持った。

『えへへへ～』

「わあー、どんどん行くよー！」

『はーい！』

「（アレがツバメの強さ…………）」

ラウラ・ボーデヴィッシュは田の前で繰り広げられる戦いを田にじて呆然とする。

ツバメは、今まで自分が苦労して相手をしていた二人を圧倒的な力で押しているからだ。

「（なぜだ…ツバメと私の何が違う。ツバメだつて強い力で二人を圧倒しているではないか…一体何が違うと言つのだ）」

「ラウラ…！」

「！」

「…？」

瞬間だった。戦いの中で呆然としていた私を織斑一夏がデュノアのアサルトライフルで私を狙撃したのだ。

完全なる油断。軍人として戦場での油断は死に繋がる。だから、そう言つた事の無いように色々訓練を重ねて来たつもりだった。しかし、理解不能な事態を前に私はその教えすらを忘れてしまっていた。

ドンッと渴いた銃声が聞こえた時には私は地面に倒れていた。

「なにやつてゐるー?」

倒れた私を心配して、私の元へ近づくツバメ。いかにも心配していると言つた表情をしていた。

何をそんなに慌てているのだコイツは？
とアイツ等を倒せばいいだろ……。

「ウニ」

連續で発砲される銃声。ツバメは一人の猛攻から私を庇うようにしてエネルギー・シールドを展開し、それを防いでいた。

「私に構うな！ 見捨てろ！ お前一人でも勝てるだろうがつ――！」

「違うよ…アタシ一人で勝つても意味が無いの」

「勝つことには何が必要だと言つのだ！」
弱い私を犠牲にしろ！！」

「アタシはそんな犠牲を出してまで勝ちたくない！ー」

「なつ！？」

「誰もが笑っているハッピーエンドの方が言いに決まってる！　アタシはそんなハッピーエンドを迎えたくて！　皆を守りたくて！　力を手に入れた！　そこにはラウラも含まれてるんだ！」

何を言つてゐるんだコイツは。そんな事不可能に決まつてゐる。そんな物は偽善だ。

そんな偽善で強くなれるものか。

私が弱いから守られる？

私を守つてお前がやられたら意味が無いだろ？

何故だ？　何故そんな事をする？

わからない。理解出来ない。

私は教官の教えで教官の強さに憧れた。

いつしか彼女のようになりたいと思つた。

強くて、凜々しくて、堂々として、自信に満ち溢れていた。

私はその強さを田指して、最強の座に還り咲いたはずだ。

役立たずの烙印を押した奴らに私の取り戻した強さを見せ付け、見返した。

だが、ツバメのこの強さはなんだ？

教官とは違う強さでもあるところのか？

何が違う？ わからない。理解できない。

私が弱いから理解出来ないのか？ 今より強くなれば理解できるのか？

もっと強い力が欲しい。

ドクン

私がそう願うと心臓の鼓動が高鳴り、声が聞こえた。

気付けば私の意識は暗い闇の中にあつた。

『 願うか ?汝、自らの変革を望むか
力を欲するか ?』

意外にも私の口から出たのは拒絶の言葉だった。

「.....黙れ」

『……何？』

「私は力を求めた。貴様が私のなんだかは知らない。貴様の答えに
答えれば力が手に入るかもしない」

この時、どうして私が力を拒んだかわからなかつた。
なぜ？ こんな事を言つてしまつたのだろうと頭の中で思つ。
だが、思考とは別に言葉が勝手に出る。

「……だがな、私はお前から力を求めない！！ 自分で見つけ、
理解しなければ意味が無いんだ！」

「……そうか、私はどうすればいいのかわかつていたんだ。

「ツバメは自分で見て学べと言つた！ だから私は彼女を見て、強
さとは何かを学ぶ！ 今ここで貴様から力を貰えばそれはその事を
放棄することになる！ だから、私は貴様から力を受け取らない！
私は最後まで彼女を見続けるんだ！ それを！！ 邪魔をするな
ああああああああ！！！」

叫んで喉が張り裂けそつなる。私はこんなに感情的な人間だつた
だろうか？ いや、私は彼女に変えられてしまつたのかもしれない。
ツバメと日々を過ごして、いつの間にか私は彼女に毒されてしまつ
た。

彼女と過ごす日々が楽しいと思つた。

それは、教官に指導してもらつていた日々と似ていた。あの時は
自分が強くなつていると実感してそれが嬉しかつた。

しかし、ツバメとの日々はそんな実感は無い。だが、それ以外は全て一緒だった。

楽しくて、楽しくてしょうがない日々。

そんな日々を過ごしていると自分の中にある何かが温かくなる物を感じるようになった。それが心地よくて、たまに強さよりもこの温かさが何かと疑問に思ったこともある。教官の名誉に泥を塗った織斑一夏に対する憎しみもそこには無く。ただただ、温かい日々。

『…………後悔は無いのだな?』

「無い。貴様に力を貰わなくともいつか自分の手で掴み取つてやる」

『…………意外とはやく見つかるかもな』

「何?」

意味深い言葉を残して、今まで聞こえていた声が聞こえなくなつた。

そして、暗い闇から眩い光にへと変わつていく。

「ああ…………温かいな…………」

光に包まれて私はそう感じた。教官やツバメと共に過ごした日々に感じた気持ち。

「私は…………この気持ちを大切にしたいんだ……どうすれば、この気持ちを無くせずに済む?」

答えは決まつている。

「 IJの気持ちを守るために……強くなろう。」

そして、まずは IJの気持ちをくれた人達を守るとしよう。

第十八話 Valkyrie Trace System Unboot（後書き）

「ラウラと一夏のフラグを潰してしまつ展開……。

ごめんなさい。あとあと、一夏さんはフラグを建てていただきます。

第十九話 神様いたら何でもアリだよな？（前書き）

原作一巻がコレにて終了。

一修正一

様々な人に指摘を受け、四組クラス代表はモブと書いてしまったがちゃんとしたキャラクターだったので、新しく出て来たオリキャラの設定を変えました。

原作知識が疎く誠にすみません。この場を借りてお詫びいたします。

第十九話 神様いたら何でもアリだよな？

『本日をもつて、学年別トーナメントの全てのプログラムを終了いたします。生徒の皆さんは各自、担当の場所にて整理を行つてください』

アリーナ内でそんなアナウンスが聞こえて来る。アナウンスが言った通り、今日で学年別トーナメントは終了した。

「すじかっただね～。特に二年！ 生徒会長がダントツだったよねえ」

「三年もすじかっただよ～。やっぱ、企業からのスカウトを受ける先輩達つて感じでさあ～」

「でも、一年は意外な人達が優勝したねえ～。でも、さすがって気もする」

「だよね～」

女子更衣室ではそんな話題で持ち切りだった。そして、そんな彼女達が学年別トーナメントの結果が写し出されているモニターを見て騒いでいた。

学年別トーナメントが終了した日の夜。八雲ツバメは部屋でどある場所に電話を掛けていた。

『もしもーし 珍しいね~シンちゃんから電話くれるなんてえ~』

電話の向こうから聞こえるハイテンションの声にオレは短くため息だけ吐く。

『お~や~? 元気ない? 皆のアイドル束さんが相談に乗るよー!』

「いいです。それよりこないだ送ったシユヴァルツェア・レーゲンは見てくれました?」

『あ~あのドイツの専用機? 見たよ~。……で、シンちゃんが言つてた通り VTシステムが積まれてたね』

VTシステム。正式名称 Walkyrie Trace System。過去のモンスター・クロッソの部門受賞者の動きをトレースするシステムの事である。

「で? やはりそれが原因と?」

『そりだねえ~。なんでこんな不細工なシステムを私のISに積むかなあ? ま、そんな奴等はもつお仕置き済みなんだけどね~』

「お仕置を皿体は止めませんが……せびせび元気におこしてくださいよ」

『あ、そうだ！ それと例のアレがついに完成したよ～』

『アレが完成したんですか？ 意外と早かつたですね』

『シンちゃんの送ってくれた天燕のデータのおかげだよ！ シンちゃんはやっぱ天才だね～色々と面白い技術を考えてくれるから大助かり！ 後は本人が連絡して来るのを待つだけ』

『それはどうもです』

『おやおや～ あんまり嬉しく無い？ せっかく褒めてるのに元のまま』

『アタシより天才の束さんに褒められても嫌みにしか聞こえません』
『えへへ～そんなに褒めないでよ～照れるじゃないですか～。じゃ、この最終調整が残ってるから～ あ、ちーちーんから電話だ。めんね～また連絡するよ～』

『お願ひします』

束さんの通話が終わるとオレはベッドに横になる。そして、田をつぶり、眠りに入らうとした。

『え？ 話が見えない？ じゃ、ひとつとその話をしようか。』

学年別トーナメントの結果を言えばオレとラウラは初戦敗退。一夏達との試合。オレ達が優勢に戦況を運んでいたが途中ラウラのレ

一ゲンが強制停止してしまい、戦闘不能。残ったオレも元から少ないシーリドエネルギーだったのでシャルロットの猛攻に押され敗退。で、試合終了後。オレが一ゲンの強制停止した理由を解析した。そしてレーゲンの中にVTシステムが積みこまれているのを発見したんだ。だが、VTシステムはISCコア内部に組み込まれており、オレにはどうする事も出来ない。だから、束さんにその取り除き作業をお願いしたって訳だ。

しかし、まさか篝が大会で優勝するとは思つてもみなかつたな。まあ、これで篝は晴れて一夏とカップルになる訳だ。

ドンドンドン！

オレの意識が眠りに入ろうとしていた時。部屋のドアから物凄いノックの音が聞こえて来る。

「どうしたの？」

「ツバメ！ ボクだよ！ ちょっと開けて！」

ドアの向こうに居る声の主はシャルロットだった。何やら慌ただしい様子である。意識は睡魔に負けそつたが、オレはだるい体を起こして自分の部屋のドアを開ける事にした。

「どうしたの？」

「うー、これー、どう言ひ意味ーー！」

ドアを開けるとシャルロットは息を荒げながら携帯をオレの目の前に突き出して来る。オレは睡魔でハツキリしない視界を凝らして

突き出された携帯の画面を見るとそこにはフランス語で何かが書かれていた。

「ああ～それ？　そこに書いてある通りだよ」

「なんで…？」

そんなに怒鳴るヒーロンドの貴公子で通つているイメージが台無しだな。寮の廊下にいる女子がこいつを見てるぞ～。

「ふ～……とにかく、入つて。話をするから」

「…………うん」

「じゃ、話してもらひよ」

シャルロットを部屋に招き入れてからちゅうと。まあ～そのちゅうとはオレが彼女に飲み物を用意していただけなんだが……。

「いいけど。なんで、一夏くんまでいるの？」

「俺だつて無関係じやないぜ？」

飲み物を用意している途中。一夏もオレの部屋にやつて来て話に参加することになつたのだ。

「それよりツバメ！ 説明して」

「だから、そこに書いてある通りだよ。アタシがフランス政府にＩＳ技術提供をする代わりにデュノア社の不正に対しても目を潰れって話をしたの」

「なつ！ ホントか！？ シャルル！？」

「うん。ＩＪＩに書いてあるメールの内容は今回の不正に対する会社への処置……って言つてもこの事を内密にしろって事ぐらいの事が書いてないけど。でも、なんでそんな事したの？ ツバメ」

一夏の質問にただ淡々と答えるシャルロット。そして、その真意を知りつとオレに詰め寄つてくるのだった。

「それが、アタシに出来る最善の解決策だからだよ。ってか、アタシに出来るのはそれくらいしか無いからね」

「それぐらいいつて……十分すぎるよ。なんでそこまでしてくれるの？」

「ん……敷いて言えば困つてる友達は見捨てられないのがツバメさんの性分なのです」

「え？」

「ＩＳ学園のいる間はシャルロットの身は安全だよ。でも、それでもアナタは三年間この罪を背負つて行かなきやいけない。そんなの面白くないでしょ？」

「…………」

「そんなくだらない物を背負つて生きるよつ……わつせと綺麗な体になつて楽しい学園生活を送つていただこつかと思つた次第です」

「ツバメ……」

「それじ、ここを卒業した後の就職が決まつたと思えばいいんだし！ 向こうもそれなりの待遇をしてくれるみたいだからね」

「……ふつ、なにそれ。でも……ありがとう、ツバメ。僕なんかのためにここまでしてくれて……ここへ来た理由は最悪だつたけど、一夏とツバメに会えてよかつた」

先程までの真剣な表情とは変わって、シャルロットは笑顔になつた。オレと一夏はそんなシャルロットを見て、なんとなくそれに釣られて笑つた。

「よーしー、それじゃ問題解決を祝つて飯でも食いに行こひぜー！ 今日は俺が奢つてやるー！」

おおーー！ なんか太つ腹な一夏くん。では、お言葉に甘えて普段食べられないスペシャルディナー（2000円）を奢つてもりおつ。

「アハハ、ありがとう。でも、ボクが一人にお礼したいからボクがお金を払つよ」

「いーやつー！ じついう時は男の俺が奢る。シャルルももつと甘えろつて普段から言つてるだろ？ それに、俺が出来る事なんてコレぐらーしか無いし

「まあまあ、お一人さん。とりあえず、そつこいつ事は食堂に行つてから決めましょ~う~ね!」

「そうだな。よし！」
そうと決まればレッツ・ゴーだ！」

「一九四〇年」

さて、そんなこんなで俺はツバメの計らいでシャルルの問題を無事に解決した事を祝つて三人で寮の学食で夕飯を食べる事になつたのだが。

「篠ノ之さん！ 神代さん！ 優勝！ おめでとーーー！」

「あ、ありがとう」

現在学食では盛大なパーティーが行われている。もちろん主役は今回の学年別トーナメントで優勝した俺の幼馴染である筈だ。

「よつ、簞。優勝おめでとうやん」

「い、一夏！？」

なので、お祝いの言葉を掛けてあげたのだが何故か驚かれた。つ

てか、周りにいる女子もなんだがわざわざついてる。何故だろ？

「しかし、本当に優勝するとほな。すいこせ」

「い、いや。その……ありがと」

「ん？ なんだ？」

「…………何でもない」

「そうか？」

「それよりも一夏ー その…………約束の件なんだが…………」

モジモジした様子で何かを呟く雛。トイ オット、さすがにこのワードは女子に失礼か。ともかく、頬を赤らめて何かを言いたげにしてくる。そして、周りにいる女子も一層に騒ぎ始めた。

「約束？ ああ～アレか？ いいぜ。付き合つてやるよ」

「何！？」

「だから、付き合つてやるって…………ねわつー？」

ガバッと雛は俺の制服を掴み、身長差を利用して締め上げてくる。
く、苦しい……。

「ほ、ほ、本当、か？ 本当に、本当に、本当なのだな！？」

「お、おう。つてか、苦しい……」

「な、なぜだ？ 理由を聞こへではないか…………」

パツと締め上げから俺を解放した簞は腕を組みながら「ホンコホンと咳払いをしている。ちなみに俺はマジな咳をしていた。肺に詰まつた酸素を吐き出し、新しい酸素を吸い込む。

「そりや、幼馴染の頼みだし。付を合つや」

「わうか……」

何とも嬉しそうな顔をしている。そんなに嬉しいのか？ その

「買い物ぐらー」

その言葉を発した瞬間だった。簞を含めたその場に居る女子たちが、シッとなにか亀裂が走ったような音が聞こえた気がした。ってか、皆さん硬直していない？ 気のせい？

「…………だらうと…………」

「ん？」

「そんな事だと思ったわ！……」

「…………で、」

「…………」

見事なまでの足、腰、腕、拳までの体重移動。その衝撃は俺の腹部を見事に捕え、締め上げで新しく肺に取り入れた酸素は全て吐き出され、軽く呼吸困難になる。それより、何故このような事になつたのだらう。そして、周りにいる女子の皆さん。何故思いつきりガツツポーズをなさつているのですか？

「ふん…」

「ハハハ…」

ズカズカと立ち去つてしまつ筈さん。俺は筈の放つた一撃で身体をぐの字に折り曲げながらその場につづくまつてしまつ。

「一夏つて、わざとやつてるんじゃないかつて思つ時があるよね」

「ほんとほんと…」

そんな俺を見て、シャルルは苦笑いしており、ツバメは心底呆れたような顔をしていた。つてか、助けてください…………。

「ところで、筈のパートナーだつた神代さんつてどんな人なんだ？」
「ここにはいないみたいだけど」

一夏が筈の拳から回復して、オレ達は三人揃つて円見うどんをすつっていた。ちなみに今日のスペシャルディナー（2000円）はすでに終了していた。ショックだ……。

「んー？ たしか三組のクラス代表の人だよ。でも、そんな人いたかな？」

「酷いなあ～。そりや～私つて影薄い方ですけど」

「ああ～ごめんごめ

！？！？」

さも始めからいたかのようにオレ達の輪の中に混じっていた少女に皆が驚く。一夏なんて月見うどんのスープ噴き出してしまっている。

「初めまして！ 織斑君！ シャルル君！ 三組クラス代表の神代千住です！」

神代千住と名乗る少女。見た目は大和撫子風のお嬢様と言えば伝わるだろうか。腰まで伸びた黒髪で前髪は市松人形のように揃えており、『和』を象徴したような少女だった。が、喋り方からして性格はそんな『和』からかなりかけ離れている。

「ツバメちゃんは人生を謡歌してる?」

「！？」

そして、彼女の一句でオレは再度彼女に驚かされる。

一夏達はその言葉の意味がわかつていないのでオレの反応を見て首を傾げていた。

「イツもしかして……

「あ、織斑君に『テュノア君』になりましたか。あ、神代さん。優勝おめでとうござります」

そしてこのタイミングで山田先生が登場。相変わらず、サイズの合っていないメガネと大きな胸を揺らしている。あ、一夏の奴変に意識して山田先生から視線を反らした。

「朗報ですよ！ なんですねー、ついについに今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

「おお！ 本当ですか！？」

ほう、男子の大浴場が解禁されたか。でも、それって不味くないか？

「ですから、早速一人で湯船に浸かってください。鍵は私が持っているので着替えを持ってきてくださいね！」

「はーー…………って、あ

「どうしました？」

「い、いえー なんでもないですー！」

「じゃ、お待けじでおりますねー」

そう言つて山田先生は小走りでその場を去つてしまつた。

「ど、どうしよう……シャルル」

「」「困ったね……」

自分のしでかしたこと後に後悔する一夏。当たり前だ。そこにいるシャルルは男装をしている女子なのだから。しかも、山田先生が大浴場の前で待っているとなると必ず一人で行かなければならぬ。

「シャルルくん。平氣?」

「うん、なんとかするから大丈夫。じゃ、行って来るよ」

とりあえず、田の前にあるイベントは一人に任せよう。

「いってらっしゃーい」

神代はそんな二人は見送りながら残つたオレと一緒にその場に残つていた。

「……なんでアンタがここにいる?」

「釣れないなあ~私とツバメちゃんの仲じゃない

「IJの世界に干渉する氣は無かつたんじゃないのか?神様」

神様。オレをこの世界に送ってくれた張本人。

それが、今、オレの前に人として存在する。つてか、この神代の声はいつも電話でやり取りしていた声とまったく一緒だ。何故初めに気付かなかつたのだろう。まあ、どうでもいいのだが……。

「どうでもいってのは酷いんじゃない? それより、私がここへ来た理由なんだけど」

「…………」

「ただの暇潰しです」

「…………」

初めの沈黙はただ真剣に彼女の言葉を聞こうとしていた。だが、二回目の沈黙はただ彼女が述べた理由に心底呆れて言葉が出なかつたのだ。

「あ、安心してこの子の身体は寄り代みたいな物だから常にここに居る訳ではないから」

「…………ちょっとまじ、なんだ？　お前はこの神代千住つて子の身体に乗り移つてここに来たつて言つのか？」

「そりだねえ～。あ、安心してね。この子の意識はただいまおやすみ中だからこの会話が彼女に知れる事は無いから」

「セレニティに来るかよ。普通」

「セレニティに来るのです。私は」

「はあー…………」

呆れて何も言えない。神故が、「イツの考えている」とは束さんをも凌駕しており、理解に苦しむ。

「さて、本題に入らうか」

「はあ？ なんだよ、本題つて」

「別にただ遊びに来た訳じゃないよ。ツバメちゃんに伝えたい事が
あってね」

それなら、いつもの電話でも済むのではないかと思つが考える
のを止める。

神代に乗り移つた神の口調は先程までのふざけた様子は無かつた
からだ。

「第一の試練を受けていた事に気が付いてた？」

「第一の試練？ そんなもん何時受けたんだよ？」

「ラウラ・ボーデヴィッヒ。彼女の存在が第一の試練だったんだよ」

「ラウラが第一の試練？ なんだよそれ？」

「彼女は強さを求めるあまり修羅の道を歩もつとした。君が何もせず、あのまま戦いが行われていたら彼女は完全な修羅となつていた
んだよ」

「そうだったのかと心の中で思つ。

いや、自分はどうかでそんな未来を想像していたのかもしない
な。

「試練つて言つのは何も戦いだけで解決する物ではない。今回のよ
うな事もあると言つ事も覚えておいた方がいい。そして、それはま
た起こり得る可能性だって事を」

もはやいつもの口調は無く、真剣に話をする神。だが、オレそんな神の言葉を聞いて笑ってしまった。

「いいね。戦わずして勝つって感じで。そっちの方が平和的だ」

「フフ、相変わらずツバメちゃんは面白い発想をするね。こっちの方が戦う事より大変だと言うのに。だから、君の描く物語は面白い」

「別にアンタに見せるために人生を歩んでいるんじゃ無い。オレはオレのやりたい事をやっているだけだよ」

「『何か守る』と言う行為はより一層の苦労が伴うけど?」

「……それでもだ」

「よし、わかった。そんな君にコレをプレゼントだ」

神はそう言って制服のポケットから一枚のディスクを取り出す。オレはそのディスクを黙つて受け取った。

「なんだよ? コレ?」

「ツバメちゃんが前にいた世界の技術だ。それは君の新しい力となるハズ。是非とも有効活用してね」

「はあ? そんな事していいのかよ?」

「いいのだよ」

キラリと可愛く星でも出そうなワインクしてくる神。それだけ言つて席を立つてどこかへ行つてしまつた。

そして、オレは手にしたディスクに再び目をやり、書かれたラベルをボソッと読み上げる。

「……ELS Driver System ACE Unit

」

篠ノ之箒は食堂で行われているパーティーから抜け出し、一人I S 学園の第三アリーナへとやつて来ていた。

「（正直、今回の大会はあの神代がいたから勝てたような物だった……本当の実力で私が優勝した訳ではない）」

学年別トーナメントで私は抽選で三組の神代とタッグを組むことになつた。この神代千住と言う人物は意外にも強い。専用機を持たずとも他者を圧倒する力を持つていた。それ故、私は己の実力を痛感されてしまう。自分のしたことなど、彼女のサポートぐらいのことしか出来なかつたのだから。

「（ツバメとならもつとうまくやれたのか？）」

始めはツバメの奴にパートナーを頼もうと思つていたが、ツバメはあのラウラ・ボーデヴィッヒと組むと言つて断られてしまつた。それ自体は別に問題は無い。何やら嫌な予感がすると言われ、自分

もそれに納得したのだから。

ツバメは異常なまでの危機察知能力がある。

小学生の頃、二人で下校をしていた時。珍しくいつもと違う道を帰ろうとツバメが提案して来た事があった。普段は目的も無く寄り道をしないツバメにしては珍しいことであったが、その時は別に気にせずその提案に乗った。

そして、翌日。いつもの通学路でトラックが歩道に突っ込むと言つた事故が発生した。ちょうど、自分達がその道を通る時間にだ。もし、あの時ツバメの提案に乗つていなければ私はこの世に存在していないのだろう。考えただけでも恐ろしい。

「（まあ、今日は外れたみたいだがな……それよりも……）」

自分の携帯画面を開き、登録されている番号に電話を掛ける。プルルルと電話の呼び出し音が聞こえ、電話を掛けた相手の声が聞こえた。

『やあやあやあ！　久しぶりだねえ！　ずっとずっとと待つてたよー』

「……姉さん」

私が世界で一番嫌いな人。でも、今はこの人に頼る他ない。

『うんうん。用件はわかっているよ。欲しいんだよね？　君だけのオンライン、代用無きもの（オルタナティヴ・ゼロ）、第の専用機が。モチロン用意してあるよ。最高性能にして規格外仕様。^{ハイエンド}^{オーバースペック}。そして、白と並び建つもの。その機体の名前は

『紅椿』

□

第一十話 仲直り（前書き）

原作「一巻が終ったと前回書いておきながら二巻にも入っていない……。
まあ、一巻と二巻の間の小話だと思つてください。

第一十話 仲直り

学年別トーナメントが終わった次の日。ラウラ・ボーデヴィイッヒは自室のベッドの上でウーウー唸っていた。

「……やはり、謝つた方がいいのだろうか?」

あの試合を終えてから、色々考えた。

教官やツバメを見て、強さとは人それぞれの形が存在すると。そして、自分も何かのために力を身に付けたいと思えるようになつた。

この事に気付かせてくれた人達を守りたいと。

「……だが、わからん。どうすればいいのだ」

しかし、そこには問題がある。あの織斑一夏だ。今まで彼に対しでは憎しみしか感情を抱いていなかつたが、今はそれも無い。実質、憎しみが消えてから興味が無くなつた。だが、教官の弟でツバメと友人関係である織斑一夏とはこれからも接点を持つようになるだろう。

だから、今のままで何かと氣まずい。前の自分ならそんな事気にはしなかつたのだろう。だが今は何とかしたいと不意に考えてしまう。しかし、私は自分から人と接することが苦手だ。生まれてから15年。習つたことは軍人としての知識ばかり。はたしてどうしたものやら。

「……あいつに聞いてみるか」

私は軍から支給された通信端末（EVD）が無いため、緊急用に用意

した衛星携帯）を取り出し、とある人物に連絡を取ることにした。

『……こちらI S配備特殊部隊『シユヴァルツェ・ハーゼ』副隊長
クラリッサ・ハルフォーフ大尉です』

少し眠そうな声。寝ていたのか？ 日本とドイツとの時差は約8時間。こつちは昼の12時だから向こうには朝の4時か。それなら申し訳無い事をしてしまったな。

「うむ。すまんなクラリッサ。朝早くから」

私が電話を掛けた相手は私が受け持つた部隊、I S配備特殊部隊『シユヴァルツェ・ハーゼ』の副隊長を務めるクラリッサ・ハルフォーフ大尉。自分より年上でよく部隊のために働いてくれる私の部下である。

『……構いません。して？ 緊急ですか？ 定時報告の時間でもないですし』

「いや、その……ちょっと、プライベートで相談があるのだが……」

…

『……隊長が、プライベートで、私に？』

電話越しではあるがクラリッサの様子は窺えた。なにせ、私は部下にプライベートについて話などした事が無かつたのだ。まあ、自分が人と接する事を拒んでいた所為でもあるが、そんな私がいきなり「プライベートで相談がある」など言えば皆驚くだろう。

「クラリッサは私より人生の先輩だ。それで……ちょっと相談した

い事があるので

『……わかりました。お話を聞きましょ、』

「つむ。よろしく頼む」

ドイツ軍宿舎。クラリッサ・ハルフォーフ大尉の部屋。

現在の時刻は朝の4時。普通ならまだ寝ていられる時間であるが、私は緊急用の通信端末への着信音で目を覚まし、「」こんな時間に誰だ」と内心怒りながらその端末の着信番号を確認する。

着信の相手は我が、IS配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』通称『黒ウサギ部隊』の隊長を務めるラウラ・ボーデヴィッシュ隊長であった。それを見て、私はハアと短くため息を吐いて着信を受諾する。

『すまんなクラリッサ。朝早くから』

「……構いません。して？ 緊急ですか？ 定時報告の時間でもないですし」

しかし、この隊長の言葉に私はとある疑問が頭によぎる。

なぜならあの冷静沈着・ドイツの冷水と呼ばれ、部隊内でも人間

関係に問題がある私の悩みの種が部下を気に掛けたのだから。普段の隊長からは全く想像出来ない行為。

『いや、その……ちょっと、プライベートで相談があるので……』

「……隊長が、プライベートで、私に？」

これまた驚きの内容。

もはやこの電話の声の主は本当に隊長なのかと疑いたくなるぐらいだった。しかし、言葉を詰まらせてちょっと恥ずかしそうに喋る隊長がやけに可愛く思える。ん？ なにか鼻の奥から鉄の匂いが……。

『クラリッサは私より人生の先輩だ。それで……ちょっと相談したい事があるのだ』

私の中でなにかが壊れるような音がした。

「（あの隊長が自分に相談、だと？）」

軍人として笑うと言つ行為は必要とされない。だが、この時ばかりは顔の筋肉が緩んでしまった。不思議と心が温まるような気もした。

何と言つか微笑ましかつたのだ。

「……わかりました。お話を聞きましょう」

『うむ。よろしく頼む』

それから、私は隊長の抱えている悩みを聞いた。IS学園に転校した初日の出来事。学年別トーナメントまでの間、ハ雲ツバメと共に過ごした時間の事。織斑一夏と対峙し、自分が感じた事。全てを包み隠さず話してくれた。

「なるほど、事態は把握いたしました。隊長はその織斑一夏と仲直りがしたいこと……」

『…………そうだ。その…………アイツとの関係を修正しなければ今後の任務に支障をきたすと思ってな……早急に、手を打つておかねばと思つて…………』

などと言つてこるが内心かなり恥ずかしがつてしているのが手に取るよつてわかる。

『それに……だ……私は異性にビリ接していいか、わからん』

「…………グハツ！」

『ビリしたー？ クラコツササー！』

「…………いえ、問題ありません」

私は隊長のあまりの一言に思わず吐血。いや、血など吐いてはないのだがあまりの隊長の純粋さに心打たれてしまったのだ。

隊長の態度の変わり様……話に出て来たハ雲ツバメとやらに感謝せねばならないな。

「わかりました。末ながら私も協力いたしましょう」

『本当か！？ 助かる…』

「では、まずはこんなのはどうですか？」

クラリッサの考える織斑一夏と仲直りするシチュエーション。その？

学園にある第三アリーナ。そこで織斑一夏とラウラ・ボーデヴィッヒは己のHSを纏つて対峙していた。

「なかなかやるな。男としては見上げた根性だ」

「そいつはどうも。次で決める…」

一夏は手にした雪片式型を構え、ラウラに突撃。ラウラも向かつて来る一夏を迎え撃つためプラズマ手刀を展開し、突撃した。

「オッ…！」

両者の武器がぶつかると辺りに衝撃が走る。そして眩い光が二人を包み勝負に決着がついた。

「ハア、ハア……貴様、強いな」

「ハア、ハア……お前もな」

だが、そこには勝者はおらず、全力を出し切ったお互いがアリーナの地面に倒れていた。

「ほら」

「何だよ？ この手は？」

ラウラは転がっていた地面から立ち上がり、倒れている一夏へと手を差し伸べる。一夏はその真意を理解出来なかつたのか不思議そうな顔をしていた。

「お前を認めてやる。織斑一夏、今日から私達は戦友だ^{とも}」

「そうだな。今までの事を水に流そう！」

クスッと一夏は笑い、そしてラウラの差し伸べた手を取る。そして、一夏が手を取つた事を確認するとラウラは倒れている一夏の身体を地面から引き上げ、その場に立たせた。

それ以上の言葉は一人の間にいらない。なぜなら、闘いを経て二人の気持ちは通じ合つたのだから。

そして、新たに生まれた友情を祝うかのように沈みかけた夕陽が二人を照らすのだった。

『うむ。なかなか燃えるシユチュエーションだな』

「そうです。日本男児なら好きな展開です。某少年誌ではこの後二人で協力してさらなる強敵と共に闘うと言う展開が人気らしいです。かなり、燃えるシユチュエーションです」

『だが、現在レーゲンは私の手元にないのだが……』

「あー、システムでしたね……では、これはダメですね」

『そうだな』

「では、次はどうでしょう？」

クラリッサの考える織斑一夏と仲直りするシチュエーション。その？

「て、ていへんだー！ 織斑くんがIIS学園のスケ番に体育館裏に連れてかれた！！！」

「そ、そんな！？」

突然、何故か江戸っ子口調の女子が教室に走り込んでそう叫ぶ。そんな女子の報告を聞いて教室にいる他の女子達も騒ぎ始める。

「い、一夏が！？ そんな！… 早く助けなければ！」

彼を救出しようと書いた篠ノ之箇。

「で、ですが。EVA学園のスケ番は学園最強ですわ！…」

相手の力量に自分達では太刀打ちできないと恐怖するセシリア・オルゴット。

「いやあああああー！… 一夏ー… 一夏ー…」

ただ、絶望する凰・鈴音。

「「」、「めん… ボクがもつとしつかりしていれば」

「己の無力さに嘆くシャルル・デュノア。

しかし、そんな中でラウラ・ボーデヴィッシュは冷静に素早く行動に移すのだった。向かうは体育館裏。

弱者を助ける強者がそこへ向かう。

「顔面はよしな！ 腹だよ！ 腹を狙うんだよー！」

体育館裏では数人の女子が男子生徒を羽交い締めにしており、彼の腹に何回も拳をめり込ませていた。

「ぐう……ゆ、許してください」

「男の癖に弱いったらありやしない! 私の舍弟になるならやめてやるよ。さあ、どうする?」

「お、俺は」

「セー! まだだ! ……」

「な、なんだ! ?」

一夏がスケ番達に屈しそうになつた時だつた。少女が現れて問答無用にスケ番一味に襲い掛る。

スケ番達はいきなりの事だつたので成す術が無く、全員が同時に宙を舞い、そして地面に激突した。

「ラ、ラウラ……」

一夏はボロボロになつた身体を起き上がらせ、自分を助けてくれた人物を見てその名前を口にした。そこにいたのはついこないだまで自分と敵対していたラウラだつた。

「大丈夫か? 織斑一夏」

「な、なんで? なんで、俺を助けた」

「ふん。私の力は弱き者を助けるために使つと決めたのだ。だから、私がお前を守つてやるよ」

「ラウラ……俺、お前について行く! 姉さんつて呼ばせてください

あね

い……

「好きひつひつ……」

「あー、待つてくださいよ～！ 姉ちゃん！…」

『……これは違うだろ？』

「む、ダメですか？」

『私はただ織斑一夏に謝りたいだけだ。なんで舍弟などと上下関係を築かなければならないのだ？ それにヒス学園の最強はスケ番などでは無く、生徒会長だぞ？』

「すみません。この間見た日本のドラマを元に考えたのですが……では、次は　』

再び自分が考えたシチュエーションを言おうとした時。通話の向こうから誰かが隊長を呼ぶ声が聞こえて来た。

『あーすまん。来客が来たようだ。この話はまた今度でいいか？』

「あとレパートリーが62あるのですが……わかりました。では、また連絡をください」

『ああ……ありがとひ』

隊長がそう言つて通信は切れた。私は通信の切れた端末を乱暴にポイとベッドに放り投げ、横になる。

「（……ありがとう、か）」

IIS学園に行ってから隊長は変わった。先程も言つた通り、人と関わろうとしない人がこうして自分から歩み寄ろうとしている。始めは織斑教官が隊長を変えてくれたのかと思ったのだが違う。通信越しで聞こえて来た隊長以外の声。

『ラウラちゃん！ 御飯を食べに行こう。』

この声、たぶん隊長の話していたハ雲ツバメのものだとう思つ。「あの隊長をちゃんと付けか……。フフ、面白い奴もいたものだ」

不敵に笑つてしまつた。そう呼ばれる隊長を想像しただけでおかしく思えて来てしまつたのだ。

「さて、部隊に招集をかけて対策を考案しなければな」

そして私は軍服に着替えて、鼻歌を歌いながら部屋を後にした。

後日。

部隊全員で考案した隊長と織斑一夏を仲直りさせる作戦を考え付くも隊長はハ雲ツバメの「素直に謝れば？」と言う助言により無事

解決。それを聞いた私達は膝と両手を地面に着き、この苦労はなんだつたのだと落胆してしまった。

しかし……

『クラリッサ……私は織斑一夏と言ひ男に惚れてしまつたらしい』

「！？！」

聞けば、謝罪をした際に織斑一夏に優しくされた事で胸がときめいてしまったとか。

いいでしょ。このクラリッサ・ハルフォーフ！　常日頃から愛読している日本の文化の知識をフルに活用させていただきましょう！！！

第一十一話 スーパーキングミッションだ！

七月上旬。

日差しも熱くなつて来た頃。IS学園の一年は来週から臨海学校がある。まあ、臨海学校だけあって場所は海なのだ。十代の女子達にとつてこれほどなイベントは無い。なので、必然的にテンションも上がつてくる。

「…………はあ～」

しかし、そんなテンションの高い集団の中、オレことハ雲ツバメは深いため息を吐きながら寮の廊下を歩いていた。

「あのクソ神…………何が新しい力だ…………全然解析出来ないじゃねえか。一部解析は出来てフォーマット出来たけど何にも起こりんし、一体何なんだよ…………」

まあ、オレがこんなになつている理由は大体こんな感じだ。神様からもらった『ELS Driver System ACE Unit』なる物は想像以上に解析するだけでも困難だったのだ。この数日で解析出来たのはほんの一部だけ。その一部を見てみるとこのシステムは羽斬のような自立型支援機らしい。まあ、どんな支援をしてくれるかまではわからなかつたけどな。

「もつといいや……今日は気晴らしでもしよう」と

なので、今日はもう諦めてどこかに出かける事にした。よし、久々に学園の外にでも行こう!

「……おや？ あれは」

そう決めて部屋で着替えを済ませ、寮の入り口を出ようとした時だつた。田の前に妙な集団がいた。

最近では珍しくも無い組み合わせのセシリアと鈴。その二人が物陰で何かを窺っている。そして、一人の視線の先には一夏と女装をしたシャルロットがいた。いや、シャルロットは元々女だから女装は変か？ とにかく、女の子の服を来たシャルロットがそこにいた。

「ツバメ、こんな所で何をしている？」

「おや、リウリウちゃん」

「だからりりん付けはやめや」

「まあ～奇妙な光景を田の辺りにしたもので……観察」

「奇妙なもの？ ああ、あれか。何をやつているのだ？」

「そりに前方の一人を尾行しているみたい」

「前方？ む、あれは私の嫁ではないか！」

「…………」

「……」

一夏に今までの事を謝罪してからリウリウの調子は「こんなものになってしまっている。まあ、一夏のフラグ一級建築による賜物だ。これが無自覚で周りにいる女性に建築してしまったので困る。

「ツバメ！ 私達も行くぞ！」

「え？ ふえ！？」

グイットラウラはオレの腕を掴んで引っ張り、無理矢理に一人の後を追うことになってしまった。

「おー、よく晴れたなあ」

週末の日曜日。天気は快晴で素晴らしいお出かけ日より。僕、シャルロット・デュノアの隣に座る織斑一夏はモノレールから見える風景を見てそう感心していた。

「.....」

しかし、僕の心はこの快晴ほど晴れやかでは無い。

「（はあ～……そりゃ、一夏だもんね。期待してた僕が馬鹿だったのかな？）」

心の中で僕はため息を吐く。

先日、織斑先生に無断EIS使用と室内での飛行がバレて罰として一夏と教室の掃除をさせられた時の事だった。一夏と二人っきりの

シコチコヒー・シヨンに僕の心臓は破裂しそうな程高鳴り、そんな状況で「付き合つてくれ」などと言われば誰だつて期待してしまつ。

でも、結果はただ買い物に付き合つてくれと頼まれただけだつた。

「（セツカク女子らしい格好したのに……）」

ツバメが僕に関する問題を解決して、僕は女子生徒としてエリ学園に編入し直して来たのだ。まあ、理由はそれだけでは無いのだが。

「どうした、シャル？　今日はやつぱり調子が悪かったのか？」

「一夏」

「あ、ねつへ」

「乙女の純情をもてあそぶ男は馬に蹴られて死ぬところよ」

「やつだな、そんなやつは死んでしまえばいい」

「鏡を見なよ」

冷たく、ちょっとした怒りを込めて僕がそう一夏に言つ。しかし、一夏は何を勘違いしたのか自分の前髪をいじりはじめた。

別に髪の事を言つた訳じゃないのに。

「はあ……。どうせ、どうせね……買い物に付き合つてくれ、だと
思つたよ。ああうん、先月もなんか似たような事言つてたもんね、
一夏……。はあ～」

【深海一万マイル並みの深いため息が出て来る。一夏はそんな僕を見てオロオロしていた。どうやら、どうして僕がこうなった理由が解らないらしい。いこわ、そりやつて一生悩んでいれば。

「いや、その、悪い。でもあれだぞ、そんなに無理しなくてもいいぞ？ なんだつたら帰つて休んでてもいいから、体の事を第一に考えてくれ」

「…………」

本気で心配し始めた一夏。ここまで鈍いと本当にわざとやつているのではないかと思えてくる。ツバメに教えてもらった朴念仁「ならぬ朴念神だけ？」まさに、それだ。

そんな、やり取りをしていると目的の駅へと到着。モノレールから降りても一夏は未だに僕の事を心配していた。そして、自分が何か悪い事をしてしまったのではないかとやつと自覚したのか色々物で僕の気を引いてし始めた。

なので、ちよつとした希望を提案してみると。

「手、繋いでくれたらいいよ」

「ああ、なんだそんなことか。ほー」

「（え？）」

【冗談半分で言つたつもりだったのに。一夏は何とも思わず僕の手を握つてくれた。ヤバい。想像以上に恥ずかしいかも……。まともに一夏の顔が見れない。

「大丈夫か？」

「ひやあ！？ な、な、なにがつ！？」

いきなり声を掛けられた物だから思わず声が裏返った。

「いや、シャルが。やつぱり帰つて休むか？」

「う、ううんつ！ いいつ、平氣つ、大丈夫つ！ い、行こつー。」

「こんなチャンス潰せない！」と内心思いながら僕は一夏の前を歩く。それにしても、男の人の手つて大きいなあ。またちょっとだけドキドキしてきたよ。

「……握りますわね」

「そっか、やっぱりそっか。あたしの見間違いでもなく、白痴夢でもなく、やっぱりそっか。よし、殺そう」

「よし、じゃない！？」

「あやつりやあ！」

鈴が目の前の光景に対し、握りしめた拳はエスアーマーが部分展開され、衝撃砲発射までのタイムラグはおよそに一秒といったところでオレの手刀が鈴の脳天に直撃する。

「ツ、ツバメ！？」

鈴は部分展開を解除して、両手で頭を押さえながらオレの方を見て驚いている。

「お前達も目的は一緒か」

「あ、ラウラ・ボーデヴィッヒ」

そして、オレの背後から現れたラウラの姿を見てさらに驚く……
……ことは無く、普通の反応。まあ、一夏に謝罪した時に一緒に一人にも謝罪しているのでこわいのは無くなっているからなんだが。

「二人で何をしているのです？」

「いや~アタシが出かけようとしてたらラウラに連れられてこいつま

で来ました

セシリアの質問にオレは苦笑いしながら答える。

「では、我々は先を急ぐ」

「ちょっと、ちょっと！ 待ちなさいよー。どうあるつもりなのよー。？」

「我々も一夏達と混ざるつもりだが？」

「え？ そうなの？ あれに入つて行く勇気はございませんよ？」

「ま、待ちなさい。待ちなさいよ、未知数の敵と戦うにはまずは情報収集が先決。そうでしょ？」

「ふむ、一理あるな。ではどうする？」

軍人的思考を逆手に取つてラウラの行動に規制を掛けた鈴。

「ここは追跡ののち、二人の関係がどのような状態にあるのかを見極めるべきですね」

「なるほどな。では、そうしよう

かくして、オレ達四人は何が何だかわからないうちにおかしな追跡チームが結成された。

オレ、帰つてもいい？

『「こちら、ブルー。現在ターゲットは女性用水着売り場内にて水着を選んでいますわ。ですがなかなか決まらない模様。どうぞ』

『「こちら、ピンク。もう片方のターゲットは男性用水着売り場で水着を購入中。購入したのはシンプルなネイビー色の水着。どうぞ』

『「こちら、ブラック。引き続き、追跡を続行。ターゲットから田を離すなよ』

「「こちら……ねえ？ 自分のT-Sのカラーでコードネーム決めるとセシイと被るんだけど？」

『天燕はツートンカラーですからホワイトにされればいいかがです？』

「なるほどー。こちら、ホワイト。現在、レゾナンス一階のケーキバイキングでお茶を満喫中。とてもおいしいです」

『「サボるな！』』

現在、オレ達の間ではT-Sのプライベートチャンネルでそれぞれが通信をしている。そんな訳で一夏とシャルロットを追跡する事になつたオレ達ながら……なんか、飽きた。だから、オレは一足先に抜け出して休憩をしていたのだが。

「いやあー人は足りているからアタシはいらないかなつて思つて

『あ、そんな事よりも一人が合流いたしましたわ。ピンクと合流して再び追跡を開始いたします』

「がんばって～」

セシリアの報告を聞いて声援を送る。再度、三人から怒られるが気にせず紅茶を口にする。

「ん？ あれは…………」

そんな時間を満喫していると店の外に珍しい人を発見。

織斑先生と山田先生だ。

「あれ？ 八雲さん？」

そして、山田先生がオレを発見。窓越しだったので声は聞こえなかつたがそんな事を言つているそぶりだったので何を言つているかが理解できた。

山田先生はオレを発見すると織斑先生と何か話し、店内へと入つてオレの座る席までやって来るのだった。

「ここにちは、山田先生、織斑先生」

「ここにちは、八雲さん。今は職務中つて訳では無いので気楽にしてもいいですよ。お一人ですか？」

「あー……友達と来てたんですけど、別行動を取つてて。それでアタシの用事が終わつたので合流時間まで暇潰しです」

本当の事を言つと何かと面倒な事になりそうなのであえてウソを言つ。山田先生はそんなウソに納得してくれた様子であつたが……織斑先生だけはなにかと疑つて山田先生に田つきをしている。さすがと言つべきか、なんと言つべきか……。

「もうなんですか？　あ、御一緒してもいいですか？」

「はい。でも、珍しいですね。何か買い物に来たんですか？」

断る理由も無く、オレが許可をすると一人はオレの向かいに座り、適当に飲み物を注文した。それにしても山田先生は相変わらず二口二口しているが、織斑先生は相変わらず仏頂面だな。虫の居所でも悪いのか？

「ええ、今度の臨海学校の時に着る水着を買いに。織斑先生つたらあまり水着を持つて無いって言つもので」

瞬間。織斑先生から殺意ある視線が山田先生に送られる。その視線を受け取った山田先生はビクッと身体が跳ね上がり、そのまま硬直してしまった。

「……私は今ある水着でも十分だと思うのだが……山田先生が無理矢理な」

「で、でも、織斑先生？　最近またバストアップして前の水着がキツイって言つてたじゃないですか」

ほへ、その歳でまだ成長いたしますか。いらっしゃい限りです。

「山田先生。生徒の前であまりそう言つた話は……」

「いいじやないです。今は職務中じやないですし、女の子同士ですしお！」

フン！ と両手で拳を作り、ガツッポーズをして力む山田先生。しかし、この人が『女の子』と言うのに違和感が無いのはどう言つことだらうか？ いや、この人だから違和感が無いのだろう。対して織斑先生は顔を少しだけ赤らめ、若干恥ずかしそうにしている。

普段のイメージからでは想像出来ない反応。

それはそれは、可愛らしいかった。

思わず、携帯のカメラを起動させてカシャリと写真に収めてしまつたぐらいだ。

直後、織斑先生に肖像権について何たるかを『教授いたただいた。もちろん、携帯を取りあげられ、写真を消されてしまったが大丈夫だ。バックアップはすでに取つてある。

「と、とこひで！ 八雲さんはどんな水着を着るんですか？」

織斑先生のお怒りがあまりにも長くなりそうだったので、山田先生が話を元に戻す。

ナイスだ！ 山田先生！ そのキラーパスしかと受け取ります！ そして織斑先生！ わざとらしい舌打ちをしないでください！

「まあ、水着なんて見せたい相手に見てもうつたためのものだ。八雲はそう言つ相手はいないのか？」

と思つたらインターセプト！？

でも、織斑先生は意外にも話に乗り気であるのに驚かされる。しかも、妙な方向に話を持って行きやがった。

「この人、自分の話に免疫無いのに他人の話になるとこいつ話が好きなんじゃね？」

「うへん……アタシにはそんな相手いませんからね～」

「身近な異性に見てもらいたいと思わないのか？」

「それって一夏くんのこと言つてます？」

「それ以外なにがある？」

堂々と言ふ張る織斑先生。

「……正直わかりませんね」

「ほう」

「一夏くんはカッコいいと思つますし……最近ではHS訓練に精を出して一段と男らしくなつたと思います」

「それじゃ不服か？」

「うーん……やつぱり、よくわかりません。友達として氣の許せる相手だと思つてますけど……男として見て無いのだと思います」

一 夏を異性として見る。

と言つより、オレは異性を見ると言つ行為がよくわからない。理由は自分の性格と状況にあるのだろう。オレの精神には若干ながら男の部分がまだ残っている。まあ『オレ』なんて言つている時点でそなんだが。とにかく、そんな部分が異性に対する気持ちを邪魔しているのかもしない。

でも、この世界ではオレは女なのだ。

時間が経てば『オレ』は消えて完全に女になるかもしれない。そして、素敵な相手を見つけて女の幸せを見つけるかもしれない。

「（やつぱり、駄目だ。考えられん……）」

想像しただけで何か頭の中がモヤモヤしていく。このハッキリしない感じは嫌いだ。だから、考えるのをやめた。

「まあいい、お前はまだ若いんだ。ゆっくり時間を掛けて考える。だが、お前も女だ。それだけは自覚しておけ。……手始めに一夏の奴でもいいぞ」

「普通、自分の弟を差し出しますか？」

「アイツの性格には私も困ついてない。お前は頭が良いからどうしたらいいかわかるだろ?」

「……考えておきます」

「さて、水着を買いに行くか……八雲、まだ時間は平氣か?」

「はい？」

「一夏の好みの水着を選んでやる」

その時の織斑先生の顔はオレの悩みを楽しむかのように笑っていた。いや、正確には一夏の恋愛成就に対して状況を楽しんでいるのだ。ただでさえ一夏の周りは凄い事になつていて「元の通り」と、さうに力オスを望むか。この人は……

「おー、何やつている。早く来い」

「はい……」

こうしてオレは織斑先生に連れられて女を磨く修行へと駆り出されたのだった。

『一夏、ピンク！ ターゲット一名が女性水着売り場で同じ試着室に入つたよ！！ 襲撃の許可を！！！』

あれ？ これってヤバくね？

第一十一話 不思議の国のアリスが襲来

「海っ！ 見えたあっ！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの女子が声を上げる。

臨海学校初日、天候にも恵まれ無事快晴。陽光を反射する海面は穏やかで、心地良さそうな潮風にゆっくりと揺らいでいた。

「おー。やっぱり海を見るとテンション上がるなあ」

「う、うん？ そうだねっ」

バスで隣の席になつたのはシャルだった。しかし、どうも出発してからずっとこんな感じで、いまいち話を聞いていない。今も、返事だけしてすぐまた手元に視線をやっている。

「それ、そんなに気に入つたのか？」

「えっ、あ、うん。まあ、ね。えへへ」

左手首にシャルがしているブレスレットは、昨日とある買い物に付き合つてくれたお礼として俺がプレゼントしたものだつた。シャルは銀色のそれを二コ一コと眺めては、時々思い出し笑いでむづかのような笑みを漏らす。

それにしてもそこまで気に入つてくれると、逆にあんまり高い物じゃないのが申し訳ない氣もする。

「うふふっ」

「へん、ものす」^{レジ}機嫌だ。

「まつたぐ、シャルロットわんたら朝から『えりへい』機嫌ですわね」「通路を挟んで向こう側、セシリアが若干むすっとした顔で言つて来る。

「うふ。やうだね。『めんね。えへへ……』

セシリアの棘のある言葉もなんのその、笑顔で返すシャル。「うむ、ここまで『機嫌だとちょっと怖いで。そんなに海が楽しみなんだろつか。いや、俺も楽しみだけじ。

「昨日、途中で一人だけ抜けたとおもつたら、まさかプレゼントとは……不公平ですか？」

「あー…………。まあ、その、なんだ。セシリアにはまた今度の機会にな?」

「どうもヤシコトさんにはプレゼントが欲しかったようだ。そんなに拗ねるなよ。

「や、約束ですわよ?」

「おひ。あんまり高いのは無理だけどな

「うあえずの約束でセシリアは引き下がってくれた。しかし、このお金を使うとせっかく溜めた貯金があつとこづ間に無くなってしまつ。またバイトでもするか。

「…………」

しかし、不思議なのはセシリアの隣で一つと大人しくしているラウラだ。体調でも優れないのだろうか、ときどき拳動不審になって周囲をキョロキョロ見ていく。

「大丈夫か？ 昨日口流したときからずっとそんな感じだけじ、どうした？」

「…………」

「おい、ラウラ。おーい

あんまり反応が無いので席を立つてその顔を覗き込む。

「！？ なっ、なんっ…なんだ！？ ち、近い！ 馬鹿者…」

「ぬア」

鼻を思いつき手の平で押し返された。ついでにおかしな声が出てしまう。どうも風邪を引いたのか熱っぽいのか、ラウラの顔はわずかに赤みがかっていた。

「つたぐ。なあ？ 篦。向こうに着いたら泳げ」

「そ、そ、う、だな。ああ。まあよく遠泳をしたものだな」

「うん？ なんか笄も笄で様子がおかしい。落ち着かなさそうとうか、ソワソワしている。

「せうだな～。畠山よく篠のおじさん達に連れられて俺と篠とツバメの三人でよく海に遊びに行つたよな」

「よく覚えているな？」

「そりゃ、楽しかったからな」

俺はやつ言いながら自分の席から篠達が座つてゐる席を覗きこむ。

「つて、ツバメは寝てこるのか？」

スースーと小さく寝息をたてながら篠の隣で寝てゐるツバメ。もつたいない。せつかく海が見えてきたと言つたんだ。

「おーい。ツバメ。海が見えたぞー」

「んつ……」

「起きなこと顔に落書きしちゃつた～」

「んん～……」

駄目だこりゃ。掛けたぐらいで起きる。なうばー。

「二

「んつ」

「二二二

「んんつ」

おおっ！ 試しにほっぺを指で突いてみたけど意外と柔らかくて気持ちいいぞ！ これは癖になる触り心地だぞ。

「い、一夏貴様」

どうしたんだ?
笄の奴、顔から血の気が引いて真っ青だ
ん?
ぞ?

「第一！ ツバメのほうペモチモチだぞ！」 柔らかくて気持ちいぞ」

や、やめろ！！ 寝て いる ツバメ に イタズラ する と

ガブリ！

ツバメの頬を突いていた指に突然激痛が走る。あまりの痛さに俺は普段出さない悲鳴を上げてしまつた。つてか、マジで痛い！ ガチで痛い！

「……ツバメが寝ている時にイタズラすると噛む癖があるんだ。しかもイタズラをした本人をダイレクトに襲う」

「そんな情報はいいからツバメを起こせ…… 指がこのままだと無くなる……！」

「無理だ。一度噛みついたらしばらくは離れない。安心しろ…… 指が無くなる事はない…… たぶん」

「たぶんって言つた！？ イダダダダダダダッ！…！」

あ、ヤバい。だんだんと指の感覚が無くなつて来た。

「織斑！ もうすぐ到着するから席に座れ！…！」

「ならこの状況を何とかしてください！…！」

田の前の状況を千冬姉は田の当たりにしながらも、相変わらずの指導能力を發揮する。だがそんなの関係無い！ とにかく、この激痛を何とかしなければ今後の生活に支障をきたす瀬戸際なのだまあああああ！…！！！

結局、ツバメはバスが停止するまで俺の指に噛みついたままだった。

「ふあ～…………よく寝た！」

バスが目的の旅館に到着。寝ていたオレの意識もすっかり覚醒して、固まつた身体を思いつきり伸ばす。

「…………」

「一夏くなどうしたの？ 疲れた？」

「…………」

「つむ、どうやら質問に答えられない程疲れたらしい。まあ、長距離移動は馴れない人には苦痛でしかないからな。しょうがない。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないよう注意しろ」

「「「ようしきお願いすまーす」」」

「はい、じゅうじゅう。今年の一年生も元氣があつてよろしくですね」

織斑先生の言葉の後、オレ達が挨拶をすると着物姿の女将さんが丁寧お辞儀をした。歳は三十代ぐらいだろうか、しつかりとした大人の雰囲気を漂わせている。仕事柄笑顔が絶えないからなのか、その容姿は女将という立場とは逆にすくなく若々しく見える。

「あら、そちうが噂の？」

そして、そんな女将さんがオレの隣で疲れ切った顔をした一夏と目が合い、物珍しそうに見ていた。

「ええ、まあ。今年は一人男子がいるせいで浴場分けが難しくなつてしまつて申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、いい男の子じゃありませんか。しつかりしてそうな感じを受けますよ。でも、今は長旅でお疲れなのかしら?」

「なに、気にしないでください。ああなたのは自業自得ですから」

織斑先生がそう言いながらチラリとオレの方を見て来る。ん? オレが何かやつたのか?

「ね、ね、ねー。おりむー」

おー、この独特なあだ名を呼ぶのはのほほんさん(本名は布仏本音)ではないか。相変わらずスローテンポでいろいろ面白い人だよな。

「おりむーの部屋どこ? 一覧に書いて無かつたー。遊びに行くから教えてー」

「いや、俺も知らない。廊下にでも寝るんじゃねえの?」

「わー、それはいいね。私もそうしようかなー。あー、床つめたーいつてー」

のほほんさんならやりかねないな。いや、やつたらやめさせらるど。

「織斑、お前の部屋はこいつちだ。つこじー」

「あ、はい」

しかし、のほほんさんが一夏の部屋を聞き出す前に織斑先生が一夏を連れてどこかへ行ってしまう。それで諦めたのほほんさんも「また後でね」と言つて一夏を送り出した。

にしても本当に元気ないなあ？ どうしたんだろう？

「といひでヤツク～」

そしてその場に残されたオレは彼女の付けた奇妙なあだ名を呼ばれた。

「なんだい？ のほほんさん」

「実は例のブツが手に入ったのだよ～」

「なんと、そいつは朗報だね。では、今晚あたりにでも……」

「心得た」

ガツシコとオレ達は固い握手を交わし、その場を後にする。

とりあえず、荷物を部屋に置いて海へ繰り出すか。

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

オレ、 篠は更衣室のある別館に向かつ途中で一夏とバッタリ出くわした。一瞬、一夏がオレの顔見ると「ひつー」と声をあげていたがどうしてだるい。いや、それよりも今は田の前にある珍妙な光景を見てオレ達は黙り込んでしまっている。

「なあ、これって

「

「知らん。私に訊くな。関係ない」

「でも、これって…………」

一夏が田の前ある地面に埋まつた『ウサ!!!』見て篠に尋ねるが、
篠は即否定する。

「えーっと……抜くぞ?」

「好きこじる。私には関係ない」

「あ、篠」

そう言つてすたすたと歩き去つてしまつた筈。そしてその場に残されたオレ達は仕方なくそのウサミミを思いつきり引つ張ることにした。

すぱつ

「のわつ！？」

「さやー！？」

一夏がウサミミを力いっぱい引っ張ると、ウサミミは意外にも簡単に抜けてしまった。そして、勢い余って一夏はオレを盛大に巻き込んでしまつて、ころんと来たのだった。

「いてて……」

「いつた～……」

「大丈夫か？ ツバ　」

「んー？……」

一夏がオレの無事を確かめようと/orして言葉を掛けるが途中で息詰まる。なんだ？と思つたオレは現状を確認する。

一夏の顔が異様に近かつた。

鼻の頭があと数センチで当たつてしまいそつなぐらい。しかも、ちゅうど一夏がオレを押し倒したような状態だ。ここがムードのあ

る場所で恋人同士ならここでキスの一つでもするのだらう。生憎オレ達はそんな間柄ではないし、真っ昼間からそんな不埒な事をする氣はない。

だが、他の女性が「イツに氣を取られる理由がなんとなくわかつてしまつた。

「な、何をしますの？」

「「おわつー?」」

いきなり、声を掛けられてオレと一夏はバツと瞬時に離れる。その時間は一秒もかからない。天燕で光速移動は出来るが生身でこれほど早く動ける事にビックリした。

「い、いや～セシリア。……今このウサミミを

キィイイイイン…………ドカ ン!

一夏が声を掛けて来たセシリアに言い訳をしようとしてた時だつた。突然、空から高速でなにかが向かつて来たと思えばいきなり激しい轟音が当たりに響く。そして、先程地面に埋まっていたウサミニがあつた場所にソレが地面に突き刺されたのだ。

「「「に、にんじん…………?」」

その場にいた皆が同じ言葉を漏らす。目の前に落ちて来たのはイラストチックなデフォルメにんじん。その人が考えそうなことはわからんが、良い趣味とは言えない代物だ。

「あつはつはつ！ 引つかかっただね、いつくん！ シンチャン！」

パカッと真っ二つに割れたにんじんの中から笑い声とともに登場したのはやはり篠ノ之束だった。

「やー、前はほいら、ミサイルで飛んでいたら危なげどいかの偵察機に撃墜されそうになつたからね。私は学習する生き物なんだよ。ふいふい」

なら常識を学習して欲しい。などと聞いても無駄なので心の中だけにことぶけておく。

「お、お久しぶりです、束さん」

「うそうそ。おひさだね。本当に久しいねー。とにかくいつくん。篠ちゃんはどうかな？ わつきまで一緒にだつたよね？ トライレ？」

「えーと……」

「まあ、この私が開発した篠ちゃん探知機ですぐみつかるよ。じゃあね、いつくん。シンチャンは後で連絡するねー！」

などと言ふ残してすつたつたーと走り去ってしまった。ちなみに篠ちゃん探知機は束さんのトレードマークであるあのウサミミだつたらしい。ズバリ篠が去った方向に耳が動き、それに従つて束さんは篠の後を追つて行つたのだ。

「い、一夏さん？ 今の方は一体……」

「束さん。篠の姉さんだ」

「え……ええええっ！？　い、今の方が、あの篠ノ之博士ですか！？　現在、行方不明で各国が探し続いている、あの…？」

「そう、その篠ノ之博士さん」

セシリアが驚くのも無理も無い。何せあの世界の理を変えてしまつた張本人があんな奇天烈な人だと誰が思うだろうか。大抵の人が本当にあの人ISISを開発したのかと疑つてしまつ。

しかし、なんでこんな所に来てるんだ？　あ、そうか。アレを届けに来たのか。

「ツバメ？　ビーブしましたの？」

「んー？」

「先程からボーとしてましてよ？」

「そう？」

「それに、顔も少し赤いですし……」

「赤い？」

セシリアに言われて両手で自分の頬を触つてみる。確かに、オレの顔は少し熱を帯びていた。体調は今朝から万全だったので調子は悪くない。風邪を引いたって事は無さそうだ。太陽の熱にでもやられたか？

「大丈夫か？ なんなら部屋まで送るけど？」

「だ、大丈夫っ！ 平気だよ！ セツー、アタシ達も海に行こーっ！」

一夏がオレの肩に触れようとした瞬間。反射的にそれを避けてしまい、「あつ」と内心思った。自分でもなぜこんな事をしてしまったのかが解らない。身体が勝手に反応してしまったのだ。

一夏も「え？」っと言わんばかりの顔をしてオレの事を見ていた。なんとなく、それが気まずくて、オレはセシリ亞の腕を引っ張り、無理矢理その場から退散することにしたのだ。

「（ヤバいな……）」の感情は……）」

だから、オレは芽生え始めた感情を押し殺すこととした。

第一二三話 誤解

「あ、織斑君だ！」

「う、うそっ！ 私の水着変じやないよね！？ 大丈夫だよね！？」

「わ、わ～。体かつこ～。鍛えてるね～」

「織斑くーん、あとでビーチバレーしようよ～」

「おー、時間があればいいぜ」

さて、男子更衣室で水着に着替えた俺はちょうど隣の更衣室から出て来た女子数人と出会つてそのまま浜辺へ向かう。

「あちあちあち～」

海に来るのも何年かブリの俺としては、この感触は懐かしくもあり楽しくもある。素足で感じる砂浜の熱にややつま先立ちになりながら、波打ち際へと向かう。

「（それでもツバメの奴どうしたんだろ？）」

準備運動をしながら、ふと先程のツバメの態度を思い出してしまふ。

いくら寝ている彼女にイタズラをしたからといつてあそこまで嫌われてしまうとは……。でも、そうしたら瞞みついたのはわざとなるのか？ いや、とにかくツバメが来たら後で謝りつつ。

「い、ち、か～～～～つ！」

おつり？ つて、のわつ！？

「あんた真面目ねえ。一生懸命体操しちゃつて。ほりほり、終わつたんなら泳ぐわよ」

いきなり俺に飛び乗ってきたのは、鈴だつた。
ちなみに着ているのはスポーティーなタンキータイプ。オレンジ
と白のストライプで、へそが出ている奴。何とも活発そうなイメー
ジである。

つてか、しゅるつと俺の体を駆け上がるんじやない。

「あつ、あつ、ああつ！？」な、何をしてますのー？」

と、言つてやつて来たのはセシリアとツバメだつた。セシリアの手には簡単なビーチパラソル。ツバメの手にはシートとサンオイルを持つていた。

セシリアは魚やかなオーバーのビキニ
胸は巻かれたハレオがち
つと優雅で格好いい。ツバメは残念ながら水着の上にパークーを着
ておりどんな水着かわからない。

「なつて、肩車。あるいは移動監視塔」につづく

「かみのじ」

「そりやそうでしょ。あたし、ライフセーバーの資格とか持つてないし」

「うーん、そう言われるとどうか

「でしょ？ まあ、溺れている子がいたら助けるけどね」

「わ、わたしを無視しないでいただけます！？」

おお、ここに金庫があるでござつた。

「とにかく、鎌さんはそこから降りてください。」

「ヤダ」

「な、なにを子供みたいな事を言って…………！」

セシリアがざくつ！とパラソルを砂浜に刺す。なんか知らないが怒りがこもつてゐる。ちなみに、ツバメはサッサと黙つて手にしていたシートを広げて、パラソルの日陰へと日光から非難していた。

「なになに？ なんか揉め事？」

「つて、あー！ お、織斑君が肩車してるー。」

「ええつ！　いいなあつ、いいなあ～！」

「さつと交代制よ！」

「そして早い者勝ちよ。」

謹ぞを聞き付けた女子が何を勘違いしたか俺に肩車をしてもらおうと詰めかけてくる。

「り、鈴。降りろ。誤解が広まる」

「ん、まあ、仕方ないわね」

よつ、と俺から飛び降りる鈴。ひらりと手の平で着地して、そのまま前方返りで起立。すげえ、猫みてえ。

「鈴さん…………？　今のはこたとかルール違反ではないかしら……？」

セシリ亞はぴくぴくと引きつった笑顔を浮かべている。ってか、ルール違反ってなんだ？

ちなみに俺は、やつてきた女子に「そんなサービスはしません」と説明するので忙しい。
ええい、鈴のせいだ。

「そんなこと言つて、どうせセシリ亞だつて一夏になにかしてもらいうんでしょ？じゃあいいじやん。ねえ？」

「いえ、何もしてもらわないんだ。じゃ、あたしが」

「し、してもうこますわっ！　一夏さん、さっそくサンオイルを塗つてください！」

「「「えー？」」」

もう少しで誤解だと説得できそうなどころで、セシリ亞の言葉に女子が声を揃える。アあ……何でそんな大声で言つんだ。

「私はサンオイル取つてくるー。」

「私はシートをー。」

「私はパラソルをー。」

「じゃあ私はサンオイル落としてくる」

塗つてあんならわざわざ俺の手間を増やすなよ。ああ、すでに海にわざわざ入つて行つたよ。

「コホン。そ、それでは、お願ひしますわね」

しゅるつとパレオを脱ぐセシリ亞。なんだかその仕草が妙に色っぽくて、ついついドキッとしながら視線を反らしてしまつ。

「え、えーと…………背中だけだよな?」

「い、一夏さんがされたいのでしたら、前も結構ですわよ?」

「いや、その、背中だけ頼む」

「でしたら

「

こきなりセシリ亞は首の後ろで結んでいたブラの紐を解くと、水着の上から胸を押さえてシートに寝そべる。

「や、やあ、どうだ?」

「お、おう!」

やばい、色々とめずかしくなつて来た。セシリアを直視できない。

「じゃ、じゃあ、塗るだ」

「ひやつ！？ い、一夏さん、サンオイルはすこし手で温めてから塗つてくださいな」

「や、そつか、悪い。なにせいつも言つた事をするのは初めてなんですか？」

「そ、そづ。始めてなんです。それでは、し、仕方がないですわね」

ん？ セシリアの声がちょっと嬉しそうに聞こえるのが気のせいだろうか？

とにかく、俺はセシリアに言われた通りに手に付けたサンオイルを揉むように温め、改めてセシリアの体に塗つていった。

「ん……。いい感じですか。一夏さん、もつと下の方も

「せ、背中だけでいいんだよな？」

「い、いえ、せっかくですし、手の届かないところは全部お願ひします。脚と、その、お尻も」

「うえつ！？」

「やいやいや…… 脚はともかくお尻は不味いだろー

「…………つて、あれ？」

「あ、いい感じですか」

突然のことだった。横で大人しくしていたツバメが俺からサンオイルを奪い、自分の手と鈴の手に付け、それをセシリアに塗り始めたのだ。

「なんだか動きが巧みになりましたわね？」

そしてセシリアは、そのツバメと鈴が自分の体にサンオイルを塗つているとは気付かず、なんだかうつとりし始めていた。

傍から見ていればなんだか面白い光景だった。実際、俺を含めた周りの女子も口を押さえて笑いを堪えていたのだ。

うげえ、手に付けてたサンオイルが口に！

「い、一夏さん？ その、そろそろお尻の方を……」

うわっ。まだ、俺が塗つていると思つてるのか。ってか、どんなにお尻に塗つてももらいたんだ？

チラリとツバメと鈴の方を見ると目をキランと不気味に光らせ、ニヤリとニ田月のように口を歪め笑い、手をワキワキさせてくる。

なんとなく、やる事が想像つくぞ。

ガシッ！ むにゅ

「ひゃ！ い、一夏さん！ そんなに強くしないでください」

むにゅむにゅむにゅむにゅむにゅむにゅむにゅむにゅむにゅ
ゆむにゅむにゅ

「ひゃああああああ……」

ツバメと鈴はセシリアのお尻を掴み、揉みまくった。いや、サンオイルを塗るのではなく、本当にガツツリ揉んだのだ。おまけにパンツの下にまで手を突っ込み、ひたすら揉んだ。

なんか……色々とHロゴ。

「や、そんな！ 中まで… ちゅうど、一夏さ…………ん？」

さすがのセシリアもコレには耐えられず、顔だけを上げてこちらを見る。そして、二人が自分のお尻を揉んでいる姿を見て、唾然としてしまった。

「セシリ亞～。せつちゅうじょつと調子乗りやすげじゃな～い？」

「やうだねえ～。そんなにお尻を塗つてほしこならアタシ達が塗つてあげるよ～」

「え？ あ、あの…………ひゃっ！ あはははははははー…」

そこからは地獄絵図のようだった。サンオイルの冷たさ&くすぐり攻撃でセシリアは変な声を上げながら大笑い。

「わ～、見ていろ」ひがくすべつたくなつてぐる。

「ああもう～！ いい加減に

「 「 「 「あ」 」 」

怒つて体を起こすセシリ亞。そうすると、体から離れていた水着はそのまま下に落ちてしまったのだ。生憎、大事な所は見えなかつたものの、セシリ亞は耳まで真っ赤になつてうずくまる。

「 「あー……」めん」 」

「い、い、今更謝つたつて……鈴さん！ ツバメ！ 絶対に許しませんわよー！」

「 「うん、じゃあ逃げる。またね」 」

妙に息が合つた二人。行動も一緒にあればセリフも全く同じなのは驚かされる。

グイイツ！

そして、そんな息の合つた二人が俺の両腕を掴みその場から退散するのであった。

「つて、おい！ 僕まで巻き込むな！ ああ、まったく……セシリアすまん！ その、見えてないから、な？」

「な、なつ……」

さりにボックと赤くなつてしまつたセシリ亞は、振り上げた拳をどうこもできずにそのままの格好で固まつてしまつ。

ああ、後でひやんと謝つておいつ。でないと後が怖い。

「イカン……調子に乗つたな……」

セシリアにイタズラして、鈴と一緒に一夏を連れて退散したオレは一人と別れてビーチから少し離れた岩場へとやって来ていた。
まあ、この場所に来たのは気分だ。なんとなく、一人になつて頭を冷やしたいと思ったのだ。去り際に一夏が何か言いたそうだったが……まあいいや。落ち着いてから聞き出せり。

「一夏なつもじやなかつたんだけどな……」

セシリアと一夏が一緒にいるのを見て、面白くないと思った。それ故にあんなイタズラをして邪魔をしたくなつてしまつたのだ。
しかし、冷静になつて考えてみれば自分はなんて事をしてしまつたのだろうと自己嫌悪になつてしまつ。

せつかく押し殺そうとした感情なのにな……。

「どんなつもりだったんだ~い？」

「わひやつーー！」

不意に背後から声を掛けられて、変な声を出して驚いてしまつ。

「た、束さん……」

「やつほ～！ シンチヤン！ 皆のアイドル天才科学者篠ノ之束さんだよ～」

「先づりですね。篠にはもう会ったんですか？」

「それがね～。会った瞬間に元氣に隠してたのか真剣を振り回してきたから逃げて来たの～」

「は、ははは……」

なんだその状況。もはや笑うしかないぞ。

「それにしてもシンチヤン？ しばらく見ない間にこの女の顔になつたね？」

「はあ？」

「なんかね～。恋する乙女つて感じだよ？ もしかして、いつくんに惚れた？」

「なつなつなつ～…？」

「おお～！ その反応！ まさしくそれだね。いや～シンチヤンもついにいつくんの魅力に墮ちてしましましたかあ～。いいね～いいね～！ でも、私は篠ちゃんのことを応援しているから協力はできないなあ～」

「ちよ、ちよっとー 何勝手な事を言つているんですか！？ そん

な訳ないじゃないですかー?」

「ん~? 違うの?」

「だつてあの一夏くんですよ!? 優柔不断で八方美人! 変な所で気が利くのに人の気持ちに対しては鈍感で唐突木! 朴念仁ならぬ朴念神ですよ!-!」

「ツンチヤン……だいたい言つてこることの意味が一緒だよ?」

ぐつ…………確かに。

「まあ、その話はまた今度詳しく述べとして

「一生聞かないでください」

「ええ~。お姉さんと恋^{コイバナ}話しちゃうよ~

「はあ~……」

「ダメだ。ここで色々ハッキリさせないとこの人は変な誤解をしたままなんらかのアクションを起こしてしまってそうだ。」

いや、誤解はしていないか。う~ん、よくわからん。

「よく解らないんです。今の自分の気持ちが。始めは、幕のいる世界が守りたくて、彼女が悲しませないようにしたくて、一夏くんも守つていました。……でも、織斑先生に女を磨けとか、年相応の事をしろとか言われたりしたら色々考えちゃって……で、一夏くんの事を変に意識しちゃうんですね」

「そつか……ありがとう。私との約束とはちょっと違うけど、守つてくれてたんだね」

「ついでみたいなもんですけどね」

「それから、もう一つありがとう。シンチャンが篠ちゃんに親友でよかつたよ」

いつものふざけた調子ではなく、束さんはオレに向かって深々とお辞儀をした。本当の感謝をオレに向けて来たのだ。

「この人もこういう事をするのだと少し驚く。まったく普段の様子では想像出来ない事だった。」

「むつ、何か失礼な事を考へてる?」

「そんな事はないですよ~」

「うおっ、それでいて妙に鋭い。

……あ、そうか。そう言つ事なんだ。

「アタシは篠も大好きですけど、一夏くんの事も同じぐらい大好きになっちゃったんです」

篠はオレに居場所をくれた大切な人だ。そして、一夏は十年以上の時と共に過ごして、知らず知らずの内にオレにとつて欠けてはならない人になつたんだ。一人がいて、初めてオレの居場所が出来るんだ。

だから、篠も一夏も他の人に取られたくないと思つてしまつたんだな。

「シンチャンは私みたいに欲張りなんだね」

「わうですね。独占欲は強いほうですね」

「ふふっ……」

「ははっ……」

「「あははははははー。」」

誰もいない海辺の海岸。オレ達の声は岩場に打ちつけられる波の音に負けないぐらいに辺りに響いた。

「…………」

篠ノ之束の襲撃を見事に返り討ちにした篠ノ之篠は暗い表情をしてビーチから離れた岩場へとやつて来ていた。

「……すこし、大胆な水着だつたか?」

自分で選んでおきながら、今更後悔をする。選んだ水着は白いビキニタイプ。かなり肌の露出面積が広く、もはや下着となんら変わらないようなものだつた。

さすがに、こんな格好で人前、特に一夏の前に出るのは勇気がいる。だから一人で人気の無い場所へやつて来てしまつたのだが。

「これじゃ意味が無いだろ…………」

「それにしてもシンチャン？　しばらく見ない間にこの女の顔になつたね？」

「ん？」

一人で落ち込んでいると不意に声が聞こえて来た。しかも、聞き覚えのある声だ。

「姉さん？」

そつと背影から声のした方を覗いて見るとそこには姉さんとツバメの姿があった。私は一人で何を話しているのだろうと思ひ、聞き耳を立ててしまつ。

「なんかね～。恋する乙女って感じだよ？　もしかして、いつくんに惚れた？」

「…？」

姉さんの言つた言葉を聞いて耳を疑つた。

「なつなつなつ！？」

「おお～！ その反応！ まさしくそれだね。いや～シンチャンもついにいつくんの魅力に墮ちてしましましたかあ～。いいね～いいね～！ でも、私は篠ちゃんのことを応援しているから協力はできないなあ～」

「ちょ、ちょつと！ 何勝手な事を言つているんですか！？ そんな訳ないじゃありませんか！？」

「ん～？ 違うの？」

「だつてあの一夏くんですよ！？ 優柔不斷で八方美人！ 変な所で気が利くのに人の気持ちに対しては鈍感で唐突木！ 朴念仁ならぬ朴念神ですよ！！」

ツバメは必死に姉さんの言つた事を否定しているが、アレは本氣で否定しているようには見えなかつた。

「（…………ツバメは一夏の事が好き？）」

その事実を知つて、私の頭の中は真っ白になり、色々な疑念が頭に浮かぶ。

今まで自分の事を応援してくれていた親友が同じ人を好きになつていた。だとしたら、私は今までツバメになんて酷い事をしてきていたのだろう。そんな素振りを見せなかつたとは言え、私はツバメを

今まで苦しめてしまったのではないのだろうか。

「…………ツバメ」

ポツリと彼女の名前を呟いて、私はその場を後にしてしまった。
もちろん、この後一人が何を話していたかは私は知らない。

第一十四話 紅い剣と蒼い翼

『なんかね～。恋する乙女って感じだよ？　もしかして、いつくんに惚れた？』

不意にその言葉が頭をよぎる。

現在の時刻は七時半。臨海学校に来たI.S学園の生徒は大広間で旅館で用意してくれた料理を食べている所である。そんな中、篠ノ之箇は田の前に出された料理に手を付けず、ただ短いため息を吐いていた。

「（ツバメも一夏が好き…………）」

ツバメと姉との会話を不本意ながら立ち聞きをしてしまつてからこの言葉が頭から離れない。

「（私は……ツバメの事を何も知らなかつたのだな）」

今思い返せば、私はツバメに関する話を聞いたことがあまりない。悩みにしろ、私が一方的に打ち明けて、ツバメはそれを黙つて聞いて後押ししてくれる。いつしかそれが当たり前になつていて、私もそれに甘えてしまつっていた。

「（それで親友とは笑えるな……全部ツバメに押し付けて、自分が樂をしていたとは……）」

ツバメは私の話を聞いてビリビリ思っていたのだらう。鬱陶しく思つただろつか？ そんな事は考えたくはない。だが、それを否定できる確証が持てない。

私はあまりにもツバメの事を知らな過ぎた。

「（でも、負けたくない。たとえ、親友でも……負けたくない）」

夕食が終わった後、旅館の風呂を浴びてオレは部屋に帰つて来る
と同室のセシリ亞が上機嫌に何か支度していた。

「セシリ、どうか行くの？」

「ええ。ちょっと」

「あーあ、せつかく織斑君と遊ぼうと思つて色々用意してきたのに、
織斑先生の部屋じゃあねえ……」

上機嫌なセシリアとは裏腹に同室の女子達はどんどんと暗いオーラを纏っていた。ちなみに、用意したものはトランプにウノ、花札、人生ゲーム、そして男子の（あるいは女子の）憧れことツイスター、ゲームである。

つてか、ツイスターってまだあつたんだな。

「あ～～～。せつしーがえつちに下着つけてる～」

そんな中、いつも半開きの田だが、なぜか観察力と洞察力に長けたのほほんさんがそう告げる。その言葉を聞いて、さすがのセシリアもギクリとしてしまった。

「なにつ！？ 脱がせ脱がせえ～！」

「剥け～。身ぐるみ置いてけ～！」

「きやああああつ～？ やつ、やめつ……引つ張らないで～！」

女三人集まれば姦しいことはよく言つた物だな。セシリアの身ぐるみがどんどん剥がされてゆく。

「わ。本当にエロい下着つけてる……」

「えぬ～。えぬ～」

「なになに、勝負下着？ 織斑君のところに行けないのにみんなの着ちゃって」

「まあまあ～。セシリアつたらおまかせん 」

口べらひに好きな事を言こながら、最後に声を揃える女子一同。

「 「 「 セシリアはエロこなあ 」 」

「え、エロくあつません～！」、「れば、その、身だしなみ……
そつ、身だしなみですわ～！」

顔を真っ赤にしながら反論するセシリア。

だが、もみくちゃにされ乱れた浴衣からあらわになつていてる黒い下着が見え隠れしているので説得力がまったく無い。いや、マジでエロい。

「はあ～……ホラ、セシィ。行くところあるんでしょ～。浴衣直して早く行つてきただら～」

「や、せひだしたわ！　では、監さん後ほじ～～！」

見るに見かねたオレがそう言つとセシリアはそそくわと乱れた浴衣を直して部屋を退場。その際他の女子達がセシリアを追撃しようとするが、一応阻止する。でないとこの追い剥ぎ集団が調子に乗ると思つたからだ。

「「～……ヤックの所為でせひしーに逃げられた～」

「はこせこ。…………それでせひさん逃げましたか～

「「「え？」」」

「セシイが風呂上りだと畠のあんなにキメ細かく化粧をして、おまけに勝負下着まで付けていた。ならば、そのお相手は誰か? 気にならない?」

まあ、想像はつくのだが。

「「「なるほど」」「」

「では、参りましょー」

そんな訳でオレ達はセシリアの後を追跡する事にした。

「ヤック~。」
「……」

「まあ~案の定だね」

セシリアの後を追つて、彼女が入つて行つた部屋の前にオレ達はいる。そしてそこは教員用に用意された部屋だった。つまり……。
「織斑君と会うために血の鬼門をくぐるとせ……セシリア、恐ろしい子ー」

「でも、じつある? これじゃ、ビックリしないもんじゃよ?」

「やうだね。帰る?」

「あ、なんか声が聞こえる」

「なに?」

それぞれが小声でざわざわするかを決めようとしていると部屋の中から話声が聞こえてきた。なのでオレ達は中でどんな話がされているのかを扉に耳を当てて聞くことにした。

「お前ら、あいつのどかがいいんだ?」

聞こえて来た声は織斑先生の物だった。

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけですの」

「(あれ?)の声は筈?」

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

「(鈴もこるのか?)」

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです」

「(いかはセシリア?と)」

なんとなく、聞こえた会話から中でどんな話がされているのかが想像出来た。現在部屋の中にいるのは織斑先生、筈、鈴、セシリアと声が聞こえないがシャルロットとラウラもこるのだ。筈、一夏を想う人々が勢ぞろいしている。

「これって織斑先生が織斑君について聞いてるのかな？」

「つてか、今現在織斑君はこの部屋にはいないってこと?」

「「ならば…」」

それは脱兎の如く、素早い行動だつた。

聞き耳を立てていた面々がその場を離脱。部屋に一夏がないのならばここ以外のどこかにいると踏んで、それを探しに行つたのだ。そして発見し次第、部屋に連れ込んで王道のツイスターゲームを繰り広げるつもりだらう。

「ヤックは行かないの～？」

「…………アタシはもうひとつここにいる」

「そ～？　じゃ、私達はおりむー探してくるね～」

他の女子に遅れて相変わらずの移動速度でのほほんさんもその場を去つて行く。オレはちょっと中で繰り広げられる会話が気になつたのでその場に残ることにした。

「まあ、あいつは役に立つぞ。家事も料理もなかなかだし、マッサージだつてうまい。といつわけで、付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか?」

「「「「「く、くれるんですか?」」」」

「やるかバカ」

「 「 「 「 「ええへ…………」 「 「 「

「女ならな、奪つへりこの気持ちで行かなくていいわ。自分を磨けよ、ガキども」

たぶん、部屋の中の織斑先生は楽しそうな表情をしながらそういう言つてゐるのだな。オレもその言葉を聞いて内心で力無く笑つていた。

「（奪つへりこの気持ち、か……）」

自分で苏生えた気持ちが渦を巻く。心臓も普段より早鐘で鳴り、胸が少しだけ苦しくなった。

「（…………罪悪感。とさちよつと違うか。昼間束さんと言つておきながら）れじや格好悪いよな）」

なんとなく、その場にいたくないと感じたオレは静かにその場を後にすることにした。

試験運用とデータ取りに追われる。特に専用機持ちは大量の装備がまつてゐるのだからさあ、大変。

のだが。

一五七

突然の来訪者。

「すゞぎど！」と砂煙を上げながらやつて来る人影によつて取りかからうとしていた作業が中断される。

「……」束

「やあやあ！ 会いたかつたよ、ちーちゃん！ もう、ハグハグし
よう！ 愛を確かめ ぶへつ」

そして、織斑先生は飛び付いて来た束さんを片手で顔面を掴み、思いつき指が食い込ませていた。

「うるせーぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらずの容赦無いアイアンクロードね」

しかし、そんなアイアンクロードを物ともせずに束さんはその拘束から脱出。今度は箒の方を向いて笑顔になる。

「やあー！」

「……………」

「えへへ、じうじて会つのは何年ぶりかなあ？　って、昨日会つたけどね。でも、おつかくなつたね、箒ちゃん。特におっぱいが

がんつー！

「殴りますよ」

「な、殴つてから言つたあ……。し、しかも日本刀の鞘でえ叩いた！　ひどい！　箒ちゃん！　ひどい！」

頭を押さえながら涙目になつてうつたえる束さん。そんなやり取りを見ている他の皆さんポカンとして眺めている。

しかし、あの箒が持つてゐる日本刀はどこから出して来たのか疑問に思つるのはオレだけだろ？

「ツンチャーン！ 皆私に冷たいよー！ お姉さん悲しいー！」

そして、今度はオレに抱きついて来る束さん。いくらオレがIRS
スーツを着ているとは言え、この炎天下で人が抱きついて来られる
と暑い訳で……。

「はいはい。とりあえず暑いので離れてください」

とりあえず、引き剥がす。

「ツンチャーンも冷たい！ 暑いとか言っておいて冷たいっ……」

別に面白くねえよ。

「一夏、あの人って……」

「ん？ あー、篠ノ之束さん。篠のお姉さんだ。セシリアは昨日見
ただろ？」

「ええ」

「あの人がIRSを開発した天才……」

束さんを知らない面々はその奇天烈なキャラを目の辺りにして唾
然としていた。

「さて、皆の愛を確かめた所で早速本題に入ろうではないか！」

もはや周りの人達のことなどお構いなしに話を続けて、束さんは
びしっと直上を指さす。そして、それと同時に空で何かが光を放つ

た。

ズズーンッ！

空で何かが光を放つた瞬間。何かの金属の塊が束さんの真後ろに落ちて来た。

しかも、二つだ。

そして、その落下して来た二つ金属の塊に割れ目が入り、四方に壁が倒れる。

「まず、じゅらー！ これぞ篠ちゃん専用機こと『紅椿』！」

「これが、私の……専用機」

金属の塊から出て来た紅いI.S. 篠はそのI.S.を見て真剣な表情になっていた。が、その表情はどこか浮かれているようにも見えた。

「そして！ じゅらがツンチヤンのために作った新しい天燕の装甲だよー！」

「…………」

もう一つの金属の塊から出て来たのは篠の紅椿とは対極的なカラーである蒼いI.S.装甲。

部分的ではあるが天燕と比べて一周りも大きい。いや、これが本来のI.S.の大きさであり、天燕自体が小さ過ぎたのだ。

「紅椿は接近戦闘を基礎に万能型に調整してあるから、フィットティングとパーソナライズが終わればすぐに篠ちゃんに馴染むよ。あと自動支援装備もつけといったから！ で、ツンチヤンの方は今まで送

られてきた天燕の稼働データを元に私が再設計したの！ パッケージ化されてるから取り付けはすぐに終わるよ！ ジヤ、早速やろうか！ まずは篠ちゃんの方から。ツンチャン手伝つて

束さんに呼ばれてオレは彼女の元に向かう。篠もそんなオレの後に続いて紅椿に乗り込み、装着した。

篠が紅椿に乗り込んだのを確認すると束さんは自分とオレの目の前にディスプレイを投影させ、一人で膨大なデータを処理するためコンソールを指で素早く叩き始めた。

「（うわっ…… 紅椿のスペックが他のITSと比べ物にならねえ……）」

バラツと空中投影されたディスプレイに表示されたデータを見て呆れる。なんだってこんなハイスペックを簡単に作り出せてしまうのだろう。この人は……。

「はい！ 終了！ さすがツンチャン。久々の共同作動だと仕事が早くて大助かりだよ」

ものの数分。束さんの終了宣言により紅椿と篠のファイットティングとパーソナライズ作業が終了した。篠は試しに紅椿の動作確認をするため、腕を軽く動かしている。

初めて動かす機体なのに妙に馴染むと言つたような顔だ。無意識なのか小さく微笑んで嬉しそうにしている。

「じゃ、今度は天燕にこれを取り付けちゃおつー！ ツンチャン、天燕出して」

「はい」

そして今度はオレの番。束さんに言われるがまま、オレは天燕を展開される。

「じゃ、ちょちょこのー、ほいー」

パアッと天燕の装甲が光に消えて束さんが作つた装甲が新しく量子変換されていく。新しく取り付けられたのは腕、脚、そして可変式ウイニングの代わりにアンロック・ユニットのスラスター。ボディ部分も少しだけ形状が変わっていた。

「はい！ 」いつも終了！ サすが私だね。じゃ、試運転も兼ねて二人で模擬戦でもしてみてよ」

「「え？」「」

相変わらずの早さで全ての作業を終えると束さんがとんでもないことを言い始めた。

試運転でいきなり模擬戦つて……貴方はどこの白い悪魔ですか？

「私は構いません」

「え？ 築？」

しかし、意外にも築はその提案を承諾。

「よし、築ちゃんは乗る気みたいだしさりやかちやかおつー」

しかもオレの意思はお構いないらっしゃい。

オレは短くため息を吐き、渋々その提案を承諾することにした。

姉さんからもらった私の専用機『紅椿』。

それは私の思っていた以上に動き、その機動性に私は妙な高揚感を感じた。そして、今その紅椿を纏い、私は空を飛翔している。打鉄とは比べ物にならない加速性。全スペックが現行ISを上回るだけの事はある。

だが、そんな紅椿の機動性に付いてくるISの姿が背後についた。

「（全スペックがこっちが上とは言え、やはり付いてくるか……
ツバメ）」

背後には新しく作られた装甲を纏つた天燕の姿があつた。

「行け！！ 羽斬つ！！」

ツバメはセイバー・ビットである羽斬を射出す。だが前見た時とは違い、羽斬の数は一本から六本となつていた。

「甘い……」

襲い掛る羽斬を私はかわし、左手に持っていた『空裂^{からわれ}』を横一閃に振る。

そして、斬撃と合わせて帯状の攻性エネルギーが解き放たれ、羽斬を四本撃破した。

「やれる！ この紅椿なら！」

この力なら私は誰にも負けないと確信した。

これでツバメと対等でいられる。

今まで離されていた距離が一気に縮まった。遠かつた存在がより近く感じられる。

『すごいね、その紅椿』

突如、ツバメからのプライベート通信が紅椿に入る。

「ああ、この力なら……誰にも負けない」

『筹建？』

「私は……お前にも負けない！ 行くぞっ！」

イグニッショングーストにも負けない程の加速。その加速を使つ

てツバメに突っ込む。空裂ともう一つの刀『雨月』^{あまつき}を交差させて斬りかかった。

ギンツ！！

「ぐうつ！！」

しかし、そんな斬撃でツバメはやられることはなく、一本の羽斬を手にしてそれを受け止めた。

鎧競り合いになつた状態。そんな状態になつてツバメの顔が苦痛に歪む。やはり、力はこちらの方が上なのかな、ツバメは私の力に押し負けていた。

「ふふつ……」

思わず小さく声を出して笑ってしまった。
自分が相手を圧倒していることになんとも言えない衝動にかられる。

だが、それが心地よくも感じた。

『二人共そこまでだ』

だが、そんな時に横やりが入る。

千冬さんからの通信で私はハツとなり、腕に入れていた力を緩めた。

『緊急事態だ。すぐに戻つて来い』

第一一十五話 銀の福音

オレ、簾、一夏の三人は現在旅館から一キロ離れた先にある空域を高速飛行していた。

『もうすぐ、目的のポイントだ。一夏、気を引き締めりよ』

『お、おひー』

そして白式を纏つた一夏を背に乗せた状態の簾の声は妙に浮かれていたような気がした。

『なあ？ ツバメ、ちょっとといいか？』

「どうしたの？」

『簾の奴、妙に浮かれてないか？』

一夏も簾の異変に気付いたのか、その事を心配してオレにプライベート・チャンネルで話しつけてきた。

「まあ、専用機を持つてちょっと気持ちが浮ついてるんだよ。アタシ達でうまくサポートしよ

『あ、ああ……』

『見えたぞ！』

一人でそんな話をしていると、簾がオープン・チャンネルでそう

言う。ハイパーセンサーで筆が指摘した方向を見ると一機のIISが見えた。

少し時間が戻つて旅館の大座敷。そこにオレ達専用機持ちと教師陣が集められた。

照明を落とした薄暗い室内に、ぽうつと大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

「では、現状を説明する。一時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IIS『銀の福音』シルバーリオン・ゴスペルが制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があつた」

いきなりの織斑先生の説明に一夏だけが面食らつたような顔をしている。どうやら、説明を受けても現状を理解出来ないでいるらしい。

「その後、衛星の追跡の結果、福音はここから一キロ先の空域を通過することがわかつた。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態を対処することになった」

淡々と説明を続ける織斑先生。

「教員は学園の訓練機を使用して空域および海域の封鎖をおこなう。

よつて、本作戦の要是専用機持ちに担当してもらひ。それでは作戦会議を始める。意見のある者は挙手するように

「はい」

早速、手を挙げたのはセシリ亞だった。

「目標工事の詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは一力国の最重要機密だ。けして口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも一年の監視がつけられる」

「了解しました」

そして、セシリ亞をはじめ代表候補生の面々と教師陣に相手のデータが開示された。

……おいおい、待てよ。

「こ、これって……ツバメの天燕と一緒にや

データを見てそう呟いたのはシャルロットだ。開示されたデータには所々オレの天燕と似たスペックデータが表示されている。まあ、さすがにエルスドライブまでは搭載されていないが。

「そうだ。相手は八雲の天燕と同等のスペックを持っている。詳細はこちらも把握していながら……八雲、心当たりはあるか？」

「…………ありません。あるとすれば天燕の開発段階で情報が何らか

の原因で漏洩したか、先月の学年別トーナメントで機体を公開しますから観客の中にいた誰かが勝手に機動データを採取したぐらいの可能性しかありません」

「…………なるほど」

織斑先生の質問にオレが答えると織斑先生はその答えで納得してくれたようだつた。たぶん、この原因が何なのかを予想していたのだろう。

「とにかく、今回の作戦では一夏を要とした一撃必殺ワンドアプローチ・ワンダウで行く」

「え？ なんで俺？」

「まだに現状が把握できていないのか、なんとも間抜けな質問がされた。織斑先生はそんな一夏を見て軽くため息を吐いて告げる。

「この中で最も高い攻撃力を持つているのは白式の零落白夜だけだ。今回のよつな作戦には重要不可欠なんだ」

「じゃ、じゃ！ 僕が作戦に参加するつてことー…？」

「確かにこれは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないなら、無理強いはしない」

「そう言われた一夏は少しだけ悩むように俯き、そして再び視線を織斑先生に戻す。

「やります。俺が、やってみせます」

その表情は真剣で覚悟を決めた表情であり、男前だった。その場にいた専用機持ちのメンバーは若干顔を赤くしているのは言つまでもない。

オレもだがな。

「よし。それでは作戦的具体的な無いように入る。現在、この専用機持ちの中でも最高速度が出せるのは…………篠ノ之と八雲の機体か」

先程の模擬戦を見ていた織斑先生がオレ達を見てそう言う。他の皆もそれで納得したような顔をしている。

あれ？ 流れ的にオレも作戦に参加するのか？ 皆さんのような代表候補生でも無ければ戦闘のプロでもありませんよ？ ってか、構成メンバーが自分を含めて不安過ぎる！？

「では出撃メンバーは織斑、篠ノ之、八雲の三名。今から二〇分後に作戦開始とする。各員、ただちに準備にかかり！」

「「「」「了解！」」「」

ああ……もう、いいや。

「加速するぞ！ 田標に接触するのは十秒後だ。一夏、集中しろ！」

「ああ！」

田標をハイパーセンサーで捉えるとスラスターと展開装甲の出力をさらりと上げる。背中に俺を乗せたまま、その速度は凄まじく、高速で飛翔する福音との距離をぐんぐんと縮めていく。

「うおおおおおおお！」

零落白夜を発動させ、俺は同時にイグニッショーン・ブーストを行つて一気に福音との距離を詰めた。

「なっ！？」

しかし、福音は最高速度のままひやりに反転、後退の姿となつて身構える。

「敵機確認。迎撃モードへ行こう。《銀の鐘》^{シルバー・ベル}稼働開始」

オープン・チャンネルから聞こえたのは抑揚のない機械音声だった。だが、そこから明らかな『敵意』が感じられる。

嫌な予感がする。

そして、悪い予想は数秒と経たずに現実になつた。

ぐりん、と。いきなり福音が体を一回転させ、零落白夜の刃をわずか数ミリの精度で避ける。それは慣性制御機能を基準搭載しているISであつても、かなり難易度の高い操縦だ。

「やっぱり、天燕みたいに動くか！？」

スペックがツバメの天燕に似ていたため、予想はしていが改めてすごいと思った。

「一夏！ もう一度だ！」

「おひつ……」

再度、俺は箒の背に乗り、福音に向かつて斬りかかる。だが、またひらりひらりと紙一重で回避されてしまう。

「二人共！ 気を付けて！！ そいつには……」

俺が大振りの一太刀を浴びせよとしていると、ツバメの声が聞こえハツとする。

銀の翼。

スラスターでもあるその、装甲の一部がまるで翼を広げるよう開く。

「ヤバッ！？」

それは天燕と同じ蒼燕そのものだった。原理は違うが高密度に圧縮されたエネルギーで、凄まじい連射速度で光の弾丸が撃ち出される。無理矢理体を捻らせてなんとかそのエネルギー弾をかわすが、背後から凄まじい爆発音が聞こえた。

あれをもうに喰らっていたらと思うと背筋がゾッとする。ツバメの

呼び声が無かつたら確実に着弾していたな。

「ツバメ！ 牽制してくれ！ 僕と簫で左右から攻める…！」

「了解！」

俺がそう指示するとツバメは新しく身に付けたアンロック・ギアの翼を左右に広げ、福音と同じエネルギー弾を撃ち放つ。福音はその攻撃を複雑な回避行動でかわし、最高速度で逃げ回る。

「 「 あああああああっ！ ！」 「

だが、福音の回避はツバメの蒼燕で限定され、先回りしていた俺達があ互いの刀を構え福音を斬りつけた。

「くつ！ 浅いか！？」

しかし、それが決定打とはならず、わずかに零落白夜がかすった程度であった。

「 「 a 」

甲高いマシンボイス。その刹那、ウイングスラスターはその砲門を全て開かれ、全方位に向けて一斉射撃された。

「 やるなっ！ だが、押し切る！ ！」

簫が光弾の雨を紙一重でかわし、迫撃をする。

コレで隙ができた。

「！」

けれど俺は福音とは真逆の、直下海面へと全速力でむかつた。

「一夏ーーー？」

「一夏くんーーー？」

二人共なぜそんな事をと言いたげに俺の名前を呼ぶ。

イグニッショーン・ブーストと零落白夜。その両方を最大出力で行い、一発の光弾に追いついてそれをかき消した。

「何をしているーーー？　せっかくのチャンスに　　」

「船がいるんだ！　海上は先生達が封鎖しているはずなのにーーー！」

「密獣船！？　こんな時にーーー！」

ツバメの一言であの船の正体を知る。けれど、だからといって見殺しにはできない。

キュウウウン…………。

俺の手の中で《雪片式型》の光の刃が消え、展開装甲が閉じる。

……つまり、エネルギー切れだ。

最大にして唯一のチャンスを失い、そして作戦の要もたつた今無くした。

「馬鹿者ーーー！　犯罪者などをかばって…………そんなやつらは

「！」

「第……！」

「ツ…………？」

「第、そんな……………そんな寂しい事を言つたな。力を手にしたら、弱いヤツのことが見えなくなるなんて……………どうしたんだよ、第。らしくない。全然らしくないぜ」

「わ、私、は…………」

明らかな動揺をその顔に浮かべ、それを隠すように手で覆う。その時に落とした刀が空中で光の粒子へと消えたのを見て、俺はギクリとした。

「（今のは、具現維持限界だ…………！　まずい…………！）」

具現維持限界コリカ・シキ・タクエンつまりそれは、エネルギー切れ。

そして今は、HS学園のアリーナではない。実戦だ。

「第いいいいい！！！」

刹那、福音はエネルギー切れを起こした第に砲口を向け、光弾を撃ち出す。

「ぐあああああっ…………！」

第をかばうよつにして抱きしめた瞬間。あの爆発の光弾が一斉に俺の背中に降り注いだ。

エネルギー・シールドで相殺しきれない程の衝撃が何発と続き、み
しめしと骨が擧げる軋みが聞こえた。同時に悲鳴を上げる筋肉、ア
ーマーが破壊され、熱波で肌が焼けていく。

だが、それも長くは続かなかつた。

「第！――夏くんを抱えて離脱！――引いて――」

エネルギー・フィールドを展開したツバメが俺と福音の間に入つて、
光弾を防いでくれていたのだ。

「一夏つ、一夏つ、一夏あつ――」

「う…………あ…………」

「天燕！――アンロック・ユニットを分離！―― 紅椿に装着させて
ここから離脱せろ！――」

ツバメがそう告げると天燕についていたアンロック・ユニットが
背中から離れ、紅椿の背中に取り付けられる。

「ツ、ツバメ！―― 何をする！？」

「…………」めんね。アタシが時間を稼ぐから………… 夏くんをお願
いね

「ま、待て！？」

「ツ！？」

グイッと何かが引っ張られるような感覚が体を襲つた。俺は力無
く、第にもたれかかつていい状態だったのでどうすることも出来な

い。しかし、簫は必死に俺を落とさないよう戸口をつけてながら何かを叫んでいる。

あれ？ 何も聞こえない？ 簫がこんなに口を動かしているのに何故かその声が俺には聞こえなかつた。そして、視界がどんどん暗くなってきて、俺は気を失つてしまつた。

「行つたか……」

オレは簫達がこの空域を離脱したことを確認するとエネルギー・フィールドを解き、福音の光弾をかわす。

『いいの？ アンロック・コニットを外しちゃって…………ボディに着いているヒルスドライバーだけだと高速戦闘は七〇%も落ちるよ？』

「いいよ。それでアイツ等が無事なら…………クソッ！ 何が甘いだよーー！」

一夏がやられたのを見てオレは激しい怒りがこみ上げて来る。オレは田の前にいる福音を睨みつけた。

簫を傷つけようとしたアイツが憎い。

一夏をあんな田に呑ませたアイツが憎い。

そして、何も出来なかつた自分に腹が立つ。

「敵機A、Bの離脱を確認。…………優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先に」

「させるかよ」

逃げようとする福音。機体を反転してスラスターを開こうとした時だった。

オレは、エルスドライブを稼働させ、瞬時に奴の背後に周り、手にした羽斬で斬り付けた。一夏の零落白天程の威力は無いが、今ので確実にダメージが入つた。その証拠に福音のスラスターから火花が散つている。

「テメエは許さねえ。オレの大切なもんを傷つけたんだ。落とし前をつけさせてもらひつ」

『ツ、ツバメ…………怖いよ』

「あア、久々にキレてんだ。ちょっと、我慢してろよ」

だが、頭の中はクールに…………でないと判断が鈍る。軽く深呼吸をして、気持ちを落ち着かせる。怒りは力に変えてぶつければいい。

「エルスドライブをフルで稼働させたらどれぐらい持つ?」

『全ての機能を回せば…………一十秒が限界。戦闘をすれば五秒あるか無いかだよ』

十分だ。それだけあれば倒せる。

「じゃ、行こうか」

『E L S D r i v e r S y s t e m F u l l D r i v e』

キュイイイインと甲高い機械音が背中から聞こえて来る。瞬間、背中から散布される粒子が天燕を包み、蒼く、強く、輝いた。

瞬間。音の壁を越えて、空気が弾けた音が鳴り響く。

ザンッ！

「ダメージレベルA。軽傷。戦闘持続に問題無し」

ザンッ！ ザンッ！

「ダメージレベルB。中傷。戦闘持続に困難と判断。至急りだ

」

ザンッ！ ザンッ！ ザンッ！ ザンッ！ ザンッ！ ザンッ！
ザンッ！ ザンッ！ ザンッ！ ザンッ！ ザンッ！ ザンッ！

「警告。ダメージレベルD。A I C 異常発生。飛行システム異常発生。シールドエネルギー105

凄まじい斬撃の嵐を喰らい、福音のIESアーマーは所々斬り傷が付けられていく。福音 자체何が起こっているのかわからないと言つ

た状態だつた。

「敵機の攻撃方法を検出。多方向からの高速斬撃によるもの……
対処方法を検討」

しかし、オレの攻撃は終わらない。フルドライブ状態には制限がある。だから、一気に決めさせてもらひう！」

「次で決める……！」

最後の一撃を決めようと、光速状態のまま福音に大振りの一太刀を浴びせよとした時だった。

ガンッ！！

「なっ！？」

福音は両手で羽斬のエネルギー刃で手を焼かれながら受け止めたのだった。そして、福音のスラスターが広がりエネルギーを凝縮させる。

オレはあまりの事に驚愕してしまい、一瞬判断が遅れた。素早く、羽斬を手放して距離を取つていれば問題は無かつたのに、それが出来なかつた。

「（ハイパーセンサーで捉えられない速度だぞ！？ なんで！？
…………まさか！？）

パターンが読まれた。別に光速での攻撃方法にパターンなど作つた覚えは無いが、どうやら無意識に作つてしまつたらしい。そして福音はそれを見破り、オレを捉えたのだつた。

そして、福音に捕まつたことでフルドライブ状態のエルスドライブが停止してしまう。

「ぐつ……しまつ

」

《ツバメ！—》

ビビビビビビビビン—！

至近距離で放たれる銀の鐘。それをかわす術はオレには無い。だから、放たれた光弾は全てオレに直撃し、爆散する。

「がはあつ…………」

《「ごめん……ツバメ……残り、のエネルギー使つても、これが限、界だよ》

「…………生きてる、だけでも…………感謝だよ

《「——めん……ね……》

最後に謝罪して天燕の言葉が聞こえなくなった。EVA事態は壊れてはいないが、損傷が酷く、機能が停止したのだろう。

からうじてシールドエネルギーが光弾の威力を弱めてくれたが、それでも全身に痛みが走る。天燕のEVAマーはボロボロに砕け、所々が海面へと落ちていった。オレの体は熱波に肌は焼かれ、肉が裂けて血が止まらない。

ものすごく痛い。

「ああ、これが痛みなんだ。誰かを守るつゝこんなに痛い想いをしなくちゃいけないのか。ちょっと嫌だな。でも、一夏はこの痛みを負つて幕を守つたんだよな……。

「ハハ……メチャメチャ、スゲエじやん」

一人で感心していると、福音は訳のわからないと小さく首を傾げた。そして、福音は捉えていたオレをゴミでも捨てるかのように空中で手を離す。もはや飛ぶ力も無く、オレは地球の重力に引っ張られるように下へ落ちていく。

「（ああ……守るとか言つといで、負けちや意味無いよな。おまけに）この高度で落ちたら確実に死ぬだろ……」

落卜中、意外にも冷静でいられた。

「（「めん、嘘。」「めん、一夏くん）」

そして、心の中で大切な仲間に謝罪する。

「（…………「めんね。幕）」

そこでオレの意識はテレビを消したみたいにブツツリと途切れた。

第一一十六話 力を求めた理由（前書き）

やつと書けた……。

更新速度が著しく落ちて来てます。
たぶん、これから週に一、二話が限界。

それでは、一十六話です。びいひー！

第一十六話 力を求めた理由

それは篠ノ之箒がまだ小学校一年の時だつた。

「（ああ……またか……）」

学校の放課後。教室で帰る支度をしていた箒は同じクラスの男子達が無意味に突っかかるのであった。

「おーい、男女～。今日は木刀持つてないのかよ～」

「…………竹刀だ」

「くつぐ、お前みたいな男女には武器がお似合いでよな～」

「…………」

「しゃべり方も変だもんな～」

確かに、他の女子と比べれば私の喋り方は変なのかもしれない。でも、別に気にする事はなかつた。家は道場であり、師範である父は私の憧れだつた。いつか、父のような強い人になりたいと思っている。

「やーいやーい、男女～」

「…………うせーなあ。てめーら暇なら帰れよ。それか手伝えよ、ああ?」

そんな時折、教室を真面目に掃除していた一人の男子が不機嫌気味に私に突っかかるつて来る男子にそう言い放つ。

同じ道場の門弟である織斑一夏だ。

「なんだよ織斑、お前こいつの味方かよ

「へつへつ、この男女が好きなのか？」

内心「はあ……」とため息を吐いた。何とも度し難いからかいだと思つたのだ。

「邪魔なんだよ、掃除の邪魔。どつか行けよ。うぜえ」

「くつ。まじめに掃除なんかしてよー、バツカジじゃねーのおわつ！？」

思わず私は突っかかるつて来る男子の胸ぐらを掴んでいた。

「まじめにすることの何がバカだ？　お前らのような輩よりははるかにマシだ」

「な、なんだよ……何ムキになつてんだよ。離せつ、離せよ」

胸ぐらを掴まれた男子は女である私の腕力にもどつする事も出来ず、ただもがく。これでも鍛えていたのだ。そちら辺の男子にも負けない自信はある。

だが、それとは別に残りの二人はまだニヤニヤと笑みを浮かべていた。

「あー、やつぱりそうなんだぜー。こいつら、夫婦なんだよ。しつてるんだぜ、オレ。お前ら朝からイチャイチャしてんるんだが」

「だよなー。この間なんか、こいつリボンしてたもんな！ 男女のくせによー。笑っちゃま うわあつ！」

突然だつた。胸ぐらを掴んでいた男子を突き放してくだらないことを言つてゐる男子に殴ろうかと考へた時だつた。その男子に大量の水が振りかかつたのだ。一瞬、何が何だかわからなかつた私は思わず胸ぐらを掴んでいた手を緩めてしまひ。

「あー、わりい。バケツの水変えようかと思つたらさあ～つまづいた」

水を掛けられたの男子の後ろには別の男子がいた。織斑同様に髪は短く、スポーツウェアに短パン、左肩にはスポーツバックといかも活発そうな奴だつた。

「なつ！ 何するんだよ！」

「おつ、十円見つけ」

「え？ わつ！」

水を掛けられた男子は怒りまかせにそいつに殴りかかるうとする。だが、そいつは床にある十円を拾おうと身を屈め、それをかわし、勢い余つた男子はそのまま床に転がつてしまつ。

「よ、よくもやつたなー！」

「ああ？ 勝手に転んだんだろ？」

「う、うるせー。」

そして今度は一人がかりでそいつに殴りかかるつとする男子。さすがに私と織斑もヤバいと思い、止めに入ろうとする。

だが、一歩踏み出した所で私達の脚は止まった。

「へへへへへッ！－！」

「があ……痛てえ、痛てえよ」

殴りかかろうとした男子二人は…………その…………自分の股間を押されて兔のように飛び跳ねていた。

事の経緯はこうだ。まず、スポーツウェアのそいつが床に転がっているモップを足で踏み、グリと回し、柄を立たせるとそれが襲い掛る男子の股間にヒット。しかも柄の先だ。そして、もう一人はそいつが体を一回転すると持っていたスポーツバックがその遠心力で勢いをつけ、それも股間にヒットしたのだ。

その場にいた織斑は何故か股間を押さえ、何もされていないのに痛そうな顔をしている。

「何故だらう？」

「うわっ…………痛そうだな。まあーわざとじゃないんだ。許せ

「て、てめえ……」

「じゃ、帰るわ」

そう言つてひそひつはその場を後にする。

「ま、待て！」

「ああ？」

そいつが教室を出てすぐ、私は不思議とそいつの後を追いかけて呼び止めていた。

「あ、その……すまなかつた」

「ああ？ なんの話だよ？ オレは何もしてないぜ？ アレは事故だ」

「いやいや、あんな偶然あるもんかよ」

いつの間にか織斑もその場にいた。どうやら、私と一緒に「コイツの事が気になつたらしい。

「まあーなんだつていいけど……」

「お、お前名前は？」

「ハア？ 聞いてどうするんだよ？」

「なんとなくだ」

「ハア……ツバメ。八雲ツバメだ」

短いため息の後、そいつが名乗ってくれた。

「やつちば?」

「え?」

「オレが名乗ったんだからそつちも教えてよ」

ああ、確かに。これは失態だったな。

「篠ノ之簾だ」

「しのの? なんか言いづらに名字だな」

「へ、ひぬわい!」

「んじゃ、簾でいいか?」

「い、いきなり呼び捨てにするな!?」

異性に名前を呼ばれて思わずドキッとしてしまった。驚きのあまりに声をあげてしまう。

その、名前で呼び合つのはもっと友好関係を築いてだな。何より、織斑以外の異性とそんなに話したことも無くて……。その織斑にすら名前で呼ばれた事も無いのに、いきなり名前を呼ばれると対応に困るのだ。

だが、次にツバメの一言で私と一緒にいた織斑はさらに驚いてしまつた。

「いいじゃねえか。女同士なんだし」

これが、私とツバメの初めての出会いであった。

そんな出会いから数日後。学校が終わっていつも通りに家の道場で修行を終えた私と織斑は搔いた汗を流すため、蛇口で顔を洗っていた。

「しかし、ビックリだよな。あのツバメって奴女だつたんだな」

「ああ……」

「でも、格好良かつたな！ 一人で複数をやつつけちまうんだから！」

織斑はショッショッと自分の拳を突き出し、ツバメの事を語る。それを見て、私は少しだけムッなった。

「お、お前はああ言う奴の方が……好きなのか？」

「へ？」

思わずしてしまった質問に織斑は訳のわからないと言つたような顔をしている。自分でもなんでこんな質問をしてしまったのかわからなかつた。

「うーん……好きって言つより、憧れるって感じだな。千冬姉妹たいでー！」

「や、そつか」

両手を組み、首を捻りながら答える織斑。その答えを聞いて私は内心ホッしてしまつた。

「別に悪く言つわけじゃないけど。男女つてツバメみたいな奴の事を言つのかな？ だつたら、篠ノ之の方がかわいく見えるな」

「なつー？ か、かわいいだとー！」

「ん？ ああ、かわいいと思つぜ？ だから前してたリボンしろよ。似合つてるから」

「ふ、ふん！ 私は誰の指図も受けない！」

不意打ちな織斑の言葉に思わず反発してしまつた。

「よしー、俺は帰るわ。またな、篠ノ之」

「だ

「うん？」

「私の名前は篠だ。いい加減、覚える。大体、この道場は父も母も姉も篠ノ之なのだから、紛らわしいだろう。次からは名前で呼べ。いいな」

「わかった。俺は割と、身近なやつの指示は受ける。
あ、一夏な」

「な、なに？」

「だから、名前だよ。織斑はふたりいるから、俺の事も一夏って呼べよな」

「う……む」

「わかつたか、篠」

「わ、わかつている！　い、い、一夏！　これでいいのだろ！？」

「おう、それでいいぜ。…………指図じゃなくて頼みなりひやんと聞いてくれるんだな」

「ふ、ふん！」

織斑……

一夏の名をしてたまらなく恥ずかしくなつてしまひ。自分の表情は見えないが、きっとなんとも言えない表情になつてしまっているのだろう。だから、一夏にそんな表情を見られなにように私はその場を後にした。

しかし、この胸の高鳴りは一体何なのだろうと思ひ。今まで感じたことの無い感情に私は戸惑い、悩んだ。

「Jの抱いた感情が恋だと知るのはまだ先のことであった。

「…………」

旅館の一室。壁の時計は四時前を指している。

ベッドで横たわる一夏は、もつ三時間以上も目覚めないままだった。

その傍らに控えている篠は、もうすっとこじりしきだなれでいる。リボンを失つて垂れた髪が、まるで今の気持ちまで表わしているようだった。

「作戦は失敗。以降、状況に変化があれば招集する。それまで各自現状待機しろ」

ツバメに無理矢理取り付けられたアンロック・ゴニットが私達を旅館まで運ぶと、アンロック・ゴニットは光の粒子となり消えていった。

すぐさま、ツバメの元へ戻ろうとするがそこで千冬ちゃんに引き留められ、そう告げられた。

「待ってください！　ツバメがっ！　ツバメがまだー！」

「八雲は……墜ちた」

「…………え？」

「お前達を逃がした後……福音の攻撃で海に墜ちた。現在教師部隊に向かわせて搜索している」

辛そうな顔をしながら千冬さんはさらに告げる。力強く握られた拳は爪が食い込んで血が出ていた。

そんな千冬さんを見ていたら私は何も考えられなくなってしまい、言われるまま指示に従つてしまつた。

「（私のせいだ…………）」

不意に思い出した一夏とツバメとの思い出。ツバメは初めて会つた頃に比べて随分女らしくなつた。一夏は相変わらず今と変わらない笑顔の絶えない奴だった。

だが、そんな二人は今はいない。目の前で寝ている一夏は、ただ力無く横たわつているだけだ。いつも側にいてくれたツバメもいない。私達を逃がして、どうなつてしまつたのだろうと考えてしまう。

「…………私が、しつかり、しない、から、二人共！――」

目から大粒の涙が流れた。

「私は…………どうして、いつも…………」

両手で顔を覆い隠し、自分の過ちを後悔する。

力を手に入れるとそれに流される。

それが使いたくて仕方なくなる。

わき起こる暴力への衝動を、どうしても抑えられなくなってしま
う。

「私はもう…………HSには…………」

一つの決心をつけようとした時。

『そんなの、ダメだよ』

不意に声が聞こえた気がした。

え？ つと伏せていた顔を上げるがここには私と一夏以外はいない。
い。そして、自分の視界がグニヤリと回った。始めは涙で視界が霞
んだと思ったが、違う。視界が回ると同時に強烈な眠気が私を襲つ
たのだった。

幕が田を覚ますとそこは一夏の寝ている部屋では無かつた。

田の前に広がる光景は室内などでは無く、夕陽が眩しく輝き、スキが一面を覆う平原。なぜここにいるのだろうと疑問に思つていると素早く、なにかが私の田の前を横切つた。

それを田で追うと、それは一羽の燕だつた。

燕は翼を休めること無く、延々と自分の周りを飛んでいる。まるで、付いて来いと言いたげに。私はその燕の案内で自分の足を進める。生い茂るスキをかき分け前へ前へと進んだ。

『……やつと来たか』

燕を追つてしまはらく進むといつの間にか田の前に一人の男が立つている。

その男を現すなら『侍』の一文字で十分だろ。衣服は時代劇で見るような着物であり、腰には一本の刀。顔は男が被つている笠の所為で見えない。だが、私はこの男を知つてゐるような気がした。

延々と飛んでいた燕はその男を見つけると近くまで飛び、その男の肩で翼を休める。

『すまぬ。お主だけが頼りだったのでな。……道は開けておいた。あやつの元への道だ。行け』

男がそつと翼を休めていた燕が再び空へ飛翔する。そして、私は飛んで行つた燕が見えなくなるまでそれを見ていた。燕が見えなくなると私は再び侍風の男へと視線を戻す。

「…………お前は誰だ？」

『…………』

「…………」

『なぜ、力を求めた?』

侍風の男に質問をするが、男は何も答えず、逆に質問をしてきた。その問いを聞いて、私は内心ズキつとなにか痛みのような物が走る。

『なぜ、力を求めた?』

再度、男が問う。

「…………置いてかれる気がした」

『なにに?』

「私の周りにある全てから

私の周りには力を持つている人が大勢いる。力の無い私は、そんな人達から守られてそれに甘えてしまっていた。だがそんな自分が許せなくて、自分が重荷になるのが嫌だった。

だから、力が欲しかった。

『だが、力を得てお前は何をした?』

「……友を。大切な人を傷つけた」

『そして、力を手放すと?』

「力を得ると、理性を抑えられなくなる。ただ、無意味な暴力になつてしまつ。だから、私に、力を持つ資格は無い……友を傷つけてしまう力など、いらない」

『哀れだな』

「…………」

『力を得て、それを極めようとすれば、成功と失敗が問われる』

そう言つて男は腰に差している刀を鞘ごと引き抜き、私に向かつて放り投げた。いきなりの事だったので私は慌てて、刀を落とさないようにそれを受け止める。

『それは人の命を落とすための武器だ。重かるう?』

真剣を握るのは初めてではない。その重さを理解し、私は毎日コレを振つている。だが、男から渡された刀はやたら重く感じられた。

『だが、それは人の命を救う重さでもある』

「え?」

『その重さを背負え。何に向かつてそれを振るうべきか、理解しろ』

「…………振るう相手を間違えたら?」

『お主の周りにはそれを導いてくれる者達がいるのではないか?』

その言葉を聞いて一夏やツバメの事を思い出す。いつも側にいてくれて、私の背中を押してくれた。そのおかげで私は一步一歩前へ進むことが出来た。

ああ、だんだんと思い出して来た。

私が本当に力を欲した理由を。

『もう一度問う。なぜ、力を欲する?』

そんな物、もう決まっている。

「誰ひとり欠ける事無く、大切な人達と共に歩む道を切り開くためだ」

力を得た仲間たちと同じ場所に立つには力が必要だった。だが、そんな事も忘れて、私は力に溺れた。暴力を振るい、内に潜むドス黒い感情を発散させることで満足してしまっていたのだ。

本筋は、道に迷ったら一緒に足を止め、一緒に悩み、一緒に答えを導き出すようにしたかった。

『良き答えだ。……願え、求めよ。されば我が力くれてやる』

男がやつて言つと、世界が眩い光に包まれた。

次に簾の意識が覚醒したのは一夏の寝ているベッドの上だった。

のそつともたれかかっていた上半身を起こし、周りを見る。なんの変哲もない旅館の一室。最後に時計を見てからさほど時間は経つていなかつたが、どうやら怪我した一夏を看病していたら寝てしまつたらしい。

「（…………なにか、夢でも見ていたような）」

とても大切なことを思い出させてくれた夢だつた気がする。だが、その内容が思い出せない。それを思い出そうとすると胸の内がもやもやとスッキリしない何かが渦巻く。

だが、ハツキリしたことはある。

左手首に巻かれた金と銀の鈴を見つめ、右手で優しくそれを握りしめた。

「…………一夏、ちょっと行って来る」

今度は寝ている一夏の手を握り、それだけを呟く。

先程までの後悔はもうない。胸に決意を抱き、私は部屋を後にした。

第一一十七話 再戦

ざあ…………。ざああん…………。

「（イリ）は…………？（）」

遠くから聞こえたる波の音に誘われるまま、織斑一夏はひとりかつかぬ砂浜の上を一人歩いていた。

足を進めるたび、沙へ、沙へと足下の白砂が澄んだ音を立てる。

足の裏に直接感じる砂の感触と熱氣。海から届く潮の匂こと波の音。

章。

そんな風景の中、俺はある物を見つけた。

それに心地よい涼風と、じつじつと照りつける太陽。

「（燕？）」

一羽の燕が俺の頭の上を飛んでいたのだ。だが、風を捉えていいのか、その飛び方には若干不安定であった。

そして、力ぬきた燕は白浜へと落ちる。

俺はその墜ちた燕の元へ駆け出し、白浜の熱氣せりあなごうにその燕を抱きかかえた。

「 」。

「 」

「の燕をびひつつかと考えてこる時。ふと、歌声が聞こえた。

とてもきれいで、とても元気な、その歌声。

俺はなんだか無性に氣になつて、声の方へと足を進める。

わくわく。

わくわく。

足の砂が軽快に鳴る。

「フ、ラ～ ハリカ」

少女は、そこへいた。

波打ち際、わずかにこま先を濡らしながら、その子は踊るよつこ
歌い、謡うたひみづこ踊る。

そのたびに揺れる白い髪。輝き、眩いほどの中の白色。

それと同時にワープースが、風に撫でられて時折ふわりと膨らんで
は舞つた。

「 ピヤ……」

その少女の歌声に反応して手の中にいた燕が動き出す。

必死に飛ぼうとする翼を広げる。

「飛びたいのか？」

言葉なんか通じる訳が無い。だけど、燕は俺の声に反応してこちらを見つめてくる。

「よしー！」

俺はぐっと腰を落として、燕を包む手を空に向かって振り上げた。その勢いで手の中にいた燕が空中に放り投げられる。

空中へ投げられた燕は重力に従い、砂浜に落ちそうになる。が、途中で風を捉え、空高く飛翔した。

飛翔した燕は少女の周りを旋回しながら飛ぶ。それに合わせて少女も歌う。

俺はただただぼんやりと田の前の光景を眺めていた。

「田標発見。照準固定。発射つーー！」

海上二一メートル。そこで静止していた『銀の福音』は、まる

で胎児のような格好でうずくまっている。

それを見つけた篝達はすかさず先制攻撃。ラウラの大型レール力ノン『ブリツツ』が火を吹いた。超音速で飛ぶ砲弾は福音の頭部に直撃、大爆発を起こす。

遠距離からの砲撃・狙撃に対する備えとして、四枚の物理シールドが左右と正面を守っていた。砲戦パッケージ『パンツァー・カノニア』を装備したシュヴァルツェア・レーゲンによる砲撃だった。

「本当にいたはね。なんで、あんたがアイツの居場所を知つてたのよ？」

「紅椿に奴の座標データが送られていた」

「ふうん……まあ、いきなりやる氣出してあーだこーだ指図するから何かと思えば」

「なんだ？ 嫌なら来なくともよかつたのだとぞ？」

「なつ！？ 誰が嫌だなんて言つたのよつ！？」

「おい！ 作戦中に私語をするな！ 来るぞつ！..」

砲撃を続けるラウラの後ろで篝と鈴が言い争つているとそのラウラが一人を怒鳴りつけた。鈴は怒鳴られたことでシコーンとなるが、篝は鋭い視線で福音の方を見る。

「（敵機接近まで…………四〇〇〇…………二〇〇〇
予想よりも速い…）」

ラウラの放つ超音速の砲弾をかわしながらこちらに向かつて来る福音。五〇〇〇あつた距離はアツと言つ間に一〇〇〇まで縮まり、ラウラへと迫つた。

「（だが、墜とされたあいつ等のためにもつ…）」

ラウラも福音を近づけさせないために福音に向けて砲撃を放つが、エネルギー弾によつて半数以上が撃ち落とされた。

「ちいっ！」

砲戦仕様はその反動相殺のために機動との両立が難しい。対して、機動力に特化した福音は三〇〇メートル地点からこちら急加速を行い、ラウラへと右手を伸ばした。

避けられない！

しかし、ラウラはニヤリと口元を歪めた。

福音の腕が目の前まで迫つて來た時。ラウラも福音に向かつて右腕を伸ばし、それと同時に福音の動きがピタリと止まる。

A I C。

シュヴァルツェア・レーゲンに備わつてゐる機能の一つ。その網に福音は捕まつてしまつたのだ。ラウラは福音が止まつたことを確認すると両肩に着いている一門の大型レールカノンを福音に向ける。

轟ツ！－と轟音を響かせ、福音は至近距離から砲撃を直撃し、吹き飛ばされた。

「セシリ亞！－」

ラウラの砲撃を喰らつた福音が吹き飛ばされると、突然上空から垂直に振り降りて来た機体によつて弾かれた。

それは青一色の機体 ブルー・ティアーズによるステルスマードからの強襲。

六機のビットは通常とは異なり、その全てがスカート状に腰部に接続されている。しかも、砲口は塞がれており、スラスターとして用いられている。

さらに手にしている大型BTレーザーライフル『スター・ダスト・シユーター』はその全長が一メートル以上もあり、ビットを機動力に回している分の火力を補つていた。強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備している。

「速い！？ でも

セシリ亞は、時速五〇〇キロを超える速度下での反応を補うため、バイザー状の超高感度ハイパーセンサー『ブリリアント・クリアランス』を頭部に装着している。そこから送られてくる情報を元に最高速からいきなり反転、福音を捉えて。

「ツバメの方がもつと速かつた！－」

引き金を引いた。スターダストから放たれるレーザーが福音に直撃する。

『敵機Bを確認。排除行動へと移る』

「遅いよ」

セシリアを脅威と感じた福音はそれを排除しようとセシリアに向かって飛ぶ。だが、今度は背後からシャルロットのショットガン二丁による接近射撃を背中に浴び、姿勢を崩した。だが、それも一瞬のことだ、すぐさまシャルロットの事を三機目の敵機と認識し、シリバー・ベルを放つ。

「おっと。悪いけど、この『ガーデン・カーテン』は、そのくらいじゃ落ちないよ」

リヴァイヴ専用防御パッケージは、実体とエネルギー・シールドの両方によって福音の弾雨を防ぐ。

「一夏やツバメには返しきれない程の借りがあつたんだ。それを返すまで負けないよ！！」

防御の間もシャルロットは得意の『ラピッドスイッチ高速切替』によつてアサルトカノンを呼び出し、タイミングを計つて反撃を開始する。

『…………優先順位を変更。現空域から離脱を最優先に』

ラウラ、セシリア、シャルロットらの三方向からの射撃に、福音はじわじわと消耗されていく。

そして、全方位にエネルギー弾を放つた福音は、次を瞬間に全スラスターを開いて強行突破を試みようとしていた。

「させるかあつ！！」

海面が膨れあがり、爆ぜる。

飛び出したのは真紅の機体『紅椿』と、その背中に乗った『甲龍』であった。

「離脱する前にたたき落とす！」

笄が叫び福音に斬りかかる。

その背中から飛び降りた鈴は、機能増幅パッケージ『崩山』。両肩の衝撃砲が開くのに合わせて、増設された二つの砲口がその姿を現し、計四門の衝撃砲が一斉に火を噴いた。

『！…』

「逃がさない！ 親友を！ 大切な人を傷つけたあなたの罪は重いんだからね！…」

肉薄していた紅椿が瞬時に離脱し、その後ろから衝撃砲による弾丸が一斉に降り注ぐ。しかしそれはいつもの不可視の弾丸ではなく、赤い炎を纏っていた。しかも、福音に勝るとも劣らない弾雨。

そのいくつかが福音に直撃する。

「やりましたの！…？」

「まだよ！ くつ！ なんだってあんなに堅いのよ！…？」

拡散衝撃砲を直撃してもなんお、福音は止まらない。

両腕を最優いっぷぱいに広げ、それと一緒に広がった翼から眩まばゆい光が爆ぜ、エネルギー弾の一斉射撃が始まった。

「くつ……」

「第！ 懇の後ろに！」

前回の失敗をふまえて、第の紅椿は機能限定状態にある。展開装甲を多様したことから起きたエネルギー切れをふせぐため、現在は防御時にも自発作動しないように設定されている。

もちろん、そう設定し直したのは、防御をシャルロットに任せられるからだ。集団戦闘の利点を生かした役割分担。

「それにしても…………これはちょっと、きついね」

防御専用のパッケージであっても、福音の異常な連射を立て続けに受ける事はやはり危うかつた。

「ラウラー・セシリア！ お願い！」

「言わざとも……」

「お任せになつて！」

後退したシャルロットの代わりに左右からラウラとセシリアが射撃を開始する。

「足が止まればこつちのもんよ！」

そして直下から鈴の突撃。双天牙月による斬撃のあと、至近距離からの拡散衝撃砲を浴びせた。

狙いは、頭部に接続されたマルチスラスター『銀の鐘』シルバー・ベル。

「もりつたあああつ……」

福音のエネルギー弾を浴びながら、しかし鈴の斬撃は止まらない。同じく衝撃砲の弾雨を降らせ、互いに深いダメージを受けながら、ついにその斬撃が福音の片翼を奪つた。

「はつ、はつ……！　どうよ　ぐつ！？」

片翼になりながらも、それでも福音は崩した体制をすぐに立て直し、鈴の腕へと回し蹴りを叩き込む。蹴りを受けた鈴は一撃で腕部アーマーを破壊され、海に墜ちる。

「鈴！　おのれっ　！！」

篝は両手に持った刀で福音に斬り掛つた。

「（獲つた　――）」

そう思つた刹那、福音は信じられないことに左右両方の刃を手の平で握りしめる。

刀身から放出されるエネルギーに装甲が焼き切れるが構いなしに福音は両腕を最大にまで広げる。

刀に引っ張られ、篝が両手を広げた無防備な状態を晒す。そして

そこに、残つたもう一つの翼が砲口を開放して待っていた。

「第一、武器を捨てて緊急回避をしやー。」

しかし、簾は武器を手放さない。

「（…………）」引いて、何のための…………）」

エネルギー弾がチャージされ、光が溢れる。そして、それは一斉に放たれた。

「（何のための力かっ！…）」

エネルギー弾が触れる寸前に、ぐるんと紅椿は一回転した。その瞬間、爪先の展開装甲が簾の意志に答えるように開き、エネルギー刃を発生させる。

「たあああああっ！…」

かかと落としのような格好でエネルギー刃の斬撃が決まる。ついに両方の翼を失った福音は、崩れるように海面へと墜ちていった。

「はっ、はっ、はっ……！」

「無事か！？」

珍しくラウラの慌てた声を聞きながら、簾は乱れた呼吸をゆっくりと落ち着けていく。

「私は 大丈夫だ。それより福音は 」

「私たちの勝ちだ」と誰かが言おうとしたその瞬間、海面が強烈な光の珠によつて吹き飛んだ・

「！？」

球状に蒸発した海はまるでそこだけ時間が止まつてゐるかのよう
にへこんだままだつた

その中心、青い雷を纏つた『銀の福音』が自らを抱くかのよつて
元氣くまつてゐる。

「これは…………！？ 一体、何が起きているんだ…………？」

「！？ まあい！ これは 『第一形態移行』だ！」

ラウラが叫んだ瞬間、まるでその声に反応したかのよつて福音が
顔を向けた。

『キアアアアア…………！』

まるで獣の咆哮のよつな声を発し、福音は篝たちに襲いかかつた。

「なにつ！？」

あまりに速いその動きに反応できず、ラウラは足を掴まれてしま
う。

そして切断された頭部から、ゅうくつ、ゅうくつと、まれで蝶が
サナギから孵化かえるかのように

エネルギーの翼が生えた。

「ラウラを離せえっ！」

シャルロットはすぐさま武装を切り替えて接近ブレードへと持ち替え、突撃する。

けれどその刃は空いた方の手によつて受け止められてしまう。

「よせ！ 逃げろ！ こいつは 」

ラウラのその言葉は最後まで続かず、福音のエネルギーの翼に抱かれる。

刹那、あのエネルギー弾丸を零距離で食らい、全身をズタズタにされてラウラは海に墜ちた。

「ラウラー、よくもひ……！」

ブレードを捨てて、シャルロットはショットガンをコールする。福音の顔面へと銃口を向けて、引き金を引いた。

「アンド……」

しかし、その爆音はショットガンによる物では無かつた。

福音の胸部、腹部、背部、装甲がまるで卵の殻のようにひび割れ、小型のエネルギーの翼が生えてくる。シャルロットはその迎撃によちショットガンを吹き飛ばされて、一緒に体も吹き飛ばされてしまった。

「な、何ですの！？　この性能…………軍用とはいえ、あまりに異常な」

再び高機動による射撃を行おうとしていたセシリ亞。だが、その眼前に福音が迫る。イグニッショーン・ブーストに寄る加速。それも、両手両足の計四か所同時着火による爆発加速だった。

「ぐつーー？」

長大な銃は接近されると弱い。すかさず距離を置いて銃口を上げようとするが、その砲身を真横に蹴られてしまつ。

そして、次の瞬間には両翼からの一斉射撃。反撃らしい反撃もできず、まともに攻撃を受けたセシリ亞は蒼海へと沈められた。

「私の仲間を　よくもー」

急加速によつて接近した筈は、続けざまに斬撃を放ち続ける。展開装甲を局所的に用了いたアクロバットで敵機の攻撃を回避、それと同時に不安定な格好からの斬撃をブーストで加速させる。

「つおおおおおつーー！」

互いに回避と攻撃を繰り返しながらの格闘戦。だが、そんな格闘戦も紅椿がわずかに福音を押し始める。

「（いける！　これならっ）」

キュウウウウン…………。

「なつーーまた、エネルギー切れだとー?」

ぐあつーー

その隙を見逃さず、福音の右腕が篝の首をしめる。

そして、やつべつじかの翼が篝を包みこんでいった。

「(すまない、一夏.....シバメ.....ー)」

ぞお、ぞおん.....。

ぞれぞれ波の音を聴きながら、俺は飽きもせず女の手と燕を眺めていた。

その歌は、その踊りは、なぜだか俺をひびく懐かしい気持ちでいた。

「(.....あれ?)」

といふが、ふと気がつくと少女の歌は終わっていた。

少女の周りを飛んでいた燕の姿も見あたらぬ。

踊りもやめて、少女はじこむと窓を見つめっこる。

俺は不思議と思つて、少女の隣へと向かつた。

「ああ、ああ、と

波打ち際までやつてきた俺を、涼しい水の調べが濡らす。

「どうかしたのか？」

声をかけるが、少女はまだじいっと空を見つめたまま動かない。

俺もなんとなく空を眺めると、ふと少女の声が耳に届いた。

「呼んでる…………行かなきや」

「え？」

隣に視線を戻すと、もうそこに少女の姿はなかつた。

あれ？

きょろきょろと左右を見るが、もう人影は見あたらない。歌も聞こえない。

「うーん…………」

俺は仕方なく戻りうつと体を反転せざる。

すると 背中に声を投げかけられた。

「力を欲しますか…………？」

「え……」

急いで振り向くと、波の中 膝下までを海に沈めた女性が立っていた。

その姿は白く輝く甲冑を身に纏つた騎士さながらの格好だった。

よく見れば、そんな彼女の肩に先程の燕がとまっている。

「力を欲しますか……何のために……」

「ん？　んー…………難しい」と訊くなあ…………そうだな。友達をいや、仲間を守るためかな

「仲間を……」

「仲間をな。なんていうか、世の中って結構色々戦わないといけないだろ？　単純な腕力だけじゃなくて、色んなことだぞ」

俺は、いまいち自分の中でもまとまっていないことなのに、妙に饒舌に喋っていた。

話しながら、「ああ、俺つてそういう風ついていたのか」と自分に驚きつつ、言葉は続していく。

「そういうときに、ほら、不条理なことつてあるだろ。道理のない暴力つて結構多いぜ。そういうのから、できるだけ仲間を助けたいと思ひ。この世界で一緒に戦う　仲間を」

「 もう……」

「 だったら行かなきやね」

「 えっ？」

振り向くと、田のワンピースの女の子が立っていた。

人懐っこい笑み。無邪氣そうな顔でじいっと一夏を見つめている。

「 その子について行つて。あなたが行くべき所に案内してくれる」
女の子がそう言つと燕が再び空を飛び、俺の頭の上を旋回していく。

「 ああ」

俺がうなずくと、いきなり変化が訪れた。

「 な、なんだ？」

空が、世界が、眩いほどに輝きを放ちはじめる。

その真っ白な光に抱かれて、田の前の光景が徐々に遠くぼやけていく。

夢の終わり、なんて言葉がふいに浮かんだ。

「 (ああ、そうこえば……) 」

あの女性は、誰かに似ていた。

白い 騎士の女性。

「どうだ？ ここは？」

八雲ツバメは教会の礼拝堂の中にいた。礼拝堂には長椅子が均等に左右に並べられ、奥には巨大な十字架とその下には大きなパイプオルガンがある。そして、自分以外の人間はここにはいない。

つい先程まで銀の福音と戦い敗れたオレは大怪我を負いながら海に墜ちてしまったはずだ。だが、体には傷らしい傷は無く、いつの間にかIS学園の制服を身に纏っている。

ああ、自分は死んだのか。と一瞬考えたがどうやらそうではない。それは、オレはこの場所を知っているからだ。正確にはここと似た場所を知っている。

「……天燕の世界？」

天燕の世界。

ISコア内にある意思なような物が作り出す精神世界。と言つた

所か。オレは依然これに似たよつた体験をしたことがある。

初めて天燕を手にした日。オレは「」の世界に呼ばれた。いや、あの時は無理矢理連れて来られたんだっけか？まあいいや。

「おーい！ 天燕～！ ビニだー？」

とりあえず、「」が天燕の世界であるなら当の本人が「」にいるはず。

「ぐすり…… ぐすん……」

だが、天燕を探そうとした直後。ビニからか女の子の泣き声が聞こえてきた。

「どうした？」

泣き声がする方に行つてみると、礼拝堂に置かれている長椅子の最前列で女の子が泣いていた。

腰の辺りまで伸びた銀色の長髪。フリルのついた白いドレス。どこかのお嬢様をイメージさせる女の子。オレはそんな女の子の隣に座り、そつと背中を擦つた。

『あ、ありがと～…… お姉ちゃんは誰？』

「アタシはハ雲ツバメ。君は？」

女の子はまだ涙目でしゃつくり交じりの声だったが、だんだんと落ち着きを取り戻し、自分の名前を口にする。

≪

福音。銀の福音》

第一十八話 鐘の音の導き

礼拝堂。そこでオレは銀の福音と名乗る少女と出会った。

福音はただ泣いている。

泣きながら、福音は謝罪している。

『「めんなさい」……「めんなさい」……「めんなさい』

オレはそんな福音を見て、少しだけ辛い気持になった。

『「めんなさい」……「めんなさい」……「めんなさい』

一夏がやられた時。オレは自分の怒りをこの子にぶつけていたのだと思つと心が痛む。

『どうしても、止められなかつたの……戦いたくないのに、あの
人を守りたかつただけなのに、体が言つことを利かなかつた……』

この子は何も悪くなかった。この子も被害を受けていたのだ。

抑えられない何かによつて自身を蝕まれ、苦しんでいた。

ただひたすらに自分が見る脅威から何かを守りつとしていただけ
なのだ。

「………… もうこころよ」

オレはそっと福音の体を包み込む。

「君のしたことは許されたことじゃない。でも、君は必死に自分を止めようとしたんだろ？　君の大切な人を守ろうとしたんだろ？　なら、オレは君のこと許すよ」

《う、う、うわああああああああああああああん！…》

礼拝堂内では福音の泣き声だけが木霊する。

罪悪感に押しつぶされ、泣いたのか、罪を許された事が嬉しかったのか、オレにはわからない。

わかるのはコイツにも守る物があって、自分なりにそれを守りつとしていくだけだったと言う事だけ。

そんな奴をオレはせめる事ができなくて、福音が泣きやむまでオレは彼女を抱きしめた。

私は悪意という間に呑まれそうになつた。

必死に、迫りくる悪意から逃げ、私はここへ逃げ込んだ。

そらからはただ泣いていた。

私はあの人を見捨ててここへ逃げ込んだ。

私を止めに来た人達を傷つけてしまった。

止めようにも言つことの利かない体。

私は、なにも出来なくて、ただ泣いていた。

《う、ぐすつ……》

「落ち着いたか？」

だが、そんな時に私はこの八雲ヅバメと言う人間に出会つた。先程の戦いで彼女がどれだけ怒っていたかを知っている。許してもらおうとは思わない。でも、私は謝つた。

私が無力であつたこと。

あなたとその友達を傷つけてしまつたこと。

だがあれつことが、ツバメと言つ少女は私の事を許してくれた。

「よしよし。いい子だ」

私の頭を触れる、ツバメの手。

抱きしめた時もそうだが、これが人の温もりといつものだろうか。

『くすり……ツバメはなんだが男みたいだね』

その優しさが、温かくて、心地よくて、何かから解き放たれた気がした。

「わりいな。普段は猫かぶつてるんだ」

『猫つてかぶれるの?』

不思議なことを言ひ。

だが、私の質問にツバメは少々困った顔をしていた。

「さて、君がここに来た理由を教えてくれないか?」

『ううん。ツバメがここに来たんだよ』

「え?」

『ここは私の世界。残った自我でここを作ったんだけど……閉じ込められちゃったの』

「ああ……なるほど、だからか」

『え？』

「似たような所は知ってるんだけど……なんか、違和感みたいなのが感じたから」

ISと心を通わせられる。と言つことなのだろうか？
だが、この人ならもしくは……

『お願い！ ツバメ！…』

「ん？」

『今私は誰にも止められない。私を止めて！ あの人は助けて！』

ツバメなら私の事を止めて、あの人に救ってくれると思った。

「あの人って？」

『ナターシャ・ファイルズ。私の操縦者で、私の大切なパートナー』

「お前はどうするんだ？」

『…………私はここから出られない。出てしまつたら、この体は完全に蝕まれ、暴走を抑えられなくなつてしまつ。もつと酷い事をツバメ達にしてしまう。だから、なにも出来ない私の代わりに』

『いやだ』

え？

「それはオレがする事じゃない」

「なんで、そんな事をいつの？ デリして、助けてくれないの？」

「それはお前がすることだよ」

《え？》

「何かを守ること」は人に任せせる物じゃない。自分で守って、やつて
意味がある物になるんだよ」

《意味がある物？》

「福音はこのまま」でジッとしてられる？」

「そんなもの……出来るなら、自分であの人を助けたいよ。

《でも、出来ないよ……私にはそんな事……もつ、自分で飛ぶ
ことも出来ないんだよ？》

「だったら、オレ達がお前の翼になつてやる」

ツバメは私の手を握つて、礼拝堂の扉へと歩き出す。

『な、なにするの…?』

「何つて? ここから出るんだよ」

『そ、そんなのダメだよ! 今、ここを解放したらアレに飲み込まれる…!』

「なあ、福音…………オレを、オレ達を信じてくれないか?」

『……信じる?』

「そうだ。…………飛ぶために翼が必要なら一緒に飛んでやる。勇気が出ないなら手を繋いで一緒にいてやる。助けたい人がいるなら、一緒に助けてやる。人もISOも一人で出来ないことを一緒にやれば何だってできる」

握られた手は、優しく私の手を包み込んでいく。
だが、ツバメの強い意志はその手を伝わって私の中に流れ込んで来る。

「だから、一緒に行こう!」

ああ、また泣きそうになる。

だけど、今度は後悔して泣くのではない。

嬉しくて、たまらなく嬉しくなって涙が流れてしまう。

『うん!』

私の返事にツバメは笑ってくれた。そして、礼拝堂の扉を開き、

外へと飛び出す。

大きく鐘の音が鳴り響き、私達は暗闇へと身を投げる。

「ぐっ、うつ
！」

ぎつぎつと締め上げられ、圧迫された喉から苦しげな声が漏れる
箒。

第一形態移行した福音によつて箒以外のメンバーは撃墜。
最後まで耐えた箒はエネルギー切れによつて捕まつてしまつたの
だ。

福音の手は硬く箒の首を掴んで離さず、さらにはエネルギー状へ
と進化した『銀の鐘』が紅椿の全身を包んでいた。

(これまでか 情けない)

ぼうつと光の翼が輝きを増していく。

一斉射撃への秒読みがはじまる中、箒の頭の中には昔の笑い合つ
一夏とツバメの姿。

会いたい。

一夏に、会いたい。

ツバメに、会いたい。

すぐに会いたい。今会いたい。

ああ、ああ、会いたい。

「いち、か……ツバ……メ……」

知らず知らず、その口からは一夏とツバメの名前を呼ぶ声が出ていた。

「一夏……ツバメ……」

さらに輝きを増す翼に、篠は覚悟を決めてまぶたを閉じる。

『一?』

突然、福音は篠を掴んでいた手を離す。

いきなりの出来事に混乱している簞が、瞳を開けた時に見たのは
強力な荷電粒子砲による狙撃。それを受け福音の体は吹き飛んで
いた。

「（な、何が起きて　　）」

戸惑う簞の耳に届いたのは、さつきからずつと願つて止まない
声だった。

「俺の仲間は、誰一人としてやらせねえ！」

簞の視線には、白く、輝きを放つその機体がある。
そして、その横には

「あ、ああ…………一夏！　ツバメ！」

夜空で蒼い装甲は影となり、月明かりで銀の装甲がより一層強い輝きを放つ機体がいる。

白式第一形態・『雪羅』を纏つた一夏と、

天燕第一形態・『斑鳩』を纏つたツバメ。

私が一番会いたかった一人がそこにいたのだ。

第一十九話 雪羅と斑鳩

幕が福音にやられそうになつて、咄嗟に撃つた荷電粒子砲が福音を吹き飛ばした。

「（…………よかつた。射撃の練習をしてて）」

実は内心ドキドキの俺である。これで幕を巻き込んでしまつたらどうしようかと思った。まあ、結果オーライって事で……

「結果オーライじゃない！？」

「ドガッ！！ と隣にいるツバメの拳が俺の脳天を直撃した。つか、心の声が読まれた？」

「イッテエー…………何するんですか？ ツバメさん」

「射線上にアタシがいたどうが！！ アタシ」と殺す気か！？』

「いや、それは、その…………幕がやられそうになつていて…………思わず…………」

「思わずで殺されかけたの！？ バカじゃないの！？ ああ、バカでしたね！？ 死にかけてもバカは治らないんですね！？」

「わーわー！ “めんなさい”…………本当に“めんなさい”って……！」

「う…………酷い言われようだ。一応、ツバメには警告したんだけどな。警告から狙撃までの時間差が短かつたか。こりや、いかん。

俺、反省。

「はあああ～…………もついいや。ホラ、簫の所に行つてあげなよ。
アタシは他の階を拾つて来るから」

「ああ、ごめん。本当にごめん」

「い・い・か・ら・行・け！」

ゲシツ！ と今度は俺のケツを蹴るツバメ。
よほど御立腹なのか蹴られたケツはかなり痛い。

う～ん、なんて格好悪いんだ。せっかく、かつこよく復活劇を決
めたと言つのに……。

「い、一夏？」

「ん？ ああ、簫。大丈夫か？」

「あ、ああ

「いめん。待たせたな」

俺達のやり取りを見ていた簫はキヨトンとした顔をしている。

俺がそう言つと呆気に取られていた表情が変わり、簫は今にも泣
きそうな顔になる。

「ひう…………よかつ…………よかつた…………本当に…………

「なんだよ、泣いてるのか?」

「な、泣いてなどいないつー。」

ぐじぐじと田元をぬぐつ簞で、俺は優しく頭を撫でた。

「心配かけたな。もう大丈夫だ」

「し、心配してなどい……」

じつも強がりばかりが出でへる様子の簞らしき。俺は頭を撫でながら、ポニーtailではなこの髪型がやつぱり気になつた。

「ちゅうじょかつたかもな。これ、せぬみ

「え?」

俺は持つて來ていたものを簞に渡す。

「う、リボン……?」

「誕生日、おめでとうな」

「あ……」

七月七日。今日は篠の誕生日。

「うーん……本当はもつと僕の利いたやつでも送らうかと思つたんだけど、何を送つていいかわからなくて。せつかべだし、それ使えよ」

「あ、ああ……」

「じゃあ、行つて来る。まだ、終わつてないからな」

「一夏ー。」

「ん?」

俺が篠に誕生日プレゼントを渡し、再び福音の元へと飛ぼうとした時だつた。

篠が俺を呼び止める。

「あ、ありがとウ……大事にする」

若干恥ずかしいそうに俯きながら篠がそう言つ。

そんな篠の仕草を見て一瞬ドキッとしてしまつた。普段強気な分、素直な一面を見ると可愛く見えてしまつたのだ。

「終わつたら、誕生日会でもやうづせ～、ツバメが色々用意してい
るみたいだし」

「ああ」

そして、俺は再び福音と向き合ひ、再び戦場へと舞い戻る。

一夏を篝の元へ向かわせたオレはヤツに墜とされた鈴達の元へ向かつた。

「皆さん、大丈夫?」

「つ、ツバメ?」

鈴達はオレの姿を見ると、まるで幽霊でも見ていくような表情をしている。

「アンタ! 大丈夫なの! ? 福音に墜とされたって……」

「んー? 墜とされたけど…………アタシは」の通りピンポンしているよ

とりあず、自分は元気だとピースしてアピールする。

「ひつ…………ふええん! バカア! どれだけ心配したと思つて

いるのよ……」「

そして、そんなオレを見て、鈴が抱きついて来た。
泣きながらオレの事をポカポカと叩く鈴。

甲龍の装甲を纏っている所為で地味にそれが痛い。
でも、それよりも仲間にこんなに心配を掛けてしまった方がもつ
と痛く感じられた。

「じめんね。心配してくれてありがとう」

「でも、本当に良かつたですわ」

セシリアも田元に溜まった涙を拭いながら近づいてくる。

「しかし、その姿は……」

ラウラはオレが纏う斑鳩を見て、不思議そうな顔をしていた。

「ああ、天燕が第一形態になつたの」

「だが、その姿は……福音そのものだぞ」

「元々、天燕と福音は同系統の設計プランで作られた機体だからね。
形が似てもしょうがない」

ラウラの言う通り、天燕の姿は今の福音と酷似していた。
本当の理由はたぶん、天燕の中にある福音の意思の所為だらう。

「いや、詳しい話は後にしよう。それより今は……」

他の皆も揃い、ラウカの一言でオレ達はヤツの方を見る。

現在、ヤツは一夏と戦っている。一夏は第一形態となつた雪羅のシールドモードで福音のエネルギー弾を無効化している。

「すうい、零落白夜のシールドで攻撃を無効化している……」

シャルロットは一夏の戦いぶりを見てそう呟いた。
実弾攻撃を持たない福音にとって、零落白夜のシールドほど厄介な物はない。戦況は一夏の方が有利だった。

『ツバメ!! 福音の全方位攻撃がくる!!』

「了解。任せて!」

福音はエネルギーの翼を回転させながら一斉に開き、全方位に対して嵐のようなエネルギーの弾雨を振らせる。

『 斑鳩、『銀翼』展開』

ボウツと排出していたエルスの粒子が固まる。

福音と同じエネルギーの翼へと。

現れた銀翼で皆を覆い、弾雨から皆を守る。

「い、これは…………」

「福音と同じ…………」

「でも……」

「…………うん、綺麗」

弾雨が止むとオレは広げた銀翼を元に戻した。

「じゃ、先に行ってるね」

それだけを言い、銀翼を羽ばたかせ、暴走する福音の元へと飛んで行く。

「（一夏が駆け付けてくれた……ツバメが無事でいてくれた！）」

篝は心中で喜んだ。それはもう、嬉しさを飛び越えてしまつ程に。

心が躍動する。熱を持つて、跳ねる。

そして、戦う一夏とツバメの姿を見て、何よりも強く願った。

「（私は、ともに戦いたい。あの背中を守りたい！）」

強く、強く願つた。

ならば、力を貸そつ。

「え？」

不意に聞こえて来た声。それと同時に紅椿の展開装甲から赤い光が混じつて黄金の粒子が溢れだす。

「これは……！？」

ハイパーセンサーからの情報で、機体のエネルギーが急激に回復していく。

『『絢爛舞踏』、発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築……完了』

項目に書かれているのは单一仕様能力の文字。

「（まだ、戦えるのだな？ ならば ）」

一夏から渡されたリボンで髪を縛り、気を引き締めて福音を見る。

「ならば、行くぞ！ 紅椿！」

赤い光に黄金の輝きを得た真紅の機体は、空へ舞つた。

『キヤアアアアアアアアアッ！！』

獣のような雄叫びをあげる暴走した福音だったI.S.。自分の光翼を最大に広げ、接近するオレをその翼で包み込もうとする。

「おつと、そうはいかないよ」

瞬時にオレは垂直に上昇してヤツの攻撃範囲から離脱。そして、奴を見下ろしながら自分の背中に生えた銀翼を左右に広げる。

『『銀の星光』^{シルバー・ショナル} 最大稼働』

広がった銀翼から複数の光球が形成され、一斉に解放された。

銀の鐘の発展型『銀の星光』。

計三十六門ある砲口から光の線がヤツに襲い掛った。

『！？』

だが、ヤツは被弾しながらもオレの攻撃を回避する。が、それでいい。

「ぜりああああつーーー！」

零落白夜の光刃で斬りかかる一夏。

由式・雪羅のダブルイグニッショーン・ブーストで突撃した一夏はヤツの光翼の片方を切り裂く。だが、もう片方の光翼を切り裂くのは至難の業であり、うまく行かない。一夏を危険と判断したヤツは一気に一夏から距離を取り、エネルギー弾を放つ。

「ぐつ！？ クソ！？」

シールドを展開させてヤツの攻撃を防ぐが、何故か苦しそうな表情をする。どうやら、活動限界が近づいているようだ。

「一夏！」

「第ー？ お前、ダメージは　　」

「大丈夫だ！ それよりも、これを受け取れ！－」

一夏の元へやってきた第が一夏の手に触れる。

「な、なんだ……？ エネルギーが回復！？ 第、これは

「今は考えるな！ それよりも、今は　　」

「だったら皆で協力しましょうじゃないですか」

「「つ、ツバメ！？」

オレが一人に声を掛けると何故か驚かれた。

「あ、ああ、本當にお前なんだな！ 幽靈とかじゃないんだな！」

そして篝は、オレの姿を見るやいなや抱きついて来た。
声を殺して泣く篝をオレは篝の頭を撫でる。

「ひどいな～。ツバメさんは親友を置いて死んだりしませんよ～」

「う、うう……」

「……心配させじ、ゴメンね。でも、今は　　」

オレは銀翼を広げて篝と一夏を覆う。
瞬間、オレ達にエネルギーの弾雨が降り注いだ。

「感動の再会に水を差すヤツにはお仕置きが必要だね！」

『斑鳩、天ノ羽斬を展開』

ハイパーセンサーがその情報を表示するとオレの手に一本の光剣
が現れる。剣は質量化されていない。エルスのエネルギーだけで生
成された剣。

「行こ～！」

「ああ！」

天ノ羽斬を構え、ヤツの元へ飛び出す。それに続いて箒も展開装甲を開放し、後に続く。

「「やああああああつ……」」

天燕と紅椿の一刃が並び、左右から一斬の斬撃を浴びせる。

「「一夏つ……」」

「つおおおおおおつ……」

オレと箒の攻撃を受け、ヤツが体勢を崩した所で今度は一夏が零落白夜の刃を突き立てながら突進した。

「おおおおおつ……」

白式の全ブースターを最大出力まで上げ、ヤツは零落白夜の剣先を受けながらその勢いに押された。最後の抵抗なのか、ヤツは一夏の首へと手を伸ばす。一夏の首にその手が触れようとしたところで

やつとその動きを止めた。

「はあつ、はあつ、はあつ………………」

アーマーを失い、スーツだけの状態になつた操縦者が海へと墜ちていく。

「しまつ

「？」

「……………。」
「……………。」

そんな墜ちてこく操縦者をオレは海面接触、ギリ、ギリでキャッチした。

「終わったな

「ああ……………。」

「わあ～帰るー。」

「ひつじて、オレ達の、こく、こく、戦いは終わった。

皆がお互この無事を確かめ、オレ達は帰るべき場所へと帰ることにした。

第三十話 本郷の坂越り（前書き）

やつと出来た三十話…………。

お待たせしました。

第三十話 本当の気持ち

カラソ、コロン、カラソ、コロン

暴走して福音と戦いを終え、オレ達は無事に旅館へと戻ってきた。

だが、待っていたのは織斑先生によるお説教。

長い間、他の生徒が見ている中で七人仲良く正座をさせられた。やっと解放されたのが午後の9時。そして、それからしばらくしてオレは旅館を抜け出して一人浜辺へと続く道を歩いていた。

海から流れてくる潮の匂いが鼻を刺激し、夜風が心地よかつた。

『ツバメ？ 元気無い？』

「そんなことないよ。ただの気分転換だ」

『よく考えたらツバメが怒られる理由つて無かつたよね？』

「確かに」

頭の中に天燕の声が聞こえてくる。天燕が一次移行してからE.Sを展開しなくともこうしてコンタクトを取れるようになつた訳なのだが、他人にはこの声が聞こえるはずも無く、油断していると独り言を言つている痛いヤツだと思われてしまう。

そして、よくよく考えればオレは織斑先生からお叱りを受ける理由が無かつたことに気付く。なにせ、オレは待機命令を受けていない。墜とされたとは言え、オレはずつと継戦状態だった訳なんだが、怒る織斑先生が怖かつたので甘んじてお説教を受けてしまった。

『あ、あの！ 私もここにいていいの？』

「んー？」

そして、今度は福音の声が聞こえてくる。

「今あのボディに戻してもまた暴走する可能性があるからな……しばらくは、天燕の中についてもらひつよ」

『で、でもー』

「早くあの人の元へ戻りたいのはわかるけど。今戻つて、福音がまた暴走でもしたら大変なことになるんだよ？」

『あう……』

「大丈夫だよ。アメリカはなんだかんだで優秀だ。すぐに戻してあげるから」

『うん……』

若干寂しそうに返事をする福音。

あれから福音の意思も天燕の内に潜むようにしている。

まあ、理由は福音に言つた通り、再度暴走しないための処置である。

ハッキングにより福音を蝕んでいたウイルスのような物はIS「アにある意思を暴走させる物。ならば、暴走させないように」と一時的に意思だけをこちらに避難させたのだ。後はアメリカ・イスラエルの共同開発チームが完全にウイルスを取り除けば万事解決。

「でも、つるむさく言われそうだな……」

ちなみに、こんな処置をオレはアメリカ側には何も言つてない。

え？ なんでって？

だつて面倒になるのは必然じゃん。エリコアにある意思とコンタクトを取れるつて実はかなり稀なことで、それがバレた日にはモルモット並みの扱いを受けるかもしれない。

八雲ツバメ、十五歳！ まだまだ花の女子高生として青春を謳歌したいのです！

『あーツバメ！ あそこに誰かいるよ～？』

「スルーかよ！？」

まあ、いいけど。

オレは天燕が指摘する方向を見ると一つの人影を見つけた。

「箒？」

そこにいたのは篠ノ之箒だった。

その姿は昨日の昼間には見れなかつた水着姿であつた。大胆にも白のビキニ。恥ずかしがり屋の箒としては勇気ある選択と言つたところか。あ、いや、それだと箒に失礼か。

そして、箒は何やらソワソワした様子でいる。何かを気に掛けているのか、ある方向をチラチラと岩陰から覗き込んでいた。オレも気になつて箒の見る方を見てみるとそこには海で泳いでいる一夏が

い。

「ああ……なるほど」

『青春だね～』

『え？ ビジがですか？』

笄の様子を見て青春だと言つ天燕。その意味を理解出来ないでいる福音。つてか、天燕の奴また変な知識覚えやがったな。
このまま見ていろのも面白いと思つたが、とりあえずオレは笄の元へ向かうことにした。

夜の海。満月の光は海面を照らし、真夜中にも関わらず明るかつた。

「（ビ、ビヒシヨウ……）」

そんな海辺にある岩場で篠ノ内笄は岩陰からある一 点を覗きこみ、悩んでいた。

「（かなり緊張する…………ただ、謝りたいだけなのに…………）」

視線の先には真夜中にも関わらず、海で泳いでいる一人の少年がいる。

織斑一夏だ。

夜の海で泳いでいるときなり一夏の姿を目にし、慌ててこの場所へと隠れてしまった。

「等等、なにしてるの？」

「ひゃい！？」

突然背後から声を掛けられて変な声が出てしまう。私は慌てて声のした方を振り向くとそこにはハ雲ツバメの姿があった。

「いやー散歩してたら姿が見えたからね。来ちゃつたー」

「あ、ああ……」

テヘヘと笑うツバメ。

「一夏くんに話しかけないの？」

そして、その言葉を聞いて内心ドキッとした。

「……ツバメはいいのか？」

「え？」

「ツバメは、私が一夏に話しかけてもいいのかと聞いている」

「？？ 何を言つているの？」

ツバメは首を傾げながら不思議そうな顔をしている。自分でも何を言つているのだろうと思つた。

「ツバメは一夏の事が好きなんだろ？ なのに、私が一夏の側にいてもいいのか？」

……………ああ、言つてしまつた。

だが、聞かずにはいられなかつた。

一夏と離れ離れになつてから私達を繋ぎ止めてくれたのはツバメと言つ存在があつたからだ。そして、この想いを今でも抱いていることが出来るのもツバメのおかげ。私がこの想いに悩まされている時は優しく手を差し伸ばしてくれた。

しかし、それはツバメの気持ちを押し殺してしまつてはいるのではないかと思う。自分を押し殺してまで、私達の仲を繋ぎ止めてくれる。私はそれが嫌でまた悩んだ。

ツバメを犠牲にしてまでこの気持ちを成就させるべきかと言つ気持ち。

ツバメが恋敵となつて一夏を取られてしまつかもしれないと言つ気持ち。

この気持ちが身の中で渦巻き、正確な判断を鈍らせた。そして、紅椿を手に入れてこつと思つてしまつた。

「これで、堂々とツバメと肩を並べられる。

私に出来ないことを平然とやってのけるツバメ。

そんな彼女に憧れ、嫉妬した。

力を手にして対等でいられる気がした。同じ力を持てば私は親友にも負けないと自負していたのだ。だが、それは間違いだと気付いた。

力を手にした私はその力に流され、無意味な暴力を振る。周りを見ずに目の前の敵だけを倒そうとし…………大切な人に大怪我を負わせ、その事実から逃げ出そうともした。

でも、力を得て何をしたかつたかを思い出し、私はこの罪を背負う覚悟をした。

もう、迷わない。この力がなんのためにあるのか。何のために使すべきか。だから、手始めに私は親友の本当の気持ちを知ろうと思つて先程の質問をした。

だが、ツバメは……

「いいよ」

実にあっけなく答えた。

「なつ！ なんで！？」

「なんでって言われても」

「昨日の夏。姉さんと話している所で聞いたのだぞ！ ツバメは一夏が好きだと！ 私はツバメの気持ちを犠牲にしてまでこの想いを

成就させん気は無い!」

「んー? ああ……いやいや、篠さんはなにか勘違いしてこるよ」

「え?」

「確かにアタシは一夏くんが好き。でも、それが恋愛とかの好きかと聞かれたら……よくわかんないの。だつて、彼に抱いた気持ちには篠にも抱いているものだから」

「私に?」

「親友以上恋人未満? うーん…………」れもちょっと違うかな? アタシは織斑一夏と篠ノ之篠つて存在に惚れてる? いや、でも……それも……」

「存在に、惚れる?」

ツバメも悩みながら自身で抱いた気持ちを渡しに話してくれる。だが、その意味を私は理解出来なかつた。もちろん、ツバメ自身もわかつていな様子だ。

「あーーー…………よくわかんなあ! とにかく! アタシは篠も一夏くんも同じぐらい好きつて事! 一人がアタシの側にいてくれればいいの!」

ついに発狂気味に本音を言うツバメ。月明かりの所為でその表情は恥ずかしさで赤くなつていたのがわかつた。

「クス…………あはははは!」

そんな本音を聞いて私は笑つてしまつた。

「わ、笑わないでよー！」

「す、すまん…………でも…………」

若干涙目になりながら怒るツバメは初めて見た。なんでもできるツバメでもこんな表情をするのかとなんだか新鮮な気持ちになる。そして、自分はなんてくだらないことで悩んでいたのだろうと思つた。だから、おかしくて笑えてくる。

ただ単純に『好き』になつた。

それは恋愛でも友情でも表現しにくい感情で、もし仮に『好き』と言つ言葉が恋愛や友情と言うカテゴリーだけに当てはまらない物があるなら、たぶん、ツバメが言つ『好き』はそういうことなのだろう。

「はあ～…………悩み悩み抜いた結論を親友に笑われてしまつとは……」

「ツバメさん、悲しい」

「あ、いや、ツバメの言つたことを笑つたのではなくて…………その、あの…………」

「…………ふつ、あはははー！」

いかん、笑い過ぎてしまったかと思った時。悲しそうな顔から一転、ツバメは声を上げて笑い出した。

「あー、からかったなー!？」

「いや～あたふたする雛が可愛くて、ついですね～」

「つ、ツバメ……」

「笑つたお返しだよ～」

「だからー。お前の事で笑つたのでは無くて

「でも、よかつた」

「え？」

私が最後まで言葉を口にしようとしたら先にツバメが喋つてしま
う。

「…………よかつた。いつもの雛に戻つて」

「あ…………」

心の底から安堵した表情。

月明かりのおかげでそれはハッキリと見えた。いつも見させてくれる彼女の笑顔。その笑顔を見ると私の目から涙があふれ出して来る。

「ぐす…………本当に良かつた…………ツバメが無事で」

「雛？」

「『めん、なさい…………私の所為で…………危険な目に』

今更になつてツバメの無事を喜んでいた自分がいる。

もちろん、ツバメが無事だとわかつた瞬間も喜んだ。

その喜びがまた蘇つてくる。

「もう、迷わないから……ツバメも、一夏も、グス……守れる
よつに強くなるから……」

両手で溢れる涙を拭き取る。だが、それでも涙は止まらない。

「もう、私を……一人にしないでくれ」

それでも、しゃつくり混じりで言葉を詰まらせながら[口]で導き出した決意と願望を口にする。

「うん、『めんね……心配掛けさせちゃって』

「いい、いいんだ。これからは私が一人を守るのだから」

「うん。それはダメ」

「え？」

ツバメはそつと私の両手を掴み、真っ直ぐ私のを見つめる。
その眼には若干涙が溜まっていた。

「アタシも一人を……皆を守れるようになる……もう、墜とされ
ないから。悲しませたりしないから……一人で強くなる?」

「…………うん、うん！」

私は力強く頷いた。

これから、剣の修練に磨きをかけよう。
それは、弱い己を鍛えるために。

これから、自分の気持ちに素直になろう。
それは、友と楽しい時間を過ごすために。

これから、大切な人の側にいよう。
それは、脅威からその人達を守るために。

「あ、そうだ。第一！」

二人で強くなると心に決めた時。ツバメが何かを思い出したかの
ように私の名を呼ぶ。そして手にしていた巾着袋から赤い小さな箱
を取り出した。

「誕生日おめでとう！」

変わらぬいつもの笑顔でツバメはそう言い、その小箱を私に手渡
す。

「これは？」

「プレゼントだよ」

「あ、ありがとう……開けていいか？」

「もちろん」

ツバメの許可を得て、私はその赤い小さな箱を開ける。

そこに入っていた物は

。

「ふうつ……」

海から上がりつて、俺は近くの市場に腰を下ろした。
銀の福音との戦闘後、千冬姉の説教を受け、食事を取り、軽い休憩の後、コツソリ旅館を抜けて夜の海へと繰り出していた。

「い、一夏……？」

そして、運動後の休憩中に突然名前を呼ばれた。
声のした方を振り向けばそこには水着姿の篠がそこにいた。

「篠……？ そういえば、昨日海で見かけなかつたけど

「

「あ、あんまり、見ないで欲しい…………。お、落ち着かないから……」

「……」

「す、すまん」

慌てて体の向きを元に戻す。

篠の水着姿にドギマギしていると、篠が俺の隣に座る。

い、いかん、これはかなり気恥ずかしい……。

何とか気持ちを整理させようとすると、上手くいかない。意識と反して、横田でチラチラと篠を見てしまう。

「ん？ なあ、篠」

「な、なんだ？」

「その箱なんだ？」

チラチラと篠を見ているとその手にしている小箱が気になつた。赤くて小さな箱。

俺の隣に座つてからも両手で大事そうに持つており、時折それを

見ては恥ずかしそうな顔をしたり、嬉しそうにしたりしていたのだ。

「ツバメがさつき誕生日プレゼントだつて言つてくれた」

「へえ。何が入つてたんだ？」

俺がそう質問すると篠は黙つて小箱の中身を見せてくれる。

「ネックレスかあ。綺麗だな

小箱の中に入っていたのは小さな赤い宝石が埋め込まれていたネックレスだった。

「付けないのか？」

「ひ、一人だとうまく付けられない……」

「じゃ、貸せよ。付けてやるから」

俺がそう言いつと簫はビックリと体をすくませ、顔を赤くしながら俺にそのペンダントを手渡した。

「た、頼む……」

ペンダントを付けるために簫は髪を搔き上げ、俺の方に背中を向ける。

またなぜかドキドキと胸が高鳴った。

現れたうなじが異様に色っぽく思え、鍛えている割には女性らしい身体のラインを目がいつてしまつ。

口に溜まつた唾を飲み込み、俺はなるべくそれを意識しないようにした。

「じ、じゃあ、付けるぞ」

簫の背後から前へ手を回し、ネックレスを付ける。緊張してか、何度もネックレスのフックがかからなかつたがそれも無事に繋がる。

「ど、どうだ？」

ネックレスを付けると簫はそれを見せるように俺の方へ身体の向

それを変える。

「…………」、似合つてゐるが。うん！ 似合つてゐる。」

「あ、ありがと。」

「…………」

「…………」

それから言葉が続かなかつた。俺達が沈黙をしていの中、やれりあんと波の音だけが聞こえる。なにか他の話題でも切り出そつかと考えるがうまく頭が働かない。でも、やっぱり何か話した方がこの妙な緊張感から解放されると思つて口を開いてみる事にした。

「「なあ…………」」

なんとタイミング悪い。喋りつとした矢先に箸と声が被つてしまつた。おかげで、話すきつかけを潰してしまつた。
だが、不意に箸と視線が合つてしまつた。

「（あ…………）」

そして見とれてしまつ。

夜の海で聞こえてくる波音。空から降り注ぐ月明かり。その月明かりがツバメからもらつたネックレスが光を反射させ、一段と箸を綺麗だと思わされてしまつ。

「ん…………」

え？

えええええええええええつ！？！？

ほ、簾、さん？ なんで田を開じて、もや匂を上向きに突き出す
んですかね、出すんですかね！？

「.....」

静かに待つてこる簾の顔は、やっぽり綺麗だった。

やっぽりと思いつつ、俺は簾の体に触れ、田を開じながらゆっくりと顔を近づけ

じつひ。

「（…………ん？ なんだ？）

改めて顔を近づけて

۱۷۰

篇に顔を近づけようとする度に何かが額にぶつかる。なんだ?と思つて閉じた目を開けるとそこには.....。

ブルー・ティアーズ

スバシニッ!!

間でBTリーザーがのけぞった俺の髪を焼き切った。

卷之三

「殺さう」

一夏、何をしているのがな
？」

卷之三

回避行動で振り向いた俺を待っていたのは、四人の突き刺さるような視線。

ちなみに順番はラウラ、鈴、シャル、セシリ亞だった。しかも、

チャッカリ己のHSをフル装備で展開している。

「え？ も、二月……他の……」

「なんて」としてくれるんじやああああああああー!?」

「え？」

そして、今度は別の方向から叫び声が聞こえてくる。そちらを振り向けばツバメがそこにいた。そしてなぜか非常に怒つていらつしやる。

「もう少しで、もう少しせいい所だったのに……」テメハリ、あんまりオレを怒らせるなよ

アレは非難せざるべし、こばへ、こばへ

「ツバメ！ これだけは譲れませんの！ 邪魔をしないでいただけですか！？」

「そりだ。こいつは私の嫁だ！ 誰にも譲る気は無いーー！」

「邪魔をするつていうのなら……ツバメでも容赦しないよ」

何を邪魔だの譲るだの言つてはいるのかわからないが、やめろ！！
火に油を注ぐようなものだぞ！！ それ以上ツバメを刺激しない
でくれ！！

「せ、戦術的撤退！！ あたしは一抜けた――！！」

「 「 「え?」」

先程まで皆と一緒に俺を狙っていた鈴は怒ったツバメを目の前にして脱兎の如く逃げ出した。セシリア、ラウラ、シャルの三人は鈴の突然の逃亡で呆気に取られてしまっていた。

「 篠! 行くぞ! !」

「え? きやあつー?」

俺は鈴同様。すぐさまこの場を離れようと篠を抱きかかえて逃げ出す。篠らしからぬ可愛い悲鳴が聞こえた。だが、そんなのは気にしてられない。

ああなつてしまつたツバメの側にいれば……下手したら殺されるかもしれない。

つまり、本気で怒つたツバメさんはもはや恐怖の象徴とでも言うべきか、とにかく怖い。中学の時、俺と鈴は過去にああなつたツバメを目にしている。その時は教室にある机や椅子を軽々と投げ、教室を半壊させた。ツバメを怒らせた生徒は傷こそ負わなかつたがまるで悪魔でも見たかのように怯え、必死にツバメの怒りを鎮めようと床に何度も額を打ち付けながら土下座して謝つていた。

そして、その現場に居合わせた俺達は「ツバメを怒らせではない」と心に決めたのだった。

「あ、待ちなさい! この

」

そして、セシリアが俺を逃がさないよう手にしている銃で俺達

を狙い撃とうとした時。いきなり、バカンと銃身が輪切りにされた。

「え？ なつー？」

「な、なんだー？」

「う、うわあああああああつーーー」

それからの事は俺は何も知らない。

必死に安全地帯に避難する事だけを考えていたから後ろを振り向く余裕が無かつた。聞こえて来たのは爆音とあの三人の悲鳴。

そして、高らかと笑うツバメの声だけだった。

「アーハツハツハツハツハツハツハーー！」

もちろん、このあと騒ぎを聞き付けた千冬姉に皆で「ひびく叱られたのは言つまでもない。

第三十一話 再び飛ぶための（前書き）

これにて原作三巻が終了です。

7 / 17

すみません。タイトルを変更いたしました。

第三十一話 再び飛ぶために

ツバメが暴れる少し前。

「紅椿の稼働率は絢爛舞踏けんらんぶたいを含めても四一パーセントかあ。まあ、こんなところかな?」

空中投影のディスプレイに浮かび上がった各種パラメータを眺めながら、その女性は無邪氣に微笑む。

子供のように。天使のように。

月明かりが照らすその顔は、いつもと変わらない。

いつだつてどこか退屈たいしゆそうな顔の、篠ノ之束その人だった。

「んー……ん、ん~」

鼻歌を奏でながら、別のディスプレイを呼び出す。そこでは白式第一形態の戦闘映像が流れていた。

それを眺めながら、束は岬の柵に腰掛けた状態でブラブラと足を揺らす。

田の前にはただ海が広がり、高さは三〇メートル近い。落ちれば無事では済まないその場所でも、束の表情はけして変わることはなき。

「は~。それにしても白式には驚くなあ~。まさか操縦者の生体再生まで可能なんて、まるで

「…………まるで『白騎士』のようだな」

束の背後から突然声がする。

「コアナンバー001にして初の実戦投入機、お前が心血を注いだ一番目の機体に、な」

「やあ、ちーちゃん」

束の背後から声を掛けたのは織斑千冬だった。漆黒のスーツに身を包んだその姿は、夜の闇全てを引きつれているかのような静かな威厳に満ちている。

一人は互いの方を向かない。背中を向けたまま、束はさっきまでと同じ用にグラグラと足を揺らし、千冬はその身を木に預ける。

どんな顔をしているのか、別に見なくてもわかる。

そんな確かな信頼が、二人の間にはあった。

「………白式を『しろしき』と呼べば、それが答えなんだろう? うか?」

「…………白式を『しろしき』と呼べば、それが答えなんだろう? うか?」

「ひんぼーん。ですがはちーちゃん。白騎士を乗りこなしただけの」とはあるね」

かつて『白騎士』と呼ばれた機体は、そのコアを残して解体され、第一世代作成に大きく貢献した。そしてそのコアは、ある研究所

襲撃事件を境に行方がわからなくなり、いつしか『白鬼』と呼ばれる機体に組み込まれていた。

「それで、うふふ。たとえばの話、コア・ネットワークで情報のやり取りしていたとするよね。ちーちゃんの一一番最初の機体『白騎士』と一一番目の機体『暮桜』が。そしたら、もしかしたら、同じワンオフ・アビリティーを開発したとしても、不思議じやないよねえ」

「…………『ナンバー000か』

ボソリと答える千冬。

「『ナンバー000かあ』。たしかに、アレは特別なコアだね。何も染まらず、なんにでもなれるコア。コア・ネットワークを使って他のコアに干渉して同じ世界を構築する。でも、結局何にも出来なくて、世界を構築する手段も無かつたから機体にも組み込めない失敗作」

「だがお前はそれを『あの機体』に組み込んだ

「ちーちゃんはするどいね~」

「なぜアレにナンバー000を組み込んだ

「…………あの子ならナンバー000を完成させてくれると黙つた。からかな?」

「お前にては曖昧な答えだな

「えへへ、あの子に会つてからこんな調子だよ。あの子と出会つて

私の知らない世界を見てくれるの。だから、ちよつとは世界がおもしろく見えてくるんだ~」

「やつが……」

「でも、」「

岬に吹き上げる風が、一度強く唸りを上げ、束の声をかき消した。そして、その姿は消えた。

忽然と。突然と。

「…………」

千冬は息を吐き出し、後頭部を押しつけるように木に寄りかかる。

その口元から漏れる声は、潮風と遠くの方で聞こえてくる爆音に流されて消えた。

翌朝。

臨海学校が無事？終了し、IS学園の生徒全員がクラス別のバスに乗り込み、帰宅をする。昼食は帰り道のサービスエリアで取ることになつてゐるのだが……

「や、やつてしまつた…………」

そして、そんなサービスエリアに設置されているベンチに腰掛けながらオレこと八雲ツバメは酷く落ち込んでいた。

理由は昨晩、自分がブチキレたからだ。

アレから一時間近く、セシリ亞、シャルロット、ラウラの三人を追いかけ、途中で見つけた鈴も一緒に制裁を加えてしまった。

そして、その後すぐ織斑先生からまたお叱りを受けた。そして、ちょっとやることがあったので睡眠は取っていない。いや、睡眠時間はさほど問題ではない。問題なのはオレがキレてしまつたことだ。

『ドンマイとしか言えないね』

「…………はあ～皆に嫌われなければいいけど」

『大丈夫だよ。あの後話しあつたんでしょ?』

「話しあつたけど…………皆オレの目を見てくれなかつた」

『はあ～…………ツバメって大胆な行動する割にはガラスのハートだよね～』

「ぐう…………何も言い返せないのが悔しい」

もはや深いため息しか出て来ない。そんなオレの様子を天燕も心配してくれるのは嬉しいが、あまり元気は出ない。

「あなたがハ雲ツバメさん?」

「え？」

そんな落ち込んでいる所へ誰かに声を掛けられる。伏せていた顔を上げるとそこには一人の女性が田の前に立っていた。

『ナターシャ！』

「ナターシャ・ファイルス……さん」

「あら？ 知つてたの？」

田の前にいたのは銀の福音の操縦者であるナターシャ・ファイルス本人であった。

「あ、いや……資料を持見しましたから」

まあ、本当は今さつき福音が教えてくれたのだが。

「アハ。隣いいかしら？」

「あ、どうぞ」

オレが横へ移動するとナターシャはオレの隣へと腰を下ろす。そして、じーっとオレの顔を見つめていた。

「な、なんでしょう……」

「ふーん、君があの八雲ツバメかあー」

なにやら興味深そうにオレの事を眺めると呑足めをしてくる。ど

うやうやしく、オレについて何かを知っているらしく、事前に聞いていた情報と実際に目にした印象を照らし合わせているらしい。

「白いナイトくんもそりだけどあなたも私の事を助けてくれたのよね？」

「白いナイトくん？　ああ、一夏くんですか」

「ええ、さつきお礼をして来たといひよ」

「お礼？」

「キスの一つか」

大人びた風貌と裏腹に子供っぽく笑うナターシャ。

よし、後で一夏からちょっと詳しい話を聞くとしよう。

「つーん……残念だわ。あなたがＩＳ学園に入つていなかつたら是非にでもウチにスカウトしたかったのに」

「スカウト、ですか」

「どう？　今からでも考えておいてくれない？」

「考えるだけなら」

「あら、素っ気ない」

オレの返事を聞くとナターシャはクスリと笑った。

「それにしてもあの事件の後に動いても大丈夫なんですか？　その、怪我とかは……」

「それは大丈夫よ。私はあの子に守られていたから」

「あの子？　ああ、福音ですか」

「あら、あなたはそう言つこと信じるの？…………そうね。あの子は私を守るために、望まぬ戦いへと身を投じた。強引なセカンド・シフト、それにコア・ネットワークの切断…………あの子は私のために、自分の世界を捨てた」

ナターシャは言葉を続けるうちに先程までの陽気な雰囲気が薄れ、その身体に鋭い気配を纏わせていく。

たぶん、今回の事件を引き起こした張本人を許せないのだろう。

「だから、私は許さない。あの子の判断能力を奪い、全てのIISを敵に見せかけた元凶を　必ず追つて、報いを受けさせる」

福音は、そのコアこそ無事であったが、暴走事故を招いたことがら今日未明に凍結処理が決定された。

つまり、福音はもう空へと舞い上がれない。

「…………何よりも飛ぶことが好きだったあの子が、翼を奪われた。相手が何であるうと、私は許さない」

悔しそうにするナターシャ。

それだけ福音の事を愛していたのかが手に取るようにわかる。

だから、オレは……。

「ならばあなたにコレを託します」

「え？」

オレは制服のポケットから一枚のディスクを取り出す。

「福音の翼は奪われていません。あの子はちょっと遠くへ飛び立て、別の所で翼を休めているだけです。元の場所へ帰れるようになつたら帰つてきますよ」

「…………」
「……」

「銀の福音の再設計プランです。それを使うかの判断はあなたに任せます」

ディスクの中身は銀の福音の設計プランが入っている。

まあ、昨日はコレを作るために徹夜してしまったわけなのだが、こんなにも早く手渡せるとは思つてもいなかつた。

「ただ、それを使うなら一つだけ約束してください」

「約束？」

「それには銀の福音のコアを使ってください。そうすれば、前の子があなたの元へ戻つてきます」

「…………どうして、そこまでしてくれるの？」

ナターシャは若干の驚きと不可解と言つた表情をしながら質問していく。オレはちよつと時間を掛けて考へる。

『もう一度、ナターシャと飛びたいからだよ』

だそうだ。

「あの子がもう一度あなたと飛びたがっているからです。アタシはそれを叶えてあげたい。それに、あの子に守られたのはアタシも一緒ですから」

「…………あるでの子と会つて聞いたよつな口ぶりね」

実際に代弁してましたし。

「…………ありがと。ねえ？ やっぱり、今すぐこでもウチに来ない？ 私あなたの事気にいつちやつた」

ナターシャの様子は先程までの鋭い気配は無くなり、陽気な雰囲気に戻る。

「ハハ、『じめんなさい』。アタシはあそこで今やらなきゃいけないことがあるので」

「うーん、残念。まあ、いいわ。また別の機会に『ラブ』ホールをするわ」

そう言つてナターシャは立ち上がり再びオレの前に立ち、自分の右手をオレに差し出した。

「いつか、アメリカにも遊びに来なさい。その時は歓迎するわ」

「じゃ、その時はお言葉に甘えさせていただきますね。あ、でもそのまま拉致なんてことはしないで下せることよ?」

〔冗談でオレはさう言つて、彼女の右手を掴んだ。

「…………」

おこ、なぜそこまで黙るんだ。

「じゃ、私はそろそろ行くわね。バーイ!」

そそくせと逃げ出すように立ち去るナターシャを見送る。手にはしっかりとティスクが握られ、その顔はとても嬉しそうだった。

『…………ナターシャ』

「…………『じめんな』。本当ならすぐにでも帰してあげたかったけど」

『ううん。凍結処理されちゃったならしじょうがないよ。それに、その事を予想してアレを作ってくれたんでしょ？ 私はそれだけでも嬉しいよ』

「そうだね。ナターシャさんならすぐこでもアレを作り出すだろ？ あ～って、オレ達も戻るつか」

そしてオレもベンチから立ち上がり、学園のバスへと向かい自分の居場所へと帰ることにした。

「ど、どうしたの？ 一夏くん

「つ、ツバメ……」

バスに戻れば一夏が顔を押さえながらのたうち回っていた。オレは何があつたのだろうと思い周りを見る。

床には500mlペットボトルが四本。しかも、中身が満タンになつた状態で転がっている。

そして、篠、セシリ亞、シャルロット、ラウラを見れば何故か怒つたような表情をしていた。

最後にナターシャが一夏に何をしてきたのか思い出す。

「ねえ、一夏くん

「な、なんでいざなこまじゅういふ。」

「わざと金髪のカジュアルースーツのお姉さんがここに来なかつた?」

「えーっと……やの、はい……来ました」

「何をしたのかな?」

「…………お礼をして、行きました」

オレは床に転がってるペットボトルを拾い上げ、ポンポンと手遊びをする。

「どんな?」

「え? つづか、そのペットボトルをどうする気で?」

「どなれをしたの?」

「…………」

「どうやら聞えなこりこり。」

まあ、答えを知つておつ、おめりと変わらないのだが。

「あ、ほっぺひよ、あ

「えつー? 騷つー?」

ぐまつー?」

もちろん嘘だ。一夏の頬にはそんな物は付いていない。

だが、反応からして事実を認めたのでオレは手にしたペットボトルを一夏に投げつけた。

「ぐおおお……何故だ？」

「フン！」

苦しむ一夏をほっておいてオレは後方にある座席へと向かう。

途中、篠、セシリ亞、シャルロッテ、ラウラがグッとサムズアップをしていたのでオレも皆と同じように力強くサムズアップでそれに答えた。

第三十一話 再び飛ぶために（後書き）

ちょっとしたお知らせです。

皆さまのおかげでこの作品もついに50万PVアクセスを突破いたしました。

なので、次の話はそれを記念した本編とはなんの関係も無いオリジナルストーリーを書こうかと思います。

まあ、思いついたネタをやってしまおつって訳ですよ。

なので次回はいつも以上に時間が掛るかもしれません。それでも、楽しみにしていただければ幸いです。

つまりなかったら「めんなさい」ww

第三十一話 犬猿の仲 前編（前書き）

大変お待たせしました。

やつと、やつと更新できました……。

50万アクセス記念企画をやると宣言しておきながら普通の話になってしまった。

「ごめんなさい」……。

でも、色々考えたんです。ネタが浮かんではボツになつての繰り返し、結局オリジナルストーリーで落ち着いてしまいました。

ネタの引き出しでもあればいいですね。

それでは（一応）50万アクセス記念ストーリー！　どうぞ！

第三十一話 犬猿の仲 前編

「さて、JUNI@クルーズの季節限定メープルバニラがあります」

IS学園にあるカフェ。

俺、織斑一夏の目の前で一同はテーブルに置かれた五つのアイスカップを取り囲み、真剣な表情をしている。もちろんメンバーはツバメ、鶯、鈴、セシリ亞、シャルロット、ラウラの六人である。

「これが手に入れるのにどれだけの労力が必要とされるだろう。よつて、一つはコレを手に入れた者。つまり、アタシが食べる権利を得るわけなんだけど」

「「「「異議ありつ……」「」「」「

「おつ！ 皆凄い反論だな。そんなにコレが食べたいのか？ どうも女子達は季節限定と言う言葉に弱いらしい。

さて、彼女達が現在何をしているかと言うと見ての通りである。五つしか無いアイスを六人で取り合っているのだ。

「たしかに、ツバメがこの季節限定メープルバニラを手に入れたことは褒められることだ！ だが、それとこれとは話は別だ！」

と何故か拳に力を込めて言い張る鶯。

「そうですわ。そんなのは横暴です！」

「いくら親友だからってここで引き下がる程あたし達はお人よしじ

「かのこ」の世界

「そうだよ。これだけは平等に決めないと」

「うむ。何事も平等に決めねばならない時がある」

そして、セシリア、鈴シャル、ラウラの順に反論する。

「世界に平等などない！――！　だけば、公は公平にジャンケンで決着を決めましょう！」

何處に飛んでもないことを口走つたツバメ。しかし、嘘は『公平』と詰つ言葉でその手法で納得する。

ジヤンケン

IS学園のカフェ。十代乙女の声が響いた。

「…………」

卷之三

戦利品を片手に何とも幸せそうな顔をする一同。だが、そんな中で一人だけ今にも泣きそうな顔をしているヤツがいる。

凰 ・ 鈴音 だ。

「あたしも…………食べたかったの!」……

「鈴、そんなこ^{シヨ}げるなよ。また買えぱいこじやないか」

「…………」

あれ? いつもなら「バカじゃないの!」とか言つて食つて掛つてくるのに。これはマジで落ち込んでこるわ。

「しようがないな~。鈴ちゃん、アタシの半分あげるから。元気を出しなれ!」

「ひ、ツバメ…………」

そんなツバメの申し出を耳にすると鈴は態度を一変。ぽよ泣きながらツバメへと抱きついた。

「ツバメ! 愛してる!..」

「^スノ^ウボ^ール^ー! 告^ハげられた!..」

「結婚してしまえばいい」

なにか色々変なことになつていて。

笄も笄で普段しないようなツツコミを入れていて。アイスってそんな魔力がある物だっけ?

「はい。あ~ん」

「あ~ん」

「じつへ。」

「んー！ 幸せ～！」

本当に幸せそつな顔をする鈴。

よほびいのアイスがうまいこと見た。

「なあ、鶯」

「ん？ なんだ？」

「俺にも一口くれないか？」

「なつ……何を言つてこるんだー!?」

いや、だつて、歯しておいしいこと横で言わわれれば食つてみたくなるだろ。

「そ、その…………スプーンで口元を守ってしまったのだぞ

「ん？ 別に気にしないよ。くれないのか？」

「……………一せー… わづでまなぐーー… 前がいいなら

「おひ、サンキュー」

「で、では……」

篝は何故か顔を赤くしながらスプーンでアイスをすくい、それを俺の方へ差し出す。俺も差し出されたアイスを食べようと口を開けてスタンバイするのだが……。

「「「わたくし（僕）（私）のもあげますわ（る）（ぞ）ーーー」」

「つおつー」

いきなり、セシリア、シャル、ラウラが声をあげた。

それぞれの口調で同時に喋るからか殆ど何を言っているのか理解できなかつたが、何事かと思つて閉じていた目を開けると目の前には四本のスプーンが差し出されてくる。

「お、お前達！？ 一夏は私に頼のんだのだぞ！ 邪魔をするな！」

「あら、食べる物は一緒ですわ。ですから、わたくしのを食べてもなんの問題もありません」

「それより一夏。はい、あくん」

「ぬつー シヤルロットー それは夫である私の仕事だ！」

再び、ギャーギャーと騒ぐ十代乙女達。なんだかんだで、いつも光景が目の前に広がる。

いや、それよりも俺はアイスを食べたいわけなのだが。

「い、一夏……」

۷۰

「せこ」

篠達が騒いでいる間にいつの間にか鈴が俺の目の前にスプーンを差し出していた。そして、スプーンにはお皿当てのアイスがすくわ
れている。

「しょ、しょうがないからあげるわよ」

「お、サンキュー。あむつ」

お、皆が言うだけあって確かにつまり。

スリーハと聞くと甘いらしいフレッシュであるかそんな事も無く程良い甘さ。あんまり甘い物は食べない俺であるがこれなら普通に食べられる。いやはや、素敵な出会いをしてしまった。

「あ……。」

「うおっ！？ 今度はなんだよ…………」

「何故鈴のを食べたのだ！？」

「そうですね！　わたくしのをお食べになつてください」――」

夏のバカ！

嫁としての自覚がなつとらん！！」

え？ あれ？ 何故に皆さんそんな凄まじい憤怒オーラを放つて

おられるのですか？ 僕はただアイスが食べたかっただけなのが
が…………。

俺、何か悪いことした？

「あつ…………酷い目に遭つた…………」

さて、カフエで酷い目に遭つた僕は現在へ学園内の第一アリーナで第一形態となつた白式の特訓中。いつものメンバーで一緒に模擬戦をしていたのだが、いつも以上に皆が張り切つており、フルボッコにされたところだ。

「う～ん…………まだまだ、弱いな」

「一夏」

「ん？ 篠？」

そして休憩を取ろうと白式の展開を解除し、持参してきたスポーツドリンクを口にしづらとした時に篠がやつてきた。

「紅椿の調整は終わったのか？」

「フィットティングは済んだ。後はツバメが調整するだけだ」

「そつか

臨海学校が終わってから紅椿の整備はツバメが担当することになった。と、言うのも紅椿は特定の企業、研究機関が開発した物では無くあの篠ノ之束博士が直々に開発した物である。しかし、肝心の束さんはアレからまた行方を眩ませ、紅椿の整備が出来る人間がない。

そこで白羽の矢が立つたのがツバメであつた。

理由は単純。束さんの直々の指名だ。篠、ツバメ以外の人間に紅椿を触ることを許さないと言い残して消えてしまったのだ。ためしに学園内の研究者が触ろうとしたら紅椿にあらかじめ仕込まれていた防衛プログラムが作動して、学園内にあるシステムがハッキングされてしまう事態に陥ってしまった。

あれにはさすがの千冬姉も顔を青くしてたな。もう少しで学園内にある情報が各国に漏洩されてしまうところだつたらしい。

「ツバメ～。ちょっとお願いがあるんだけど～？」

「んー？　どうしたんだい？　鈴ちゃん」

「甲龍の出力がいまいち上がらないのよ。ちょっと、見てくれない？」

「りょうか～い。」口ちが終わつたら見てあげるね～

「ありがと～」

少し離れた場所を見れば無人となつた紅椿を調整しているツバメ

に鈴が後ろから抱きついていた。

「あいつ等はホント仲がいいな」

「ああ、まるで姉妹みたいだな」

そんな二人を見ていた筈は何故か不機嫌そうだった。

「でも、不思議だな。あれでもあの二人出会った頃はケンカばかりだったんだぜ」

「え？」

「鈴が転校して来た初日から大喧嘩。そんでもって、鈴が帰国する直前までずっと喧嘩してたんだ。だから俺と弾の二人でいつも仲裁してたんだ」

「それが何故あのように仲良くなれるのだ？」

「うーん……なんでだろう?」

「知らないのか?」

「ああ、気付いたら仲良くなつてたな」

「そう言えば、なんであの二人はあんなに仲良くなつたんだろうな
…………。

それは中学二年の時だった。

凰・鈴音が親の都合で日本から中国へと帰ってきた時。現地の学校で受けたIS適性が基準より高かつたことから叔父が所属している軍に配属され、日々ISに関する訓練を受けていた時のこと。

「（最悪だ……） よりによつてなんであいつが…………」

世間一般で言つ夏休み。学生の身であればこれほど嬉しい物は無いのだが、あたしにとつてはあまり関係ないもの。と、言つのも日々ISの訓練で忙しいからだ。

「鈴。では、頼むぞ」

そして、この軍服を着た中年男性があたしの叔父である。それなりの地位にあり、何かとあたしの我が儘を聞いてくれる優しい叔父さん。

だが、今日ほどこの人を呪つたことは無かつた。

あたしの目の前には叔父さんの他にもう一人いる。

「では、ハ雲さん。後の案内はこの子がしてくれるんで」

「…………」

「そ、それでは、私はこれで」

そう、あたしの目の前にいるのはあのハ雲ツバメだった。

日本にいた時は何かと一夏にまとわりついていた鬱^{うつ}としい女。

何故、コイツがここにいるのかと疑問に思つてゐると叔父さんが開発中の第三世代EISを視察に来たとか言つていた。そして、あたしがコイツの案内役に任命されたのだった。理由は至つて単純、日本にいた時からの顔見知りと言つだけだった。

「ふん。まさかあんたがここへ来るとわね。知つてゐるEISの理論つてバカには理解できないのよ?」

「まさか、凰さん^{ひの}がEISに乗れるとは思つてもみなかつたよ。しかも、代表候補生つて」

自分が言つた嫌みに対して、皮肉そうに笑うハ雲ツバメ。

「なによ」

「そつちこわなによ」

「「ガルルルルルルルルルツ」」

犬猿の仲。

これほどあたし達の仲を現すのにピッタリな言葉は無いだろ?。日本にいた時もそつだが顔を合わせればいつもこうだ。なんの因果か、コイツとはウマが合わない。

とにかくあたしはコイツのことが嫌いだ。

「それよつサツサと案内してよ。じつちだつて暇じゃないんだから」

「ハア？ なんだあたしがそんな事をしなくちやいけないのよー？」

「アタシ、お姫さん」

「レーベン」

「ふん」

立場なんて物が無ければこの場でハツ倒してやりたい！

それにしてもなんでコイツが開発中のISを視察に来るわけ！？あれは完成まで軍内部でもトップシークレットなはずじゃないの

「へえ……あれが白狼かあ～」

「え？」

あたしがイライラとしているといつ之間にか軍のHS訓練所へと
やつて来ていた。

訓練所内にあるグランドには中国量産型IS『白狼』^{ぱいろん}を使って何人かが訓練をしている。

そうだ。
いい事思いついた。

第三十一話 犬猿の仲 前編（後書き）

と言ひ訳で前編終了。

今回は鈴が主役のストーリー。

そして、勝手に作ってしまった中国量産型TIS『白狼』ぱいろん。

詳細は次回明らかに！

第三十三話 犬猿の仲 後編（前書き）

後篇です。では、どうぞ。

第三十二話 犬猿の仲 後編

「…………どうしていつなるの?」

「なに? 怖氣ついた?」

現在オレは中国量産型『白狼』を身に纏い、中国軍のIS訓練場にいる。

そして、オレに対面するよつに同じ白狼を纏つた鈴がそこにはいた。

中国の第三世代開発の視察。

それが今回のオレの目的であった。それがなんでこんなことになつたのかと聞かれれば……鈴の軽い挑発に乗つてしまつたからだなんだが。

「所詮、IS研究者。勝手に理論組んでISの何を理解しているのかしら?」

「にしても、この白狼つてリヴァイヴより動きやすいね。……なるほど、装甲を犠牲にして機動性に特化しているのか。ふんふん」

中国量産型IS『白狼』。リヴァイヴには劣るがこちらも操縦しやすい機体。そして、格闘戦闘を視野に入れ、複数の接近戦闘用の武器が後付けされている第一世代量産型IS。特徴は中国武将が身上に纏つていた甲冑のような外装。どちらかと言えば日本の『打鉄』に近い感じだ。

オレは鈴の話を聞かずに白狼の具合を確かめていた。

「ぐつ……」ひの話を聞きなせよー。『のひ馬鹿……』

「馬鹿とは失礼な。それより、さあせと始めない? ひちはいつでもいいんだけど?」

「なら」ひから行くわよ……」

轟ツ……

鈴の白狼が地面を蹴ると素早くオレへと特攻を仕掛けてくる。両手には白狼の接近戦闘用の中国刀『麒麟牙』が握られており、それでオレに斬りかかるつとしていた。

「ハツ……」

「おつと」

左右から一閃。鈴が放つ斬撃がオレを襲う。だが、オレは上半身を反らしてかわし、自分の白狼に搭載されている武器を展開する。選んだのは槍の『龍胆』りんとう。すかさず槍の間合いに鈴を入れ、龍胆を連續で突き出す。

「くっ……ひのつ……」

「うわっ……無理に間合いで詰める……?」

しかし鈴はオレの連續突きを麒麟牙で弾きかわしながらも前に進んで来る。

剣は槍にも劣ると言われるがそれは間合いだけの話。相手を近づけさせず、槍の間合いで戦えば相手は手出し出来ないのだから。だが、そんな間合いも懐に入られてしまえばなんてことも無い。

鈴はその事をよく理解していた。ここで恐れて後退していれば追撃しやすかつたのに。怖がらずに突っ込んで来やがった。

「もうつたあああああ！」

「なんの……」

特攻を仕掛けてくる鈴。麒麟牙を横一閃へと放と全身の筋肉を使い、渾身の一撃をオレに喰らわせようとしてくる。

だがその斬撃はオレに当たる事は無かつた。

「！」後退しながらのイグニッショーン・ブースト！？
やつ！…」「

白狼のスラスターを後方では無く、前方に噴射させての瞬間加速。そのおかげでオレは瞬時に鈴との間合いを広げる事に成功した。おまけに、スラスターの噴射の余波が鈴に直撃し、強い衝撃を喰らつたかのように鈴を吹き飛ばす。

「あ、コレいいかも」

「ぐうう！　まだ、負けてない！…」

吹き飛ばされた鈴もすぐさま体勢を立て直し、同じくイグニッショーン・ブーストでオレに特攻を仕掛けてくる。

「はああああああああつー！」

「特攻ばかりで勝てると思わないでね！」「

「そんな能無しなら代表候補生なんてしてないわよー！」

「なつ！？」

イグニッショーン・ブーストで最大加速した鈴の体が急停止した。

白狼のスラスターを前方に噴射させて急ブレーキを掛けたのだ。そしてその両手には先程の麒麟牙では無く、連装ショットガン『レイン・オブ・サタデイ』が握られている。鈴はショットガンを構えて狙いをオレに定め、ためらいも無くその引き金を何度も引く。オレは特攻する鈴に対してカウンターを狙っていたがそれが裏目に出た。予想外な事をされ、反応が遅れる。

氣付いたら弾丸の雨を浴びてしまつていた。

「ハルヒー、おめでたー。」

「伊達に代表候補生つて名乗つてないわよ！　あんたこそ、アレを凌ぐとはね！」

「お褒めに預かり光栄だよー。ならば」ひうちもー。」

なんとか、散弾の雨を凌いだオレは再び鈴との距離を取り、今度はアサルトカノン『ガルム』を開幕する。

「ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！」

一定の間隔を空けて渴いた発砲音がグランドに響く。

白狼は長距離射撃には向かない機体である。だからそんな弾丸が鈴に当たるはずも無く、鈴は左右上下に体を動かし、オレとの距離を確実に詰めて来た。

「これで終わりよ……。」

そして、完全に鈴の間合いでオレが入ると鈴は再び麒麟牙を構えて斬りかかるてくる。

「残念」

「へ？ があつー？」

不意にオレの言つた言葉を鈴が理解しようとした瞬間。

強い衝撃が横から鈴を襲う。鈴にとつて一体何事かと思つただろう。吹き飛ばされて尚、理解が出来ていなか表情をしていた。

「…………アサルトライフルで殴った！？」

そして、やつと理解した。

鈴の言つた通り、オレはガルムの砲身を持ち野球のバッターの用にガルムで鈴を殴つたのである。うん、やっぱフルスイングって気持ちいいな。

「ふざけたるのー？」

「いたつて真面目だよ。白狼は接近戦主体の機体なのにこんな狙撃銃をインストールしてもしょうがない。でも、下手な射撃でも相手の行動を制限するくらいは出来るんだよ。それにアタシ、武装切り替え苦手だからここのまま殴った方が早かつたし」

「そ、そんな戦い方

「あるわけ無い?」

「…………」

「さて、続きをしよう」

戦闘の再開。

それと同時にオレは右拳を握り、右脇を閉め、腰の辺りまで拳を引く。左手は鈴に向けて突き出す。

ガシュンと白狼の腕アーマーが変形する。

白狼の固定装備であるヒートクローナー^{ぱこるん}。この機体の名前を由来する武器。手の甲から伸びた獣のような三本の爪は熱を帯び、空気を焼く。

「決着、ね」

短く、鈴がそう言いつと手にした武器を捨て、オレと同じような構えを取り、白狼を展開する。

「同じ土俵に上がる? タスガは代表候補生」

「研究者」ときに後れを取る訳にはいかないのよ。あたしの実力を見せつけてやるわ」

その会話を最後にオレ達の間には沈黙が場を支配する。自分も鈴もその場から一步も動かずに相手の様子を窺い、攻めるタイミングを見計らっていた。

どこかで何かの音が聞こえた。

それを合図にオレ達はイグニッショーン・ブーストで距離を一気に詰め、両者の武器がぶつかり火花を散らした。

「「はあ……疲れた」」

中国軍IJS訓練所のグランド。

あたしはIJSを纏つたままグランドに仰向けに倒れていた。

そして、そんなあたしの横では同じIJSを纏っているハ雲ツバメが同じ用に仰向けに倒れていた。

「悔しいな……後ちょっとで勝てたのに

「代表候補生なめるな。……でも、正直あんたがここままでやるとは思わなかつたわよ」

さう、あたし達は先の模擬戦を終えて疲労した体を休めていたのだ。

結果を言つてしまえばあたしの勝ち。

だが、ギリギリの勝利だつた。白狼のエネルギー残量を見れば残り53と表示されている。

「うへん……もつと強くなないとな~」

「…………ねえ?」

「なにさ?」

「なんで強くなりたいの?」

八雲がボソッと呟いた言葉にあたしは不思議に思った。
なぜ、こいつはそこまで強さにこだわるのだ?つゞ。

「うへん…………」

八雲は少し考えるようにして答む。

「自分の夢と大切な人を守りたいから」

そして、若干恥ずかしそうに答えた。

「夢? 大切な人?」

「うん」

「大切な人つて……その…………」

『大切な人を守りたい』その言葉を聞いてあたしは胸がチクとした。

あたしが思いつく中でこいつが守りたいと思えるような人物は一人しかいない。

あたしの想い人である織斑一夏だ。

八雲はいつも一夏の側にいる。そして、傍から見ればまるで恋人のような感じであった。一夏を狙っていた女子はその光景を見て半分以上がその恋を諦めてしまう。そして、残りは勇気を振り絞ってアタックするが、一夏の唐変木ぶりに撃沈していった。もちろん、あたしもその一人だ。

だが、それでも諦めることが出来なかつた。織斑一夏と言う存在はあたしにとって特別な存在なのだ。

彼と出会つて色々と楽しい思い出が出来た。笑つたり、泣いたり、怒つたりすることもあつた。そして、全てがあたしの掛け替えの無い物となり、そして、もつともつと彼とそんな思い出を作りたいと思つた。

もし、八雲が一夏の事をあたしと同じ気持ちでいたらきっとそれは叶わぬ恋になつてしまつ。正直、八雲に喧嘩を吹つ掛けていたのはその恋が潰えないようにと邪魔者を排除しようとしていたのだ。今、思えばなんとも馬鹿らしい理由だと思う。けど、小学生だつたあたしはその事が理解できず、感情のままに行動をしてしまつた。

「あー安心してよ。一夏くんでは無いから」

「え？」

「アタシが守りたいのはアタシの親友。あ、一夏くんとは別ね」
しかし、意外とアッサリとあたしの疑問は解決されてしまった。

「あんたは、一夏の事が好きじゃないの？」

「はあ？ なんで？」

本当に意味が解らないと言つた顔をするハ雲。

「だつて、あんなに仲良くて……恋人みたいだつたし……」

「無い無い。それは、無い。アタシは一夏くんに対して恋愛感情は
もつてません」

「じゃ！ なんであんなに仲よそつこしているのよ」

一夏とハ雲は恋人では無いと言つ葉に反応して、あたしは横に
していた体を起こし、ハ雲に詰め寄る。

「別に仲良くてもいいじゃん。友達なんだし」

「友、達？」

「そつ。友達」

その言葉を聞いてあたしは全身の力が抜けたよつになってしまい、
再び地面に寝転んでしまつ。

「あははははははははははははー。」

そして、声を出して笑つてしまつ。同時に大粒の涙が溢れてくる。

自分はどれだけ馬鹿な事をしてきたのだろう。

何も確かめず、勝手にこいつを妬んで、八当たりをしてしまつた。

なんて醜い醜い醜態をさらしていたのだと思い、それがわかると笑いと涙が止まらなかつた。

「何笑いながら泣いてるの？」

「…………うるさいわね」

いつの間にか八雲があたしの顔を覗きこむよつこして見ていた。
あたしは咄嗟に手で自分の顔を隠すよつこする。

「…………ね？　八雲」

「何？」

「今までの事…………謝る。『めんなさい』」

「どうしたの急に？」

素直に謝るうつと思つた。

あたしが一夏に抱いた感情を、八雲に抱いた感情を、全て話して謝りうつと思つた。

今まで酷い事言つて「めんなさい」。

あたしの勘違いでいろいろ迷惑をかけて「めんなさい」。

本当に、本当に、「めんなさい」。

「じゃ、許す」

「え？」

あたしが全てを話し終えると八雲はあまり悩む素振りを見せず簡単にそつと言つた。

「だから、許すって」

「うょっと待ちなきよー なんだつて簡単に許せやつのー!?
あたしはあなたに色々酷い事してあたのよーー」

「でも、悪い事したつて自覚したんでしょ？ それで謝つてくれた。
これからどうするかもわかつてんんでしょ？」

「え？ …… 一度とあなた達の前には現れない」

「はーー 〇点ー やつぱり、許れない！」

「なつ！？ ジヤ、ジバメすればいいのよ！？」

簡単に許すと黙つたハ雲。その言葉にあたしは戸惑いが隠せなかつた。そして、これからどうすればよいのかを聞かれ、それに答えれば違うと言われた。

ハ雲はそんなあたしを見てため息を吐いて立ち上がる。

そして、あたしに向かつて右手を差し出した。

『『の手を取るだけじゃん。ねえ？ 『鈴ちゃん』』

「あ……」

ああ、どうして一夏や他の奴が『』に心を許すのかがわかつた。

長い年月。あたしとハ雲の間に出来た壁のような物が一瞬で壊された様な気がした。そして、ハ雲はあたしに向かつて歩み寄り、手を差し伸べる。敵意や悪意と言つた感情を持たず、純粹な気持ちでだ。

ハ雲ツバメと言つ人物はそれが簡単にできる奴なのだ。

だからみんなこいつに惹かれるのだろう。

「ありがとつ…………『ツバメ』」

そして、あたしはツバメが差し出した手を握る。それと同時にツバメはあたしの手を引き、あたしの体を引き起しす。

その際、ツバメはあたしが名前で呼ぶと嬉しそうな顔をした。今までいがみ合つて怒つた表情しか知らないあたしにとつてそれはとても新鮮だった。

「いっぽこんな風に笑うんだと思った。

「うん、やっぱり笑つた顔の方がいいね」

「え？」

気付けば、顔の筋肉、特に口の辺りに妙に力が入つていた。だがそれは無意識であり、自分でやろうとしたわけではない。

自然な笑みだった。

自然に笑つたのは一夏といいた時ぐらいしか思い浮かばない。よもや、今までいがみ合つていたツバメにこの表情を晒すとは思わなかつたので不思議な感じがする。

でも、これからあたしはツバメの前でこんな表情を見せて行くのだところの時思った。

「鈴ちゃん。スラスターの出力値を変えてみたよ」

「サンキュー。早速試してみるわ」

HIS学園のアリーナ。甲龍の調整を手伝つてもうひとつあたしは早速甲龍を装着してみた。

「なあ？」

「「んー?」」

そして、今から飛ぼうとした時に一夏が話しかけて来た。

「お前、うつてなんでそんなに仲良くなつたわけ？」

「「え?」」

突然の質問。あたしとツバメはお互ひの顔を見合せ、自然に笑みになる。

そしてその笑みのまま。一夏に向かつてこう言つた。

「「内緒」」

第三十三話 犬猿の仲 後編（後書き）

白狼ぱいろうの補足設定。

中国量産型IS。世代は第一世代であり、リヴィアイヴ、打鉄とは総合評価では劣るが接近戦闘ではトップを誇る機体。

イメージは作中の通り中国武将の鎧を模した物。ただ、頭部に付けるバイザーの様な物は獸耳であり、腰の付け根辺りから尻尾が生えている。

ツバメが説明していたように後付け武装は接近戦闘用武器がメイン。ただ、鈴が使った連装ショットガンやツバメが使ったアサルトカノンも装備可能である。

そして、機体の名前の由来となるヒートクローバー『白狼ぱいろう』はシャルロットが使っていた『盾殺し』に続く破壊力を持つ。イメージはザクのヒートホークが爪になったと考えてください。

ざつとこんなもんです。

第三十四話 One day of Summer (前書き)

原作四巻へと突入です。

第三十四話 One day of Summer

八月。

IS学園でも少し遅めの夏休みが始まり、在学する生徒は各自の夏休みを過ごしていた。

そしてアタシヒトハ雲ツバメもそんな夏休みを満喫している……
…はずだった。

「じゃ、これから「アに直接リンクして稼働させますね」

『よろしくお願ひね。でも、本当にそこから出来るの?』

「天燕は特別製です」

現在アタシはIS学園にある地下施設の一室にいる。

目の前には無人となつた天燕があり、無数のケーブルが取り付けられ、室内の機械と繋がれている。そして、アタシは電話の相手と話しながら目の前にあるキーボードのボタンを軽快に叩いていた。ちなみに電話の相手はナターシャ・ファイルス。臨海学校の時、暴走した銀の福音のパイロットである。

なぜ、彼女とアタシが連絡を取つてゐるかと言つて、永久凍結されたシリバリオン・ゴスペル計画がアタシの渡した再設計プランにより再起動が決定したからだ。

その知らせを聞かされた時は心底驚いた。いくらなんでも早すぎると。しかも話を聞かされた時にはもうすでにコア以外は完成していると来た。一体何をしたのだろうと思つたが、今は気にしな

いでおーじ。

「（じゃ、天燕。後は頼むな）」

『りょうかい！ ちゃんと送り届けて来るね～』

『つ、ツバメさん。短い間だっただけど、本当にありがと～』
「（何時になるかわからないけど、その内アメリカとかに遊びに行
くよ）」

『はい！ お待ちします！～』

それを最後に天燕内にいた福音の声が聞こえなくなつた。

アタシは座つていた椅子に体重を預けてもたれかかる。作業が一
段落ついたことで体の力が抜けたのだ。

『やつたわ！ ツバメ！！ 福銀が起動した～～』

「おめでとうござります」

『……………ありがとうございます。本当にありがとうございます。この子に再び翼を～えて
くれて』

「頑張ったのはナターシャさんじゃないですか。じゃ、アタシはこ
れで失礼しますね」

『うん、本当にありがとうございます。また連絡するわ』

ナターシャさんも少し鼻声になりながら電話が切れる最後までアタシにお礼を言つてきた。アタシも彼女達の力になれた事を喜んだ。

「ん～～！ これにて一件落着～～！」

電話が切れた後からは固まつた体をほぐすように伸ばした。長時間椅子に座つていた事から体が固まり、背筋がポキポキなるのが気持ちよく感じる。

『ただいま～！ 無事に送り届けて来たよ～』

「ああ、おかえり。そして、御苦労さま」

『えへへ～』

「さて、今日はこのれぐらこにして部屋に戻るか～」

『そうだね。なんだかんだで三日間も籠つてぱなしだしね』

そう、実はこの地下施設には三日間も籠つており、その間食事以外では外に出でていない。

「はあ～…………だつて、フランス政府に提出する書類とお前の第二形態についての資料、第の紅椿の稼働データをまとめるので大忙しだつたんだよ。後、明日は一夏くんの白式・雪羅のデータ採取とかで付き合わされるし…………世間は夏休みだつて言つのに…………まったく遊んで無いのはアタシだけだよ。…………さうと」

自分のやることを指を折り曲げながら呟くとその数の多さにアタシは深いため息を吐いた。

『…………そう言えばツバメって最近『オレ』って言わなくなつたよね?』

「ん? そうか? そつ言えばそつだな」

『気付かなかつた?』

「氣付かなかつた」

『言われてみればそうだな。』

『臨海学校から帰つて来た辺りから『オレ』では無く『アタシ』と自分の事を呼んでいる。今までまつたく自覚していなかつた事が不思議なくらいだ。』

『ツバメもついに女の子を自覚したんだね。僕は嬉しいよー。』

「…………バラすぞ」

『『ごめんなさい…』』

『とても女子が出す様なドスの利いた声でアタシがそつ唇べと天燕は即座に謝罪した。』

しかし、心境の変化とでも言えばいいのだろうか。まさか、自分がこんな風になるとはな。

まあ、どうでもいいけど。

さて、久々に外へ出でみると夏の蒸し暑さがアタシを襲つ。

「ああ…………これが夏なんだね」

冷房が利いた地下施設で冷え切つた肌は一瞬で焼かれ熱を帯び、額から滝のように汗が流れてきた。

よし、途中でアイスでも買つてクーラーの利いた部屋で涼もう。

「ふつふん~」

そんな熱い日差しの中。アタシの正面から軽快にスキップをしてくる一人の少女がいた。

凰・鈴音だ。

「この暑さなど気にせず、なんとも上機嫌。

「機嫌いいね。鈴ちゃん」

「あ、ツバメ」

アタシが声を掛けるとやつとこちらの事に気づく鈴。

そして、この暑さにも関わらず鈴はアタシに抱きついて来る。どうやらこの子のスキンシップはこの暑さをものとしないらしい。

「うわっ、汗かいてるじゃん」

……そんな事もなかつた。

アタシが汗だくだと気づくとすぐさまアタシから離れる。

「黙らっしゃい！」の暑さで涼しい顔が出来る人が見てみたいわー！」

「心頭滅却。火も又涼し。……でも、確かにこの蒸し暑さは嫌よね」

「その割には肌が冷たいですね。一体どうで涼んでたのかしら？」

そんな質問をすると鈴はあからさまにギクリと言つた感じに体をビクつかせる。

「んー？ これは何がありますね～。

「べ、別につ！ あたしがビードロで涼んでよつと勝手でしょー。」

「ん？ なに、この紙

「あつ」

不意に鈴の服のポケットから落ちた長方形の紙切れを拾い上げるアタシ。鈴はそれを見てしまつたと言いたげな顔をし、動搖していた。

「ウォーターワールドの入場券？」

そして、拾い上げた紙切れに書かれている文字を読み上げ、それが何かを理解した。

そう言えばテレビで今月からオープンされたウォーターワールドがあると耳にした事がある。たぶん、これはそのチケットであり、鈴はこれを使って遊びにでも行こうとしていたのだろう。

「か、返して！」

「あつ」

鈴はアタシが拾い上げたウォーターワールドのチケットを奪つようにして取り戻す。

「ど、どうしたの？」

「な、なんでもない！　じゃ、あたしは行くねーーー！」

あからさまに何かを隠している鈴であるが、それを問いただすといじょうとしたら脱兎の如く走つて行ってしまった。

「なんだつたんだ？　あれは？…………まあ、いいや

色々と疑問に思つところはあるが、この暑さでそれを深く追求する気力は現在のアタシには無い。

「とにかく…………クーラー利いてるといひことに………」

どこのゾンビ映画のように腕の力を抜き、おぼつかない足取りでアタシはこの暑さを凌げる自室へと向かつた。

その際、正門の方でセシリ亞と一夏がいたようだつたが気にしな

い。

「…………なんか怒られた」

「でしょ? ちやんと連絡しないからだよ」

翌日。

HS学園の第一アリーナのHSピット内で鈴に電話を終えた一夏が肩を落しながらやって来た。

どうやら、昨日鈴が「機嫌だったのは今日一夏とウォーターワールドへと遊びに行く約束をしていたらしい。しかし、今日は白式の稼働データを取る予定だと把握していなかつた一夏は当田になつてドタキヤン染みた断りの電話を鈴に済ませたのであった。

「一応、昨日から連絡入れてたんだぜ? でも、鈴の奴電話に出ないわ直接部屋に行つてももう寝たとか言われるし……」

よほど、今日と並びが楽しみだったのだろう。
鈴よ、行動がおかしくなつていいだ。

「まあ、代わりにセシリアに行つてもうつたから大丈夫だろ」

「…………アホだ。アホがいる」

「あ、あの~そろそろ始めたのですが……」

「あ、すみません」

一人でそんな会話をしていると今度は数人の大人を連れて山田先生が登場。

アタシ達に話しかけるタイミングを窺っていたのか少し落ち着きが無い様子だつた。

「では、織斑君。白式の展開をお願いします」

「はい」

山田先生に言われて一夏はピットの中央へと向かう。

そして、大勢の大人の視線の所為で少し緊張しているのか深呼吸をしてから一夏は意識を集中させた。

「……来い！ 白式！」

掛け声と共にガントレット状になつてている白式が光を放ち一夏の体を包み込む。そして、一夏の体を包み込んでいた光の粒子が形になり、第一形態と変化した白式・雪羅が姿を現す。

「「「「おおおお～…」」」

そんな白式の姿を見てテーク採取に来た研究員達が歓喜の声を上げた。

「では、性能テストを行います。グランドに出てとりあえず最大加速で適当に飛んでください」

「適当ですか？ 了解！」

山田先生の指示で一夏は白式の大型ウイングスラスターを広げピットから飛び立つ。

一夏が飛び出すと同時にアタシも自分の端末を操作して、検査項目を順々に計算し答えを導き出していく

「初期動作から最大加速への到達時間、第一形態時より25%上昇。最高速度も50%上昇。エネルギー安定率……………30%です」

「え？ マイナス値ですか？」

「マイナス値です」

アタシの報告を聞いて山田先生をはじめとする研究員達がざわめき始めた。

まあ、確かに各性能の向上には成功しているが、その所為で余計にエネルギーを食つてしまつ機体になつていると知つて誰も喜べない。それより、この問題をどう対処しようかと勝手に話を進めようとしていた。

「先生。稼働時間が第一形態より落ちてますから早く次の項目やつちやいましょ」

だが、それは今する事では無いとアタシは判断し、燃費が悪くなつた白式を考えて提案する。

「そ、そうですね。織斑君聞こえますか？」

『あ、はいー』

「次の性能テストを開始します。グランド上にあるバルーンを雪羅の荷電粒子砲で狙い撃つてください」

『わかりました』

山田先生がそう言い、目の前にある端末から操作するとグランド上空にはいくつかのバルーンが浮く。一夏は左手を前方に構え、バルーンに狙いを定め、雪羅の荷電粒子砲を発射する。

「バルーン10個に対して18発の砲弾を使用。命中精度は操縦者の技量不足と推定。砲弾速度 1050 m/sec 。連続発射は出力により比例。エネルギー安定率は $-0.1\text{ m}^2/\text{N}$ マイナス値です」

「またですか…………やっぱり、燃費が悪いですね」

「まあ、篠ノ之さんの紅椿とセシートと考えればそうでも無いんですけど」

「単独ではなんとも不安定ですね」

「うん……」

さてはで、どうしたものかと悩むアタシと山田先生。

まさか、第一形態となつた白式がこれほど不安定な機体とは思わなかつた。能力的には第一形態より優れていがその分エネルギーを消費してしまう。アタシが言つた通り、エネルギーを供給してくれる紅椿の『絢爛舞踏』と一緒になら問題は無いと思つただがいつでもそれに頼る訳にもいかない。

「織斑君、とりあえず、白式にエネルギーを充電しますからピットに戻つて来てください」

『はい』

まだ、30分も稼働していないと言つのに始ゞのエネルギーを使った白式を充電するため、山田先生は一夏にピットに戻るよつに言った。

それから白式に何度か充電を繰り返しながらも稼働実験は進む。が、一向にいい結果は得られずにはいるアタシ達。外部からやつてきた研究者たちもだんだんと肩を落とよづに落ち込み始めていた。

『ねえ？ ツバメ』

「（なに？ 天燕）」

『上空から何か来るよ』

「はあ？」

天燕が指摘した方を見る。

そして、突然の事だった。

キィイイイイン

どこかで聞いた事のある飛来音。それが、アリーナ上空から聞こえてくる。

ドカアアアアアアアアアン！――！――！

そしてそれは、アリーナ上空に展開していたシールドを突き破つてグランド中央に落下して来た。

「 「 「…………にんじん？」」

落下して来たのは巨大なあの人参。

臨海学校で束さんが乗っていたイラストックなデフォルト人参だ。アリーナにいる一同がそんな人参を見て啞然としていると今度はピット内にあるモニター全てになにかの映像が映し出される。

映像は始めこそ荒れて何が写っているのかわからなかつたが、次第にそれはクリアになり、とある人物が写し出された。

そこで、アタシ達はさらに驚愕してしまう。

「「束さん…？」」

『はつはつはつはつ…！ やーやー！ 久しぶりだね。いつくん、シンちゃん。皆のアイドル篠ノ之束さん、見参！』

モニターに写ったのはあの篠ノ之束であつた。相変わらずの不思議の国のアリス風の洋服にウサ耳を頭に付けている。

そんな大物人物が映像とは言え姿を現したことによりピット内の研究者たちに動搖が走る。ある者はあまりの事に腰を抜かし、見つともなく尻もちをつき、ある者は純粹に憧れの眼差しでモニターに釘付けになつており、ある者はこの事実を外に伝えようと電話で連絡をしようとしていた。

『おつと、そはいかんだよ。現在、このアリーナ内にある通信手段は全て私が掌握しました。それと、色々メンドクサイ事になりそうなので外部からの干渉も受け付けないよ』としたからねえ』

つまり、アタシ達はアリーナ内に隔離されたと？

「束さん。一体どうしてこんなことを？」

『んー？ 今日は白式の稼働実験と聞いてとある贈り物を届けに来たのだよー！』

「贈り物？」

そんな一夏の質問に束さんは元気よく答える。そして、贈り物と言つ言葉を聞いてピット内にいる全員がグランドに落ちてきた巨大人參へと視線を送る。

『ふつふつふつ！ ではでは、『』登場していただきましょう！！

ツンちゃんが開発したE-LISドライブ搭載機！ 天燕の兄弟機！

『クリムゾン・レイヴン』だよ～』

巨大なデフォルト人参が束さん掛け声と共に半分に割れ、そして、人参の中からは一体のI-Sが姿を現す。

紅と白のボディ。それが一番早く目に入った。笄の紅椿と似た色合い。背中には四枚羽根のウイングスラスターと大型ブースターの様なものが付けられている。それら一つ一つからはE-LISの粒子が噴き出されていた。そして、操縦者と言つていいのか？ そこに人がいるべき場所には頭から足の先まで装甲を纏つた人型がいた。

『いつくんの白式稼働テスト。このクリムゾン・レイヴンで試してあげるよ』

実際に楽しそうに言う束さん。しかし、この状況に追いつかず、ピット内の山田先生を含む大人たちは混乱していた。

「えへっと……」

「山田先生。下手に動いたら何されるかわかりません。ここは従つた方がいいかと……」

「そ、そうですか？ …… そうですね。でも、大丈夫なのでしょうか？」

「大丈夫ですよ。あの人にとつてイタズラ程度の事ですから」

「い、イタズラって……わかりました。では、急いで白式の充電

を済ませてしまおうよ。」

とつあえず、山田先生に白式の充電を頼べみつける願いすむとすぐさまその作業に取り掛かつてくれた。

「束さんもそれでいいですね？」

『 もうらん オケだよー 全力で来ないとこつくとも酷い田にてつよーなんならシンちゃんも一緒にやるわ。』

「暑いのでバスします」

『 ブーブー！ つれないなあー』

嫌だよ。ピット内は冷房が利いてて涼しいし、何度も外に出てる一夏なんて帰つて来る度に「ああ～涼しい～」って汗だくになりながら言つてるんだぞ。

「ツバメ。本当に大丈夫なのか？ アレ

ピットからグランドを眺めている一夏。モニターで拡大されたあのI-Uを見ず、肉眼でのI-Uを見ていた。

「んー……わかんない」

「わからなーって…………毎度の「ことながら束さんこまビックリさせられるよ」

「今に始まつた事じやないじゃん。いつも通りだよ」

「そんなもんか？」

「そんなもん」

ハハハッ。とお互いに小さく笑つてしまつ。

「織斑君！　白式の充電が完了しました」

「了解しました。じゃ、行つて来る」

「サポートは出来るだけするよ。頑張つて」

「おつかれ」

一夏はグッと親指を立てて白式の元へと向かう。アタシはそんな一夏を見送り、再びクリムゾン・レイヴンの方を向く。なんとなくクリムゾン・レイヴンと視線が合つた気がした。

そして、アタシは空中にいくつものディスプレイを投影して自分の出来る事を始めた。

第二十五話 クリエイション・レイカン（繪書き）

急展開…… とだけ書つておきます。………… たぶん

第三十五話 クリムゾン・レイヴン

夏休みがもう終わらひはじっていた時。俺は白式の稼働データを取つている最中の事だつた。

束さんの突然の来訪。

グランド中央に降り立つた謎のIIS。

そして、俺は訳も解らずソイツと模擬戦をする事になつてしまつたのだ。

『一夏くん。あのクリムゾン・レイヴンはアタシと同じE-17ドライブを搭載した機体。束さんが提示してくれた情報だと見た目よりも早く動ける。射撃、格闘戦も出来る武装があるみたい』

「了解」

ピットからグランドへと降りた俺の白式にツバメからの通信が入つて来た。そして、ハイパーセンサーにもその情報が表示される。

「クリムゾン・レイヴン……カッコいい名前だな」

『そんな事言つてないで田の前に集中しなさい。』

「あ、『めでた』めでた」

ツバメの注意を受けて俺は田の前のクリムゾン・レイヴンに意識を集中させる。右手に雪片一型を展開し、それを構える。しかし、クリムゾン・レイヴン（メンドイから以下レイヴンな）はそんな俺を無視して戦う準備をしない。

とある方向を見つめたまま動こうとしないのだ。

一体何を見ているのだろうと思い、俺もレイヴンの見る先に視線を動かして見る。視線の先にはツバメ達がいるピットがあつた。

「（ピット？ 何を見ている？）」

ハイパーセンサーで視線の先を拡大投影するとそこには一人の人物が写った。

「（ツバメ？）」

俺と相手の情報収集をするため、束さんが使っていたような空中投影されるモニターを操作しているツバメの姿がそこにはあつた。

あのレイヴンはツバメの事を見ている？ でも、一体なぜ？

『では、これより模擬戦開始』

そんな疑問について考えていると突然束さんの開始合図がグランードに鳴り響いた。

しまったと思った。

それは一瞬の油断だった。開戦直後、一番警戒しなくてはならぬ場面で余計な事を考えていた俺は完全に出遅れる。だから、慌てて雪片を両手で構え戦闘態勢に入る。相手の初手をやり過ごし、隙を見て間合いを広げ体勢を整えるために。

だが、レイヴンからの攻撃はなかつた。

模擬戦が開始されたにも関わらず、相変わらずツバメの方を見て俺の事を完全に無視している。

その態度が気に食わなかつた俺は白式の大型スラスターを吹かし、レイヴンに向かつて斬りかかる。

だが、レイヴンは依然として動かない。ツバメを見たまま俺の方を振り向かない。この腕を振り下ろせば雪片の刃が届く位置に来てもだ。完全に舐め切った態度に俺は怒りにまかせて縦一閃に雪片を振り下ろす。

ガキイイイイイン！！

「なつ！？」

卷之三

しかし、振り下ろした雪片の刃はレイヴンに届かず俺の意思に反して途中で止まってしまう。

よく見ればレイヴンのウイングスラスターの一つが雪片を受け止めていたのだ。

「スラスターじゃ無い！？　こいつは

」

以前、ツバメの天燕が使っていたセイバービット。セシリアのブルー・ティアーズが使っている空飛ぶ砲身では無く、空飛ぶ剣。

その事を理解すると俺は反射的に体を動かしていた。

瞬間、俺のいた位置に三本のセイバービットが地面に突き刺さる。

「…………」

そして、やつとレイヴンが俺の方を見る。目の前に敵がいる事をやつと理解したのか地面に刺さった一本のセイバービットを手に取り、それを合わせるように連結させ、構える。

合わさったセイバービットからELOSの粒子がエネルギーを凝縮させ、巨大なエネルギー刃を形成された。

「やつと…………その気になつたか」

「…………」

相変わらず一言も喋らないレイヴン。その寡黙さがその存在を不気味に思わせる。

俺は再び雪片を構え、レイヴンと同じエネルギー刃を展開させる。

そして、お互いが相手の出方を様子見していると先に動いたのはレイヴンの方だった。背部に付いている本当のスラスターを噴射させ、一気に距離を詰めてくる。俺はレイヴンが振りかざした大剣を雪片で受け止め、鍔競り合いとなつた。

「ぐつー！　じのつーー！」

刀身の殆どがエネルギー刃でその重量はそれほどでもないのに大剣による斬撃は想像以上に重量を感じた。

これが、一撃の重みと言うやつだらうか。その一撃で俺はレイヴンの戦闘技量がどれほどの物か理解する。

「強いつー！」

「この状況が続くのはまずい。

そう思つた俺は渾身の力でレイヴンの大剣をいなし、体勢を崩させる。体勢を崩されたレイヴンはそのまま地面に転がりそうになつた。

「チャンス！」

すかさず、雪片に零落白天を展開させ、レイヴンを斬りつけた。

が、それは出来なかつた。

「ぐつー！　またか！？」

レイヴンの体を守るようにセイバービットが前に立ちはだかる。そして、それは俺を斬り付けるように襲い掛つてくる。

「クソ！　後少しだつたのにーー！」

セイバービットの相手をしている内にレイヴンは体勢を整え、後方へスライドするように移動し、俺との距離を空けた。

「（ん？ 何故そこで距離を空ける必要がある？）」

この状況だつたらセイバービットと一緒に自分も攻撃を仕掛けば幾分か有利になるはずだ。なのに、あいつはわざわざ有利になる条件を捨ててまで距離を取つた。俺はその意味が理解出来ずに頭が混乱する。

レイヴンは大剣を前に突き出した。

一瞬それは突撃の様な構えだつた。が、それは違うとすぐに気づく。

大剣からはエネルギー刃が消え、刀身が二つに割れる。

キューン……………バシュ――ンッ――

「うわっ！――」

咄嗟に俺は雪羅のシールドモードでそれを防ぐ。

「何だ！ 今のは！？」

よく見ればレイヴンの手には巨大な銃が握られている。

先程まで使つていた大剣が形を変えてあの銃へと変わつたのだ。それにしても凄まじい威力だつた。零落白夜のシールドで防いだにもかかわらず、白式のシールドエネルギーが一気に削られてしまつた。もう、後が無い状態に陥つてしまつ。

レイヴンは残つた一本セイバービットを戻し、それを合わせもう一つの大剣を手にする。

「はははっ…………おもしれえ！」

危機的状況にも関わらず、自然と笑いが込み上げてきた。

雪片を構え俺は再びレイヴンへと特攻する。

「バスター・ライフル！？ 漆い威力です！！」

「白式の零落白夜のシールドで相殺は出来ますけど、その分エネルギーが消費されてしまう。たぶん、次にあれを防ぐことは無理でしょう」

ピット内で山田先生が一夏とレイヴンの戦いを見て驚愕していた。

「離れればピットとバスター・ライフル。近づけばあの大剣。織斑君にはどうする事も出来ないのでですか！？」

「…………」

近距離、中距離、遠距離で戦える理想的スタイル。山田先生の言う通り、そんな相手では今の一夏では勝つ見込みが見あたらない。

『ふつふくん ディウ？ 私が作ったクリムゾン・レイヴンは？ ちなみに、あのセイバー・ピットの名前は『俱梨伽羅』って言つんだよ。一つの武器に二つの役目を与えた武器。でも、シンちゃんも凄いねあんな武器を考え付くんだもん』

「え？」

束さんがそう言つと山田先生はまたビックリした顔でアタシの事を見る。

確かに、少し前まで多目的武器を設計した事がある。だが、それはアタシの技量では持てあます物であり、作り出すのは不可能だと判断した代物。それを開発してしまつとはやはり束さんは天才だと思はれられた。

『うんうん。やっぱり、いつくんは変なテストより実戦の方が白式の性能を引きだしてくれるね』

「…………あ」

そして、束さんの余計なひと言で山田先生の心に傷が付いた。

「あ、別に先生がいけないってわけでは…………」

「…………いいんです。どうせ、変なテストしか思い浮かばないような人なんです」

ああ～。完全に塞ぎこんじゃつた。体育座りしながら人差し指で地面をなぞるとか、なんとも漫画チックな落ち込み方をしている。よし、メンドクサイからほっとくとしよう。

「エネルギー安定率がマイナス値だったのに今は若干プラス値になつてます。…………直感で白式の動かし方を理解していく」

『なんか、『男の子』って感じだね』

「ふつ……」

『でも、あの子も負けないよ』

「もう言えれば聞きたかったんですけど。あのクリムゾン・レイヴンのパイロットって何者ですか?」

『ふつふつふん　それはまだ言えないのだよ』

「ええ～……」

『後のお楽しみだよ～』

そう言われてしまつと深く追求できない。と言つか、上手くはぐらかされてしまうだろう。だから、追求する気が起きなかつたのだ。アタシは再びディスプレイに目をやる。コンソールを軽快に操作しながらデータを処理して行つた。

「あの～…………出来れば我々にもそのデータを閲覧させていただけないでしょうか」

アタシがデータ処理をしていると白衣の男が声を掛けて来る。

すっかり忘れていたが今日は外部から白式の稼働データを取りに来ていた研究員がいたのだった。気付けばアタシの後ろでは数人の研究者達がディスプレイに釘付けになつていてる。

テロリスト紛いの状況だと言つのに、それでも自分達の研究に執着する辺りがすごいと思った。まあ、悪く言えば職業病だろうな。

「あ、すみません。そつちの端末に送信しますのでそちらで閲覧いただけますか？その……」の状態だと操作しこへーので

「あ、あのっ！あのクリムゾン・レイヴンを作成するあなたってあなたも関わっているって本当ですかー？」

「え？」

「見た限りではエネルギーも安定しますよねー！？あの粒子のような物が動力となっているのでしょうかー？」

「え？え？」

「それとあの武装ーイギリスのBTシステムと似ていますけど原理は別なんですかねー！」

「え？あーえーっと……」

アタシがそう言つとゾロゾロと後ろにいた研究員達は言われた端末の方へと向かつ。が、一部の研究員はアタシの元に残り、どんな質問をして来る。

なんか、それがもう怖い。質問していくの皆さんの事がもうマジで怖い。もつ欲望もき出つのオーラをえてくる。

「み、皆さん！質疑は後で受け付けますからー今は作業の邪魔をしないでくださいー！」

おおおーーー やつまで落ち込んでいた山田先生が復活なされ

た！ もはや自分の不甲斐無さをハツカたりするかのように怒って
いらっしゃる。研究員達もそんな山田先生の気迫に負けてイソイソと
他の研究員達がいる所へと戻つて行く。

「先生！ 『めんなさい』。少なくとも明日からはリスペクトをせじ
いただきます！」

「あつ！ 日式のエネルギーシールドがレッジゾーンに…？」

「一夏くんそろそろ決めないとヤバいよ…………」

「ぐつ！？ ノの…！」

レイヴンの攻撃。

左手に持っている大剣をまるでナイフのように扱い、俺に襲い掛
つて来る。

「うわー、うどー！」

猛攻から逃げるよに下がる。が、レイヴンは俺が距離を空ける
と今度は右手のバスター・ライフルを俺に向け、引き金を引く。

キューーン…………バシュー——ンッ！

「うわー！」

白式のエネルギー残量を考え俺はそれを防がず、射線から逃げる
ように横に飛んだ。

レイヴンはバスター・ライフルを発射させるとそれを分解し、ビットに戾してそれをしまった。代わりに左手の大剣がバスター・ライフルへと変化し、再び俺を狙い撃つてくる。

「（ライフルをしまった？　弾切れか。威力が強大な分、弾数は少ないみたいだ）」

覚えている限りではバスター・ライフルで撃てる数は5発。
弾切れになつたらああやつて充電をして再び撃てるようにするの
だろう。

そして、充電している間はもつ一本のライフルで攻撃。

「なら戦い用はまだある！－！」

狙いは今手にしているバスター・ライフルが撃ち終わる時。俺はひたすらにバスター・ライフルの射線からずれるように動き回る。

キューーン……………バシューーーンッ！－！

1発目！

キューーン……………バシューーーンッ！－！

2発目！

キューーン……………バシューーーンッ！－！

3発目！

キューン……………バシューンッ！！

4発目！

キューン……………バシューンッ！！

5発目！ 今！！

レイヴンが今手にしているバスター・ライフルをしまい、充電して
いたもう一本を取り出そうとした。

「はあああああああつー！」

大型になつた白式のウイングスラスター。そこから発するイグニッショーン・ブーストは第一形態の比にならない。50mぐらい離れていた距離があつという間にゼロとなる。俺はその勢いを使って取り出したバスター・ライフルを構える前に雪片でそれを弾く。バスター・ライフルはレイヴンの手から離れてしまつた。

「チェックメイトだ。この距離ならはずさない」

そして左手に備わつてゐる雪羅の荷電粒子砲を突き出し、発射させた。

ドオオオオオオオオオオオン！！！

光の閃光がレイヴンを包み、凄まじい爆煙が目の前で広がる。

「…………ヤバい。やり過ぎたか？」

いくらH.Dが操縦者の命を守ってくれると言つてもこれはやはり過ぎたと思つた。俺はすかさず荷電粒子砲をまともに食らつたレイヴンの姿を探すように辺りを見回した。

『初期設定終了。一次移行いたします』
ファースト・シフト

「え？」

爆煙の中から電子ボイスが聞こえてくる。

一体なんだと思い電子ボイスが聞こえた方を見てみる。白式のハイパーセンサーが何かを爆炎の中で捉えた。

「な、なんで……」

爆煙が晴れるとそこには無事でいるはずのないレイヴンがそこにいた。

「今のはじつつ危なかつたわ……」

初めて聞く声。同じ日本語で関西独特の喋り方。

「自分マジで殺す気か？ 一次移行せんかったらどうなにするつもりやつたねん？」

先程までの寡黙さとは違い、田の前に立つレイヴンのパイロットは悠長に俺に話しかけてきた。

「…………」「めん。まだ、コイツを扱いきれなくて」

「まあええわ」

ガラランとパイロットを覆っていた仮面以外の装甲が地面に落ち、レイヴンは自分の顔についている仮面に手を伸ばし、それを取り外した。

だが、そこで俺はやけに驚いてしまつ。

「ふー。やつとの暑苦しいのから解放されるわ」

「…………え？ あ、え？」

「初めまして織斑一夏君」

いきなり、挨拶をしてくるレイヴン。

「オレは瀬戸晃輝。^{せと ひかる}世界で一番田代ヒロを操れる『男』や」

第三十五話 クリムソン・レイヴン（後書き）

ここへ来てオリジナルキャラ。しかも、ISが使える男です。
さて、これからどうしよう……

第三十六話 瀬戸晃輝

「男！？ 男でエスを使えるのは織斑一夏だけではないのか！？」

「だが、現にあそこにはいるのは男だぞ！？」

「おい！ それより篠ノ井博士との通信が切れてるぞ！！」

「くそつ…… 詳細を聞かせないのではないか！？」

現在、ピット内では外部から白式のデータを取りに来た研究者達が騒ぎだしている。

無理も無い。突然現れた謎のエス。そして、そのバイロットが女性しか扱えないエスを扱える『男』なのだから。

「や、八雲さん…… どうしましょう？」

「…………」

山田先生はこの混乱を目撃してどう対処していくのかわからぬ様子だった。もちろん、アタシだってこの状況をどうにかする術がある訳ではない。それよりも、この人達同様にアタシも混乱していたのだ。

「全員動くな！？」

そして、混乱の中、ピット内にあるロックされていた扉が開く、そこから現れたのは織斑千冬だった。

「お、織斑先生！！」

織斑先生を先頭に数人の教師陣を連れて中へ入つてくる。山田先生はそんな織斑先生が救世主などに思えたのか膝を地面につき、神様に祈りを捧げるようにしていたのは気にしない。

「ここにいる全員は無事か？」

「あ、はい！ ……あの、織斑先生達はどうしてここに？」

「突然第一アリーナのセキュリティーが誰かにハッキングされてな。山田先生達が中にいるのは知っていたから急いで駆け付けた。で？ 状況は？」

「はい、えへっと……なんと言いましょうか……」

それから山田先生は事の経緯を織斑先生に説明を始めた。

白式の稼働データを取つていると束さんからコンタクトがあつた事。

謎の工Sと一夏が模擬戦をした事。

そして、その工Sに乗つていたのが男だつた事。

全ての説明を聞いた織斑先生は頭を悩ます様にしている。しかし数秒で立ち直り、テキパキと他の教員達に指示をし、この後処理を始めるのであった。

指示を受けた教員達も織斑先生の指示に従い行動する。まず、ピ

ット内にある端末を持参した別の端末に繋げ、異常が無いかを調べる。別の教員は外部から来た研究者を外へ誘導させていた。若干の小競り合いがあつたもののアタシと山田先生以外の当事者はこの場を去つて行つてしまつ。

「グランドにいる一人！ 至急ピット内まで戻れ！」

『え？ 千冬姉？』

「織斑先生だ馬鹿者。さつさと戻れ！！」

『は、はい！..』

そして、今度は先程までグランドで模擬戦をしていた二人を呼び戻す。一夏とクリムゾン・レイヴンのバイロット瀬戸晃輝はそれに素直に応じ、ピット内に戻つてくる。一人は自分のE.Sの展開を解除し、織斑先生の前に並ばされた。

「本当に男……」

誰かがそう呟いた。

皆、瀬戸晃輝の姿を見てその場にいる一同が驚愕している。

織斑一夏以外にE.Sの使える男。瀬戸晃輝。

アタシも含め、皆物珍しそうに彼の事を見ていた。

「瀬戸晃輝だな」

「はい」

「貴様が来るのは2学期からだと聞いたが？」

「 「 「え？」」

唐突に始まつた織斑先生と瀬戸との会話。その内容にピット内にいるアタシと一夏、山田先生は声を揃えて驚いてしまう。

話から察するにこの瀬戸と言う人物は織斑先生を含む数人の教師達に知られている人物らしい。おまけに、2学期からここに編入する事になつてゐるとか。

あれ？ だつたら山田先生も知つてゐるはずなのでは？

「山田先生…………君には事前連絡はしてあつたはずだが？」

「えつ……？…………あつー ああー！！」

忘れてたんかいっ！！

「あの～…………」

「なんだ？ 瀬戸」

「束さんからはここへ来ればなんとかなるつて聞いていたんですが

……」

「…………先程も言つた通り、貴様の受け入れは2学期からだ。今ここに来られても準備が出来とらんからどうにもならん」

「うえ！？ ほんまですか！？」

「事実だ。何故今日ここに来たんだ？」

「いや～ 束さんにオレのHSクリムゾン・レイヴンの最終性能テストを兼ねて皆さんに挨拶しておいで～って言われたもんやつたから…… てつきり、もう転校できるもんかと……」

「はあ～…………毎度面倒事を…………」

眉間にしわを寄せながらため息を吐く織斑先生。束さんの予測不能な行動に頭を悩ませどうするかを必死に考える様子だった。そして、仕方ないと言つた顔で視線を一夏に向ける名前を呼ぶ。

「織斑」

「はい」

「貴様は明日から帰省だな？」

「え？　はい」

「ここつを連れて今帰れ」

「えつ～？」

「部屋割の出来てない状態でここに寝泊まりさせる訳にはいかん。ホテルで泊まると高い手もあるが学園はそう言つた援助はできん。なら、家にいてもらつた方がいい」

「俺はいいけど……千冬姉はいいのかよ？」

「織斑先生だ。私がそう提案しているのだ。駄田だと云ひ理由がない」

「わかつたよ。じゃ、準備をしてくる」

「敬語を使え。馬鹿者」

「…………すみません」

「瀬戸もいいな？」

織斑先生は確認を取るために今度は瀬戸に声を掛ける。

「嫌も何も…………」いつとしだまありがたい申し出です

「なら、決まりだ。よし、教師陣はこの事態の対処を！ 瀬戸晃輝の存在は学園編入当日まで内密に！ 情報操作！ 口外！ 全てにおいての規制を厳とする！」

「…………はい！」

ああ～なんか妙なことになつて来たな。

「八雲、お前にも協力してもらひからな」

「え～…………。

オッス！ オレ瀬戸晃輝！ いきなりやけどなんか世界で一番田口HJが使える男やねん。

「瀬戸。 じつじつつかう」

「おーへ、すまんな」

で、今オレを案内してくれてるHJが世界初のHJを動かしたと言われる男、織斑一夏や。

「なんかすまんな。 いきなり、おせこむ邪魔する事になつてもひつ」

そり、現在オレ達はHJ学園を出て織斑の家に向かつている。 束さんの話からてつきり今日からあの学園で生活するもんかと思つたからその氣でおつたんやけどなんか勘違いだつたらしく。 生憎、ホテルで宿泊なんて出来る金は無く、どなにしようかと迷つた所に天の助け。 織斑の姉さんである織斑千冬さんの提案で家に泊めてもらえたよひつになつた。

「気にあるなよ。 でも、嬉しこぜ。 男でHJ動かせる仲間ができる

「……織斑。 お前ええ奴やな」

「ははっ。 あ、 じいが家だ」

そんなこんなでオレ達は織斑の家に到着。 隣家と変わらぬ、普通の一軒家がそこにあつた。

「自分の家だと思つて寛いでくれよ」

「ほな、お邪魔しま～す」

織斑の案内でオレは家中へと上がらせてもいい。上がらせてもらつた家は人がいないにも関わらず、生活習慣が残つてゐる。家を空けてもこまめに掃除しに帰つて来どる事が窺える。

そして、リビングで適当に寛ぐように言われオレはその言葉に甘えソファーに腰掛けた。ちなみに織斑は一人で一階に上がって行ってしまった。

「はあ～…………東さんの所為でいろいろ滅茶苦茶やつたな…………」

「これからどうかと正直思つ。ちょっとしたきっかけでIISが動かせるようになり、いきなりあのIIS学園に編入させられる事になつてしまつたのやから。似たような境遇である織斑一夏は始めわこないな気持ちやつたのやろか?」

「瀬戸」

「あ、なんや?」

「すまん、ちよつと出かけなきやいけない用事が出来たんだ。一応、部屋は用意したから。後、ベランダに瀬戸が使う用の布団が乾してあるけど適当な時間に入れて貰えないか?」

「かまへんよ。むしろ言つてくれればオレがやつたのに

「そんな事をされるわけないだろ。ここでは瀬戸は客なんだから。じゃ、行つてへる」

慌ただしく、織斑は自分の家を後にしオレはそれを見送った。

「ん~密か………… よし! まずは織斑と打ち解けよ!」

先の事なんてどうなるかわからへん。といあえず、オレの学園生活が楽しくなるように色々するとしよ。

「ヤバい。すっかり遅くなつた」

急な学園からの呼び出し、なにかと思えば白式の書類に不備があつたらしくその手直し、それからなぜか学園外でトラブルを起こした鈴とセシリ亞を迎えに行つてたらこんな時間になつてしまつた。

「瀬戸の奴怒つてないかな?」

本当なら明日から帰省する予定であったが、今日はこっちの方でもトラブルがあつた。いきなり現れたISを動かせる男、瀬戸晃輝の面倒を家で見る事になつたのだ。

だが、現在の時刻は午後7時。いきなり他人の家に招かれ、勝手がわからない瀬戸にしてみれば苦痛だ。だから俺は急いで家へと向かつて走つていた。

「晩飯は適当にコンビニで買つたし……大丈夫だよな?」

普段ならコンビニで食事を済まさないのだが、時間が時間だ。そんな事言つてられない。

「ただいまー！ すまん、瀬戸ー！ 遅くなつたー！」

家に着き、俺は玄関で大きな声を出してくるはずである瀬戸に帰つて来た事を伝える。

「おおー織斑、おかえり。息切らしてどうなつた？..」

「すまん、こんなに遅くなるとは思つてなくて。腹減つてるだろ？ 悪いけど夕飯コンビニで買つて来たから」

「ああ……夕飯なんやけど……」

「ん？ もしかして、もつ済ませたのか？ あれ？ なんか匂いが

……」

俺がコンビニ袋を瀬戸に差し出すと瀬戸は何故か申し訳なさそうな顔をしていた。やはり、コンビニなどで済まそうと言つのが気に食わないのだろうか？ それはすまない事をしてしまった。だが、そんな事を考えていると何やらいい匂いが家の中に漂つていた。俺はそれが何かと思い匂いのする方へと向かつ。そして、辿り着いた先は台所だった。

「すまん！ 台所を勝手に使わせてもらつたー！」

瀬戸は両手をパンと合わせて頭を下げる。

食卓に並んでいたのは夕飯だった。メインはトンカツ。それに御飯と味噌汁が並んでいる。

「いやー帰つて來るのが遅いし、悪いと思つたんやけど……飯作

つておいたるうかなかって思つたんよ

「それは全然構わないけど……………これ全部瀬戸が作ったのか？」

「せやー オレの一番得意な料理やー。」

自信満々に言つ瀬戸。「うん、確かにうまそつだ。

「まつ、食べてみー。」

「ああ、いただくよ

瀬戸に言われるがまま俺は食卓の椅子に座り、箸を手に取る。そして、トンカツの一切れを摘み、口に運ぶ。

「…………つまい」

「ほんまー？ やーよかつたワ～～～。」

本当にましい。

衣はサクサク。そして、肉のうま味もちゃんとしていい。俺もトンカツを作つたりするがここまでうまく作れる自信が無い。いや、トンカツ作るならやり方はそんなに変わりはないはずなのに。

「わ～てー オレも食おつひとつー。」

「料理うまいんだな

「んー？ まあ～ガキの頃から作つとたからな～」

「え？ 親とかは？」

「オレ親おりへんねん。生まれた時から孤児院暮らしあつた。料理はその手伝いで作つたりしてたねん。あ、でも養子として育ててくれた人もおるからな別に寂しい思いはせえへんかつたワ」

「…………あ、いや、すまん」

「あー別に悲觀せんでええよ。オレもそない氣にしてへんし。つてか、そういう態度が一番傷つくんやで？」

自分の触れられたくない過去のはずなのに[冗談ぽく言つ瀬戸]。

「うん、よくわかるよ」

その気持ちはよくわかる。

俺も親がないから。

物心着く前に俺と千冬姉を置いて蒸発してしまった両親。それを理解する歳になると周りの態度が異様に気に食わなかつたりもした。同情染みた優しさ、哀れみの目線。問題を起させば「これだから親のいない家庭は」などと言われる。

「この話は終いや。飯が不味くなる」

「そうだな」

「それ以外やつたらなんでも答えるでえー。タイプの女性から好きな女優まで」

「はははっ、なんだよそれ

「あ、やうひしお」入つよつたな。上出来、上出来

「やへば関西とかつてやうひしおのりなのか?」

「全體がやうひの訳やあらへん。オレはシッ『まれんと寂しくて死
んでしまつさや」

「ウサギかわ」

「おー調子出で来たんぢやうへ..」

「ははは」

それから俺達は色々な事を話しながら食事をした。

瀬戸について、俺について。本当に女の子の話になつた時は若干恥ずかしかつた。それでも、お互一面白可笑しく笑つて、男同士でしか出来ない話もあつて本当に楽しい食事だつた。

瀬戸と弾を会わせてみたいとなるだらうへ、本格的な漫才が見
れるかな?

「では、後ほど一夏の秘蔵コレクションを拝見をせいでいただきまし
よ」

「こやこや、先にそひの厳選コレクションの拝見を.....あれ?
今名前で呼んだ?」

「せや。オレは友達と思つた奴は名前で呼ぶよつじとるわん。あ

かんか？」

「…………こや、いいぜ。俺も晃輝つて呼ばばしてもいいだな」

「なら決まりや」

女子だけの生活で色々悩まれる所もあつたEHS学園。
それでも、樂しい事はあつた。だが、晃輝と一緒に俺の学園生
活はより樂しくなるよつの気がする。

「なあ？ 晃輝」

「なんや？ オレの『夜の診察室』はやらいんで？」

「じゃなくて。明日近くの神社でお祭りあるんだ。それに行かない
か？」

「なるほど。一夏は和服物が好み…………ええチヨイスやー。」

「だーもーーーー。」

本当に楽しくなつたのだ。

一方、その頃ツバメは……

「なああああああああ————書類が終わらない————」

「！」

「八雲さん後少しです！　お互に頑張りましょーーー！」

「夏休みーーー！　アタシの夏休みがああああああああーーー！」

「ああーーー！　せつかく並べたのこーーー！」

本日の後始末（書類の山）を山田先生と共に行つてこたのである。

「あれーーー！？　アタシーーー！？　しか喋つてないーーー！？」

第三十七話 織斑家での一日 前編（前書き）

懲りずにまたもや前・後編。

……いや、もしかしたら三分割になるかもしません。

第三十七話 織斑家の一日 前編

「……………」

ドキドキしながら、その表札を見つめる少女がいる。

『織斑』と書かれたそれを、シャルロットは何回も読み返しながら、深呼吸をした。

「（大丈夫、大丈夫…………。今日は家にいるって言つてたし、一夏は迷惑がつたりしない…………よね、たぶん）」

現在僕がいるのはIIS学園一年生寮の廊下ではなく、路上。『織斑』の表札とその下のインターホンと睨めっこをして10分。じりじりとした日光は容赦なくその金髪を照らしている。

「（うー、あー、えっと、本田はお田柄も良く…………じゃなくてっ）

「

そして、なんて切り出そうかと考へては、またボタンに伸びた手を引っ込む。

「あの～…………

「ひやつ……」

そんな事を繰り返していたところで、急に声を掛けられた。

慌てて僕は声のした方を振り向くとそこには一人の少年がいた。

「IJの家に御用ですかあ？」

「えつ、あ、えつと……」

見た田は僕とそんなに変わらない歳の男の子。身體は一夏よりやや高めで整った顔立ちをしている。長めの前髪はピンで止めしており、寝癖なのか無造作へアーなのか毛先が所々跳ねていて、目が少しつり上がっていた。

「あーもしかして一夏の友達かなんか?」

「え? は、はい」

「なんや、それならそつまつてくれればええの。ちよつと待ってなあ。今呼ぶさかい」

「え? え?」

突然現れた少年の口から一夏の名前が出たのにビックリして思わず「そうです」と正直に答えてしまった。

関西弁と言うやつだろうか? その獨特的な喋り方をする少年はなんの躊躇も無く織斑と書かれた表札の下にあるインター ホンを押してしまった。

『晃輝か? 鍵なら開いてるぜ?』

「あー一夏? なんかお密ひんが来とるんやけど?」

『密? ちよつと待つてろ』

インター ホンから聞こえる声。それが終わると家の玄関が開き、一夏が中から姿を現した。

「あれ？ シャル？ どうした

「あ、あつ、あのつー、ほ、本日はお口柄も良くな
くて！」

「？」

「え、えつと、ええつと……」

まだ心の準備が出来ていないと言つたのに一夏の登場。僕の頭の中
はパニックになりなにかいい言葉が無いかを脳内で検索した。

「や……」

「き?」

「来ちゃつた

「ぶふつー。」

えへつ と笑みを添えて 言つた後、とてつもなく後悔した。しかも、名前も知らない人に笑われる始末。

「（う、う、うわあああああ。僕のバカつ、僕のバカつー。）」

「そつか。じゃ、上がつて行けよ。あんまり盛大なもてなしはでき
ないけどな」

「へ、うん？ 上がつていいのー？」

「そりゃいいだろ。追い返す理由もないし。晃輝もいいよな？」

「ウキ？ と一瞬思った。

そういうえば、一夏はこの人の事をそう呼んでいる。近所に住む友達かなんかだらうか？ 先約があつたのにも関わらず、僕を招いて大丈夫なのだらうかと思つてしまつ。

「かまへんよ。えへっと……シャルさんでええんか？ オレは瀬戸晃輝や。よひしゅう」

「あ、シャルはあだ名です。名前はシャルロット・トヨノア。よろしく瀬戸くん」

「しつかし、一夏も隅に置けへんなあー。こない可愛い彼女さんがおるとは」

「か、彼女ー？」

「ん？ なんや、違うんか？」

いや、将来的にはそなりたいなあへつて思つてゐるナビ…………その、えつと、あのー……。

「何言つてゐんだよ。シャルは俺のクラスメイトで友達だよ

…………そりですよね。はい。

「それよりも早く入れよ。外だと熱いだろ? ほら」

「…………うる」

あからさまにため息と一緒に肩を落とす。先程までのウキウキ気分も半減してしまった。

「ああ…………シャルロットちゃん、一夏はああ言ひ奴をかい、これでめげたらあかんよ」

「…………うん。…………え?」

彼の言葉を聞いて僕は耳を疑つた。

今言い方、僕が一夏をどう思つているかを知つていてるかのよつな口ぶり。初対面なのになぜわかつたのかと思つてしまつただつた。

だが、そんな考えも一夏の家に上がつてからどうでもよくなつた。

「（一）、（二）が一夏の家かあ…………」

よくよく考えれば男子の家に上がつたこと自体初めてだ。
そんな事を思い出すと心拍数が上がりついへの自覚する。

「しかし、今日も暑いなー。ちよつと座つて待つてくれ、飲み物出してくれるか?」

「あ、一夏。これさつとき買つてきたアイス。ついでにスプーン持つて来てくれへん?」

「お、サンキュー。でも、そしたら千冬姉の分なくなるな……」

「後で夕飯の買出し行ってくれからその時また買つて来る」

「悪いな。じゃ、三人で食べちゃまおつ」

リビングのソファーに腰掛けたそんな一人のやり取りを見る。本当に仲のいい友達なんだなと思った。

「ねえ？ 濑戸くん」

「ん？」

「瀬戸くんって一夏と仲がいいよね？ 付合って長いの？」

なんとなく気になつたので質問してみることにした。

だが、彼から帰つて来た言葉は意外なものであつた。

「一夏とはつっこないだ会つたばかりやナゾ?」

「え？」

「あーオレの親と千冬さんが知り合いで、親が夏の間旅行に行くことになつて。そんで、夏の間この家に居候させもらつてるんや」

「へーそつなんだ。それにしても仲いいよね」

「せやあ。初日からオレと一夏はマブダチになつたんや」

「ま、まぶだしぃ？」

「親友つて意味や」

「親友かあ～」

素直に感心してしまう。出会った時間は短くとも一夏は誰とも仲良く出来る事が可能である。異性同性問わずそれが可能なのは凄い事だと思う。でも、異性に対しても少し自重してもらいたい。

「晃輝。変な事をシャルに吹き込むなよ。シャル、俺達は別に親友つて訳じやないぜ」

そんなこんなでアイスを小皿に乗せてやつてきた一夏。瀬戸くんが言つていた親友宣言を何故か否定している。

「なにつ！？　一夜を通して新境地について語り合つたやないか！兄弟！」

「ば、バカ！　シャルの前でその話をするなー？」

一体なんの話をしているのだろうと不思議に思い首を傾げる。

「ちなみに昨夜の議題は『ブラのホックはフロント派？　バック派？　どっちの方がそそられる？』やつた

「だあああああー！　言つんじやねえー！」

ボンッ！　頭が爆発したような気がした。

冷房が入つてこらはすなのに急に温度が上がつたよつて頭が暑くなる。

「で？ フロント派の一夏くん。オレのアイスのスプーンが無いんやけど」

「があああああー！ 僕の派閥までバラすんじゃねえー！ もう、黙つてろよ！ やして自分で取つて来い！」

「へーー」

瀬戸くんの途方もない話で一夏は珍しく声を荒げた。やっぱ男の子同士だとそう言つ会話をするだよね。

それに一夏はフロントホックの方がいいのか。

今度からそういうのを身に付ける事にしよう。

「はあー…………シャル、『めんな。気分悪くしただろ？』

「えつー？ そんな事ないよーー」

一夏が忘れたスプーンを瀬戸くんが台所に取りに行つている間、二人きりになつた状況で一夏が僕の心配をして来てくれる。僕としては恥ずかしい思いもしたけど、むしろいい情報を聞けたと思います。

「でも、悪い奴じゃないんだ。だから、晃輝の態度は気にしないでくれ」

「う、うん

やっぱり、一夏は優しいな。だから、好きになつたんだけだ。

ピンポン

「お？ 空配便でも来たのか？ やよつと出でへる

「う、うん」

一夏が席を立つて廊下に消えてから、ようやく肩の力が抜けた気がした。

どうも緊張してしまつと行動がうまくいかない。瀬戸くんがいたおかげでなんとか話題には困らなかつたけど、一人っきりになるとやっぱりだめだ。

「（もういえば、一夏の趣味ってなんなのかな？ 後で訊いてみよ
つと）」

次こそは自分からと思ひ、話題を再び考えておく。

「……なんやこの状況？」

それはオレが台所でスプーン探しに手間取つてやつとの思いでお手当での物を見つけた後やつた。

一夏とシャルロットさんはこのはずのリビングに見馴れぬ少女が
もう一人。

シャルロットさんと同じ金髪でまるで人形みたいに可愛らしいお嬢様がそこに立った。

「あ、晃輝。遅かったな」

「えへっと…………お友達？」

「ああ、じつちはセシリア・オルコット。シャルと一緒で俺のクラスマイトだ。セシリア、こいつは瀬戸晃輝。夏の間俺の家で居候してる」

一夏の紹介でセシリアと呼ばれた少女は腰を上げてお辞儀をする。オレもそれにつられてお辞儀する。

「初めまして、セシリア・オルコットですわ」

「あ、ども。瀬戸晃輝と言います」

そしてお互に自己紹介したといいでオレはリビングの床に腰を降ろし、自分のアイスに手を付ける。

「晃輝。セシリアがケーキ持つて来たんだけど食うか？」

「はあ？ でもそれ三つしかあらへんやん」

一夏が差し出した箱には三つのケーキが入っておった。だが、四人いる状況で三つのケーキでは数が合わん。必然的に一人ケーキに

あつつけへん。

チラリと女子一人を見ればなにか考え込む様にしどつた。

きつと、一人共一夏田当てで「一人きり～みたいな事を考えて来たんやろ。それが、思わぬ邪魔者がいて計画破綻してしもうて、威嚇し合つとる。

「夏め、」のハーレム野郎。

「オレはアイスだけでええわ。三人で食えや」

そのオレの言葉を聞いて少女一人の表情が明るくなつた。

「そつか。じゃ、準備してくるから待つてくれ」

「ほいほーい」

「晃輝。セシリ亞に変な話をするなよ

「善処いたしますう」

妙な釘を打つといった一夏はケーキの箱を持って台所へと姿を消して行つた。そして、残されたオレ達三人の間では妙な空気が漂つ。

誰一人喋らうといひん。なんや、この盛り上がりん合コンみたいな雰囲気は！？ お兄さん！つづつ嫌いやねん！ こうこうの！

「あ、あの……」

しかし、そんな空氣を打ち破ったのはセシリアさんやつた。

「瀬戸さんは一夏さんとはどうした？」関係で？」

あたりがりな質問。だが、それがいい！

「オレの両親が千冬さんと顔見知りで、両親が旅行に行つとる夏の間こつちでお世話になつてゐるんや。出会い事態はつこにないだ知り合つたばかりやけど」

もちろん、嘘である。

シャルロットにも同じことを言つていたがこれはエリが使える男とこつ事を隠すための千冬さんが考へた設定や。

まあ、学園に通つよつになればすぐバレるんやけど……。

「…………変わつた喋り方をされますのね？」

「なんや？ 関西弁つて聞いた事あらへん？ 言葉の訛りみたいなもんや」

「はあーやうなんですの。では、『』出身は関西なのですか？」

「せや。大阪つて言つよつぱりかつて言つと京都寄りなんやけどな」

「京都…………あのゲイシャで有名な！」

あながち間違つてへんけど…………やつぱり、外人にはそつちの方が有名なんかな？

「京都かあ～一度行つてみたいね」

「そうですね。日本の『和』を司つた街とお聞きしますし。着物と言つ物も一度袖を通してみたいですね」

意外と京都と言つ街に食いつく一人。

それから一人の間でガールズトークが始まり、たまに一人からの質問にオレは答える。

先程の沈黙が嘘のようにリビングには笑いが絶えへんかった。

「お、なんか盛り上がってるな？」

そして、ケーキの用意が出来た一夏が登場して一人はより一層笑顔になつたんのは気にせんでおこつ。

「じゃ、ケーキどうする？」

一夏がアイスティーといつしょに持つてきたセシリ亞さんのお土産ケーキは、苺のショートケーキとレアチーズケーキ、それに洋なしのタルトやつた。

「セシリ亞のおみやげだし、セシリ亞から選べよ

「そ、そうですね。では、わたくしはタルトをいただきます」

「ん、了解。シャルはどうする？」

タルトの皿をセシリ亞に渡し、一夏は続けて尋ねる。

その気遣いが一夏らしさぢやへらしこのやけど。

「い、一夏が先に選んでいいよ。僕は最後でいいから」

「やつはつなかで。お姉さんなんだし、せり」

「じゃ、じゃあ、その……母のがいいな」

「やつか。じゃあ、はー」

「あ、ありがとう。その、セシリアも、うれしかれや」

「いえ、どういたしまして」

セシリアさんは笑顔でニッコリと笑う。それを見たシャルロット自分が手ぶらで来た事を悔やんだりの少し暗い表情になりながらも渡された苺ショートケーキを小さく切り、口に運ぶ。

「わ、すいへんこしー…………」

「うふ。うまいなー、これ。家で作れないもんかなあ」

たしか、箱に書いてあった店の名前は『リップ・トリック』。そのシェフは国際大会に出て受賞しそうたつていう人気のあるお店やつたな。

って、ああ……シャルロットさんがまた落ち込んでる。

しゃあないなあ。

「一夏、せつかくやから他のケーキも食つてみたりせりやー、シヨ

一トケー キぐら こなり つまく 作れるかも しれへん で?

「 「え?」

「あ~そつかもな。シャル、一口くれよ

「 「えつー?」

「え?　だめか?　なんなら、チーズケーキと交換でもいいぞ」

「そ、それは食べさせ合いつこ……みたいな?」

「おつ」

「.....」

さりげなく出した提案。

女子一人には願つてもおらん状況であり、カップルならやりたいシチュエーションの一つ。

まあ、これはオレの願望でもあるんやけどな!

くわづー、自分で言つとしてアレやけど田の前でやらられる所を見るのは腹立つわ!!　そして、羨ましい!!

「あれ?　晃輝、どうしたんだ?」

「あ~実はコンビニでアイスもつ一つ食つてなあ。さすがに連續二つはキツイわ。腹が冷えたからちょっと部屋で横になつとる」

「おいおこ。いいから暑いからって冷たいもん取り過ぎだろ」

「オカンみたいな事いうなや。じゃ、シャルロッタさん、セシリアさん、後はガンバテなあ～」

「うー！？ー？ー？」

「？？」

去り際、女子一人はオレの言葉を理解したのか顔を赤くして俯いてしまう。唯一、オレの言葉を理解出来なかつたのは一夏だけやつた。首を傾げてどう言ひ意味だつと言わんばかりに悩んだ。

とりあえず、一夏に付き合はれて早起きしたからうつづく眠い。せやから、オレはこの眠気を覚ますために自分の部屋で仮眠を取ることにした。

HS学園の一室。大量の紙媒体の資料に埋もれる少女がいた。

「ま、まだ終わらない…………」

机に伏せていた状態から顔を上げたのはアタシ、八雲ツバメである。

ちなみに現在アタシがしているのは天燕、白式、紅椿、そして新しく来たクリムゾン・レイヴンの稼働データの整理であった。

さすがに一人でやるとこの量はかなりの重労働であり、山田先生が手伝ってくれる事になったのだがアタシと同じ様に机に伏せたままピクリとも動かない。

「もう、駄目だ。死ぬ…………」

ピリリリリリリ

意識が朦朧として来た時、自分の携帯に着信が入った。なんだ？と思いつつアタシは渾身の力を振り絞って手を伸ばし、携帯を掴み取る。

携帯の画面を見れば着信は篠からであった。

「もすもす…………」

『もす？ ツバメか？ 今大丈夫か？』

「現在進行形で死にかけてます」

『え？ それは、大変だな…………』

「で？ どうしたの？」

『いや、これから一夏の家に行こうかと思つたのだが…………』

なん、だと？ あの筈にしては思い切つた行動に出るな。

『一人じゃ不安で……それで、ツバメを誘おうかと思つたんだが、

無理か？』

「いえ！ 行きます！！ 40秒で支度いたしますーー！」

『え？ でも、大丈夫なのか？』

『バカ野郎！！ ここから抜け出す口実が出来たんだ！ コレを逃したら本当に死んでしまうっ！！』

『えーっと。アタシは今学園にいるから駅前集合でいい？ 今から出れば10時ぐらーに着くけど？』

『構わない。では、10時に駅前で』

『了解ーー！』

やつほーーー！ これでこの地獄から抜け出せる。悪いが山田先生、後は頼みましたーー！

あ、一応置き手紙は置いて行こう。えーっと、なんて書こうかな
……。

『山田先生へ アタシはまだエンジニアしていない夏休みをエンジニアしてきます。しばらく戻るつもりは無いので後の事をお願ひします。ハ雲ツバメより』

完璧だ。よし、いざ出発ーー！

あれ？ なんか大事な事を忘れているような
つか！！ まあ、いい

第三十七話 織斑家での一日 前編（後書き）

次回に続く

第三十八話 織斑家の一日 中編（前書き）

やつぱつ、三分割にしました。

第三十八話 織斑家での一日 中編

織斑邸は現在力オスな事になつてゐる。

「しかし、来るなら来るで誰か一人くらい事前に連絡くれよ」と、先程簡単に出来ると言つてござるそばを調理していた一夏が麵をすすりながら言つ。

「仕方ないだろ、今朝になつてヒマになつたのだから」

適當な言い訳をするのは筈。

「そうよ。それとも何？　いきなりこいつれると困るわけ？　エロいものでも隠す？」

無理矢理、話題を変えようとする鈴。

「う、箸で人を指さない。

「エロいと言えば、勉強机の引き出しを改造して一重底に入れてあつたなあ～後は押し入れの奥にあるいらなくなつた教科書の下に隠してあるのもまだ持つてるの？」

「ふふつ！？　な、なんで知つて　　あつ」

そして、鈴の話に乗っかりアタシが止めを刺すと見事に墓穴を掘る。

一夏はしまつたと言いたげな顔をしているが時遅く、アタシ以外の女子から非難の視線がビシバシと浴びせられた。

「わ、わたくしは、ケーキ屋さんに寄つていて忙しかつたので」

「「」、「」めんな。」つかりしあやつて」

わさび抜きのざるそばをさりあると食べ、セシリアとシャルロットもそれっぽい言い訳を言ひ。

「ちなみに私は突然やつてきて驚かせてやひついたのだ。ビリだ、嬉しいだらう」

そばつゆに次の麵を入れながら、しれつとラウラがそう告げる。その際、アタシ以外の女子四人はラウラを見て何か羨ましそうにしていたが気にしない。

「はい、」馳走様。空いた食器片付けてくるね」

「あ、そんなの俺がやるつて」

「自分の分だけだつて」

一夏が申し訳なさそうにしている所、アタシは半ば強引に自分の食器を重ねて織斑家の台所へと足を運ぶ。

しかし、筈にここに行くと言わされて来てみれば、見事に他の皆が勢揃いしていたのには驚いた。

駅で筈と待ち合わせをしていれば偶然鈴と出会い、結局二人で一夏の家に向かえば今度はラウラが一夏の家の前にいたのだ。そして家中に入ると先に来ていたセシリ亞とシャルロットがいるときた。

恋する乙女達の思考は皆一緒にでもこうのかな？

それと、アタシはここへ来る途中から何か大事な事を忘れており、それが何だか未だに思い出せない。

「（一体なにを忘れているんだろう？）」

台所のドアを開け、アタシは中に入る。

「「あっ」

そして、何を忘れていたのかを思い出した。

「な、なんで…？」

「おー八雲さんやん」

そこにいたのはつい先日現れた瀬戸晃輝の姿があった。
Tシャツに短パン。長く鬱陶しく伸びた前髪はピンで留められ、おでこがさらされている。

そして、なぜかさも当たり前の様に台所で自分用の昼食を作っていた。ちなみに、作っていたのはアタシ達と同じさるそばであった。

「ちょ、ちょっと…？　あんた…？　今、学園の人來てるんだよ。こんな堂々としていて　」

「あーそれは心配あらへん。千冬さんが万が一、一夏の友達が遊びに來た時は適当な嘘を言えって言われてるねん。ちなみに、設定は『千冬さんとオレの両親が顔見知りで両親が旅行に行つてる夏の間、

「……でも面倒をせてもいい『ひつか』」

「…………あ、そう」

瀬戸の話を聞いてアタシは納得する。
瀬戸の存在がバレないようになると言われているがそれはあくまで「EISが使える」と言う事であり、「彼自身の存在を隠し通せ」と言う訳ではない。

「んー。こんなもんかな?」

ちゅるりと麺を一つ摘み瀬戸はそれをする。
茹で加減でも見ているのだろうか?

そんな様子を横で見ながらアタシは持つてきた食器を流しへと入れた。

「あー八雲さん。そこにある麺つゆ取ってくれへん?」

「え? あ、うん」

「あんがとう。…………ほな、いただきます」

そして、台所のテーブルに出来あがったそばを置き、一人で食べ始めた。

「向こうで皆と食べないの?」

「いきなり、オレみたいなのが現れても気まずいやう。 食ったら挨拶はする」

「ふうん」

意外と空氣が読めて律義な奴と思った。

アタシは台所での用事は済ませたが、一夏達の所には戻らず瀬戸の座る真正面にある椅子に腰を降ろす。

「な、なんやねん?」

「うーん、特には。一人で寂しいかなあ」と思つて

「そこまでガキやない」

ムツとしたのか瀬戸はそばをすする音をより一層強くした。

「まあ～あなたとは色々話してみたかったし」

「話せる事なんて限られとるで?」

「やうだね。じゃ、初めの質問」

「するんかい」

「クリムゾン・レイヴンはどう?」

「どうつて?」

「感じたままを聞きたいの」

あれにはアタシの開発された技術が詰め込まれている。まあ、技術だけで形にしたのは束さんであるのだが。

今まで技術提供などは色々な所でやつてきた。だが、クリムゾン・レイヴンを調べればあれは天燕と同じE-SHIELDライブが積みこまれている。その技術だけはどこにも出してないので単純にそれを使う他の人の感想が聞きたかったのだ。

「ハ雲さんが考えたんやつてな、アレ。……その、自分の体によく馴染む。他のE-Sとチゴうてホンマ自然に。あれで空飛んだ時はメシチャ感動した。束さんからレイヴンの動力源を考えたんはオレと同い年の女の子って聞かされた時には正直驚いたで」

正直に嬉しかった。

瀬戸はアタシを真っ直ぐ見てそう告げた。嘘偽りも無く。それが、妙に照れくさくも感じ、口角が緩むのがわかる。きつと変な顔になつていてるのだらつと思い、思わず顔を伏せてしまつた。

「なんや？ どないした？」

「な、なんでも無い！」

そんな事を悟られないようにアタシはすぐさまこつも通りに振る舞つた。

「あれ？ 晃輝。もう、起きたのか？」

「え？ 瀬戸くん？」

二人でそんな話をしていると家の主である一夏とシャルロットが台所に姿を現す。一人の手には先程までざわるわばの乗つていたざると麵つゆが入つて皿、それと箸があった。

「おう、なんや脹やかになつとるな？」

「ああ、なんかかなりの人数になつちまつた。あ、シャル皿洗つてくれるか？」

「うん、任せて」

やつてきた二人はまるで新婚夫婦の様に流しで作業をして行く。

「といひでツバメ。ツバメは瀬戸くんと知り合いなの？」

一夏からスポンジを手渡され、皿を洗つていたシャルロット。アタシがここにいて瀬戸と話をしていたのを不思議に思い、そんな質問をして来たのだった。

「ううん。台所に来たらいたから自己紹介がてらお話してたの」

「せやねん。あ、シャルロットさん、この皿もお願いできる？」

「はーい」

シャルロットはそんな嘘を疑いもせず、それを信じ込む。そして、瀬戸から空いた皿を受け取り、一緒に洗い始めた。

「うつしー。洗い物完了ー！」

「じゃ、お茶淹れるね。暖かいのでいいんだよね？」

「おう、サンキュー。そうだ、晃輝。皆に紹介するからビング来

「いや。会つてない奴もいるだろ?」

「せやね。ほんなら、行こつか」

「じゃ、アタシはシャルロットの手伝いする」

「うん。じゃ、ツバメはコップを人数分出して」

一夏と瀬戸は台所から出て皆の所に戻り、残ったアタシとシャルロットは人数分のお茶を用意する事になった。

「始めてまして。ちょっとした理由でこの家に居候させていただいてます。瀬戸晃輝と申します」

「そう言つ訳だ。セシリ亞はさつき紹介したけど鈴とラウラは初めてだろ? 篠はこないだの祭りの時に会つたし」

そんなこんなでオレは現在一夏の紹介で自分の血口紹介を田の前にいる少女達にじとつた。

「先日ぶりだな。瀬戸」

「せやね」

話の通り、オレは篠ノ之さんとは以前会つてゐる。一夏の案内で連れられた神社の境内の娘とか。祭りのメインである神樂舞かぐらまいの後三人

で祭りを周り、それなりに仲良くなつた。

そう言えばあの神楽舞は凄かつたなあ。あれを一言で表現するんやつたら『美しい』やね。それだけ篠ノ之さんは格好よくて、綺麗やつた。

「ほー、それが関西弁と言う奴か。貴様、漫才といつやつは出来るのか？ 関西人は皆「メテイコント」が出来ると聞いたが」

突然の無茶ぶりをして来るのは銀髪眼帯の少女ラウラ・ボーデヴィッヒさん。どこでそのような事を学んだんかは知らんが、それは間違つた解釈やで。

「なんでやねん！ 関西人皆がそんな訳ないやん！」

だが、ビシッと手の甲で隣にいた一夏を叩いてもつた。

「おお、それがツツ『ハリトヒツヤツカー』」

そして、そんなツツ『ハリトヒツヤツ』を見て異様に嬉しそうにしどつた。

「嫁よ！ 今度一緒に漫才をやるつー。そして、私に突っ込んでくれ！」

「え？ ナニを？」

「下ネタかつ……」

ガスつとオレのボケに一夏がオレの脳天にチョップを喰らわす。しかも、割と本気のチョップである。

「フツ、やるやないか、一夏。瞬時にオレのボケを理解してツツコミを入れるとは……もつ、教える事は何もない」

「俺はお前から何も学んだ覚えは無いんだけどな」

なん……だと……。

「はーい。漫才以前の馬鹿をやつてないでお茶でも飲みな」

ど、これから一夏との漫才晝シヨーがヒートアップすると言つ所にハ雲さんが割つて入つて来る。

「お、サンキュー。やつぱ、食後は緑茶だな。はー、落ち着く」

夏であろうと熱茶なのは、一夏のこだわりやつた。食前は冷茶、食後は熱茶。

何ともジジ臭い。

「今ジジ臭いって思つたか?」

「己はエスパーか。その鋭さを他に回せや」

「はあ?」

オレの言葉の意味を理解出来なかつたのか一夏は不思議そうに首を傾げる。ちなみに、一夏以外の女子はそれを理解したのか、黙つてウンウンと頷いとつたのは言つまでもない。

「それで、この後はビーフしたもんかな。うちはあんまりみんなで遊

べるものとがないぞ」「

「まー、やう言つだらうと思つて、アタシが用意してきてあげたわよ。ほー」

そう言つて、凰さんは一夏に紙袋を手渡し、一夏は紙袋の中身をテーブルに並べた。

並んだのはトランプ、花札、モノポリーに人生ゲーム、その他様々なカードゲームとボードゲームが溢れておった。

「ほー、我がドイツのゲームもあるのだな」

そして、ドイツ国旗が描かれていた箱を見つけたラウラさんが腕組をしながら少し嬉しそうにしてした。

「あー…………それは…………」

「うーん…………」

しかし、一夏と凰さんはそのゲームを見て何故か口ごもる。

一同、どうした? と言いたげな顔をして、一夏がその理由を答えた。

「そのゲームだと。ツバメに勝てない」

「ふつふん」

えつへんと腕を組みながら血漫氣にする八雲さん。

「どういたしまして。」

そして、その理由を聞くとシャルロットさんが質問し、凰さんが答える。

「このゲームはカラー粘土で何かを作つて当てる行くゲームなの」

「え？ それでは、作る人間の技量に左右されるのではなくて？」

「そんなことないわよ。むしろ逆。上手く作り過ぎると、すぐに正解されてポイント入らないから。適度にわからないくらいがいいわけ」

「んん？ どういたしまつまつ、下手過ぎるとやはり不利なのではないのか？」

「いや、質問次第なんだよ。答えに当たりをつけて、質問で埋めていけば大丈夫だ。どっちかって言いつて、造形どうひつようひつ質問をするかがこのゲームの鍵だね」

それぞれの質問に経験者である一夏と凰さんが説明役に回り、それに答えてつた。

「それで？ なして、ハ雲さんには勝てへんのや？」

「「ツバメは戦略的に攻めてくる」」

「はあ？」

最後にオレが質問すると一人が声を揃えてそう答えた。

なんやねん。戦略的に攻めるつて？

「実際にやつてみるか」

「そうね」

「久々だから腕がなるねえ！」

そんな訳で皆でカラー粘土をこね始めた。

こねこねこねこね
。

「できたつ

「それじゃ、スタートね」

シャルロットさんからサイドロを振り、ゲームが開始される。

גָּדוֹלָה וְעַמְּדָה

「あ、宝石を得ましたわ」

「アタシの番だね。…………お、質問マスだ。では、シャルロッテ

1
3

「わなみに回ぬせ『はい』『いいえ』『わからない』よ。『いいえ』

を出されるまで質問出来るから、最初は大分類で始めるのがお得ね

シャルロットさんの田の前にあるカラー粘土は四本の支柱がある何かやつた。つっても、それはとてもわかりやすく、瞬時にそれが何かを連想させる。

ああ、なるほど。そつとかいな。

「それは馬だね！」

「あ、正解」

つまり、八雲さんは確実にポイントを取得する方法で攻めてくる。それぞれの造形物から一番わかりやすい物を選び、質問をするんや。それに、質問の仕方も上手い。凰さんのアドバイス通りに大分類から質問をし、確実にその範囲を絞り、確実に正解していく。

そんな調子でゲームが進行し、中盤。八雲さんがオレの『ダルマ』と篠ノ之さんの『井戸』を言い当て、確実にポイントを重ねていった。ちなみに八雲さんはシャルロットに『東京タワー』と言い当てられとる。

だが、それも計算の内。このゲームの特徴として中盤で正解されることにより、正解者だけではなく制作者にも得点が入るらしい。

しかし、さすがの八雲さんもこの二人の造形物には手を焼いたらしい。

「……バクテリア」

「違います」

「あ……」

思わぬ伏兵とでも言つたやうつか。
未だ言い当てられていないのはセシリアさんとラウラさんの二人だけ。

セシリアさんの粘土はこれまた奇妙な造形をしており、どんな質問をしてもかすりもしいひん。

ラウラさんも円錐状の造形物を作られておった。セシリアさんよりは形になつとつたさかい、質問はしやすかつた。それは、何かの道具の様に思えるが、つい先程篠ノ之さんの質問で「人より大きい」事がわかつたる。だが、それ以上の事は何もわからずじまい。

結局全員がギブアップした。

「で、ラウラ、これはなんなんだ？」

ずっと聞きたくて仕方なかつた一夏が早速口を開く。

「何？ わからんのか。嫁失格だぞ」

「いやまあ、それはいいから。答えは？」

「山だ」

.....。

「は？」

「山だ」

重要なので一回書きました。

「いやいや待て待てー。こんなに山は尖つていなーんだー。」

シシコム所はそいやない気がするが何も言わないでおぐ。
「むつ…………。失礼な事を言つ奴だな。エベレストなどせんじんな感じだひひ！」

「それならエベレストにて特定しねーとわからんねーってー。」

「エベレスト以外にも山つうのはある

えらい自信で自分の粘土に間違いは無いと言つ張るラウカさん。

「ま、まあ。ラウカ、正解されなかつたから減点ね。それで、セシリアのね？」

「あひ。誰もわからなーのかしら？」

いや、これを理解できるんやつたらすでに正解されとるはずなんやけど。

「我が祖国、イギリスですわー。」

.....。

やして、ラウラさんの時同様に沈黙がこの場を支配する。

「まつたく、みなさん不勉強には驚きますわ。一回一回世界地図を見る事をお勧めします」

『イギリスの形を知らないわけじゃねーよー』とは、全員が思つたやうに。しかし、ラウラさん以上に自分の造形物に自信を持つとするセシリアさんを見とつたらそんな気が失せてもうた。

「じゃ、じゃあ。今度はあたしと一夏が参加してもう一回やりましょ」

そして再度全員が手渡されたカラー粘土をいね始めるのであった。
なんだかんだで、そないな事でオレ達の時間は過ぎて行つたのであつた。

ハサウエ園でのとある一室。

「や、やつと終わりました.....」

私が山田真耶は八雲さんに押しつけられた資料整理をひとつ終えたところである。

あまりの多さに八雲さん一人では辛いだろうと思い、手伝ったのが間違いだった。おかげで途中から意識が飛んでしまう。そして、次に目が覚めた時には八雲さんの姿は無く、代わりに置き手紙だけがあつた。

それを見た時は再び意識が遠のくかと思った。この量を一人でやれと？

だが、そんな絶望に絶句している私でも励みがあったからこそ頑張れた。

織斑先生からの連絡があり、飲みに行かないかと誘われたのだ。

それからは今までにないハイスピードで膨大な資料をやつつけた。

あの織斑先生が私を誘ってくれた！

これは滅多にないことだ！！

全身全霊で手を動かせ！！

この苦の先にあるのは祝福の一時なのだ！！

頑張れ！ 山田真耶！！

結果、後三日は処理に掛ると言われる量が彼女の手によって処理

されたのだった。

第三十八話 織斑家での一日 中編（後書き）

まだ、続く。

第三十九話 織斑家での一日 後編（前書き）

ちよつと悶田です。

第三十九話 織斑家での一日 後編

死地へと赴く士たち。それはどんなイメージなのだろうと聞かれれば、たぶん俺の目の前にある光景がそうなのだろう。

「んつ…………しょ。ああもひつ…………」のつ、ジャガイモつ、切りにくいつ

鈴が、危なっかしくはないものの、ざつくりざつくりとジャガイモの皮の実ごとそぎ落としていた。

その横では、ハッシュドビーフを作っている『ばず』のセシリアが、ケチャップを豪勢に鍋へと流し込んでいた。

「おかしいですわ。写真と色が違います。赤色が足りませんわね」

「お、おい。そんなに大量に……。ああっ！ 火が強すぎるー。」「（）心配なく、篝さん。わたくしの料理は最後で挽回するのが常ですのです」

「料理は格闘や勝負ではないぞ……」

はあつとため息を漏らす篝は割烹着にほつかむりという和エプロン姿で、料理自体もしつかりと作っていた。メニューはカレイの煮付けである。

「シャルロットは何を作っているのだ？ 焼き鳥か？」

「違うよ、ラウラ。これは唐揚げ。今下味をつけるといひなの」

「ふむ、さうか」

言いながら、ラウラは大根のかつらむきを見事に行なっている。その手つきは手馴れたもので、プロでさえ息を飲む。……使っている刃物がサバイバルナイフなのだから。

「う、ラウラ、なんかすごいね。そういうの、ビビで覚えたの?」

「見よう見まねだ。テレビでコックがやっていたのを真似してみた「真似しただけでそこまで鮮やかになるものなんだ……」

「ナイフの扱いには長けているのでな。ジャングルでは、木を加工できなければトラップの一つも作れない」

「そ、それはともかく、メイヨーはなに?」

「おでんだ」

.....。

「おでんだ」

「こ、一回言わなくともいいよ。でも、あれって冬の料理じゃないの?」

「夏に食べていけないといつ決まつはない」

「それはそつだけど…………。あ、ラウラ、大根余つたらわけてくれるかな？ 前に一夏が言つてた大根おろしを混ぜる唐揚げにしたいから」

「…………」

「ラウラ？」

ダンツ！ と、いきなりラウラが大根を真つ二つに叩き斬る。

「 ああ、すまない。集中していたのできこえなかつた。なんだ？」

「え、えつと、大根が余つたら欲しいなつて…………」

「 そつか。わかつた」

ダンツ！ 正確に、五センチ幅でラウラのナイフが大根を分断していく。

「 軒る！」

ダンツ！ ダンツ！ ダンツ！ と、エプロンドレス姿の眼帯少女が大根を軒つていく様は、異様を通りこしてシユールだった。

そんな女子一同の料理風景が、とにかく気になつてしまふがない様子で俺は何度もキッチンの方を振り向く。

「 余所見しとる余裕があるんか？ 今や！ ハイパー モード！ ！」

「あ、ズリイ！」

リビングのテレビ画面。上下に一分割された画面には『YOU WIN』と『YOU LOSE』の文字が表示されていた。

「よっしゃー！ ロレで3戦2勝！」

「へへへ……」

「なんや、やないに台所が気になるんか？」

「まあ……不安要素があるもんだから」

「誰とは言わないが……。」

さて、なぜこのような状態になつたかと言つて、それはちょっと
前まで時間が遡る。

俺達がバルバロッサでそれなりの盛り上がりを見せていると、そ
の途中で千冬姉が帰つて來たのだ。だが、帰つて來て早々にまた出
かけてしまい、せっかく作ったコーヒーをどうしようかと思
つていた所。結局皆に振る舞うことになつた。

そして、女子達が毎日ゼリーのお礼と言つ形でこうして手料理を
振る舞つてくれるこことになつたのだ。

「はー、一夏くん交代だよ」

「ところでツバメは料理しないのか？」

女子達が料理をしてくる間、暇な俺達は「E-S/V-S」で対戦を

していた。しかし、そんな女子の中で料理をせず、俺達と囁つぶしをしている女子がいる。

八雲ツバメだ。

ツバメは俺からゲームのコントローラーを受け取ると鼻歌交じりに機体を選択しながら「こここの理由を出す。

「だつてアタシ料理なんて簡単なのしか出来ないんだもん。皆みた
いに手の込んだのは出来ない。」

「いや、胸張って言われても……」

「いいじゃん。あ、今度はテンペストで行こ~

「うしほ、ツバメと晃輝の対戦が始まる。俺はする事が無くなつたのでソファーに腰を降ろし、その対戦を観戦するのだった。が、やはり、台所の様子が気になつて気付けば視線はそつちに行つてしまひ。

「出来たー！」

そして、時がやつてきたのだった。

そんなことはなでやつて老た最後の晩餐
先どい、夕飯。

俺の目の前にはツバメ以外の女子が作った手料理の数々が並べられていてる。

「おおー、みんなメシチャレルのやん！」

T

「ん?
どないしたんや?」

「いや、なんでも

俺の隣に座る晃輝がみんなの料理を見て絶賛していると女子達は少し照れくさそうにしていた。その間俺はツバメと田を合させ、苦笑いする。

そう、並べられた食事に異様な皿が一つだけあつたのだ。言わずもがな、セシリアのハツシユドビーフだった。見た目こそは普通のハツシユドビーフ。しかし、それが放つ匂いは異常なまでに鼻を刺激するのである。

「（辛い！ セシリ亞の奴ヶチャップの代わりにタバスコでも入れたのか！？）」

「んじゃ、これから頂いてー。」

「あつ

晃輝はようによつてセシロアの作ったハッシュショーブーフを手にしてしまった。

そりそり、勢い良くそれを口に入れて行く。

「ほな、いただきますー。」

そして、俺とツバメは手を合わせて合掌した。
別に日々の食事に感謝しているわけではないぜ。

「なんや？ 念入りに、がしょ……ひ……こ……よ……つて……」

「…」

バタン。

晃輝が呑まれないようになると祈っていたんだ。

「…………うわっ、なんか一段と破壊力が増してない？」

「い、いかん！ なんか拒絶反応起こして体が痙攣していくぞー。？」

「わ～！　瀬戸君！～！」

「まさか、これが噂に聞く体を張つたりアクション芸と書つやつかも？」
実におもしろいぞ！　瀬戸！～！」

晃輝が前乗りに倒れると一次災害が起じる。またもや、よりによつてセシリアのハッシュコドビーフに顔を突つ込ませて氣を失つてしまつたのだ。筈の言づ通り、体がビックンビックンと跳ねあがつている。

それとワウ。これは芸でも何でもない。必然的なアクションだ。

「…………せうままでしてわたくしの料理が食べたかったのかじり？」

…………。

本当に、本当に不思議そうに首を傾げるセシリア。
自分の所為でじつなつた事を自覚していない所に思わず言葉を失つてしまつ。

お前は一度自分の料理を口にしてみた方がいいぞ。

「…………つてか、ヤバいよ。瀬戸くん」

「うわーーー！　そうだった！　晃輝！～　しつかりしろーー！」

ツバメに言われて俺は晃輝の体を起こし、顔に着いたハッシュコドビーフを拭き取る。そして、晃輝の意識を覚醒させるために往復ビ

ンタをお見舞いした。

え？ それじゃ余計に気が沈むつて？

大丈夫だ。問題無い。

「…………うう」

「晃輝！ 良かつた！？ 無事なんだな？」

「…………ああ、ばあちゃん。今そっちに行かかい」

「わー————！ 無事じやない！？ 晃輝！！ そっちに行くな————！ ってかお前、ばあちゃんの顔は知らないだろ————！ きっとそれは人違ひだ————！」

何かがいけなかつたらしく、晃輝は危険な状態だった。

有りもしない光景を見ているのだろうか、晃輝はとんでも無い事を口にしており、俺は必死に晃輝の意識を覚醒させようと頑張った。

「ハツ————！ オレは今何を————？」

「よかつた！ 今度こそ無事だ————！」

「なにを言つて うおわつ————！ なんや————！ 口がメツチャ辛い————！ 痛い————！ 辛痛い————！」

「とりあえず、水を飲め。それで、少し横になつてろ。な？」

口を手で抑えて晃輝は激しく首を縦に振つた。手渡されたコップ

の水を一気に飲み干し、落ち着きを取り戻した晃輝は、ツバメが用意した濡れタオルを口に当ててソファーに横になるのだった。

「凄まじいわね。……あ、一夏。見た『ドラマあるからテレビ付けていい?』

「別にかまわないけど……あんまりひんぱんするなよ」

「わかつてるわよ」

セシリアの料理が起こした騒動がひと段落つくと俺達は食事を始める。

もちろん、セシリアの料理には手を付けずに。

その途中で鈴が俺にテレビを見る許可を求め、それを承諾するとリモコンを持ち、テレビの電源を入れた。

『臨時コースです。先程、世界的有名なIS開発者、篠ノ之束博士からの各国の政府、メディアに衝撃的な事実が通達されました。なんと、世界で唯一ISを動かせる男性、織斑一夏君に続き、新たにISを動かせる男性の存在が公表されたのです。その男性の名は『瀬戸晃輝』君です』

「…………え?」「…………」

そして、俺達は絶句した。

テレビでは緊急特番がやっている。番組ロゴには『世界で一番田にISを動かせる男。その正体は…』などが書かれており、晃輝の顔写真も一緒に[写]し出されていた。

「な、なによ。これ…………」

「「これは瀬戸なのか?」

「え? HSを動かせるって…………」

「瀬戸さんって瀬戸さん?」

「そんな馬鹿な事が…………」

順に鈴、簫、シャル、セシリ亞、ラウラが言つて、口の皿を凝つていた。

これは何かの間違いだろ?と思つているのだ。

だが、番組は晃輝がHSを動かしている映像を流し、それは明確になつてしまつ。

ちなみに、ツバメはしまつたと言わんばかりの表情で深くため息を吐いていた。

「う~ん…………」

その場にいた一同は現在ソファーに横になつて、うめき声を上げている男子を見つめて言葉を失つてしまつ。

「お待たせしましたっ」

駅から少し行ったところにある商店街の、その地下にあるバーを切らしてやってきたのは山田先生事山田真耶だった。

「すまないな、急に呼び出したりして」

「いえいえ。どうせ部屋で通販カタログ眺めていただけですから」

もちろん、嘘である。

つい先程までハ雲さんが放りだした資料の片付けをして、体力的にキツイのであるが、目の前にいる織斑先生 千冬さんに余計な心配をさせないために嘘をついた。

そして私が席に着くと千冬さんがマスター注文をし、出てきたビルで私達は乾杯をする。

「でも、今日はどうしたんですか？ お休みだから、帰省されたんじゃ？」

「そのつもりだったんだがな、家に女子がいてな」

「女子！？ おおー、もしかして織斑君のですか？」

「ああ、そうだ。うちの生徒 というか、いつもの面々だ」

「といつことは専用機持ちが七人ですか。戦争が起こせる戦力ですね」

「一人忘れているぞ。瀬戸も家にいるから八人だ」

「ああ、そう言えばそつでしたね。どうです、瀬戸君の様子は？」

「ただで世話をなるのが^{しゃく}癪^{しゃく}なのか一夏と分担して家事をしてくれている。アイツの料理も一夏に劣らぬ、なかなかだぞ」

「へえ～、料理が出来る男子はカッコいいですからね」

織斑一夏君は優しく、とても良い生徒だ。それでいて女子に人気がある。ただ女子高に唯一の男子と言う事で人気があるのかと思えばそれだけでは無い。単純にあの子といふと楽しいと思える生徒もチラホラいると聞く。

瀬戸晃輝君はどうだろうか？

一夏君同様に世界でE-Sを動かす事が出来る男子。まだ、ちゃんと話した事が無いので何とも言えない。だが、千冬さんの話を聞く限りでは一夏君同様に優しい印象を持てる。それでいて、一夏君よりは気が利く所があるとか。

「アイツが学校に通うとなれば、一夏にもいい刺激になるだろ？」

「と言いますと？」

「勉学、実技、何でもだ。瀬戸の人生観は一夏よりも大人だよ」

「へえ～」

意外。と言つては失礼だがあの歳で大人びた考えが出来るのは難しい物がある。

自分が高校生の時は色々悩まされて、考え、成長し、今に至るの

だと思つている。

「うど、なんだこんな時に？ すまん、ちょっと電話で出でへる」

「はい」

そんな会話をしていると突然千冬さんの携帯に着信が入ったのだ。電話に出るために千冬さんは席を立ち、店の外へと出て行く。つと言つか、私の携帯にも着信が入つた。さすが、最新機種。地下にいても電波はしっかりと来ている。

携帯の表示画面にはIS学園と書かれている。

「もしもし？ 山田です」

『山田先生！ テレビ見てください！ 大変なんです！！』

「え？ ちょっと、なにが……？」

『いいからテレビ…』

「は、はいっ…！」

電話の向こうからは慌ただしい声が聞こえ、テレビを見るように指示をする。生憎、店内にはテレビなどは無く、携帯のワンセグ機能を起動させた。

そして、驚愕する。

『臨時ニュースです。先程、世界的有名なIS開発者、篠ノ之束博士からの各国の政府、メディアに衝撃的な事実が通達されました。

なんと、世界で唯一 IIS を動かせる男性、織斑一夏君に続き、新たに IIS を動かせる男性の存在が公表されたのです。その男性の名は『瀬戸晃輝』君です』

それを見た時、自分の目と耳を疑つてしまつた。

情報操作は完璧だつた。

あの時来ていた研究者達にも厳重に口外しないようにと契約書を書かせた。

学園内の誰かが口外したとは考えにくい。

しかし、ニュースでも言つていた通り、『この人物』だけはどうしようにもなかつた。

篠ノ之束博士。瀬戸晃輝を学園に送り込んで来た張本人。

目的は何と考えるが、凡人にある人の考えなどわかるはずも無く、早々にそれについて考えるのを止めた。

それよりも、この事態に対する対策を早急に実行しなければならない。

「『山田先生』。仕事だ」

そして、すっかり仕事モードになつた千冬さんが戻つてくる。

「はい、連絡は受けました。私はすぐに学園に戻ります」

「私は家に帰つてアイツを確保してくる」

「わかりました。では」

ああ～せつがくの千鶴さんと一緒に楽しい時間を過ごしかねと思つたのに……。

「あ、そうだ。織斑先生」

「なにかね？」

大事な事を忘れるといひでした。

「八雲さんがまだいたら連れて来てください」

私がそう言つと何故か織斑先生は顔が蒼白になり、顔を引きつつていた。

場所は変わつて織斑邸。

「なあ？ なしてこいつなつとるんや？」

「知るかよ」

「…………なんで、アタシまで」

現在リビングの床には俺の左右に正座させられた完全復活した晃輝とツバメの姿があった。もちろん、俺も一人に挟まれ正座をしている。

事の始まりは例の一コースを見て女子達が「正座」と一言冷たく言ったのが始まりだつた。そして、田の前にあるソファーには鈴、セシリ亞、シャル、ラウラが真剣な顔をしてこちらを見ていた。ちなみに、篠は台所から持ってきた椅子に腰を降ろし、こちらも真剣な表情をしている。

「あの一コースはなんだ?」

口を開いたのは篠だつた。だが、凄まじいまでの気迫をこちらに送つて來るので自然と俺は身を小さくしてそれに答えた。

「そのままの事で」「やれこます……」

「瀬戸がEISを動かせると?」

「はい」

「なぜ黙つていた?」

「それについてはアタシが話す」

なぜ、自分達に秘密にする必要があったのかと詰つ質問をする篠。だが、その理由を答えるのは俺では無く、隣にいるツバメだった。

「男性でEISを動かせるって事は一夏くんがEIS学園に入學する前

みたいな騒動が起るんだよ。マスクミ、政府、各研究所から人が雪崩のように彼に押し寄せてくる。だから、学園側は瀬戸君の存在を彼が編入するその日まで内密にしようと考えたの」

「学園に入つてしまえば手出しできんからな……」

ツバメの説明に納得したのはラウラだった。だが、続けてラウラは言つ。

「だが、それを私達に秘密にする必要がどこにある？ 学園に入れば私達にはバレるだろ？」

「学園側から情報規制が引かれていたの。軍でも良くあるでしょ？ 秘密事項を知った人は例え身内や親しい人でもその内容を喋ると処罰を受けるつて」

「…………なるほど。たしかに」

「まあ、学園からの処罰なんて反省文の様な物を何十枚と書かされて期限付きで監視されるつてぐらいだと思うけど」

いや、それはそれで嫌な気もするなあ…………。

「加えて瀬戸くんの工事はアタシの天燕と同系統の設計プランを探用した『束プラン』と来てる」

「…………各国が喉から手が出る程欲しい逸材ですわね」

「セシイの言う通り、もしかしたら強行手段を取る人だっているかも知れない」

「それなら早く学園に匿つてもひつた方がいいんじゃない?」

「政府が運営しているとは言え所詮は『学校』。生徒一人が入るにしてもそれなりの手続きで時間が掛る。まあ、それはもう大丈夫なんだけど。もう学園側が動いてると想つし、もうすぐ迎えが来ると思つよ」

ツバメはテキパキと皆の質問に答えていた。それを横で見ていた俺と晃輝はその鮮やかさにはあーと息を吐き、素直に感心してしまつ。つてか、いつの間にそこまでの手はずをしていたんだ?

「…………せやけど、やつぱり話を騙しどったのは変わりない。ホンマ。すみませんでした!」

「うん、確かに騙していると思つと気が引けたな…………皆、『ごめん』

「規制が敷かれたとは言え、やつぱり友達に隠し事は、ね?」

そう言つて、俺達は素直に皆の前で頭を下げた。

そんな俺達の態度を見ると女子達はお互いの顔を見て、一斉にため息を吐いた。

「別に怒つてなんかいないわよ

「…………え?」「」

鈴の一言に俺達は声を揃えて反応してしまつ。

「やうですわ。わたしくし達はただ事情を聞きたかっただけですわ

「えへっと…………怒つていらっしゃらないのですか？」

「そこまで器は小さくありません」

セシリアは相変わらず凛とした態度でそう告げる。正座をして頭を下げていた俺達はお互に顔を見合わせ、これは一体どう言つことなのだろうと考えた。

「もしかして、皆が真剣な顔をしてたから怒つていいと思った？」

そして、そんな疑問に答えてくれたのはシャルだった。

「事が事なんだよ？ そりや、皆も真剣な顔になっちゃつて」「

「それに事情を理解しなくてはいけないも手助けできん」

シャルの話に続いてラウラが言つ。

「確かに貴様が抱えている事態は深刻な物だ。それを人に喋るなど出来る訳がない。だが、私達は知つてしまつた。それ故、私達に出来ることがあるのではないか？」

そう告げるラウラの瞳は真つ直ぐ俺達の方に向いていた。

それは、他の女子も一緒に力強かつた。

そして、理解する。

んだな。

そうか、ここからは真剣に晃輝の事を考えてくれていた

真実を伝えなければ、今日一日だけの出会いだと思つていた彼女達。

たつたそれだけなのに事情を知ればこいつやつて手を差し伸べてくれる優しい奴等。

「……ハハッ」

力無く笑つたのは晃輝だつた。

そして、いつもの笑顔で俺の首に腕を回し、寄り掛つて言つ。

「一夏、みんなええ子やな」

ああ、そう思つよ。

「当たり前だろ。俺の大切な『仲間』だからな！」

俺がなにがなんでも守り通そと誓つた『仲間』達。皆優しくて、いい奴なんだ。

でもな、晃輝

「お前だってその『仲間』になるんだぜ」

これから共に過ごす、新しい『仲間』。

晃輝はそんな俺の言葉を聞いて少し目を見開いていた。が、それは一瞬で元の笑顔に戻り、首に回していた腕をグイッと引き、俺の

首を引っ張る。そして、ガシガシと俺の頭を掻いた。

「はつ、よう言ひつけ。模擬戦でオレを仕留め損なつたくせに」

「邪魔が入らなかつたら俺が勝つてたね！」

「ああン？ それは聞き捨てならんなあ…………もつこつぺんやつてもええんやで？ こんなにやろ」

「うわっ！ やめろよ！ ハゲる！」

「生意気な事言つ奴はハゲてまえ！」

必死の抵抗により解放された俺は肩で息をしながら晃輝から離れた。晃輝はギヤハハと笑つており、そんな俺達のやり取りを見ていた女子達もクスクスと笑つっていた。

「うわっ！ 馬鹿な事やつて笑えるつていいよな。

「お、そうだ。晃輝」

「なんや？」

新たに加わる仲間この言葉を送りつけ。

「おうじさん、
ハサミ園へ！」

おまけ

千冬「よし、瀬戸。今日からは学園の方で宿泊してもうつからな」

晃輝「了解しました」

千冬「それと八雲」

ツバメ「はい？」

千冬一 山田先生が大変」立腹だつた ようでお前も来い！」

ツバメー！？

千冬「それと、どうやら追加で処理をしなければいけない資料がある。なに、今から寝ずにやれば終わるだろ」

ツバメ「げえつ！？」

千冬「だが、机にかじり付くのもいかん。よつて、明日は私が特別に実技講習をしてやろう。どうだ、嬉しいだろ?」

ツバメ「大変恐縮ですが遠慮いたします！…」

千冬「答えは聞いていない。さ、行くぞ」

ツバメ「ぎや――――――」 御助けを――――――

一回「烟浦」

第三十九話 織斑家での一日 後編（後書き）

次回から一学期。ついに、あの人が再登場！

第四十話 始まり、そして早くも再戦。（前書き）

くて、ていへんだ―――！　ツバメちゃんの活躍がまつたくない！？

くな、なんだつて―――！

本当に「めんなさい」。じ、次回こそは……

第四十話 始まり、そして早くも再戦。

「どうわけで今日からこの学園で勉強する事になりました。瀬戸晃輝です。顔をよろしくお願ひします」

「「「「キヤ——————」」」

「わつー? なんや、この超音波染みた怪音はー?」

「今度こそ本物の男子!」

「織斑君並みの美形!」

「今こそ思える! 地球に生まれてよかつた——————!」

HIS学園の一学期。その初日におれ、瀬戸晃輝は編入したクラスで自己紹介を済ませると今のよつに女子達が騒ぎ始めるのやつた。

『しても、ホンマ女子しかおらへんな。

え? 一夏はつて?

「「「「『一組も』れでかつる————』」」」

そないな訳です。

なんの勝負をしてこらんやろ？

「ねえねえ？ 瀬戸君つて工事を動かせるからこりこりいるんだよね？」

「趣味はなに！？」

「今度学園を案内してあげるよ～」

「あはは……えへっと……」

窓際に並ぶ一番後ろに並ぶ席。そこを中心の人だかりが出来ている。それを囲む女子達は中心にいる男子を囲んで騒いでいた。
それを離れた席から見ている女子は思う事があるらしく短くため息を吐いている。

凰・鈴音だ。

「…………あいつが、つちのクラス、…………」

瀬戸晃輝とあたしはちょっとした機会があつてアイツと顔を合わせている。その時は一夏の友達と言う事もあって一緒に遊び、結構楽しい奴でいい奴だと思った。だが、アイツもIISを動かせると言う事実を知つて驚かせる。

一夏以外にIISを動かせる男子。それがあたしと同じクラス、…………。

「へえ～！ 瀬戸君つて関西出身なの？」

「せや。でも、大阪やのつて京都の方やで」

「京都つて中学の修学旅行で行つたよ～」

「あかん、あかん。学校の規則で回つとつたら京都の素晴らしさはわからへん。もし、京都に遊びに行くよつやつたら声掛けてや。とつておきの場所案内したるよ」

「うんうん～ 絶対だよ～」

さつきまで女子に囮まれてあたふたしていいたにも関わらず、今では状況に順応している瀬戸。

「（何と言つか、意外と軟派？ なんだか弾みたいな奴ね。でも、色々と馴れてるのかな？）」

そう思つと、あたしはまた短くため息を吐いてしまう。

一夏もアイツみたいにもう少しあたしに気を使わせるスキルを身に付けて欲しいと思う。まあ、誰構わず話しかけるのは遠慮しても

らしいたいが……。

「なあ？ 凪さん」

「ツー？」

色々と考え込んでこるとこつの間にか瀬戸の奴があたしの目の前に現れた。

「いや～知つとる顔があるって安心するわあ。一年間…………って、半年もあらへんか。とにかく よろしくうー！」

「え？ あ、そ、そうね。これからようじく

不意に出された瀬戸の右手。一瞬何が何だかわからなかつたがすぐさまその意味を理解した。だから、あたしはそれを自分の右手を差し出してそれを握る。

「おーい！ 晃輝！」

「あ、織斑君」

「なに？ 一人つて知り合いなの？」

そして、あたし達が改めて挨拶をしていると隣のクラスからやつてきたのだった。思わず、あたしは瀬戸の手を握っていた手を慌てて引いてしまつた。

「おーい、一夏どないした？」

「なに言つてるんだ？ 一時間目は一組、二組で合同実技だぞ。男子は専用の更衣室で着替えないといけないから迎えに来たんだよ。つてか、急げ！ ここから更衣室まで遠いから時間がギリギリなんだよ！」

「うお！ マジか！？」ほな、またな～凰さん

「ル」

あたしは慌ただしく出て行く一人を見送つて思わずため息を吐いてしまうのだった。

「者ども…… である……」

「うわっ！？　来た！！　急ぐぞ、晃輝！！」

「どこの武家屋敷やねん!? うわー! 男としてこの状況は嬉しくやけどなんか怖い!!」

「それでは瀬戸。ISを展開しろ」

さて、早速だが妙な展開になつた。

実技講師である織斑先生に指名され、周りにある女子の視線が才に注がれる。

……やりすらい。なんや、この空気は！？

クラスでの自己紹介もそうだったがもう一つクラスが加算された事によつて人数は倍。それが一斉にこちらを見とる。

先日会つた一夏達も一緒に、皆、オレの事を見とる。

「どうした。やつをとしろ」

「はい」

織斑先生に言われるままオレは集団の前に立たされる。

さらに視線が注がれ、氣まずさが倍増しよる。

よし！ ならば！」で一発！！

「へへん～し ぐばつ！？」

「普通にやれ」

織斑先生は手にしていた出席簿を大きく振り被つてオレに投げつけた。出席簿は見事にオレの眉間にヒットし、オレは地面に倒れた。

人は第一印象。それが見事に失敗した。

「は～い」

そして渋々エリの展開をする」と云。

光の粒子と共に現れたのはオレのパートナーであるクリムゾン・レイヴン。

「あれ？ 前と形が違う？」

「前のは初期設定だよ。そして、あれは一次移行した姿」

「なるほど、それでか」

そんな会話をしどたのは一夏とハ雲さん。

にしても、なして女子のIISスーザンてあないにエロいんやろ？
もう、体のラインが丸わかりやん。

「よし、それでは織斑……と、凰、オルコット。クラス別にタッグを組んで模擬戦をしろ」

「「「え？」」」

「はやくしる。時間が無いぞ」

「「「は、はーーー」」」

「おー怖つ……。

織斑先生は三人を気迫だけで威圧すると三人はビビりながらも自分のIISを開闢させる。そして、凰さんはオレの元へやって来て、残りの二人はオレ等から離れた場所でスタンバイをするのやけど……。

「…………なんで、」しないな事になつてしまつたやう

「」」」ちが聞きたいわよ

何故か少し不機嫌な凰さん。何かを見ながらふくーっと頬を膨らませて不満そうにしどた。なんやろ? と思ふオレは凰さんが見とる先に視線を向け、納得した。

「セシリ亞、よろしくな

「え、ええ。ではフォーメイショーンは

和氣あいあいとオレ等に対する作戦会議をしどる一夏とセシリ亞さん。

凰さんはそれが氣に入らないらしく、ギリギリと不快音を立てて歯ぎしりしどる。

「しかし、アレは確かに氣に食わんな

「え?」

「よし、決めた! ボロす。とつあえず、ボロす。そんでもつてボロす!」

「え? ええーー! ?」

「自分以外でいい思いをしとる野郎はとつあえず爆発しちゃ——

!」

オレの魂の叫び。

だが、そんな叫びも空しく隣にいる凰さん以外には聞こえていない。もちろん、それはEVAによるプライベート・チャンネルの所為なのだが。

そして、そんなどうでもいい叫びを聞いていた凰さんはキヨトンとした顔をしてオレを見て、軽くため息を吐いた。

「はあ～…………まあいいわ。一夏をボロすのには賛成だし」

「あ、うん。せやつたら、いい考えがあるんやけど」

「なに?」

「えへつとな.....」トトロ.....

オレは自分の考え付いた作戦を耳打ちする。そして、その内容を聞いた凰さんはそれを理解して、不敵にも笑つた。

「うおっ、なんか寒い」

ゾクつと何か冷たい物が俺の背筋を舐める様な感じがした。

「一夏さん、大丈夫ですか？」
体調が悪いのでしたら見学されていた方が……」

「いや、大丈夫。平気だ」

そうだ。こんな所で休んでいられない。

なにせ、あの時の決着をここでつける事が出来るのだから。

「さう、一夏。あの時のケツ」

前は邪魔が入ってちまたからな」

「あの大魔神の魔力で、この魔界を守るために、おまかせして？」

晃輝がそう言い終えると俺達は所定の位置に付き、スタンバイする。

『それでは！始め！！』

開戦の合図。それと同時に俺と晃輝の雄叫びがグランドに響く。

初っ端からのイグニッショーン・ブースト。一気に距離を詰め、零落白夜の間合いへと持つて行く。晃輝もそれをわかっていたのかクリムゾン・レイヴンのウイングスラスターを吹かしていた。

そして、俺達の距離は一気に

開いた。

「え？」

「後退しながらのイグニッショーン・ブースター…？」

セシリアの解説によつて俺は晃輝が何をしてゐるかを理解した。

晃輝はあれだけ啖呵を切つておきながら俺から逃げるように飛んで行つてしまつたのだ。しかも、バック走の様に体の正面はむずむづに向けて。

「なつ！？　逃げるのか！？　晃輝！？」

「わーはつはつはつは…　なに言つてゐんや！　あの時とは違つて言つたやろが…！」

「は？　　ぐはつー？」

「一体なんだー！？」

そんな晃輝に呆気に取られていつて突然の衝撃が俺を襲つた。

何事だと思い、その原因を探る。が、すぐにそれが何かがわかつた。

「一夏。これはタッグマッチなのよ。」

俺に衝撃を与えたのは不敵に笑う鈴だった。

甲龍のアンロック・コニット『龍砲』。見えない砲身と弾丸が特徴のソレが俺に向けられていたのだ。

いや、見えないのに向けられていると言つのはおかしい話なのだ
が……。

「だったら、こちらの事もお忘れな

「ああ、忘れとらへんよ」

「え？ めやつーー！」

そして、今度は俺のパートナーであるセシリアに凄まじいビーム光線が襲つ。

それは晃輝の『？梨伽羅』のバスター・ライフルモードによるものだつた。凄まじいエネルギーの光線を撃ち放つそれはブルー・ティアーズのビット格納ユニットである肩部の片方が吹き飛ばされ、爆散した。

「おう？ 一撃で決めるつもつやつたのに……やっぱ、精密射撃はあかんな」

「馬鹿！ 今ので決めなさいよー！」

「んな殺生な！？ でも、これで

「好き勝手に暴れさせてもいいつーー！」

お前等何気に仲いいだろ？

それよりも、晃輝の後退のイグニッショーン・ブーストは俺との距離を空けるだけでは無く、セシリアの背後に回り込み、チャンスを作り出すためのアクション。一見、ふざけた様でしつかりとしている戦法。おかげで、俺はセシリアの射撃支援を失い、鈴と一対一の状況に置かされてしまう。

「やつぱり、晃輝は強いな…………」

「一夏さん！ 吞氣にしている場合じゃないですわよー！？」

「ああ、すまん」

セシリアの一喝により、俺は展開した雪片を強く握る。

とりあえず、あいつとの決着の前に目の前にいる強敵を何とかするか。

「ふむふむ、二人共なかなかやるね」

一年一組と二組のタッグマッチ。それが行われているアリーナのピット内で一人の少女がモニターを見て感心していた。

「織斑一夏。HSの操作には難あり。が、光る物を感じさせられる

わね

少女は手にしている扇子を開き、思わずニヤついてしまつ口を隠すようする。

「そして、新しく来た瀬戸晃輝。織斑一夏よりはIISを上手く操作できるものの、やはり不慣れな部分がある。まあ、それをカバーできる戦略と分析能力は合格つて所かしら？」

モニターが映す模擬戦の分析を終えると少女は扇子を閉じて、イタズラっぽく笑う。

それは新しいオモチャを見つけたかの様な子供の笑み。

それでいて、大人の様な色気を感じさせる笑み。

矛盾した二面を持ち合わせる少女はどこか不透明な雰囲気を持ち、神秘的だった。

「時期も頃合い。そもそも接触してみましょつかしら？ それに久々にツバメちゃんともお話したいしね」

そして、少女はピット内にあるモニターを背にして、出口の方へと歩いて行く。

「IIS学園生徒会長、更識楯無^{さむきたてなし} この私が鍛えたら君達はどこまで高みへと登る事ができるのかな？」

第四十話 始まり、そして早くも再戦。（後書き）

久々に登場した生徒会長様。

わたくし、どうやって話に絡ませようか悩みます。

第四十一話 会長様は気まぐれ？

一学期早々に始まった一組と一組の合同実技。現在それが終わってオレ達は一夏と常に一緒にいるメンバーで学園の学食へとやって来ていた。

「…………のう、一夏」

「…………なんだ？」

「オレ等つて…………滅茶苦茶弱い？」

「…………それを言つたな」

だが、そんな中でオレ等はガラにも無く落ち込んでる。

結果を言えば模擬戦は一組の勝利。

タッグマッチにも関わらず、事実上一対一で対戦をしていた四人。一夏はエネルギー切れにより凰さんに敗北。オレはセシリ亞さんと接戦を繰り広げ、ブルー・ティアーズのビットを全て撃破するも最後の最後で敗北。残ったセシリ亞さんと凰さんの勝負ではオレにとってかなりエネルギーを消耗したセシリ亞は成す術も無く、鈴が勝利を収めたのだった。

「ふつふつふ！」「これであたしは一夏に一連勝ね！ ほらほら、何とか奢りなさいよ」

「ぐつ…………悔しい」

本当に悔しそうする一夏。鈴さんはそんな一夏を見て調子に乗りながらもゲスゲスと男のプライドを踏みにじつていいく。

「おー……オレの心まで痛い……。

「ちゅうど、口か。あたし達が勝ったんだからシャキッとしなやこよ」

「ああ~? ってか、口かってなんや?」

「晃輝の口」

……単純やな。

「せつですか。わたくしは敗北したとは言へ、晃輝さんは立派な実力をお持ちですか」

「ん~~名前で呼ばれた?なして?」

「べ、別によくではないですか!? 」のわたくしが一夏さんに続いて認めた男性なのですから

「なんや知らんけど.....そつか~そいつは光栄や」

「や、やつですわ」

おめでと/or オレ。皆から名前で呼ばれるようになつた。

いやはや、女子だらけの学園でつまくお友達が出来るか不安やつたけどなんとかなつとるみたいやね。よかつた、よかつた。

「「ハカあ～確かにそつちの方が呼びやすいかも」

「やうか？ 私は瀬戸の方が良い気がするが？」

「「ハカラ。あだ名やトの名前で呼ぶ事はその人との親密性を現すんだよ？」」

「ほへ、やうか。なら私もやうか」

そして、シャルロットちゃんとハカラちゃんも進んで名前で呼んでくれると言つてくれた。

あかん、お兄さん涙が出来ちゃへ。

本当に嘘こじ子やねん。そんな目に想われてこる一夏は幸せ者で正直つらやめしこと思つ。もう、本当に体の奥底から不思黒い感情が湧き出ぬへりこ……。

「なあ？」

「ん？ どうした雛」

沸々と湧き出る負の感情をその内にやぶせないと、突然篠ノ之さんが一夏に話しかけた。

そう言えば先程から辺りをキョロキョロと覗渡して何かを探してつた気がしどつたけど。

「ツバメの姿が見えないのだが……」

そんな篠ノ内さんの言葉を聞いて一同は「あ！」と声を揃えて気づくのだった。

いつも一緒にいるはずのハ雲さんの姿が確かにそこには無かつた。その事に不安があるのか篠ノ内さんは少し元気が無く、トレイに乗せている昼食にはあまり箸を付けていない。

「しても、ホンマハ雲さんはどうに行つたんやろ？」

「なぜ、こうなった……。」

「では、これよりハ雲ツバメの尋問を始めるーー。」

「始めるっーー！」

合図実技が終わつた後、更衣室で着替えを済ませて食堂に向かう途中の事だつた。何か薬品の様な匂いがしたと思つたら意識がグラクアウトしてしまい、今の状況に陥つている。

暗闇に閉ざされた一室。アタシは手錠で椅子に固定され、それに座らされていた。

部屋の中にある唯一の光はアタシに向けられ眩しい。そして、そんな暗闇の中から声が聞こえてくる。

「あ、あの……やつぱり「この」事はやめませんか？」

「ええー もうちょっと遊んでみたかったのに」

「遊びで「この」をしないでください…」

まつたくだ。

どうやら、相手は複数。内一人は常識的な思考を持つているらしく、首謀者らしき人物を叱かり始めた。

「本音！ カーテン開けて！」

「はーい」

トテトテと何ともスローテンポの足音が暗闇から聞こえてくる。そして、その足音が止まるときシャーッとカーテンが開き、部屋の中に光が差し込む。

「やつぱり、あなたでしたか…………」

アタシは目の前にいる人物を見てそう呟いた。

「あらあら、まるで始めるから解っていたみたい」

「こんな事するのはあなたしか思い浮かびませんよ。ってか、手錠はずしてください！ 横無先輩！」

部屋全体に光が行き届いた事により、アタシをこんな目に遭わせ

た張本人の素顔があらわになる。

更識楯無。IIS学園現生徒会長にして学園最強の称号を持つ人。

そんな彼女がどこからか取り出した扇子を開いて口元を隠すようになっていた。だが、口元を隠そつと楯無先輩の表情は手に取るようになると解る。

「うー、ごめんなさい！ 今、はずしますからね！」

「あ、どうせです」

そして、慌ててアタシに駆け寄つてくれたのは三年生のリボンをしている女性だった。その人によつてやつと解放されたアタシは自分の手首をさすりながら楯無先輩を睨む。

「なんのつもりなんですか？」

「やん、怖い。せつかくの可憐い顔が台無しよ？」

「誰の所為ですか。誰の」

「ほり、本音ちゃん。ツバメちゃんが怒つてるから謝つて」

ええへつと自分の所為ですかと言わんばかりに声を上げたのは同じクラスの布仏本音。通称、のほほんさんだった。

「私は会長の命令でヤックを連れて来ただんですよ～」

「ちょっと、まつて。アタシここまで連れて来られた記憶が無いん

だけど「

「やじはー。」の薬をハンカチに付けて。口を抑えればぐつすりなんだけれど

何気に恐ひしことあるなー? それって立派な犯罪者のやる事じゃん!?

しかし、普段のんびりした口調をしてこのほほんさんからは想像が付かない行為。完全に油断していたよ。以後、この子の行動には目を張るようにしておじうと決意するアタシだった。

「さて、そんなことより本題に入りましょう」

「何気に話を進めようとしてないでください。」

「まあまあーでね? 今日ジバメちゃんを呼んだのはほりとお願い事があったの」

「はあああ……………そんな事で誘拐染みた茶番に付き合わされたんですか。それなら、素直に呼んでくれればいいのに

「普通に呼んだらつまらないなこじやない?」

命の危機にやられるとシマシだよ。

「で? お願い事つてなんですか?」

「今度の学園祭でイベントをしようと考えているのよ。で、ツバメちゃんにも手伝ってほしこなあーっと頼った訳です」

「イベント？」

「やつよ～実はね

」

「ほなつ、一夏。先行くでー！」

「あつー、もう少しだけ待つてくれよー！」

「そないな事しどつたら遅れるわ！ 始めからTシャツ着とつたらええやうひが」

「だあああつ！ 僕もそつしておけば良かつたーー！」

午後の実習。相変わらず男子にあてがわれた更衣室はアリーナからかなりの距離があり、急ぎ足で向かわなければ授業開始のベルに間に合わない。

その事を予見しどつたオレはあらかじめTシャツを制服の下に着込み、素早く着替えて更衣室を後にす。もちろん、着替えて困惑している一夏を置いて。

「ん？」

更衣室を出た途端の事やつた。

「誰かおるんか？」

思わず、足を止めて声を掛けてしまった。

「…………」

しかし、オレが声を掛けても返事は無い。

「気のせいか…………」

いや、誰かいたのは気のせいやない。だが、向こうから何かせえへん限りじからから関わりたくなかった。

嫌な予感しかせえへんから。

だから、勝手に気のせいだと結論付けてオレは再び速足で廊下を歩いて行くことにした。

その後、授業に遅刻して来た一夏が妙な言い訳をしてシャルロットさんの高速切替の的こされたのはいつまでも無い。

さて、一夏がシャルロットの的になつてゐる頃。学園のある一室。

「ふつぶ~ん」

「嬉しそうですね。お嬢様」

私、布仮虚(のほとけう)ははお嬢様である更織櫃無に紅茶を差し出すためカップに紅茶を入れていた。そして、お嬢様は鼻歌を歌つて嬉しそうにしていつるのに気付き、どうしたのだうつと思ひ聞いてみたのだった。

「あれ？ そう見える？」

「はい、例の一人ですか？ 接触は上手く行きましたか？」

「うん。織斑一夏はからかいがいがあるわね。瀬戸晃輝は……

お嬢様は私が淹れた紅茶を受け取り、口を付け、少し齒むかうしていた。

「瀬戸晃輝は？」

「何とも未知数ね。ちょっと氣を緩めたら逃げられちゃった

「お嬢様の尾行を？」

それは驚いた。お嬢様はこれでも『裏』に通じる技術を身に付け

ている。こゝへ手を抜いていたとは言え、お嬢様の気配を読み取る事が出来るとは……。

「うんうん、断然興味が湧いてきたよ」

それほどどちらに對してですか？ とは聞けなかつた。

「そうですか。では、予定通り……」

「ええ、ツバメちゃんも手伝ってくれるみたいだし。明日の全校集会でね」

「準備をはじめておきます」

「よろしくね。…………ふつふうん」

私が準備のために部屋からまたお嬢様の鼻歌が聞えてきた。よほど、彼等に興味を持ったのだろう。

さて、明日からまた忙しくなりそうです。

翌日。SHRと一緒に限田の半分を使って全校集会が行われた。

内容は今月中に行われる学園祭についてだ。

「にしても、さすが女子高。異常なまでの女子の多さやな」

「だな。この中で男一人だつたら絶対浮くだろ?」

「いやいや、二人だけでも十分浮いとるわ」

オレの横にいる一夏と一緒に周りを見渡して見る。さすが、女子高と言うだけあって見事に女子ばかり。

その中で男子が二人だけとは何とも心もとない。

「それでは生徒会長から説明していただきます」

静かに告げたのは生徒役員の人やろうか。その声で、騒いどった女子の声はさーっと引き潮のように消えていった。

「やあ、みんな。おはよう」

「あつ」

壇上に青いリボンをした女子生徒が上がる瞬の一夏が声を上げる。

「なんや? どないした?」

「あの人だよ。昨日、更衣室で絡んできた人」

ほーそれはまたうらやましい事ですね。つと内心呆れながら思い、視線を壇上方へ戻した。

「さてさて、今年は色々立て込んでいたちやんとした挨拶がまだだつたね。私の名前は更織樋無。君たち生徒の長よ。以後、よろしく」

「ううう」とほほ笑みを浮かべて言つた生徒会長さん。その笑顔は異性同性を問わず魅了してしまうものやつたらしく、列のあちらこちらから熱っぽいため息が漏れた。

「では、今度の一大イベント学園祭だけど、今回に限つて特別ルールを導入するわ。その内容といつのは」

閉じた扇子を馴れた手つきで取り出し、横へとスライドさせる。それに応じるように空間投影ディスプレイが浮かび上がった。

「名付けて！『各部対抗織斑一夏、瀬戸晃輝争奪戦』！」

「ぱんっ！」と小気味のいい音を立てて、扇子が開く。それに合わせて、ディスプレイにはオレと一夏の写真がデカデカと写し出された。

「……………はー?」「

第四十一話 更織家

時間が経過して放課後。俺と晃輝は各クラスでやめ出し物の報告を各自任に報告をし終えた時だった。

「 やあ 」

職員室を出るとやっこほみ例の生徒会長さんが待ち構えていたかのようだった。この人によって色々理不分明な想いをしてるので睨み返すのみがてつた。警戒をしていた。

「 生徒会長さんがなしてこりたん? 」

だが、自分がイベント景品じられたにも関わらず、晃輝は俺と対極的な態度を取つてこら。

「 ここ、この余裕な態度。俺つて器小さいのかな……? 」

「 君達を迎えて来たのだよ 」

「 「 迎え? 」 」

「 「 うううではなんだし。場所を変えましょ! 」 」

と、その時だった。

「 覚悟おおおおおおおおおつーーー。 」

「なつ！？」

いきなり粉塵を上げる勢いの女子が竹刀を片手に襲い掛ってきたのだ。

反射的に俺は会長とその女子の間に立つが、それすらをかわされてしまい先輩に向かつて竹刀を振り下ろされる。

「迷いのない踏み込み……いいわね」

しかし、先輩は扇子で竹刀を受け流し、左手の手刀を刺客へと叩き込む。

そして、今度は窓ガラスが破裂した。

「！」、今度はなんだ！？』

もはや、何が何だか解らない。

割れた窓の方を見れば和弓を射る袴姿の女子が見えた。どうやら、あそこから先輩を狙つたらしい。

「つてか、晃輝！？」

思わず、床に伏せて俺は晃輝の事を探す。
が、その姿は他の女子と一緒に安全地帯へと避難していた。

あれ？ 僕、見捨てられた？

「もうつたああああ！」

「おわつ！？」

パンツ！ と廊下の掃除道具ロッカーの内側から、三人目の刺客が登場。

その両手にはボクシンググローブが着用され、軽やかなフットワークとともに体重を乗せたパンチで襲い掛ってきた。

「ふむん。元気だね。…………といひで織斑一夏くん。つて。瀬戸くんはちやっかり避難しているか」

「は、はい」

「これから君に」「一チを付けてあげようと思つてるんだけどどうかな？」

「な、なにを言つて……」

「生徒会長と言ひ肩書きはHS学園において、一つの事実を証明しているんだよね」

先輩は半分開いた扇子で口元を隠しながら、楽しげに話す。
その間も、ボクシング女の猛ラッシュを紙一重でかわし続けているのでからす」とい。

「生徒会長、即ち全ての生徒の長たる存在は

」

振り抜きの右ストレートを円の動きで避け、とんつ…………とその足が地面を蹴つて身を宙へ躍らせる。

「最強であれ」

そして、突撃槍のよろくなソバットの蹴り抜き。^{ランス}ボクシング女は登場したロッカーに逆再生よろしく叩き込まれて沈黙した。

「…………とね」

ソバットの際に手放した扇子を一回転のあとで床に落ちる前に手に取り、ぱんつを開いてスカートの裾を押さえる。

「見えた？」

「みつ、見えてませんよつー！」

「それはなにより」

フフ、と笑みを添えて先輩は扇子を置む。

「…………で、これはどういう状況なんですか？」

「うん？ 見たとおりだよ。か弱い私は常に危機に晒されているので、騎士の一人でもほしいところなの」

嘘だーー！

「さつき最強だとか言っていたくせにですか」

「あれ、ばれた」

そしてまた楽しそうに笑う。

……どうでもいいけどこの人、笑い方が異常に上品な上に、しかも似合っている。

「つて！？ 危ない！！」

先輩の背後に手刀を決められた刺客もう起き上がり、どこかに隠していた脇差サイズの木刀を持って襲い掛って来ていたのだ。さすがの先輩も突然の事だったので反応が遅れる。助けようと思つて自分の体を動かそうとするが向こうの方が多い。

「きやつ！？」

突然、女性の短い悲鳴のような声が聞こえた。

声を上げたのは意外にも会長である。

会長はいきなり腕を引っ張られ、グンと後ろに下がり、会長を引っ張った人物と位置が入れ替わったのだった。

「！」、晃輝？

会長と女子の間に立つたのは先程まで安全地帯に逃げていた晃輝だった。

「なつ！？」

「ちよ、瀬戸くん！？」

いきなりの事態に驚く先輩と刺客。しかし、刺客の勢いは止まらずそのまま木刀を突き出したまま晃輝に突っ込んでしまった。

そして、刺客が晃輝の体に寄りかかるよつよぶつかり、その動きが止まる。

「晃輝！…」

「あやーあやー、うひそこわ」

「へ？」

しかし、心配して俺が声を上げるとアッサリとした表情で晃輝は返事をしたのだった。

いや、だつて。木刀が腹に あつ。

「はいはい、终いや。おももこないな物騒なことせんぐの子らしくじよづや？ なあ？」

「え？ あ、はい」

よく見れば、晃輝に刺さったと思われた木刀は寸前の所で白刃取りの様に掴まれていた。刺客も必死に木刀を引き抜こうとするが晃輝の掴む力が勝っている所為でそれが出来ない。そして、晃輝の言葉で戦意喪失したのか木刀を持つ手を緩めて少し顔を赤らめていた。

「ほな、場所変えましょ。騒ぎ過ぎたみたいやし」

「え、ええ……」

あれ？ 先輩なんかしおりじくなつてない？

ミステリアスと言う先輩のイメージとはかけ離れたような態度。突然の出来事にちょっと戸惑つた様子であった。

う～ん……よくわからん。

しかし、晃輝の言う通り俺等の周りには大勢のギャラリーがいる。だから、晃輝は床に座り込んでいた俺を起こし、そのまま会長の案内でその場を去る事にしたのだった。

しかし、アタシは田の前の光景を田の辺りにして絶句した。

「おねーさんの下着姿は高いわよ?」

物の見事に空中コンボを決めている樋無先輩。そして、それを喰らっている一夏くんは空中で氣を失っている。

「やあ、八雲さん」

「瀬戸くん?」

道場入り口近くの壁にもたれかかって座っている瀬戸くん。アタシ同様にこの状況に若干引きつつも声を掛けてきたのだった。

「なんや? 八雲さんも学園最強を狙いに来たんか?」

「そんなのに興味はないし。ってか、これなに?」

「一夏が会長さんの袴を剥いで会長さんの下着があらわに。んでもつて、ああなつてます」

「…………なるほど、それじゃ仕方ない」

あのラッキースケベ野郎め。後でとつちめてやる。

「あれ? ツバメちゃんも来たの?」

「来たの? じゃないですよ。先輩から呼びだしたんでしょ?」

「あーそうだった。」「めん、」「めん」

「つむか、いい加減に一夏くんを降ろしてあげてくださいよ。わい、ライフばば口ですよ」

アタシの存在に気付いた樋無先輩。

アタシと蝶りながらも一夏くんへの攻撃はやめずにいるのであった。

「こやー！」まで見事に決まると記録更新してみたくなつて

「ちなみに現在は？」

「64H・ユーミー」

「田嶋せりゆうまで」

「了解」

実際に楽しそうに空中コンボを続ける樋無先輩を見て、アタシは道場に上がり、瀬戸くんの横に腰を降ろした。

「次は瀬戸くんもやるの？」

「やるわけないや。あんなもん食らいたくないわ」

「だよね~」

「こじても、いくら学園最強とは言え……なんや、あの『データラメ
な強さは？』の人、ホンマに人間か？」

「少なくとも人間はやめてないはず?」

「なして疑問形?」

「いや、アレを見てたらどうなんだかついつい思つて」

「確かに」

「あ、ミスつちやつた」

一人で樋無先輩について話をしていると空中「ンボが終了した。一夏くんはドサツと空中へと投げだされて畳みの上に落ち、ピクリとも動かなくなってしまっている。

あれ、本当に大丈夫かな? あ、一応生きてる。

「まあ、いいや。記録更新よ」

「おおー」とアタシは瀬戸くんと一緒に歓声を上げ、パチパチと樋無先輩に拍手を送る。吹き飛ばされた一夏くんなど忘れて。そして、樋無先輩はそれに答えるようにしてお辞儀をした。

「さて、瀬戸くんもやる?」

「遠慮いたします!」

「ええー。でも、お姉さんの下着見たよね?」

「イエ、見テナイテスヨ.....」

見たんですね？ 田が泳いでいるし、方言になつてゐるよ。瀬戸くん。

しかし、そんな瀬戸くんを樋無先輩は残念そうに短くため息するだけで何もせず、アタシ達の前に正座する。

「まあ、いいや。では、役者も揃つたし……瀬戸くんには話題おきましょうか」

話を始めると田つきが変わる樋無先輩。

いや、田つきだけでは無かつた。

いつもの人をからかうような態度はどうにも無く、田の前にいるのは『本当』の更織樋無本人であつた。

特になにもされていないのに、アタシ達は気迫だけでその場に釘付けにされる。

「改めまして、更識家十七代田当主。更識樋無でござります」

「あ、ども」

樋無先輩の丁寧なお辞儀に対しても瀬戸くんはサラリーマンの様に反射的に頭を下げた。

「つか、ええええええええ！」

この雰囲気の中をざつとして普通でいられるのよ！？ 思考が吹っ飛んでるんじゃないの！？ アタシなんて背中に変な汗かいて気持ち悪いんだから！－

「では、早速お話なのですが

」

「ちょっとタシマ

話が切り出されそうになつた時。

話を聞かなければならぬ瀬戸くんがその腰を折る。そして、ビツと一夏くんを指差して言つ。

「この話に一夏を加えんでええのですか?」

「彼には時期が来た時にお話いたします。…… 続けても?」

「わかりました。ただ、その喋り方なんとかなりません? 一いちまで緊張しますさかい」

「承知いたしました。……いやー瀬戸くんは話がわかる子でいいわね。この話し方つて窮屈な感じがして嫌い」

切り替え早ツ! ? いや、確かにそっちの方が馴れていいんですけど。

「さて、では本題です。私達、『更識家』は裏社会に存在する暗部組織に対抗するための対暗部用暗部なのよ」

そして、樋無先輩は自分がどう言つた存在なのか瀬戸くんに語つた。

ちなみに、アタシは先輩が初めて接觸して來た時に聞かされてるので全てを把握している。おかげで、化け物の先輩と組手をする日々を送るようになつたのは言つまでもない。未だにこの人から一本も取れないのが悔しい。

「私が得た情報によると一夏くん、篠ちゃん、ツバメちゃん、そして瀬戸くんのISAがある組織に狙われている事が解ったのよ」

「とある組織？ それはどいですか？」

「教えてもよいけど…………一度と日常には戻れないわよ？」

「なら、遠慮いたします」

「ふふふ、冗談よ」

「ハツハツハ！…………全然笑えまへん」

確かに、樋無先輩が言つ「冗談はまったく笑えない。

「で、会長さん一人で四人も守る事は難しいから一人で何とか出来るようにじりじりて訳ですか？」

「やつぱり瀬戸くんは理解力があつていいわね」

「はあ～。じゃ、会長さんのトレーニングにオレも参加すればええんですね？」

「それもいいけど、あなたのコーチはツバメちゃんよ」

「へ？」

「同じ特性を持つたISA同士なんだからそっちの方が効率いい。それにお姉さんの手はそんなに無いのよ」

楯無先輩は手にした扇子を開き、口元を隠すように笑っている。ちなみに開かれた扇子には『残念』と言う文字が書かれていた。

「あ～なるほど…………… やつは訳なんですか」

「そういう訳なのです。だから、よろしくね」

「うわー、やめとけ。ハントさん」

「ツバメでにこよ。咲そり呼んでいろし」

「 そ う か ? 」
「 な ら 、 オ レ は 晃 輝 で え え 」

そう言って瀬晃輝くんは微笑みながら自分の右手を差し出してきた。アタシもそれに答えるよつに自分の右手を差し出し、彼の手を握る。

うん、やつぱり名前で呼び合ひの間柄とはいい物だ。

「さて、お姉さんは一夏くんを保険室に連れて行くわね」

「あ、運びましょうか？」

「あら、瀬戸くんって紳士的ね」

「そいつはどうも。ほな、行きましょ」

晃輝くんはまだのびて一夏くんを担ぎ、立ち上がる。そして、アタシ達は道場を後にして保健室へと向かつたのだった。

とりあえず、晃輝くん向けの訓練内容考えておかないとな。

第四十二話 立場

楯無先輩による一夏くんの初特訓が終わった後の事だった。

「お願いします。ツバメ、ツバメさん、ツバメ様。どうかご慈悲を……」

一年生の学生寮。

ハ雲ツバメと書かれた表札のある自分の部屋の前でアタシは驚きと呆れが入り交ざった感情が頭を支配される。

「なにやつてるの？ 晃輝くん」

「見ての通りや……土下座……」

そう、今アタシの目の前にいる晃輝くんはアタシに向かって土下座をしているのであった。

「ああ～」めん……質問が悪かつた……どうしてそんな事してるので？」

「実はカクカクジカジカなんや」

なるほど、特訓が終わって一夏くんと一緒に部屋に戻つたら部屋の中に裸エプロン姿で出迎えてくれた楯無先輩がいて、しばらく一緒に部屋で寝泊まりすることになつたと……。

ちなみに、晃輝くんが編入してから部屋は一夏くんと一緒にになつたのである。

「で？ なんで晃輝くんがJリーカに来るの？ 普通先輩じゃないの？」

「…………それを提案したら、決め文句を言われてもひつて口出しきれいへんのや」

「決め文句？」

「…………生徒会長権限」

まさかの職権乱用。虚さん辺りが頭痛で悩まされそうだな……。

「しかも、部屋が二人部屋つて事を理由にオレを追い出しちゃったんや……頼む！ ツバメしかおらへんのや！」

「うわっ！？ こきなりすがるよつて抱きつくな！ まだ、シャワーネー浴びてないんだから！？」

「ハーザーーー 抱きつかないでーーー！」

「Jリーカのままやとオレー！ 野宿やねん！ お願い！ 泊めてくれえ！」

「もー！ わかったからー！ わかったからー！ 離れてよーーー！」

とりあえず抱きついてくる晃輝くんを引き剥がすため、アタシは自分の部屋に彼を泊める事を承諾してしまつ。その言葉を聞いた晃輝くんは半泣き同然だった表情から一変してパアーッと笑顔になつたのだ。

その笑顔を見てアタシはしてやられたと思った。

「いやーおおきこー マジで助かるわ~」

「…………くつそー、今開けるから待つて」

「ほーー」

アタシは晃輝くんを部屋に入れるために自分の部屋の鍵を開けた。

「うつわ~、ヒライ」と云なつとるやん

「…………うつさいな」

早速部屋に入れると晃輝くんは部屋の惨状を見て呆気に取られていた。

床一面に散らばっている紙の山。

洗面台は洗われていないコップがいくつか放置されていた。

勉強机は人一人が使えるスペースだけが空いており、後は分厚い本や何の原型が何だったのか思い出せない分解された機械などが山が積まれている。

そして、使われていらないもう一つのベッドは自分の洗濯物が脱ぎ捨てられ、これも山積みのままである。

「とも女子の子の部屋とは思へん……」

「うつさいなあー。嫌なら出でつてもいいんだよ?」

「…………しゃーない、片付けますか」

「え？」

突然、晃輝くんは洗濯物が山積みにされていくベッドへと歩き出した。

つて、ちよつと待て……

「ん？ なんや？」

だから、アタシは晃輝くんが洗濯の山に手を付ける前に彼の田の前に立ちはだかる。

「な、何をしようとしているのかな？」

「なにして、洗濯物を……」

「いい！ しなくていいから！ いつかはアタシがやる……」

「はあ？ なして……あ！」

どうやらアタシの言いたい事が理解出来たらしく。

そして、なぜか晃輝くんの顔は見る見る内に真っ赤になつて行くのだった。

「やつ、その…………すまん…………気付かんで……」

なぜだか氣を使われてしまった。なんだか惨めになつて来るしこつちまで恥ずかしくなつてくる。

そりゃ、いくらずぼらでも女の子な訳ですよ。で、放置されい
る洗濯の山には必然的にアレもあるわけ……ホラ、わかるでし
ょ？ アレ、ね。アレ。

「…………床の方からお願ひします」

「…………おひ」

「ひして始まつた部屋の掃除。掃除をしている間アタシ達は気ま
ずくて一言も喋らかつたのは言つまでも無い。

大体一時間ぐらいして部屋の片づけは終了した。

晃輝くんは自分が使つベッドに座り、ヘッドホンを付けて音楽を
聞きながら何かの本を読んでいた。

「はい、コーヒー。インスタントだけど」

「お、サンキュー」

部屋を綺麗にしてくれたお礼も込めて差し出したコーヒー。晃輝
くんは笑顔でそれを受け取り、「クッヒーと一口飲んだ。

「うわっ…………ブラックかいな」

「ん？ ブラック駄菴？」

「駄菴やないけど…………好きでは無いな」

「そつか、『めん。ミルクと砂糖出すね』

「ああーすまん」

ふむ、晃輝くんは意外と甘党らしい。
そんなわけでアタシは晃輝くんにショガースティックとミルクを手渡し、晃輝くんは豪快にそれらを全部ブラックコーヒーの中へと入れていく。

「こしても、あの会長さんはどうなつもりなんやろ？」

晃輝くんはコップの中に入っていた真黒だったコーヒーが程良い茶色へと変色し、それを口にする。そして、それを一口だけ口にすると「コップを置き、喋り出した。

「え？ なにが？」

「なして会長さんは『裏』の事をオレに話したって事」

ああ～、なるほど。確かにそれは気になるね。でも、一応自分がどう立場にいるのか把握してもらわないといけないからなあ～。

……。

「晃輝くんはアタシ達のことをどんな価値があると思つ？」

「価値？」

「天燕とクリムゾン・レイヴンにはE-LISドライバーが積みこまれている。そもそも、E-LISドライバーってどんな物かわかる?」

「えーっと……Hネルギー動力源やつけ?」

「ただのじゃ無いよ。『どんな物にでもなれるHネルギー源』なんだよ」

「?? どんな物にも?」

「説明すると物理学の位相欠陥とか力学とかの話になるけどいい?」

「あー…………出来るだけ簡単にお願ひします」

やつぱり、そう言う専門的な話だと解らないか。
うん……どうやって説明していいのやら。

「えーっと…………E-LISドライバーにはとある特殊な金属結晶、アタシは『インフィニット・クリスタル（E-LIS）』って呼んでるけど、それを粒子加速器で加速させたあと天燕やクリムゾン・レイヴンが放出する光の粒子『E-LIS』が出来るの。で、その粒子ってのが生成方法次第で何にでもなる。空飛ぶための推進剤、ビーム兵器とかに」

「ん? それって他のH-Sとなんも変わらへんやん? H-Sは内蔵されどもエネルギーで空飛んだり、武装を展開したりするやんか」

確かに晃輝くんの通り、H-Sは独自のHネルギー源がある。それを推進剤として空を飛んだり、量子変換で武装を展開し、一夏

くんの様な零落白夜の様な特殊なエネルギーを作り出したりする。そして、それは先程アタシが説明した通りの役割を果たしているのだ。

だが、E-L-Sにはもう一つの特徴がある。

「確かにそれはISを動かすための動力だね。でも、E-L-Sはさつきも言った通り『生成方法次第では何でもなる』事が出来る。それはつまり、生成方法を知れば『同じISを作る事ができる』んだよ」

「…………それってつまり？」

「E-L-SドライバーはISを粒子加速器で粒子を放出して消耗していく。だけど、同時に同じISを生成してあげればどうなる？」

「…………おい、それって」

「どうやら、晃輝くんはアタシの言いたい事を理解し、言葉を詰まらせていた。

「つまり、E-L-Sドライバーは『半永久的に莫大なエネルギーを生成出来る装置』。人類が夢見る無限機関つてわけ」

エネルギーの分解と再構築の繰り返し。それがE-L-Sドライバーの特徴。

説明したとおり、E-L-Sドライバーの内部にはE-L-Sを生み出すICがある。それを粒子加速器で加速させることによって特殊な粒子を生み出し、それをエネルギーとする事が出来る。

天燕・斑鳩も銀翼の様なエネルギーの塊を生成出来るのはこれのおかげだ。まあ、第一形態の時はエネルギー形成、維持の仕方が解

らなく、蒼燕のように圧縮、放出ぐらいしか出来なかつたが銀の福音と接触したことからその方法を得る事が出来たのだけど。

「ちょい待ち！ 無限機關つて……それでもオレのクリムゾン・レイヴンやツバメの天燕かつてエネルギー切れはあるやろ？ 全然、無限やないやん！？」

「だつて、これは未完成だもん」

「…………はあ？」

そう、実の所このE-Sドライバーはまだ完成されていない。あくまで完成したら無限のエネルギーを作り出せると言うだけで、現在は少し長持ちするエネルギー動力源にしかなつていないので。

まあ、改良は続けているのだがこれがなかなかうまくいかない。

「なんや、知らん内にけつたいなもん持たされとつたんやな。オレは…………」

そして、現状を理解した晃輝くんはあからさまに肩を落としていた。

気持ちは解らなくないが、それが今の君の現状だよ。

「まあ～そう言つ訳だから。完成していないとは言え、そこら辺の人からしたら喉から手が出る程ほしい物だから気を付けてね？」

「…………はい」

それから晃輝くんはふて寝したようにベッドに横になり一言も喋

らなくなってしまった。

なのでアタシも今日はもう寝る事にした。

「（つて… 男子が横にいるのに寝れるかああああああ…）」

ちよつと前の自分なら氣にはしなかつただろう。

篠やシャルロット達はこんな氣持ちで一夏と共に同じ部屋で過ごしていたのだろうか？

さて、ツバメから自分の状況を聞かされてから数日。本日の特訓も無事終了し、現在は寮食堂で夕飯を食べようと思っていたんやけど……。

「あ……」

丁度、本日の焼き魚定食を運んでいつもの席に座つたらオレの隣にいる男子、織斑一夏は力無き声を出しながらベチャリとテーブルに伏せつとつた。

そして、こつもの面々はそんな一夏を見て苦笑いしつる。

「一夏、お疲れ様

「おー……シャルか……」

「お茶飲む？」ほん食べられなになら、せめてそれだけでも

「おひ……サンキユ……」

「ハハモニル?」

「お、ええんか？ なら、もひひわ」

「一ん、いつこもまじてシャルロット（オレが名前で呼ばれるようになつてからあと付けはやめた）は眞の利くええ子やね。所為でお疲れか？ 色んな意味で

「にしても一夏はどないしたんや？ 金庫さんと同じ部屋になつた所為でお疲れか？ 色んな意味で

瞬間、女子達の鋭い目線が一夏とオレに向けられた様な気がした。

わ~怖い……。

「色んな意味ってなんだよ？ でも、確かに疲れた。なんか、毎晩からかわれて休んだ気にならないんだよ」

「具体的には？」

「…………言いたくない」

「なるほど。下着の上にシャツ一枚姿でマッサージを數理され、マッサージしてたら思わず鼻血を出したり、シャワー浴びている最中に水着姿で乱入され、くすぐり攻撃を受け、恥ずかしめを受けたか。ついやめしina、おい」

「なんで、具体的に知ってるんだよー?..」

「ドンッ! と一夏がテーブルから顔を起こすと同時に田の前にお茶の入った二つの湯飲みが勢い良く置かれる。

「はいっ! お茶ー!」

「お、おひ………ありがとひ」

「ふんっー.」

お茶を運んで来てくれたシャルロットはプリプリ怒つとる。ちなみに、この会話を聞いていた他の女子もシャルロット同様の「」様子。だが、オレはそんな事を気にせず味噌汁をすする。

あー味噌汁が美味しい。

「それで、あの女はどうした?」

少しペコペコした様子でラウラ(こちりやせん付けをやめた)が
言つ。

「ん? 生徒会の仕事があるって出て行つたぞ?」

「そーそー。書類がちゅお溜まつてゐんだよね~」

間延びした声、のんびりした口調が聞こえてくると一回はその声が聞こえた方を振り向く。

「よー本音ちゃん。元氣かあ~?」

「や~セシ~ン。今田も今田と私は元氣だよ~」

どこの宇宙怪獣やろ?

声の主はやはり布仏本音やつた。本音ちゃんは自分の夕食、鮭の切り身が豪快に乗ったお茶漬けをお構いなしにオレ等のテーブルの上に置き、ちゃっかりその場に座る。

「私はね~、いふと仕事が増えるからね~。邪魔にならないようこしていいるのだよね~」

「自分で言つなよ~~~~~」

確かにそれは生徒会としてどつなのだひつと一夏の言葉に賛同する。

大方、事務仕事は虚さんと会長さんの一人で回しどんなんやひつ。

「えへ~、お茶漬けは番茶派? 緑茶派? 思い切つて紅茶派?
私はウーロン茶派~」

ちなみにオレは玄米茶派やで。

「そしてこれに~

「…………」「これ」「？」

「卵を入れまか」

何をするかと思つて興味身心にそれを見ていた一夏。だが、本音ちゃんが卵をお茶漬けに入れて搔きまわした時点でドン引き。

ふむ、それは未知なる領域や。今度やつてみよう。

「食べまーす。じゅるじゅるじゅる…………」

「本音ちゃん。わすがにそれは引くわ～…………」

「えー。むりつほ～。すれせつていのが通なんだよ～」

「そりゃソバだけや

「じゃあ努力します～。ちゅるちゅる…………」

オレの忠告を聞き入れてくれたおかげで本音ちゃんは控えめなすり音を立てながらお茶漬けをすすつた。

「一夏さん。…………一夏さん？」

「ん。なんだよ、セシリ亞。改まつて」

「あの部屋にいるのがつらいなら、仕方なく、人助けとこい」と、武士の情けとこい」と、わたくしの部屋にこいらしても構いませんわよ?」

本音ちやんの乱入により大きく脱線した話がセシリ亞（くどいがさん付けは無しだ）の言葉によつて軌道修正される。一夏としては再びこの話題に戻るのかと少し気まずい表情をしていた。

「ちよっとセシリ亞！ 待ちなさいよー 一夏、あんたこっちの部屋に来なさいよ。トランプあるわよ？」

「トランプで釣られるとか、小学生か！」

「じゃあ金平糖こんぺいとう」

「幼稚園児か！」

「なによ、豆まめがいいわけ？」

「ハトか！」

おお、見事なボケとツッコミの攻防。やはり、この二人は息がぴつたり合つんやな。

「なあ？ 晃輝」

「ん？ なんや？」

そんな漫才を横で見ていくといきなり篠が話しかけてきた。

「ツバメが見あたらないのだか……」

「あー…………しばりく、整備課の方で寝泊まりするうじくてそっち

に行つてこる見たいやね。なんも聞いとらへん？

オレがツバメの部屋で寝泊まりするようになった初日。ツバメはなにやら慌てて整備課の方に行つてしまい、現在ではツバメの部屋を寝る時だけオレ一人で使わせてもらつとる。

やはりと言つべきか、なんや悪い事をしてしまつたようで申し訳ない気持ちでいつぱいや。今度、お詫びになんかしてやらなあかんな。

「いや、メールが来たから知つてこる。……その、お前は今ツバメの部屋で寝泊まりしているのだね？」

「ああ」

いつにも増して、真剣な顔でオレを見てくる雛。オレは丁度夕食を食べ終え、シャルロットの淹れてくれたお茶をすすりながら雛の話を聞いた。

「変な事したら私が許さないからな！」

「ブフフシ——！」

盛大に口に含んだお茶は噴き出された。
もちろん、女子達に被害が及ばないよう隣に座る一夏に向けて。

「ゲホッ！ ゴホッ！ だ、誰がそないな事するかー？」

「ツバメに手を出したら許さないと言つている」

「はあ！？ なして、そんな事せなあかんのや！？ オレは本人の

意思を無視して手出す程の甲斐性無じむぢやうわー。さうぢやうわー。

「あの言葉に偽りは無いのだな?」

「あらへんーー。」

まつたぐ、ホンマなにが言いたいねん。予想外の人から指摘を受けでビックリしたわ。

せりや、女の子の部屋ですよ。青春真っ盛りの男子高校生としてこれまでに無いイベントですが、部屋の主は殆どおらへんし、オレも寝る時以外はなるべく他の所で暇潰すようにじとる。コレなんてエロゲー? みたいな事もないねん。

いや、あつたらあつたで嫌やけども…………。

「はあー…………もつ部屋に帰るわ

「あつ、俺も…………」

なんやろ? 一気に疲れた。こいつ時はもつ寝るに限る。なので、オレと一夏は食堂を出て各自の部屋へと向かって行つたのだ。

「んじや、一夏。お疲れ~」

「おつ」

ツバメの部屋に到着したオレは一夏に別れを告げて部屋に入るのだった。

「…………」

「…………」

だが、それがあかんかった。

オレの目の前にはシャワー上がりのツバメさんがおり、タンクトップとパンツ一枚だけと言う何とも男心をくすぐる格好をしている。ツバメもオレがいきなり部屋に入ってきた事にビックリしているのか、目を見開いてこちらを見てくる。そして、次第にその目には涙が溜まり、今にも泣きそうな顔をしてフルプルと体が震えておつた。

あー…………あつたよ。男子としてはこの上無いお色気イベントが。ハハッ、全然嬉しくねえ。

「これ……セーフ?」

「…………アワト」

「ですよねー」

瞬間、彼女の背中からエネルギーの羽が現れ、三十六本の光線がオレに向けられて放たれた。

そこから先の事は逃げるのに必死でなんも覚えとらへんねん。

第四十二話 立場（後書き）

単なる自己解釈です。ツツ「なんだら駄目です」；

ふ、ふ、フラグが建つたぞ――――――――――

第四十四話 霧總の淑女と月夜の円舞曲

さて、ツバメとのドキドキハプニングから小一時間。なんとか、ツバメから逃げ切ったオレはアリーナの観客席で一休みしながら乱れた息を整える。

「ぜえ、ぜえ、さ、さすがに……キツイわ……」

あー、シャツが汗でグショグヨや。部屋に戻つてシャワー使いたいんやけど、戻つたらツバメと鉢合わせになるかもしれへんし、大浴場でも行こうかの？

「つと、あれは……」

そんな事を考えながら辺りを見ているとグランド中央に何かがいるのを見つけた。生憎、グランドの照明は全て落とされているためそれが何だかは良く見えへん。

だが、数秒後。雲に隠れていた月が現れてそれが何かが解った。

「…………更識会長？」

そこにおつたのは他でも無い更識楯無本人やつた。自主練なのかその姿はエスースーツであり、そして、足元が月灯りで照らされると自分のエスを展開させ、空を舞つ。

それはもう神秘的やつた。

例えるなら会長さんはそんなエス（衣装）を着た舞台女優。月光と言つスポットライトを浴び、空と言つ舞台で優雅に、そし

て大胆に踊る女優の様やつた。

「…………」

あー…………もひアカン。ずっとこのまま彼女の舞いを見ていきたい。
もひ、汗でグショグショの服とかどうでもええ。魅了されるつて言
うのはいつ書いつ事を書いつんやろか?

『あら? 瀬戸くん?』

しかし、そんな魅力的な時間も会長さんがオレの存在に気が付いた
といひで終わる。

ヒヒ同士のプライベート・チャンネルで会長さんはオレに話しか
けて来たのだ。

「ども」

『み、見てた?』

ん? なんや、見られとうなかつたんか?

「えつと……すんません。だいぶ前から……お邪魔でしたらも
う帰ります」

『うつん、邪魔なんて思つてないわよ。……ね? あなたもこつ
ちに来ない?』

「え? ええんですか?」

『わひわひ』

では、遠慮なく。

オレは会長さんの誘いを受けると観客席からグランドへと飛び、そのままクリムゾン・レイヴンを展開して空へ飛翔する。

「へえー、展開速度はなかなかのものね」

「ツバメに偉くじ」かれましたか？」「

「こ」最近のトレーニング内容は地獄の基礎訓練やった。まず、始まつたのがエスの展開と解除の反復練習。5秒で10回は出来るようになると言われた時は「んな、無茶な」と反論したが、反論した瞬間にツバメは鬼「ーチへと変身、おかげで5秒で7回は出来るようになり、難しい部分展開も造作じゃありません。

「じゃ、特訓の成果がどれだけの物になつたかおねえさんが見てあげましょ」

「えー……」

「文句を言わない。じゃ、付いて来てね~」

そう言つて会長さんは一人でぐるぐるとアリーナ内を飛び始めよつた。確かあれば円^{サークル・ロンズ}状制御飛翔やつたけ？仕方ないのでオレもその後に続く。

「わお！ もう追いついた？ さすがね

「散々やられましたから」

地獄の特訓その一。「H-Uをマニコアル制御で動かすこと。機体制御のP-H-Uをマニコアル制御に変えて細やかな動作を可能とする特訓である。

「この特訓をする時、ツバメにオートへの切り替えをロックされた時はさすがにビビったわ。おかげで、飛ぶ度に壁や地面に激突して痛い思いをした。まあ、今ではオート時の様に飛べるようになつたんやけどな。

「うんうん。短期間でこれだけ上達できれば上出来ね。で、最後までおねーさんの後に続けるかしら?」

「生憎、女の尻を追いかけるのは大好きなんで」

「いやん」

轟ツ!

今までの速度でも十分速かつたのに会長さんはさうに速度を上げてオレとの距離を引き離して行く。負けじとオレも速度を上げて会長さんを追つただが……。

「(ぐつ……スピードを上げると機体バランスがいまいち安定せえへん。かと言つて、安定させようと意識を集中させると速度が落ちる)」

「あれ? ちょっとスピード出し過ぎたかな?」

「ぐ、平気ですー。」

いや、平氣やないけど……女子の前で弱音を吐く訳にはいかん。

だから、強がって意識を集中させ、現在の速度を維持しながら機体を安定させるようにする。

「んー、まだ高速飛行は物に出来ていないと。それじゃ、無理矢理にでも早く飛んでもらいましょう」

「は？」

突然、高速で飛んでいた会長さんがその場で宙返りをしようとした。そして、会長さんはオレの後ろへと周り、巨大な突撃槍を構える。

おい、まさか……。

「逃げないと痛いわよ~」

会長さんがそう言った瞬間、突撃槍に内蔵されているガトリングガンが火を噴く。

「のわつー?」

「あ、うまいうまい」

「ちょー!? なに、悠長に言つとるんですかー!?

「ほりほり、意識を集中させないと」

ガトリングガンは相変わらず継続的に発砲されると。オレはそれをロールでかわしたり、狙いを定めさせないようにと変則的な飛行を繰り返していた。

「（ただでさえ飛ぶのに必死やつちゅうの）一、余計に意識が分散されるわー！」

「ちなみに、私に抜かれたら罰ゲームよ」

「んな殺生な！？」

ええい！ いのなればままよー！

背部にあるスラスター・コニットに大部分のエネルギーを回し、 安定制御を P I C では無く主翼だけで制御する。さしづめ、 ジェット機のような飛行方法。だが、これが案外安定した飛行を可能とし、 オレと会長さんとの距離はみるみる開いて行つた。

「おっしゃーーー、これで勝ったーーー！」

「あ、前」

「？」

ほんの少しの余所見。どれだけ距離が開いたか後方にある会長さんを見つとたら会長さんがなにかを指摘してきた。なんだと思い、視線を前に戻すとアリーナのシールドバリアーが目の前に迫っていこう。

あ、コレ無理。

そう判断した瞬間。オレはシールドバリアーに激突し、強い衝撃に襲われ、意識がブラックアウトした。

もし、車に乗れるようになつた。絶対、脇見運転はせえへんと誓つた瞬間やつた。

「　　」

歌が聞こえてくる。それはとても優しく、それでいてオレの心を落ち着かせる。

「ん……」

そんな歌が聞こえてオレの意識は覚醒する。そして、なんだかとても懐かしい気分やつた。誰かの温もりを感じ、頭をそつと優しく撫でられる感覚。小さい頃…………つつても、あまり覚えとらんが誰かにじうされていた様な気がする。

「あ、やつと田覚めた」

「…………余暉さん?」

ほんやりした視界がクリアとなり、意識もハツキリして来ると余暉さんがオレを覗きこむ様にしつづいた。

「えーっと…………」
「されば?..」

「ピックリしたよー。こせなり壁に激突してピクリとも動かなくなつちやうんだもん。ここまで運ぶのも大変だつたし」

気付けばそこはアリーナ内のグランジでは無く、アリーナの観客席の長椅子の上やつた。そして、オレはそこに寝かされると。しかも、余暉さんの膝枕で……。

「わわわわっーー! めんなわーー!」

膝枕されてこる事を自覚すると急に恥ずかしくなり、慌てて体を起しそうとする。が、まだぶつかつた時の痛みが残つてこるので、思つてかに動かへんかった。

「あそ、駄目よ。もう少しじっとしてなわー!」

「…………ぐつ」

「HISの絶対防護があるとは言へ、衝撃事態は残るんだから」

「…………はー」

「でも、驚いた～。フワフワと飛んでいたと思つたら、かなり安定して、しかも私より速く飛ぶんだもの。君は『U』の操作が下手なんか上手いのが良く解らないわね」

「…………精進しますわ」

「こしても、この人の膝枕は反則的に気持ちがええ。意識がハッキリして来たばかりやつちゅうのになんだか眠くなつてくる。

「ねえ？ 濑戸くん」

眠りそうな意識を保とつと何かを喋りつゝと考へていたところ、瀬戸さんが先に話しかけてくれた。

「なんですか？」

「Uの学園は楽しい？」

「楽しいです。オレにはもつたいないぐらう」

正直にオレはその質問に答えた。

「Uに出来つて、一夏と馬鹿やつて、皆と笑つて楽しくて。こんな気持ちになれたんは『前におつた居場所』だけやつた。

「これも皆、学園を守るために動いてくれる会員さん達のおかげなんですかね？」

「へ？」

おや？ 珍しくスジトンキョとした顔をなさりますね。

「だつて、そりでしょ？ こんな宝の山が埋まつている場所に手を出さない人はおらんでしょう。それが無いつて事は学園側が色々と頑張つてくれてるつて思つんだすかど？ ちやこます？」

「…………間違つてはいないわね」

「なら、オレは余韻せんにお礼を言わなあきませんね」

「え？ あ？」

心地のいい膝枕が名残惜しかつたけど、オレは余韻せんの膝から頭を上げて向を立つて座り直す。

「色々とあつがとつゝれこます」

「え、あ、うん……じへ、いたしまして」

「オレはヒーローつて柄じやないんですけども…………今よつ強くなつま。その時はあなたの事を立らせてしまふぞ」

「へあ！？ ま、立つて……」

あれ？ なんや？ オレ、変な事でも言つたか？ いつものひょうひょうとした態度はどうに行つたんや？ あ、今度は顔が赤くなりよつた。

「どういました？」

「な、なんでもないよー。そ、それより夜も冷えて来た事だし！
そろそろ、帰りましょー！」

「え？ あ、はい」

そして会長さんはすぐさまその場を立ち上がり、ツカツカと早歩きでアリーナの出口に向かってしまった。しかも、一連の動作がスムーズであり、そんなスムーズな動きにオレは対処できるはずも無く一人アリーナの観客席に置いてかれてしまう。

「ハックション！！」

あーそう言えば汗搔いたままやつた。あかん、残暑があるとは言え、さすがに夜風は寒い。早く部屋に戻つてシャワーでも浴びよ。

…………あれ？ 何か忘れてるような…………まあ、いいや。

1025号室。現在そこは私が使つている部屋だ。

そこへ帰つて来た事を再確認すると私はドアの取っ手に手を掛けて、その部屋に入る。

「あれ？ 先輩？ 今戻ったんですか？」

そしてそんな私を出迎えてくれたのはこの部屋の住人である織斑

一夏であった。

「あーり? 裸エプロンで出迎えてくれないの?..」

「…………男がそんな事やつたらキモイだけです」

「残念。おねえさん、一夏くんの裸エプロンなら歓迎しかねるの」「元の髪の毛の」

「はあー…………まつたく、」Jの人は

「フフフ。じゃ、おねえさんシャワー浴びるわね。…………覗いてもいいのよ~..」

「そんな事しませんからサッカと入ってください」

「ああん。ノリが悪いわね」

「はあ~…………」

一夏くんをからかい満足すると私は替えの下着とシャツを持ってシャワーに入ることにした。

しかし、洗面所に入つても着てている衣類は脱がず、目の前の鏡で自分も顔を見てみる。

「い、いつもの感じよね?..」

洗面所の鏡に映つていた私の顔はなんの変哲もない、いつも鏡で見る自分の顔だった。だが、とある事を思い出すとその顔はどんどん赤くなつていぐ。私はそんな変わり様を素直に見る事が出来ず、

私はその場に「おまつりしまつ。

「（はう～まさか、あんな面向かつてあんな事言われるなんて思つてもなかつた）」

ちなみに、とある事とは先程瀬戸くんに言われたことである。瀬戸くんの言つ通り、私は影ならがこの学園を守つてきた。合法、非合法、全ての面に対しても。だが、所詮それは影の仕事。誰にも知られず、誰からも称賛されない仕事である。

彼に暗部について話したのは少なくとも一夏くんよりは口の身は守れる技量を持つていると思つたからだ。だから、あえて自分の正体を明かし、瀬戸くんがどんな状況にいるかを話して、警戒心を持たせようと思つた。

「（あ、あんな笑顔で言つなんて卑法よー。それに、そんな事言われたら…………甘えたくなるじゃない）」

とくとくとくとくといつもよつ高鳴る胸に手を当ててその鼓動を感じる。

馴れない感情に困惑しながらもそれはどこか心地良かつた氣もある。

「これが俗に『恋』と言つ感情なのだろうか？

「（だとしても、あんな一瞬でこんな気持ちにさせられるとは思わなかつた。…………不覚だ）」

度々、一夏を想つ女子達をからかっていたけれど、なんだか悪い事をしたと思えてくる。

「うん、これからは少し自重しよ!」

「（もう言えば……瀬戸くんって一夏くんよりは女子に対する常識を持つていいみたいだけ……バレなかつたかな？ バレてないよね？）」

普段と違つた態度で接してしまつた事で自分の抱いた気持ちがバレないかと心配になる。

自分のしている事は褒められる様な事では無い。だがそれでも、彼は私に心からの感謝を言葉にしてくれた。さすがの私も戸惑つたけど、一方で嬉しさが込み上げてきた。

そして、極めつけは……

あなたの事を守りながらください。

その言葉を思い出すとまた顔に熱が帯びて来た。

「（…………たぶん、そんな気があつて言つたんじゃないと思つたけど。イヤイヤ、もしそうだったら嬉しいんだけど、でも、えっと、うーんっと…………）」

ただいま混線中の思考をリセッタせよつと思いつきり頭を左右に振つてみる。が、少し力を入れ過ぎたためかすぐに氣分が悪くなるのでやめてしまった。

「…………瀬戸、晃輝か」

名前を口にするとまたとくと心地良い鼓動が聞こえてくる。

それがあまりにも心地よくて、私はしばらくその音に耳を傾いていたのだった。

「…………完全に忘れとつた」

ツバメの部屋に戻つてきたオレは現在正座中である。

「わあ、O H A N A S H。しようか？」

あ…………その可愛らしき笑顔がもつ怖いです。

「すんませんでした……」

潔く土下座。

日本古来より怒り狂った人はこの手法でその怒りを鎮める事が出来る最強の手段！

これでツバメさんもオレの心からの謝罪で怒りを納めてくれるはず！

「いいよ。いいよ。そんなに誠意を込めなくて、暴走したアタシも悪かったしね。でも、寮内でISを展開させて、寮長である織斑先生にこいつてり怒られて、なんだかムシャクシャするの？ ねえ？ ここの気持ちをビリビリぶつけたらいいかな？」

「…………えーっと、オレに？」

「えっ！？ いいの？ わー晃輝くんって優しいね。じゃ、遠慮なく

く

「

「おつんや無かつた！ 誰や、土下座なんて考えた人！ 全然効果無しやん！」

だが、そんな後悔もすでに遅く、オレの死刑宣告は見事に判が押され、今までにそれが執行される所やつた。

あ…………そういえば、明日は学園祭やつたな…………オレ、無事に出れるかな？

第四十四話 霧總の淑女と月夜の円舞曲（後書き）

この小説を書いている事を知っている友人、そしてたまに読者様から寄せられるカップリング案。

それを考慮していたらこうなりました。

と言つて瀬戸くんは樋無会長にフラグ建てました。

友人A （・） チョイトイ

え？ なに？ まだ増える？ ……ハハハ！ そんな馬鹿な！

ジー（・・）――

……マジで？

グッ d（・・）

第四十五話 学園祭（前書き）

大分遅くなりました。申し訳ない.....。

そんなこんなで学園祭当日。

「うそー? 一組での織斑くんの接客が受けられるのー?」

「一組は瀬戸くんがお菓子作ってくれるんだって…！」

「一組はゲームあるらしいわよ？」

「しかも勝つたら写真を撮ってくれるんだって！　ツーショットよ、ツーショット！　これは行かない手はないわね…」

「あーいいなー！私も一緒に撮つてもらうー。」

アタシのクラス一年一組の『「奉仕喫茶』と隣の一組の『中華喫茶』は盛況で、朝から大忙し。

特に男子一人は引張りたこな状態で他の女子達はわりと普通に楽しそうにしている。

「いや、いや、いませ
」さくらがうつむき、お嬢様

「シャルロットは楽しそうだね？」

「だつてメイド服だよ？」
「可愛いよね？」
「ツバメも似合つてるよ」

「おつかれさう」

接客班（「スプレ担当）はシャルロットとセシリ亞。そして意外なことに篝とラウラ、そしてアタシもだ。

そして、一夏くんは執事服を着て裏方でスタンバイ。特別メニューがオーダーされた時だけフロアに姿を現し接客をする。

「ちょっとそここの執事、テーブルに案内しなさいよ」

どこかで聞いたような声が聞こえた。

教室の入り口の方を見れば、チャイナドレスの鈴ちゃんが外を覗こうとしていた一夏くんに声を掛けていた。

「きやー鈴ちゃんセクシー！」

「うわっ！ ツバメ！ 抱きつかないでよー！」

何を言いますか。一枚布のスカートタイプのチャイナドレスでかなり大胆にスリットが入っているのですよ。それでいて頭のシニヨンがこれまた可愛い。抱きつかずに何をしろと？

「ええい！ とにかく、案内しなさい！ ちなみに一人だからー！」

「え？ 二人？」

鈴ちゃんに抱きつく事に夢中になつているとの一人が教室の中に入つてくる。

『儲かつてまつか～？』

「 「 「 「 「パンダ?」 「 「 「 「 「

教室に入つて来たのはパンダだつた。

いや、もう見事なまでのパンダのきぐるみだつた。

『反応薄つー?』

そして、パンダのきぐるみを着ている何者かは胸から下げているホワイトボードにセリフを書き込み、何を言いたいか教えてくれている。

「鈴ちゃん。あれ、誰?」

「誰つて……」「わだけど」

アタシがあのパンダの正体について鈴ちゃんに聞いてみると予想していた答えが帰つて來たのである。

「わやはははははー! なんだよ晃輝ー? その格好ー!」

『「うわせこねん! やつともひらめた休憩やつちゅのこ店の宣伝を兼ねてコレ着りつて監督が言つんやー!』

一夏くんはパンダの中身が晃輝くんだとわかると大爆笑しており、晃輝くんはホワイトボードで文句を書く。

つむか、きぐるみ着ても喋れるんじゃないの?

「「ウ、もういいわよ。店の中では脱いでいいから」

『マジで？ そりや、助かる！ そんな、鈴が好きだ（笑）』

「やっぱ脱ぐな」

『「めんなさい…（涙）』

「ほら、一夏。さつわと案内しなさいよ」

「くくくく、ああ～いもん見れた。……ふー、それでは、お嬢様、御主人様。席へと案内いたします」

一夏くんが店のルール通りに執事役を演じると一人は鳩が豆鉄砲を食らった様になり、鈴ちゃんは次第に顔が赤くなつて俯き、晃輝くんは首から下げるホワイトボードに「W」の文字を一杯に書いていた。

「あーあー！ これが店のルールなんだよ…！」

一夏くんも自分でやつておきながら、逆ギレしている。どうやら、この接客にまだ慣れず、恥ずかしいと思つてゐるのだらう。さつさと一人を席に案内して注文を取ろうとしている。

「この、『執事に』褒美セツト』つて何よ？」

「オレはこのちの『メイドに』褒美セツト』つてのが『気にな』」

そして、一人を席に案内し、メイドを手渡すといきなり氣になつたメイドを口にしたのだった。ちなみに晃輝くんはパンダのきぐるみを脱いで普通にしている。

.....。

「当店おすすめのケーキセットはいかがですか?」

「なんでしたら、サービスでドリンクおかわり出来るよ」といたしますよ?」

「おこひら、誤魔化すな」

無理に話を逸らそうとしたが失敗に終わった。

「執事はさつと一夏絡みと見た!」

「メイドのフロアにいるメイドをチヨイスして何かさせるのねー。」

客として来ている中華ソンビは楽しそうにお互いのメニューの内容について勝手な解釈をしていく。もはやそれはイタズラを思ついた子供の様なはしゃぎ様。それでいて、その勝手な解釈が見事に当たつているから怖い。

「じゃ、あたしは『執事に』褒美セット』ー。」

「ほんなら、オレは『メイドじて』褒美セット』ー。」

そして、オーダーが言い渡された。

閻魔大王に地獄行きの太鼓判を押されたような、空から終焉のラッパが聞こえて来た様な気分だった。

いや、実際はどんなのか知らないけど。

まあ、一夏くんはともかくアタシはまだ助かる術があるのだがいいとして、やつさと厨房班にブローチ型マイクでオーダーを伝える。キッチンテーブルには二つのアイスハーブティーと二つの冷やしポッキーが用意され、アタシと一夏くんはそれをワンセグド्रップ受け取り、中華コンビの元へと戻る。

「お待たせしました、お嬢様、御主人様」

「へ、うむ。ぐるじゅうないわよ?」

「それでは、まず『執事に』『褒美セツト』の説明をいたします」

アタシがそつまつと一夏くんは渋々鈴ちゃんの正面へと座る。

「では、お嬢様。『』の執事に『』褒美をあげてください」

「…………はい?」

「ですから、田の前に用意されたポッキーを『』の執事に『』えぐだれど」

「えええええつー?」

簡潔な説明を終えると鈴ちゃんはぱぱりくつまばたきをして、顔がボツと赤くなる。

「それから、『メイド』『褒美セツト』ですが……」

パン！ パン！

これから説明を始める前にアタシは手の平を叩いて皆に知りせん。ちなみに、皆とはフロアに出ているメイド達、シャルロット、セシリア、ラウラ、幕のことである。それが合図と解っている皆はすぐさまアタシの後ろへと並び、待機する。

「な、なにするん？」

「アタシ達の中から一人をお選びになつてその執事同様の『褒美』をお与えください」

つまり、こういう事です。

『執事に『褒美セット』は一人しかいない執事にお客がポッキーを食べさせる事が出来るセットであり、『メイドに『褒美セット』』は五人いるメイドの中らか一人を選びポッキーを食べさせると言つセツトである。

確立は五分の一。晃輝くん次第でアタシがこの恥ずかしい思いをしなくて済むと言つわけなのだ。

「ええ…………マジかあー。それは、恥ずかしいなあ。うーん、どないしよう……」

晃輝くんは目の前にいるメイド達を品定めするように見て悩む。

一方、鈴ちゃんは顔真っ赤にしながら一夏くんにポッキーを食べさせており、それを見ていた四人のメイドからは羨ましそうに見ていた。それはもう、解りやすくギリギリと歯をしりをしながら、呪詛の様な声までもが聞こえてくる。

立ち位置の関係で先頭にいるアタシは背後から感じる多大なプレシャーに苦笑いするしかない。対面している晃輝くんもアタシ同様の気持ちなのか、同じ様に苦笑いしていた。

「あ、そや」

そして、何かを閃いたらしい。

「なあ？ 内容変更はできひん？」

「変更とは？」

「ほい、一人一本取つて」

晃輝くんはコップに入った冷えたポッキーを一本ずつ渡してくる。アタシを含めた皆はその真意が解らずに受け取り、全員にポッキーが行き渡るのを晃輝くんが確認すると一ヶコリと笑顔になって変更内容を告げた。

「じゃ、それでそこにおゐ執事に食べせせり」

「うえつーー？」

「…………え？」 「」「」

なんとも間抜けな声で驚く一夏くん。そして不可解な発言にメイド五人は声を揃えて驚いてしまう。

だって、意味が解らないんだもん。なんで、そんな事をしなければならないんだよ。つとメイド達が顔を見合させじうじょと悩んでいたらその発言の意味を晃輝くんは教えてくれた。

「メイド」「『』」褒美 やり? ほれ、『』褒美 やるから執事に食わせろ!」

「「「「「あひ」」」」」

そして、理解した。なるほど、これは間違いなく『』褒美だ。

「『』、御主人様の命令となればしかたありませんわね」

「そ、そうだね。これは『』褒美だもんね」

「つむ、褒美となればしかたないな」

「……一夏に……ポツキー……」

順にセシリア、シャルロット、ラウラ、篝はその命令に甘いながらも納得する。

それよりもこの後の展開を妄想爆発で乙女オーラと言ひべきか、ピンクオーラと言つべきか、とにかく見つともなく顔がニヤけていた。

そして、アタシ以外のメイド達の熾烈な戦い（ジャンケン）が幕を切ったのだつた。

「面白い事をしているわね?」

「あ、樋無先輩」

「やあ ツバメちゃん。かわいいメイド服ね」

「あつがとハヤリこまよ。…………でも、なんで先輩までメイド服に？」

「可愛いでしょ？」

答えになつてません。

突然やつてきた樋無先輩はさつきも言つた通りにアタシ達と同じメイド服姿なのである。しかも、このクラスで使用している物と一緒に入ったのかやけに上機嫌だ。

「おひー、会長さん？」

「ひゃ！？ せ、瀬戸くん！？」

「む、なんですか。その反応は？ 傷付くわ～」

「えつ！？ そんなつもりは無かつたのよ！ 本当よー。」

「冗談です。うーん、ヒョウヒョウとした態度の会長さんもええですかけど、取り乱す会長さんも新鮮でええですね～」

「なつ！？ からかわないでよーー。」

なんだが勝手に一人で盛り上がつております。

ほんの数秒ですっかり蚊帳の外にいるアタシはどいつもこよひと歎んでこるとちゅううビメイド達が一齊くんにポッキーあげ終えていた。

「こじても、メイド服ええですね」

「ほ、ほんと? た、似合ひでぬかな?」

「ええ、メツチャ似合つりますよ。これぞ生徒会長 メイド様」「それ、あんまり伏せてないわよ? でも、ありがと」

「ほーれ、一夏くーん。ポッキーですよ。あ、やけくそ氣味に食いついて来た。」

「あ、あのね、瀬戸くん! 良ければなんだけど、この後一緒に学園祭を周らない?」

「ん? 別にええですけど。今の休憩も後少しあし……次の休憩が昼前やから……まあ、その時に連絡でもしますよ?」

「お昼前かー…………うん、大丈夫。ステージは向とかなる…………。わかったわ、それじゃこれ私の携帯の番号ね」

「どうも…………といひでステージってなんですか?」

「ふふふ、それは後のお楽しみ」

「うわー、なんかリスみたいにコリコリとポッキーを食べてる。なんか、可愛い。あ、なんか周りのお客が写真を撮り始めた。」

アタシもデジカメ持つてればなあ。お、薰子先輩一眼レフで一夏くんの写真ですか? 焼きまわしてくださこよ。え? 一枚300円? 先輩、それは高くないですかい? でも三枚分予約しておきます。

「わい、わるそろ戾りますわ」

「あー? もう行つやないの?」

「せやつたら店の方に来てくださいよ。どびつきりの胡麻団子を用意しますさかい」

「ふふ、じゃーその時はサービスしてね」

「はーはー」

「おや? いつの間にか一人だけの空間は終わったみたいですね。

晃輝くんも皆に挨拶して鈴ちゃん引っ張つて自分の教室に戻つてしまつし、残された楯無先輩なんかもう顔がテレテレしてる。

どうやら一人の間に何かあつた事が窺える。

『『『学園生徒会長に春が訪れる!』』』『うーん…………ありきたりでインパクトがいまいちかしら? ツバメちゃんはどう思つ?』

「いや、十分じゃないですかね?」

そんな楯無先輩の浮かれ様を記事にしようとしていた薰子先輩を別に止めようとは思わなかつた。

だつて、その方がおもしろいんじゃない?

「はあ～…………やつと休憩だ……」

「と言つても先輩に代わつてもうつて抜け出しただけなんだけどね」

「…………えつと、シバメさんばかり着いて来るのでしょうか?」

さて、やつともらえた休憩なわけだが。

現在、俺はツバメと一緒に学園校門へと歩いていた。

「やー『ゴハン』くんが来ると聞いては会わねばならないでしょ~」

そう、俺はこれからこの学園祭に招待した友達を迎えて行く所である。

名前は五反田彈。

なにやらこの学園に来たがっていたようだつたし、今回の学園祭で外部の人を一人招待出来るとの事で招待してやつたのだ。

電話越しではあつたがアイツの声によつには弱冠引いてしまったのは言つまでも無い。

ちなみに、ツバメが弾の事を『ゴハン』と言つのは五反田の五反田の部分を五反普通に呼んでしまつたのがきっかけである。

実際にビリでもいい。

「あの～…………」

「はい？」

そして正面玄関へと向かう途中、階段の踊り場で女性に声を掛けられた。

「失礼しました。私は、こいつのものです」

スーシーの女性は手早く名刺を取り出して渡してくれる。

「えっと…………白式装備開発企業『みつるね』涉外担当・巻紙礼子さん?」

「はい。織斑さんにぜひ我が社の装備を使っていただけないかと思いまして」

「（ああ……またこいつ話しか……）」

正直な話し、白式の装備提供を名乗り出していく企業は後を絶たない。夏休みも半分以上そういう人達と会うのに費やしてしまったぐらいだ。

「（ついで言つてもなあ。白式が嫌がるからどうしようにもないわけだが）」

実の所、俺の白式に後付武装が使えないのは『白式自身の好み』によるところがある。射撃武器も全滅、楯もダメ、雪片式型以外の格闘武器もノーノーなのだ。

まあ、今は第一形態である『雪羅』があるから射撃、防御、格闘と幅広くこなせるように設計されているから問題は無い。

「どうです？」

「えーっと…… あつまつのはちよ」

「はーい。 あつまつのは学園の方から許可を得てやつてください」

「「え？」」

押し寄る巻紙さんにたじろいでいた所にツバメが割つて入つて来てくれた。

「巻紙さん『みつるや』の人ですよね？」

「え、ええ。 そうですが？」

「先日お渡しした白式に関する資料見ました？ 色々と条約とかが書いてあつたんですけど？ 後付武装の開発特許は倉持技研が有しているんですよ？ もし、これが無断によるものだつたらみつるぎは倉持と学園と国に慰謝料を払つて IIS 開発資格を剥奪されます。後、この場合巻紙さんは契約違反とみなされ、司法裁判のちにそれなりの処罰がくだります。まあ、最低でも 5 年は牢屋ですね。あ、好きでやつているならどうぞ？ 別にアタシは止めませんから」

「し、失礼しますー！」

なんとまあ、ツバメの見事なまでの説明により巻紙さんはその場を去つてしまつた。

つてか、白式ってそんなことになつてゐるのか？ あれ？ そう

言えば夏休みにそんな紙切れ見たような気がするけど……。

「夏休みに書類にサインしたでしょうが？ ちなみに一夏くんも契約違反したらブタ箱行きになるからね」

「…………マジか」

「マジン」

「これから契約書は内容を読んでからサインする事にしておいた心に決めた今日この頃である。

「つと、予想以上に時間取られたな。サッサと弾の所に行こう」

「それもそうだね。ゴハンくんもいい加減待ちくたびれちゃうもんね」

「ふ、ふ、ふつ…………」

「IS学園の正面ゲート前で、一人の男子がチケットを片手に笑いをこらえている。

それは一夏の友人と五反田弾である。

「ついに、ついに、ついに！ 女の園、IS学園へと…………来

たあああああ……「

遡る事二日前。いつものように友人である御手洗数馬の家でベスの練習をしていた時に一夏からのEIS学園へのお誘いがあったのだ。

あの時は心の底から喜んだね。いやー、マジで友達は大切にするべきだぜ。

「（ああ、ここからでもたくさん女子が見える…………。レベル高いよなー、正直）」

若干気合の入った私服を着てはいるが、やっぱり女の園に十代男子がいるのは目立つんだろうか。先程から女子の視線がこちらに向かって気になってしまふがない。

「（どこか変な所でもあったか？）」

「そここのあなた」

「はい！？」

キヨロキヨロと自分の格好を再確認している所に不意に声をかけられて、思わず背筋を伸ばしてしまった。おまけに声が裏返った。マジで恥ずかしい…………。

「あなた、誰かの招待？ 一応、チケットを確認させてもらつていいかしら？」

「は、はいっ」

「配布者は…………あら？ 織斑くんね」

「え、えつと、知っているんですか？」

「（）の学園生で彼のことを知らない人はいないでしょう。はい、返すわね」

「（）の人、むちゅくちゅ美人…………いや、可愛い！ なんと
かお知り合いで……話題、話題…………」

田の舞いにいるのはメガネと手に持ったファイルがいかにも堅物
そうなイメージをした人であった。だが、雰囲気から来るお姉さん
的オーラとなんだか優しそうな表情が見事に俺の心を驚掴みにする
のである。

「あ、あのっ！」

「？ 何かしら」

「い、いい天氣ですね！？」

「そうね」

会話終了。自分のセンスの無さに心底呆れるぜ。こんなことなら
もっと雑誌とか読んで勉強してくればよかつた…………。

「あら？ あれは…………」

「ん？」

一人で落ち込んでいると、彼女が何かを見つけたらしくそのままトコトコとの場を去ってしまうのであった。

『兄さん大丈夫か？』

「？」

つと、一人で地面に向けて顔ドラムをしていると、今度は突然そんな文字が書かれたクリップボード俺の目の前に差し出されたのであつた。

「一体何事だ？」
と思しながら打ちつけた額をさすりながら視線を
上に向けて見る。

「…………パンダ？」

そこにいたのは紛れもないパンダのきぐるみだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4355t/>

IS ~Blue Swallow~

2011年10月16日22時27分発行